概 要

新羅千年の歴史と文化

文化篇

資料提供(ハングル字母順)

江原文化財研究所
慶南文化財研究院
慶北大学校博物館
慶尚北道文化財研究院
啓明大学校行素博物館
国罡考古学研究所
国立伽倻文化財研究所
国立慶州文化財研究所
国立慶州博物館
国立公州博物館
国立金海博物館
国立文化財研究所
国立中央博物館
国立中原文化財研究所
国立清州博物館
国立春川博物館
大邱カトリック大学校博物館
東国大慶州キャンパス博物館
福泉博物館
釜山大学校博物館
釜山博物館
仏教文化財研究所
仏教中央博物館
三江文化財研究院
三星美術館·リウム
尚州博物館
聖林文化財研究院
新羅文化遺産研究院
嶺南文化財研究院
ウリ文化財研究院
蔚山大学校博物館
蔚山文化財研究院
蔚山博物館
蔚山発展研究院
中央文化財研究院
中原文化財研究院
昌原大学校博物館
韓国文化財財団
ハンビッ文化財研究院
韓神大学校博物館
朴光烈
安秉燦
崔応天
咸舜燮

凡例

1. 本書は、新羅の胎動期から高麗に服属した時代までを対象としている。
2. 研究叢書の内容に基づき、歴史篇と文化篇に分けて述べている。
3. 高度の専門性を備えた教養書のレベルに纏めた。
4. 執筆者は『新羅、その千年の歴史と文化』の執筆者の中から選んだ。
5. 韓国語の原稿は実務関係者の校閲と監修を経ている。
6. 外国語の翻訳は、韓国語の原稿から翻訳しており、外国人専門家からの監修を受けている。
7. 写真資料は研究叢書及び資料集に基づき、収録した。
8. 外国語の表記は、学界で通常使われている用語にまとめ、固有名詞の英語表記法はローマ字表記法に従っている。

概 要

新羅千年の
歴史と文化

文化篇

慶尚北道

発刊の辞

千年王国·新羅(シンラ)は、韓国民族としてはじめて全国を統一するという偉業を達成し、華やかな文明を築きました。闊達で進取的な精神の持ち主だった新羅の人々は、シルクロードを通じて文物を交流した、国際性に富む国民でもありました。しかし、このような新羅について纏め、体系的に集大成した歴史書に乏しく、それを残念に思っていました。それが、新羅の誕生した慶尚北道(キョンサンブクト)が編纂事業に取り組んだ理由でもあります。今、この時代、我々の手で民族のルーツを探る事業を行うという、歴史に対する責任感ももちろんあります。

『新羅、その千年の歴史と文化』は、今までで最大の新羅史編纂事業と言えるでしょう。新羅の母体となった斯盧国(サログク)が出現して古代国家へと発展し、韓国民族を一つにした三国統一を達成し、そして高麗へと続いた新羅全体の歴史を、時代順に沿って纏めています。さらに、新羅の政治·経済·社会·文化など、誰でも容易に接することができるように構成することで、一般人の理解を高めるよう努めています。

千年にも及ぶ新羅の歴史を、始まりから終わりまで纏めた研究叢書を執筆·発刊するということは、我々にとって大きな挑戦でした。しかし新羅の作り出した歴史と文化は、皆が生涯をかけて掘り下げる十分な価値のある民族の宝であり、我々の文化の源流です。『新羅、その千年の歴史と文化』の編纂は、2011年、「新羅史、どのように書くべきか」という学術大会の開催を始まりとして完成まで5年が掛かった大事業でした。韓国の新羅史の専門家136人の力を結集した力作で、計30巻、1万2千ページに至る膨大な量です。これは編纂委員、編集委員、執筆者たちの智慧と情熱の賜物です。

『新羅、その千年の歴史と文化』の編纂は、単に過去の出来事を纏めたものではありません。それを通じて、偉大なる民族の歴史の一部を知ることで、民族の矜持を取り戻し、アイデンティティーを定立する旅でもあります。編纂の成果は若い世代にとって重要な歴史教育の資料となり、世界と交流を深めた新羅の歴史と文化を海外に紹介する道が開けます。千年の歴史を織りなす様々な物語、神話·伝説、文化遺産は、我々の文化コンテンツの基礎となり、文化·観光産業にとって永遠の泉となるでしょう。

日々、世界は変化し続けています。ルネッサンスが中世の暗黒時代を終わらせ、産業革命が近代社会を導いたのと同じく、21世紀の今は、文化革命が時代を切り拓いています。また、「スマート」という名の付く物質文明の発展が刻々と世界を変えています。この最先端テクノロジーの時代、「我々」と呼ぶことを可能にするアイデンティティーこそ、未来を描く唯一の精神的価値だと信じています。

歴史を見る観点は時代や状況によって変わってきましたが、変わらぬ歴史の価値は過去と現在を結ぶ架け橋となり、未来の我々を形作るでしょう。それが我々が歴史を通じて学ぶ智慧といえるのではないでしょうか。新羅は遠い昔、歴史の表舞台から消えましたが、我々はその歴史と文化を踏まえて現在と未来を生きていけるのです。歴史と文化を探ることは、我々の精神と魂を探し求めることにつながります。

さらに、慶尚北道は道庁を安東(アンドン)·醴泉(イェチョン)に移転し、新しい慶尚北道の時代の力強い出発を世に示しました。このような出発の時期に『新羅、その千年の歴史と文化』が完成されたということは、我々により大きな意味を与えます。新しい千年を切り開く慶尚北道の旅において、精神的·文化的基礎となるでしょう。『新羅、その千年の歴史と文化』の編纂が、新しい未来の序幕になることを祈り、国民の歴史観を育てるのに役立つ大衆的な歴史書になることを期待しています。最後になりますが、民族史に残る史書を書くという使命感をもって渾身の力を降り注いで下さった執筆者の皆様、関係者の皆様に深甚な感謝の意を表します。

2016年12月

慶尚北道知事

編纂の辞

新羅千年の歴史の中で最初の700年間以上は、三韓列国の一つ、斯盧国として出発しましたが、一転して王国へと飛翔し、先進国の高句麗(コグリョ)·百済(ペクチェ)とともに鼎立の情勢を形作った期間と言えます。したがって、三国統一以前の長い年月の韓国古代史は、一国を中心に再構成することは不可能であり、三韓及び三国という全体の有機的な枠組みの中で捉えてこそ、真に理解できるといえます。今まで半世紀の間、韓国古代史の様々な部分で輝かしい研究上の進展が見られたので、その豊かな成果を便宜上、国別に纏めて集大成するという努力が試みられてきました。

韓国史の研究において、政治的目的を以て取り組んだ北朝鮮が、古くから高句麗を三国の正統な国だと主張し、百済と新羅をその付庸国(ふようこく)と見下す立場で高句麗史の研究に力を注いできたということは、周知の事実です。今まで我々も伽耶(カヤ)史と百済史の研究成果をまとめるという挑戦があるにはありました。1990年代末、当時の教育人的資源部が伽耶史政策研究委員会を臨時で設け、伽耶文化圏の開発と整備のための学術的根拠を設けるという趣旨のもと、2000年代初めまでの数年間、金海(キムヘ)地域の伽耶史蹟整備とともに、伽耶史と伽耶考古学の研究成果を総合·整理する事業が釜山大学·韓国民族文化研究所を中心に進められました。また、10年前は忠清南道の予算による支援で、忠南歴史文化研究院の主管により3年にわたって研究叢書15巻をはじめとし、各種文献や考古学資料を収録した『百済文化史大系』25巻を刊行し、学界に裨益するところが大きかったといえます。

このような動きから見て、慶尚北道が2011年12月、慶北文化財研究院を中心に、この『新羅、その千年の歴史と文化』編纂事業に取り掛かったのは、狭義では慶尚北道の伝統文化のルーツを探ることになりますが、広義では韓国の民族史における根幹となる新羅の歴史と文化の研究成果を、現段階で総まとめすることで、その輝かしい伝統を定立し直すという意味深い試みと言わざるを得ません。実際、今まで新羅史に関する研究は、韓国古代史研究の牽引車の役割を果たしてきました。それは、古代研究資料の紛れもない双璧である『三国史記』と『三国遺事』がほとんど新羅を中心に記述しており、その補助資料である碑文などの金石文資料も、新羅が圧倒的に豊富であり、また新羅社会の様子を生き生きと今に伝える木簡も、百済に引けを取らず多く発見されています。要するに、現在、我々は三国の中で新羅について最も多くのことを知っていると言えるのです。新羅はその成長過程で政治·文化などほぼ全分野にわたって高句麗と百済から影響を受けました。逆に言うと、新羅の文物、社会制度を以て、資料の少ない百済や百済の様子を類推できるという意味にもなるのです。韓国古代史学界では、新羅に関する知識に基づき、高句麗·百済·伽耶、この三国の歴史を理解する上で礎石を築いていっているといえます。

本編纂委員会は新羅の歴史と文化をまとめた研究叢書22巻と資料集8巻、その他概要書2巻の韓国語版、そしてそれに関する3種の外国語版を編纂しています。これは、一地域の歴史と文化に対する一般の人々の関心を促し、愛郷心を高めるというレベルで満足してはなりません。何より韓国古代史を復元するという信念と使命感を以て編纂に臨みました。但し、140人もの専門家の協力を得て270の論文を編むという大事業だっただけに、予想だにしなかった様々な困難に遭い、そのため、慶北道庁移転事業とともに発刊する予定だった本叢書の刊行が予定より2年も遅れてしまいました。それにもかかわらず、最後まで待ってくださった慶尚北道当局の広い理解に感謝します。特に歴代慶尚北道行政部知事で、編纂委員会共同委員長の任に当たった李周錫, 朱洛栄, 金玄基, 金章周 氏に感謝の意を表します。また、編纂委員会から全面的に委任され、5年近く編纂の実務を全般的に行って力を発揮してくれた編集委員会の盧重国, 朱甫暾, 李熙浚教授と慶北文化財研究院の李東喆先生の献身的な努力に、編纂委員会を代表して心よりお礼を申し上げます。

2016年12月

『新羅、その千年の歴史と文化』編纂委員会委員長 李 基 東

概要

新羅、その千年の歴史と文化

文化篇

目次

はじめに 010

第Ⅰ篇
新羅

第1章 新羅文化の胎動 斯盧国期 018
第1節 集落と住居 021
第2節 墓と葬送儀礼 028
第3節 服飾 039
第4節 器物 044
第5節 遺物から見た対外交流 060

第2章 黄金文化の隆盛 麻立干期 066
第1節 都市と城郭 069
第2節 墓と葬送儀礼 076
第3節 服飾 094
第4節 器物 108
第5節 遺物から見た対外交流 126

第3章 外来系文物の受容と発展 中古期 140
第1節 金石文 143
第2節 墓と葬送儀礼 160
第3節 仏教美術 168
第4節 服飾 182
第5節 農耕と物品の生産 188
第6節 遺物から見た対外交流 199

第Ⅱ篇
統一新羅

第1章 三国文化の融合と新羅文化の最盛 統一新羅期 206
第1節 王京と地方の都市 209
第2節 王陵 225
第3節 宗教と祭儀 233
第4節 仏教美術 246
第5節 儒学と文学 304
第6節 音楽 318
第7節 科学と技術 329
第8節 生活文化 358
第9節 農耕と物品の生産 376
第10節 海外との文物交流 388

はじめに

本書は千年にわたる新羅の文化を対象とする著作である。もちろん、文化とはどのように定義し、その構成項目を分けるかによって、内容が異なってくる。しかし、文化というものを多くの人が共感できるように定義することは容易ではない。今日、文化という言葉は、その言葉を用いる人の数ほど多いといっても過言ではなく、非常に多種多様で、複雑な現象を含んでいる。それほど地球上に住む我々人間の条件や生き方が多様で複雑になった上に、その事実が様々な媒体を通じて、互いに知ることができるからだと考えられる。このように、文化を一言で言い表すことは非常に困難である。いや、ある意味、不可能なことなのかも知れない。

しかし、たとえそうだとしても、人間集団の様々な現象をいくつかの分野に区別する場合、通常、政治·経済·社会·文化と区別することから、文化はその前に来る三つの部門の現象を除いた残りのものだと理解できなくもない。もちろん、この四つの分野が指す現象は、互いに密接に関係しているので、実際は明確に分けることはできない。もう少し具体的に、文化を、人間集団の中で現れる現象のうち、力または権力の行使と関連した政治部門と、それに基づいて現れる経済部門、そして集団の構造と関連した社会部門を除く現象と理解することができる。ただし、このようなアプローチは、我々に文化が具体的にどのようなものなのかを教えてくれるものではない。その内容を知るためには、人間と関連のある様々な現象の中で、特に文化を主な研究対象とする人類学の定義を参考にすることができる。

人類学におけるパイオニアの一人であるエドワード·バーネット·タイラーは、1871年に「文化」を定義しており、それが広く引用されている。彼の言葉によると、文化とは「社会の成員としての人間(man)によって獲得された知識·信条·芸術·法·道徳·慣習や、他のいろいろな能力や気質(habits)を含む複雑な総体である」としている。この定義を参考にすると、大まかではあるが、文化とは何かが見えてくる。ただし、人類学のこのような定義は、我々の目で観察できる現象としての文化を念頭に置いている。したがって、文献などによる記録以外では殆ど観察できない新羅の文化にまでこの定義を適用するのは難しい。しかも文献はほとんどが政治的事件を中心としていて、文化が直接記述されることはほとんどない。このような傾向は、特に時代を遡って新羅初期になればなるほど強くなる。このような事情が働き、新羅の文化を叙述するにあたっては、「考古学者」が「文化」と呼ぶ、いわゆる物質文化が重要性を帯びることになる。

考古学における文化の一般的な概念は、1929年のゴードン·チャイルドの定義によると、「我々は各残存物―土器、道具、装身具、墓の遺構、家屋の形―の特定の類型が常に同時に現れる現象が繰り返されることを目にする。そのように規則的に共伴する特性の複合体を我々は『文化集団』あるいは『文化』と名付けることができるだろう」と述べている。ここで挙げる土器などの器物と墓、住居跡は新羅の文化を述べる上で重要な項目になる。

前置きが長くなってしまったが、以上のように本書において新羅の文化を扱う上で、叙述する細部項目を選ぶとき、どうしても考古学的に調査可能な分野、または今にのこった物質、またはそれに関する研究成果を多く用いる以外に方法はないことは明らかである。そしてこれに関連して選ぶことのできる文化の項目としては、集落と住居、墓と葬送儀礼、服飾、器物、遺物から見た対外交流となるであろう。そして文献を中心に再構成できる項目としては、宗教と祭儀、学問と文学、生活文化、芸術、科学と技術などを選ぶことができる。

このように記述項目を設定すると、今度は記述方法が課題となってくる。最も望ましい記述方法は、もちろん上記に挙げた項目別に時間の流れに添って叙述する方法といえるであろう。そうすることにより、各文化の流れを容易に理解することができるからである。ところが、時代別に残っている当該項目の物質資料と歴史の記録は、その多寡が激しいだけでなく、特に物質資料の場合、まんべんなく確保されてもいないのである。例えば、物質文化は時代をさかのぼるほど多様性に欠き、また我々が知り得る分野も減る傾向にある。そして関連記録の落差も時代によってあまりにも大きいので、項目別に同じようなレベルの叙述を維持することは非常に難しい。したがって、まず新羅史をいくつかの時代に分けて、できるだけその時代別に各項目の流れがわかるようなかたち、通時的な視点で叙述するしかない。時代別に全体の文化の様相を理解するには、この方法がそれなりに長所を持つ。

千年の新羅史を俯瞰すると、数々の変動や紆余曲折を経て展開していったことがわかる。したがって、新羅史そのものを体系的に理解するためでも、いくつかの時代に分けて考える必要がある。『三国史記』と『三国遺事』を紐解くと、当時の新羅人が、自らの歴史を三つの時代に分けて考えていたことがわかる。ただし、二つの歴史書はそれぞれ、その時代区分の基準や強調する点が異なるため、設定の時点にもずれがある。両者を一つにまとめて整理してみると、新羅の歴史は「上古」、「中古」、「中代」、「下代」の、四つの時代に大別できる。ところが、この四つの時代のうち、「上古」は非常に長く、しかもその期間ははっきりと二つの時代、つまり斯盧国(しろこく)期と麻立干(まりかん)期に分けられる。このようにしてみると、千年の新羅史は、大きく五つの時代、つまり斯盧国期(BC57~AD356)、麻立干期(356~514)、中古期(514~654)、中代期(654~780)、下代期(780~935)に分けることができる。

この五つの時代はそれぞれ独特な性格をもっているので、歴史的にはっきりと時代区分を行うことには意味がある。ただし、文化という観点からは、中代期と下代期との間には、ある程度の違いはあるが、そこまではっきりとは区別できないので、統一新羅期という一つの時代として捉えるべきではないか。そしてその時代の文化を知る上で情報となる資料の質と量という側面から見て、統一新羅期は、それ以前の時代に比べ、遥かに豊かで詳しい。特に、文化と関連した記録は、殆どこの時代に集中していると言っても過言ではない。したがって、本書はまず統一新羅期の以前と以後に分けて以前を前篇とし、それをさらに斯盧国期、麻立干期、中古期に細分する。

写真 1　慶州·舎羅里130号墓

写真 2　瑞鳳塚金冠

写真 3　壬申誓記石

いわば、「古新羅期」と「統一新羅期」という時代は、それぞれの文化の細部項目の設定においても自然と異なってくる。斯盧国期と麻立干期の文化は、記録に基づいて叙述することは不可能である。したがって、考古学資料といわれる物質文化が自ずと中心資料となってくる。この二つの時代は、集落と住居、墓の葬送儀礼、服飾、器物、そして遺物から見た対外交流を項目として立てているが、集落関連資料があまりないため、墓から出土した資料が中心となるであろう。とくに、麻立干期の集落関連資料は、調査ケースがまだなく、王京の都城と防御施設、地方各地の城郭を中心に叙述する。

中古期は考古学的調査の側面から見ると、ほぼ死角、非常に見えにくい時代といえる。特に、集落関連資料は皆無に等しい。ただ「古新羅期」における叙述の一貫性を貫くため、墓と葬送儀礼、服飾、器物、遺物から見た対外交流の項目はそのままにしておく。しかし、この時代になって開始された仏教美術項目を別に述べ、また、時代の特徴となる金石文の項目も別に設定しているが、次の時代である統一新羅期の金石文もそこでいっしょに述べる。これはできるだけ、各文化項目の全体の流れが把握できるようにするための試みである。墓と葬送儀礼の項目も、統一新羅期は中古期の延長線上にあるため、それについても統一新羅期のものまで合わせて述べる。

統一新羅期は、文献を中心に記述するが、物質文化を補助資料として述べていく。まず王京と地方都市について説明する。ここでは前の時代、特に中古期では当該内容について述べることがあまり多くないため、王京の都市計画と関連した部分をここに含める。また、この時代の墓については、前の中古期において一括して取り扱うので、ここでは王陵項目を別に設け、斯盧国期から全体的に叙述する。次いで、土着宗教と国家祭儀、そして仏教という宗教の項目を述べ、仏教美術を別の項目として詳述する。これは仏教と関連した彫刻·建築工芸が、新羅文化の重要な特徴となっており、文化における一つの到達点といえるからである。その次に、儒学と文学項目、音楽項目、科学と技術項目となっている。科学と技術項目では天文、暦法、度量衡、医薬、器物製作技術、木版印刷術について考察する。その他の項目としては、統一新羅期の服飾や新羅の全時代を通じての食文化、住居を中心とする生活文化項目、統一新羅期の農耕と器物項目、そして遺物から見る対外交流項目を設けている。対外交流では、この時代の文献からうかがうことのできる人々の交流をも含む。

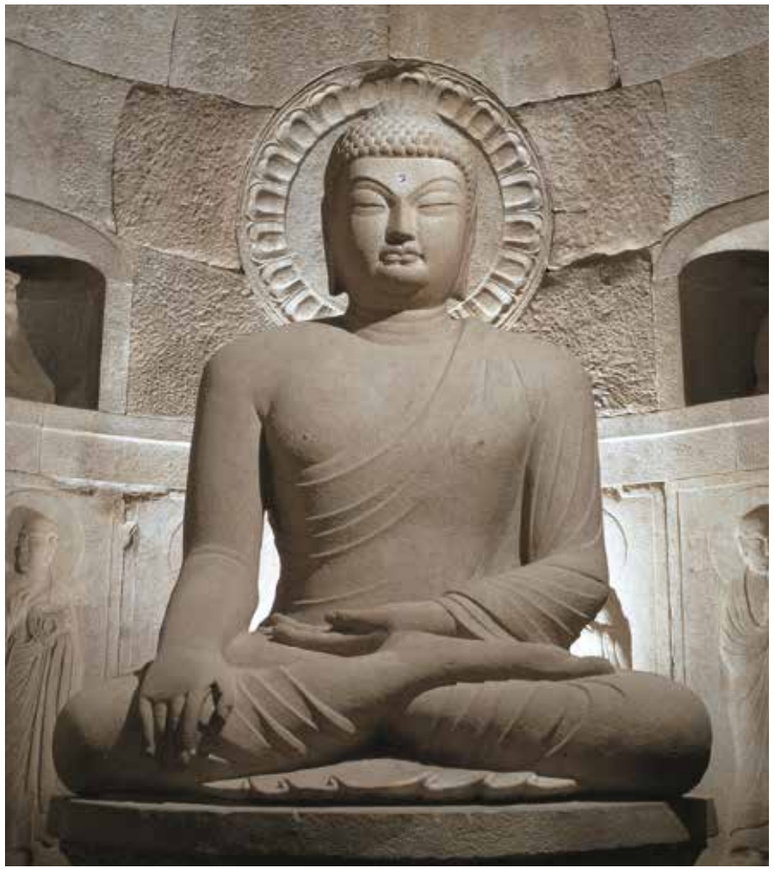

写真 4　石窟庵本尊仏

第 I 篇

新羅

新羅文化の胎動
斯盧国期

黄金文化の隆盛
麻立干期

外来系文物の受容と発展
中古期

第１章

新羅文化の胎動

斯盧国期

集落と住居
墓と葬送儀礼
服飾
器物
遺物から見た対外交流

6世紀中頃まで、新羅と加耶(カヤ)の主な舞台だった嶺南(ヨンナム)地域は、全体的には洛東江(ナクトンガン)本流及び大小の支流の流域に該当する。その水系に属しない地域は、東海岸と南海岸地域のみと言うことができる。その中で、新羅の母体といえる斯盧国(サロクゥ)の舞台であり麻立干(まりつかん)期以降は新羅の中心となった慶州(キョンジュ)地域は非常に独特な地理的位置を占めていた。慶州地域は洛東江流域にも東海岸地域にも属しない盆地である。この地域は太白(テベク)山脈の端の部分に該当すると同時に、東海へと流れこむ比較的小さい川の兄山江(ヒョンサンガン)の上流･中流地域を占めていた。

慶州地域はこのような地理的条件であるため、洛東江本流を含む大邱(テグ)から、その支流である琴湖江(クムホガン)を遡って東へと進み、永川(ヨンチョン)を経て東海岸、特に東南海岸、そして洛東江河口へと進む際に必ず通る場所に位置している。さらに逆方向では、東南海岸から内陸へと入る様々な交通路の結節点であると同時に、関門のような場所である。このような位置は、鉄の輸出のような対外交易が非常に盛んだった辰韓･弁韓時代には、地政学的に非常に有利であったはずで、斯盧国の成長と発展において非常に重要な基盤となったと、推察することができる。

墓などの考古学資料から考えると、斯盧国が初期の国家としての姿を具体的に浮き彫りにしたのは、紀元前2世紀末から紀元前1世紀初め頃と推定される。その頃造成された木棺墓群が重要な証拠となる。斯盧国の成立過程は、文献においては神話や説話の形で表れている。その記録によると、慶州一帯では、紀元前1世紀前半に、いわば「六村」を構成した政治集団が定着し、続いて「朴」、「昔」、「金」の、三つの血縁集団が移住し、政治的優位を巡って争った。確かに彼らの姓氏そのものは後代になって発生したものであるが、慶州盆地において様々な集団がそれぞれ異なる文化的背景をもって異なる時期に移住･定着したと考えられる。彼らは斯盧国を構成する邑落をそれぞれ形成した。

斯盧国はその後、成長を続けた。その基本構造は政治的中心といえる「国邑」と、多数の「邑落」によって構成されていた。時代が下ると、邑落の数は増えていた可能性がある。その要因は、生産力の発展とともに、移住民の流入による人口の増加が考えられる。ただし、それが押し進められた具体的な過程や内部の実情はまだ明らかになっていない。いわゆる斯盧六村が邑落の数を意味するという

意見もあるが、これを後代の付け加えたものと見る見解もあり、まだ確定されていない。

斯盧国は次第に辰韓の中心勢力として発展を遂げていった。その点は墓に副葬された遺物の中で当時の暮らしや文化の中で最も重要な役割を果たしていた鉄器の発見が、とくに慶州周辺で最も集中しており、多様性に富むという点から容易に推定することができる。斯盧国は2世紀中頃になってさらに飛躍的発展を遂げた。『三国志』「魏書東夷伝韓条」には、ちょうどこの頃、「韓濊」が強くなり、漢の郡県にとって脅威となる勢力にまで成長したという記録がある。この事実をさらに明らかにする史実は、2世紀中頃、従来の木棺墓に代わり、木槨墓という新しい墓制が導入されたことが物語っている。木槨墓はその規模や副葬品の質量の面から見て、それ以前の時代の木棺墓のレベルを遥かに凌ぐものである。このような変化の背景には、製鉄技術の発展がある。このような墓制の出現は、鉄製武器だけでなく、農具などの製作技術が飛躍的に発展したことによって生産力が向上し、社会分化が加速化した結果といえるのである。

3世紀末頃は、斯盧国は依然として辰韓の名称ではあったが、多くの友好的な国々とともに数回にわたって韓半島にあった楽浪郡·帯方郡などの郡県だけでなく、中国本土にまで出向き、交渉を行って先進文明を受け入れた。このような状況の下、313年と314年には、高句麗が南下し、楽浪郡と帯方郡を服属させるという政治変動が起きた。それによる影響は南にまで及んだ。大規模な移民集団が南へ移住し、そのような外からの危機に対応するため、辰韓では、その内部から統合の動きが広がった。具体的には、斯盧国の隣国を次第に服属させていったことである。その結果、辰韓の基盤をおおむね受け継ぎながら、それを取りこむことで成立したのが、新羅であった。

1 集落と住居

集落分布の型式

慶州地域の地形は、兄山江の支流が四方で谷間地帯を形成している。西側は隣接する永川(ヨンチョン)の琴湖江上流の水界との分水界として大川(テチョン)が東へと流れ、1つの谷間地帯を形成している。南は隣接する彦陽(オニャン)の洛東江河口の水界との分水界として兄山江の上流である麟川(インチョン)が北へ流れ、谷間地帯を形成している。北側は兄山江下流の支流が随所で谷間地帯を形成している。そのうち、特に東西方向で発達した谷間地帯は、北東の東海岸地域で太白山脈の南の麓を回って洛東江支流である琴湖江流域の永川へと通る交通路に該当する。東南は南川(ナムチョン)が流れ、兄山江へと合流するが、この南川の水界との分水界となる東川(トンチョン)は、同一の谷間地帯に添って東南へ流れ、東海の太和江(テファガン)河口へと続く。このように分けられる慶州地域の主な谷間地帯は自然と、「邑落」の舞台となったはずであり、それらの邑落が一つになって斯盧国を構成していたと考えられる。

ところが、これらの邑落はどのような構造であったかについては、記録がまったく残っていないだけでなく、辰韓·弁韓時代の集落の構造を知ることのできる住

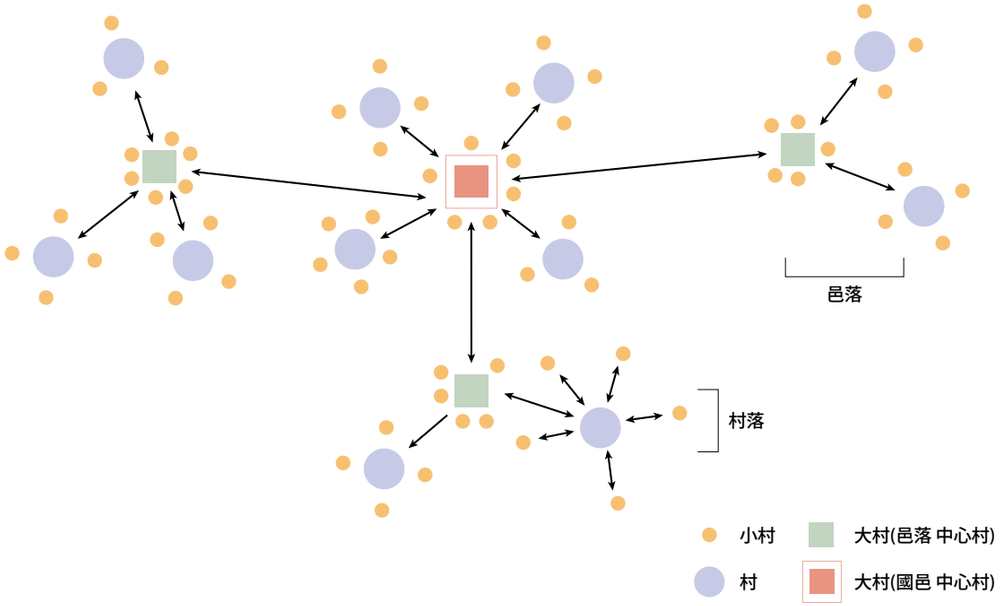

図1　斯盧国期における集落分布の型式モデル

居遺跡についても、まともに調査されていない。そのような理由で集落周辺に造られ、集団の居住を間接的に推定できる当時の古墳群の分布から、集落の分布や構造を推定する以外に、現在としては方法がない。ただし、斯盧国期の古墳群が複数の集落に対応すると考えると、斯盧国期における集落分布の型式は、〈図1〉のようにモデル化することができる。

紀元前2世紀末から1世紀初めの頃は、慶州盆地の随所の谷間地帯に、木棺墓が造られるようになる(〈図2〉)。また、この木棺墓群に続き、ほぼ同じ場所で木槨墓群をはじめとして以後の墓も造られ、長年、一種の共同墓地として使われるようになる。木棺墓群の分布が慶州盆地の随所で確認されているという点は、それを造った人々の集落だけでなく、それ以降の集落も大きな枠組では共通していて、共同墓地の近くに固定･維持されていたということを暗に示している。

ほぼ同時期に嶺南各地で同様の現象が見られ、また慶州において安康(アンガン)･仁洞里(インドンリ)のような交通の要地ではあるが、狭い場所に木棺墓が位置している点から考えると、木棺墓はそれ以前の時代の邑落社会がすでにある種のネットワークを形成し、結集していた状況を物語っている。これは、邑落の連合体から出発した斯盧国の成立過程を現していると解釈でき、上述した慶州の谷間地帯を中心とした自然環境から見て、斯盧国に5~6の邑落があったと推定できる。

発掘された集落と生産遺跡

今まで慶州一帯から確認された生活と関連した遺跡としては、隍城洞(ファンソンドン)集落遺跡と月城(ウォルソン)周辺の住居遺跡があり、生産遺跡としては隍城洞鉄器製作関連遺跡が代表的である。

隍城洞遺跡では暮らしと関連した住居遺構と木棺墓と木槨墓中心の埋葬遺構、そして鉄器生産と関連した生産遺構などが一カ所に集まっているが、区域はわかれている複合遺跡である。この遺跡は慶州盆地の北西部にある兄山江の川辺、海抜約30mの沖積平野において川の方向に添って南北に形成されている。北は墳墓遺跡が、南は住居及び生産遺跡がある。隍城洞の住居遺跡では、斯盧国期の住居址が計47棟確認されたが、前期と後期の、二つの時期に大別できる。

前期の住居址は全体の遺跡の南西に該当する地点で計17基が発掘されており、平面がほぼ円形となっている(〈写真1〉)。直径4~5m、幅約20m^{2}の小型が主流であり、地面が浅く掘られている。住居址の内部施設としては、浅い竪穴の壁にちょっとした鍛冶作業や炊事のできる火床がある。この火床は特別な設備は施されておらず、住居址の地面を浅く掘った形とカマドの形である。一部の住居址の火床周辺には台石として使われた痕跡が明らかな、大きな石が置かれており、また、焼失した住居址からは鉄器をつくる材料である小さな鉄の塊が出土している。これらの鉄の塊について科学的分析を行った結果、砂鉄を原料としていることがわかっている。遺跡は紀元前1世紀後半から西暦1世紀のものと考えられる。前期の住居址は鉄器の製作技術を持つ人々の住居空間であり、鉄器の製作と関連した工房の性格を兼ねたものと考えられる。

後期の住居址では、平面の主流は角丸長方形であることなど、前期とははっきり異なる。ほとんどが土を非常に浅く掘るか、あるいは地面の上に建てた構造と

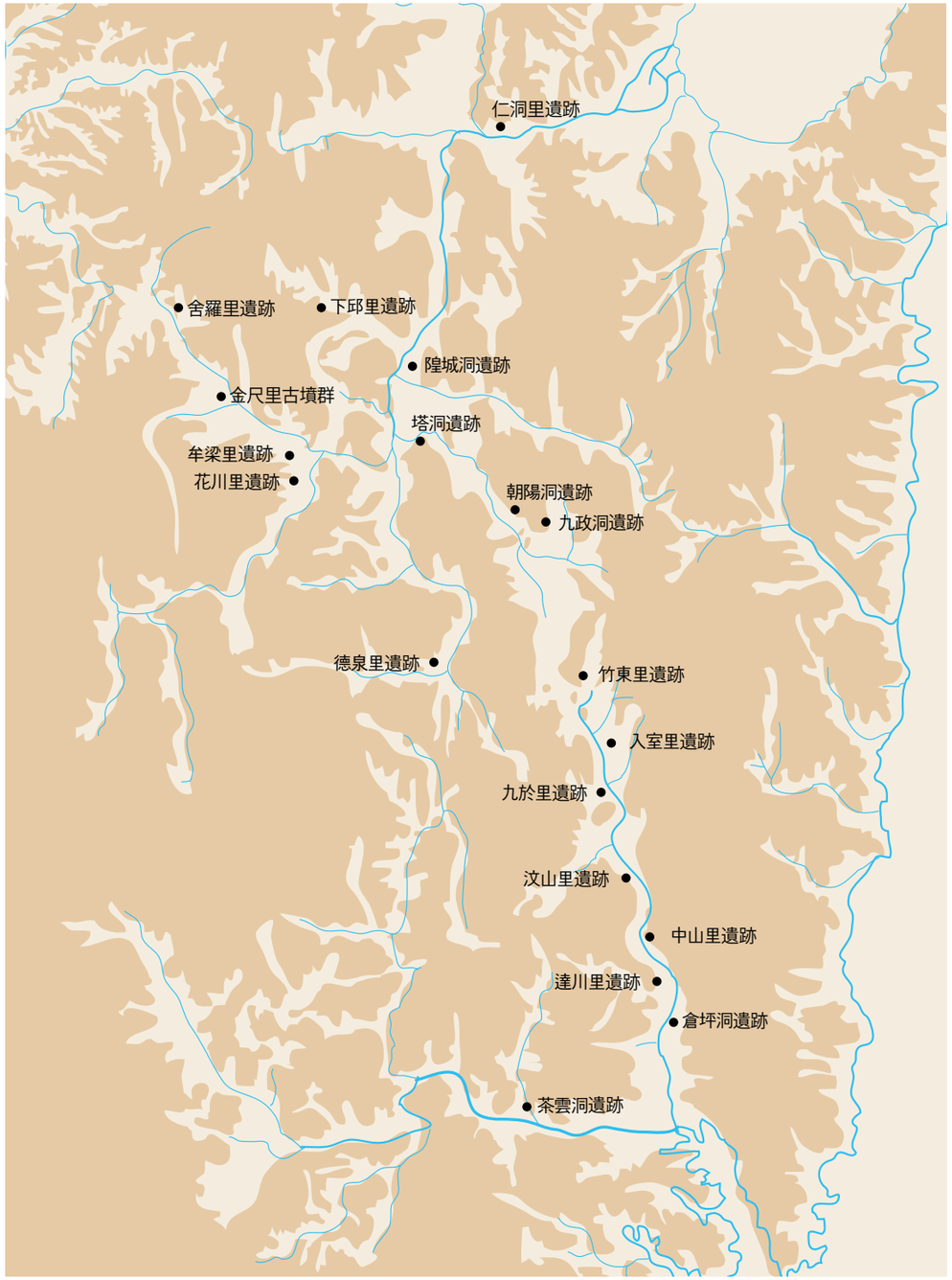

図 2　慶州地域における斯盧国期の遺跡分布図

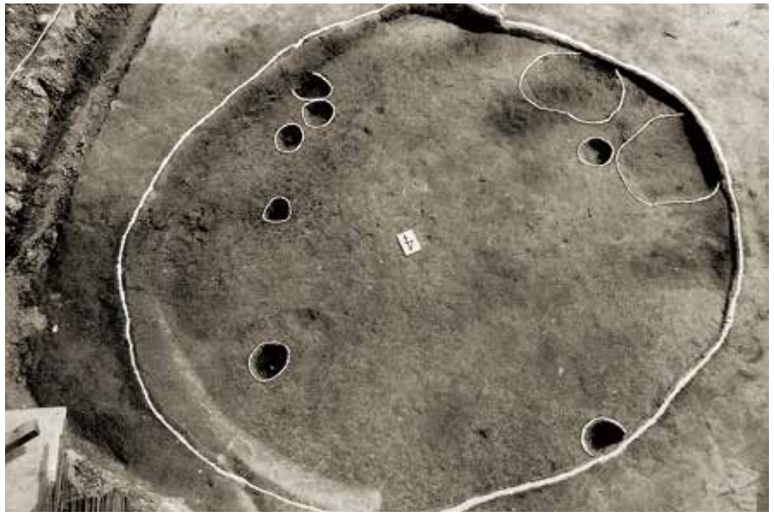

写真 1　慶州·隍城洞遺跡Ⅰ-ター1号住居址

なっており、壁体は粘土に藁を混ぜた土壁だったと思われる。大きさは前期に比べて大きくなり、30m^{2}以上のものが多い。内部には火床が1つ確認されており、壁の一部に煙が通れるような保温施設が設置されている(〈写真2〉)。出土遺物はほとんど土器類である。住居址は3世紀前半のものが多い。後期の住居址は、前期の鍛冶屋を兼ねた住居址だったのとは異なり、鉄器製作関連の技能を持つ職人の住居址が多いように考えられる。つまり、後期となって鉄器製作と関連した工程は独立した鍛冶炉、溶解炉などを備えた作業場において行われ、住居址は職人の居住だけのための空間であったと思われる。

月城周辺の住居遺跡は、月城と鶏林(ケリム)との間から確認された住居址と竪穴遺構から見て、当時、この一帯に集落が形成されていたことがわかる。斯盧国期の住居址2棟と竪穴遺構などが確認された。住居址1号は平面の形が角丸長方形で、規模は700㎝×340~400㎝と推定できる。住居址と竪穴から出土した遺物は3世紀前半から後半にかけてのものと考えられる。これらの住居址は月城の濠が造られ、破壊された。このことを考えると、月城とその濠が造られる前、この一帯に集落が形成されていたことがわかる。月城の北側の平地だけでなく、月城の内部にも集落が造られていたと推定することができる。

最近ではここからそれほど遠くない「チョクセム地区」から、この時期の木槨墓

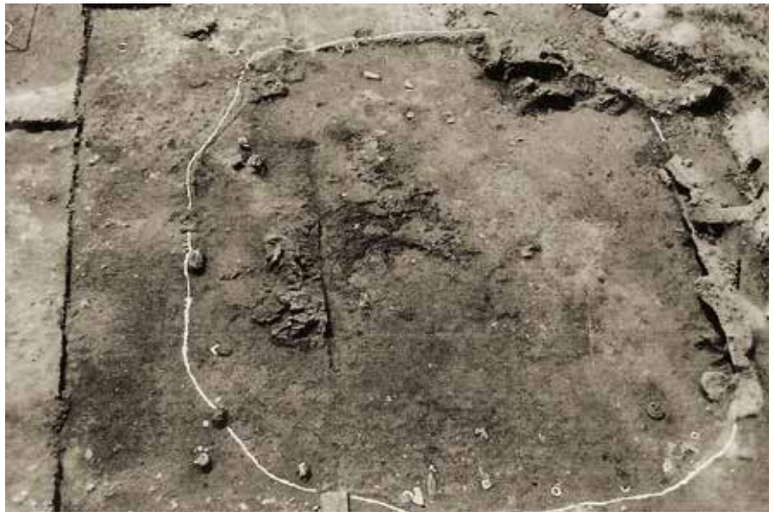

写真 2　慶州·隍城洞遺跡Ⅰ-ナ-6号住居址

が発掘された。墓の規模はそれほど大きくなく、一部しか発見されていないが、この一帯に多数の木槨墓が存在したと推定されている。これらの木槨墓は、月城周辺の集落からある程度距離があるので、住居と埋葬空間が隔離された様子をうかがうことができる。これは同時期に隍城洞(ファンソンドン)墳墓群と住居群、製鉄工房群などが空間的にわかれていながら、近い距離に位置している点とは対照的である。隍城洞集落の集団は月城一帯に基盤を持つ集団の統制を受けた、下位の生産集落の集団だったと推定される。

隍城洞の鉄器製作関連区域では、銑鉄を生産した製錬工程遺構はなく、製品の生産段階の施設で、鋳造鉄器の生産と関連した溶解炉や、鍛造鉄器生産と関連した鍛冶炉が中心となっている。前期の鍛冶工程遺構は、前述した斯盧国期初期の集落址である隍城洞遺跡1次「タ」地区の住居址の内部から見つかっている。この時期の暮らしと関連した遺跡における最大の特徴は、住居と生産空間がわかれていないという点である。

後期の遺構としては、屋外で操業した鍛冶炉と小規模の独立した溶解炉の調査が行われた。これは時間が経つにつれ、製鉄の技術力が独自の発展を遂げていく中で、2世紀後半から3世紀にわたって鉄の素材を溶かして鉄器を製作する溶解·精錬·鍛錬の鉄器製作工程へと分化が起きたことを物語っている。

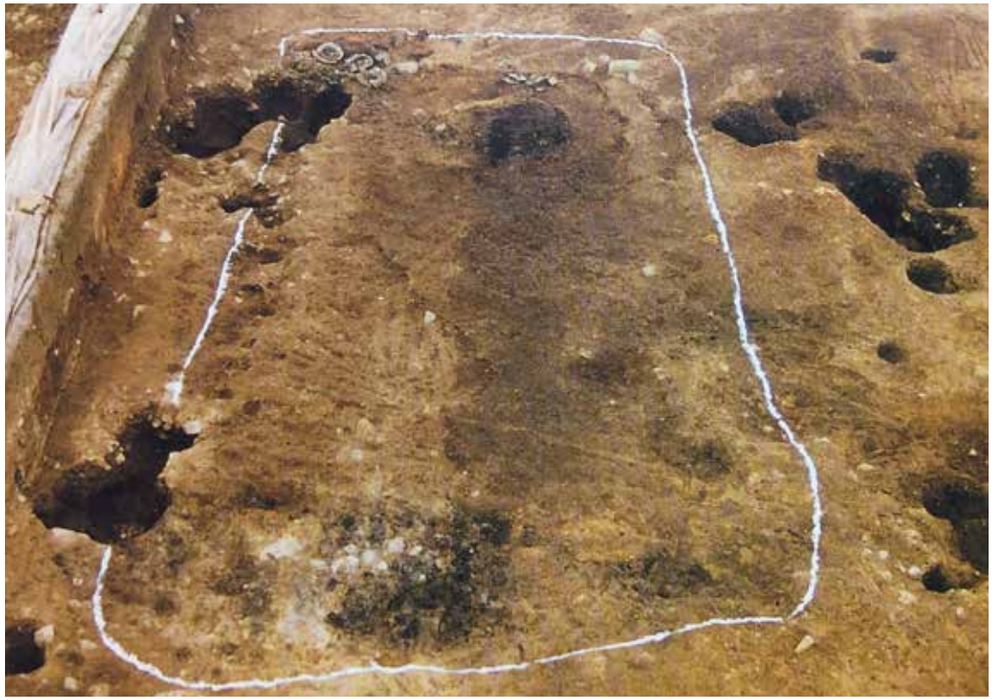

写真 3　慶州·月城近隣の斯盧国期生活遺跡1号住居址

後期の鍛冶炉は、楕円状の浅い竪穴を掘ってその中央に約50~100㎝の楕円形で設置していたことが確認されているが、床には木炭が敷かれており、周辺には台石として使われたと思われる大きな石や鍛造剝片が散らばっている。溶解炉は直径約100㎝の楕円形竪穴を掘って、炉壁片等を混ぜた土で地面に敷き詰め、再度直径約50㎝の大きさの穴をつくり、藁を混ぜた粘土で壁体を造るという構造となっている。このような溶解炉の周辺からは台石、鍛造剝片、スラグなどが多量見つかっている。スラグの中には水玉模様で固着したものも確認され、小規模の溶解作業が行われていたことがわかる。その他、精錬炉、製鋼炉も見つかっている。

隍城洞の鉄器製作遺跡に対する発掘調査により、斯盧国では遅くとも3世紀には既に多様で分業化した形に発展した、大規模な鉄器製作産業が定着していたことがわかる。隍城洞遺跡において使われた直径の大きい送風管の形は、統一新羅時代にまで受け継がれていった。

2　墓と葬送儀礼

斯盧国期前期を代表する墓制、木棺墓

斯盧国期の前期、つまりおおよそ紀元前1世紀初めから西暦2世紀前半の主な墓制は、木棺墓である。これは現在の土葬のように、穴を掘ってその中に木棺を安置した後、その上に土で盛った形である。この時期の墓を木棺墓と呼ぶが、慶州地域において実物の木棺が出土したことはない。ただし、1988年に昌原(チャンウォン)·茶戸里(タホリ)1号墓から出土した実物の木棺とその他の考古学的証拠から見て、大きく見て、二つのタイプの木棺が使われたのではないかと考えられる。一つは人体より長い丸太を縦半分に切って中をくり抜いた後、二つを再び合わせた丸太の木棺である。もう一つは、板を組み立てた箱形の木棺である。

このような二種類の木棺の形態上の違いは系統、または伝統の違いだと考えられており、それぞれを製作した住民の出自が異なったと思われる。丸太の木棺については、初期鉄器時代に属する和順(ファスン)·大谷里(テゴンリ)の墓から発見された木棺の欠片は、本来は丸太の木棺の一部だった可能性が高い。この事実を一般化することができれば、丸太の木棺は以前の時代のものと繋がるので、土着民の木棺と考えることが自然である。一方、板材の木棺はその起源について特定できるような証拠はないが、韓半島の北西地域の木棺墓の形との関連性が考えられるので、そこからは移住民のものではないかと推定できる。

普通、斯盧国期の前期を代表する墓とされる朝陽洞(チョヤンドン)38号墓の土壙は長さ258cm·幅128cm·深さ150cm程であり、木棺は長さ190cm·幅65cm·高さ30~40cmと推定される(〈写真4〉)。このような深い土壙は、遺体を収めた場所を密閉するという意識が強く働いた結果と考えることができるが、その深さは時間が経つにつれ、浅くなる傾向がある。

土壙の主軸方向はおおよそ東西方向であり、頭部を東に置く。この伝統は少なくとも麻立干期まで続く。木棺墓の墳墓がどのような形であり大きさであったかについて直接示す事例はないが、間接的証拠はいくつかある。木棺墓の土壙の周りから発見された周溝がそれである。徳泉里(トクチョンリ)遺跡木棺墓16基のうち、大型墓4基の周溝は平面が「一」字形、「コ」の字形、「ロ」の字形であるが、「コ」の字形と「ロ」の字形は土壙の長い辺に沿った周溝が長いので、墳墓の平面は長い楕円形か、あるいは長方形であったと推定できる。周溝と推定される墳墓の最大規模は長さ800~900cm、幅600~700cmである。ただし、このような数値は最大に考えた際の規模に過ぎず、それよりはるかに小規模だった可能性もある。墳墓の高さについてはまったく情報のない状態であるが、現在の墳墓のようにこんもりと盛り上がった墳丘ではなく、上の部分が平らであったのではないかと考えられる。

斯盧国期の前期でも遅い時期を代表する木棺墓としては、舎羅里(サラリ)130号墓(〈写真5〉)がある。その土壙は平面が隅丸長方形であり、規模は長さ332cm·幅230cm·深さ100cmである。その中に収められた木棺は長さ205cm·幅80cmと推定される。土層と土壙の床面に見える痕跡によると、木棺は平面がまるでハングルの「ㅍ」の字形であり、板材のものだったはずである。被葬者の腰部分には長さ74cm·幅60cm·深さ15cmの腰坑(ようこう。床からさらに掘下げた小坑)がある。特に、木棺と土壙の間に多くの遺物が収められている点は、儀礼が精巧になっていたことを物語っている。もし、この舎羅里130号墓の土壙の平面に添ってそれらの遺物をすべて含む枠組みとして外皮構造が設置されるとしたら、それは次の墓制段階である木槨墓のようなものになる。これこそ、舎羅里130号墓が木槨墓の先駆的な形態だといわれる所以である。

写真 4　慶州·朝陽洞38号墓(左)と細部(右)

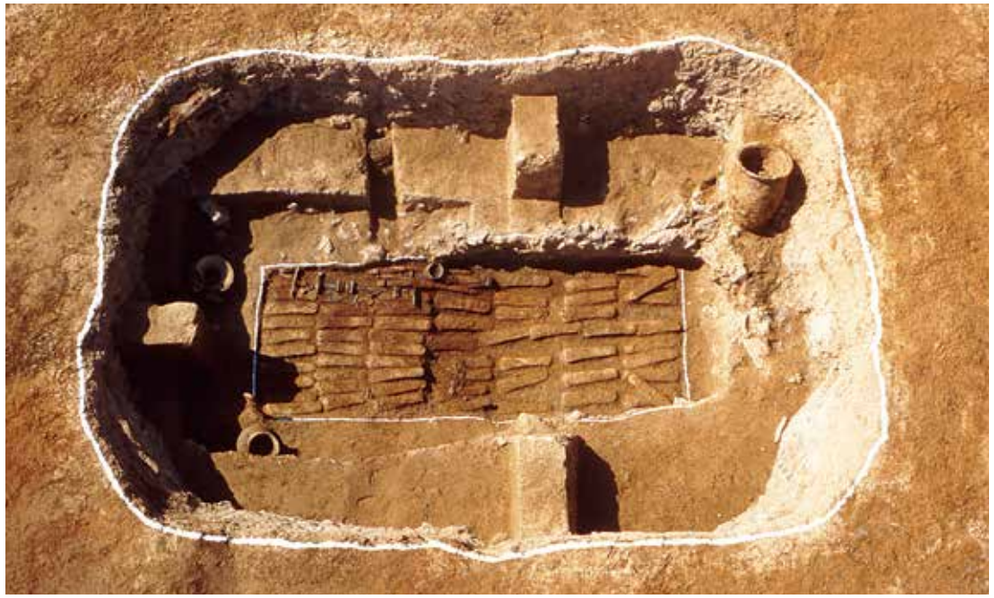

写真 5　慶州·舎羅里130号墓

写真 6　合口甕棺

木棺墓とともに、斯盧国期前期に用いられた墓制である甕棺墓は木棺墓の間に設置されている。甕棺墓は主流の墓制ではないので、ここでは木槨墓の段階のものまで合わせて述べたい。甕棺の構造は斯盧国期の前期には江辺路(カンビョンロ)1号甕棺墓のように単甕(たんおう)のものもあるが、大体同じ器種の二つの土器を合わせた合口(あわせぐち)甕棺が多い(〈写真6〉)。ところが、後期へと下るにつれ、別な器種を合わせるケースが増え、両耳付壺に盤口碗、または把手付碗を合わせた事例が多く、さらに甑などを中央に合わせた三甕棺も用いられている。

斯盧国期の甕棺の規模は、おおよそ長さ1mほどであり、長軸方向は等高線の方向と平行して東西向きとなっている。甕棺を安置するための土壙は甕棺の大きさより少し大きく掘削した。地上に墓の表示があったはずであるが、その証拠が残った事例はない。

斯盧国期後期を代表する墓制の木槨墓

木槨墓は木棺墓とは根本的に異なる構造と副葬の様子を示している。これは結局、様々な地域における首長の政治権力の増大に伴い、勢力拡大を誇示するために埋葬と副葬の空間を拡大する目的で採用したのである。上述した斯盧国前期を代表する墓として朝陽洞38号木棺墓と、斯盧国後期を代表する墓として隍城洞江辺路1号木槨墓(土壙の長さ414cm·幅338cm·深さ39cm、木槨の推定長さ275cm·幅206cm)(〈写真7〉)を比較すると、両者の規模の違いは一目瞭然である。したがって、2世紀中頃にこのような木槨墓が登場した事実は、以前とは完全に異なる社会の出現を反映していると言える。これは前述の木槨のような木棺墓からもわかるように、それ以前から内側から蓄積されてきた一連の変化が、この頃になって一気に噴出した結果である。

木槨墓の墓制としての特徴を挙げると、まず土壙及び木槨の長短比がそれ以前と比べて非常に低くなっている点が挙げられる。また、木槨墓になって最も重要かつ顕著な変化は、土壙の深さが浅くなった点である。したがって、最初から

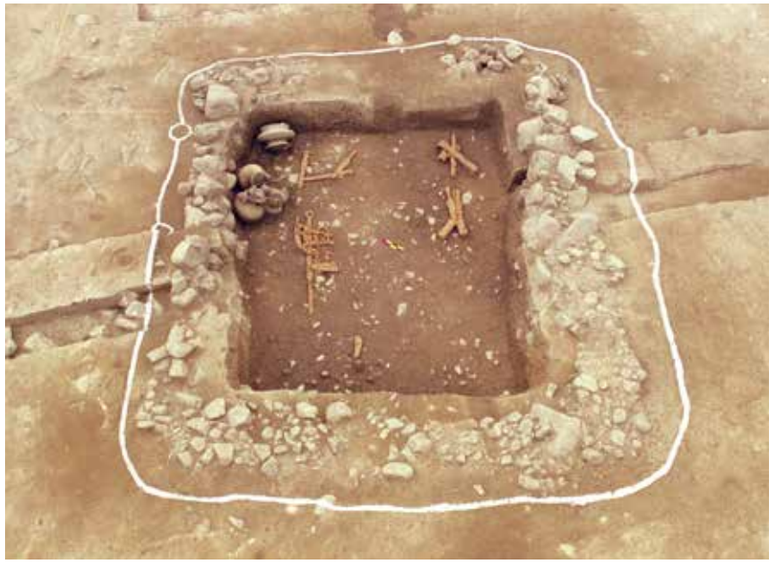

写真 7　慶州·隍城洞江辺路1号木槨墓

木槨が地上にあった可能性も高く、それを覆う墳丘の外観を誇示しようとする意図がはっきりと感じられる。

木槨墓は平面を基準に方形に近い長方形、長方形、細長方形の三つに分けられるが、方形に近い長方形は初期の形であり、他はそれ以降に現れていると考えられる。とにかく、長方形と細長方形は、後期になると、二つの槨が埋葬されている。

木槨墓の墳丘の形や規模を推定できる資料は皆無に等しいが、蔚山(ウルサン)·中山里(チュンサンリ)遺跡から護石が巡らされた事例が確認された。土壙の長さ840cmの主·副槨構造の細長方形石囲(いしがこい)木槨墓である蔚山·中山里ⅠA-26号は、長さ1480cm·幅760cmほどであり、平面の長い角丸長方形の護石が確認された(〈図3〉)。前期からこのような護石があったということは、墳丘を高く積み上げようとする意図を最初から持っていたことを示唆している。

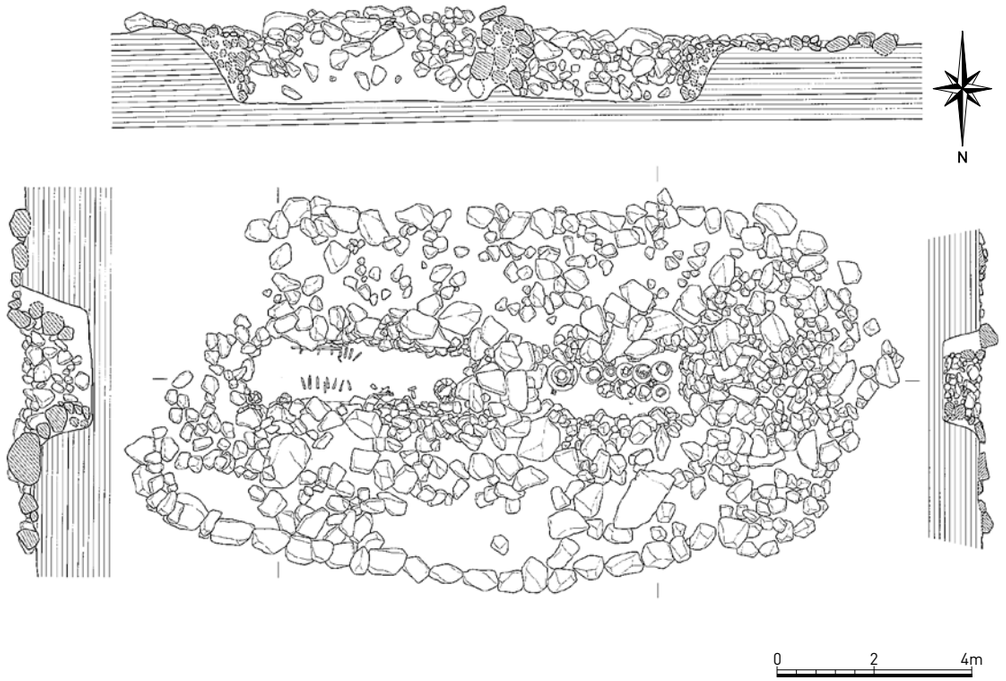

図 3　蔚山·中山里ⅠA-26号二槨構造の細長方形木槨墓の護石

木槨墓から積石木槨墳への変化

積石木槨墳と呼ばれる墓制が麻立干期において慶州の支配階級の一般的な墓制だったことは、周知の事実である。その構造が非常に独特なので、その起源に関する問題は古くから人々の関心を集めてきた。石だけで墓を造った高句麗にその起源があるなど、外部に起源を持つ墓制だとする傾向が強かった。しかし、積石木槨墳が慶州地域の木槨墓から徐々に進化した形の墓制だということが、発掘によりほぼ立証されたと言っても過言ではない。

このように「木槨墓から積石木槨墳へ」と次第に発展したという自然発生説の立場から見ると、積石木槨墳の最も典型的だとされる木槨周辺土壙の間と、木槨の上の積石という形は、木槨墓からいきなり出現したわけではない。積石という要素にのみ注目すると、土壙と木槨の間の周りに積石の形(四方積石式：最近ではこのような形のものを石囲(いしがこい)木槨墓とも呼ぶ。)が最初に現れ、その次に木槨の上にも積石のものが現れ、最後に木槨が地上に置かれ、その上に積石に覆われた形が現れたことがわかる。なかでも最初の形は斯盧国末期に現れるので、ここでも述べておく。

木槨墓がはじめて造られる2世紀中頃から主·副槨構造の細長方形木槨墓が出現する3世紀中頃までは、平地に位置する古墳群の一部でのみ石囲木槨墓が見られる。しかし、3世紀後半からは比較的石の少ない丘陵の古墳群でも見られるようになり、積石木槨墳としての要素を次第に整えていく。浦項·興海邑(フンヘウプ)·馬山里(マサンリ)積石木槨墳は、まさしくそれに該当する事例と言える。この事例は、木槨の床に小石を敷き詰め、木槨の周りにも積石を行った四方積みの積石木槨墳までも石囲木槨墓としてひとまとめにして考えてはならないことを示す例である。この積石木槨墳は小さな丘陵の頂部に東西を主軸にしてまず造られた主·副槨構造の木槨墓から、わずか3mほど北へ離れていて、まるで瓢形墳(ひょうけいふん)のように並んでいる四方積みのものである。これは状況から考えると、木槨墓という墓制が長年維持されていたが、一気に積石木槨墳へと変化する初期の段階、遅くとも4世紀初めの様子を示すものではないかと思われる。

墓の構造を見ると、土壙の中央に主槨を配置し、両方の短い壁に副槨または副葬の箱が設置された形となっている。土壙の規模は長さ800㎝·幅320㎝·深さ50㎝である。土壙の中の西側の副槨跡及び東側の副葬の箱が置かれた東壁のすぐ下を除いた全面に、長さ10~20㎝ほどの小石を床に敷いて主槨を設置し、その周辺に川の石を幅約60㎝になるよう4~5段積み上げた。さらに土壙と主·副槨との間には長さ15~30㎝の川の石と割石を用いて幅約60㎝になるよう詰めていたと推定される。主·副槨内部の陥没した土層の様子から考えると、木槨の上部は石が積まれていなかったと考えられる。中央に設けられた主槨の範囲は長さ290㎝·幅110㎝ほどと推定され、金製耳飾の出土場所から見て、東に頭を向けていたと思われる(〈写真8〉)。

主槨と東側にある副葬の箱の間には幅80㎝·高さ20㎝の隔壁が設置されており、東側の短壁の下にある副葬品の空間には、下に小石が敷かれていない。西側の副槨と主槨との間には隔壁跡が見つかっておらず、西側の副槨の床面は基盤層をそのまま利用している。西側の副槨の規模は長さ190㎝·幅195㎝前後であり、主槨の内部の幅より約85㎝広い。このような遺物の配置は、つまり頭部には副葬の箱、足元には副槨が設置されていたことを示している。

写真 8　浦項·馬山里遺跡の大型四方積みの積石木槨墳

斯盧国期の葬送儀礼

新羅の葬送儀礼についてはほとんど記録がない。ただ、『隋書』によると、新羅では「一年葬」を行ったと記されているので、それだけは参考になる。葬儀の最後の段階である葬送儀礼についてうかがい知ることのできる証拠としては、古墳を挙げることができる。古墳は人間の最大の通過儀礼である葬送儀礼や、その葬法について知ることのできる資料である。昔、葬儀の過程で行われた正確な行為については知る由もないが、葬送儀礼の一環として造られた墓に現れる様々な特徴から、ある程度類推することができる。

斯盧国期前期の墓制である木棺墓の築造過程を復元すると、「墓地の選定と地ならし-土壙の掘削-(腰坑の掘削)-木棺の安置-木棺の四周と、上に補強土を設置–埋土-墳丘の築造」の順に考えることができる。このような過程は古代中国の木棺墓や木槨墓の築造過程に類似しており、朝鮮時代の儒教に基づいた葬祭における木棺墓の築造過程とも酷似している。ただし、斯盧国期の慶州地域における木棺墓では、各段階において行われた儀礼をうかがい知ることのできる良好な事例があまりないため、ここでは近くの永川地域の龍田里(ヨンジョンリ)木棺墓の発掘例を挙げて説明したい。

永川·龍田里木棺墓において、遺物が副葬されていた場所は(1)腰坑、(2)木棺の下部の土壙の床、(3)木棺の内部、(4)木棺の外部土壙の床、(5)補強土の中、(6)木棺を覆った補強土の上、(7)埋土の中などであり、(8)墳丘の築造前、土壙の肩部の外側で墳丘の内部である。したがって(1)と(2)は腰坑を掘って土壙の準備を最終的に整えた後に行われた儀礼と関連する遺物、(3)は遺体の盛服遺物、(4)と(5)は木棺を安置した後に行った儀礼と関連する供献遺物、(5)は補強土の設置過程で行われた儀礼と関連する遺物、(6)は木棺を補強土をもって完全に覆った後の儀礼と関連する遺物、(7)は土壙内の埋土過程で行われた儀礼と関連する遺物、(8)は埋土の完了後、墳丘の築造前の儀礼と関連していることが推定できる。このうち、(6)は土取りと関連する祭儀、(8)は墳丘の完成後の「平土祭(地均し祭祀)」と関連する祭儀の結果と見ることができる。

これを見ると、儀礼と関連する遺物の他に、死後の生活に必要な物を副葬するという意識はあまりなかったように思われる。特に多く出土している「組合式牛

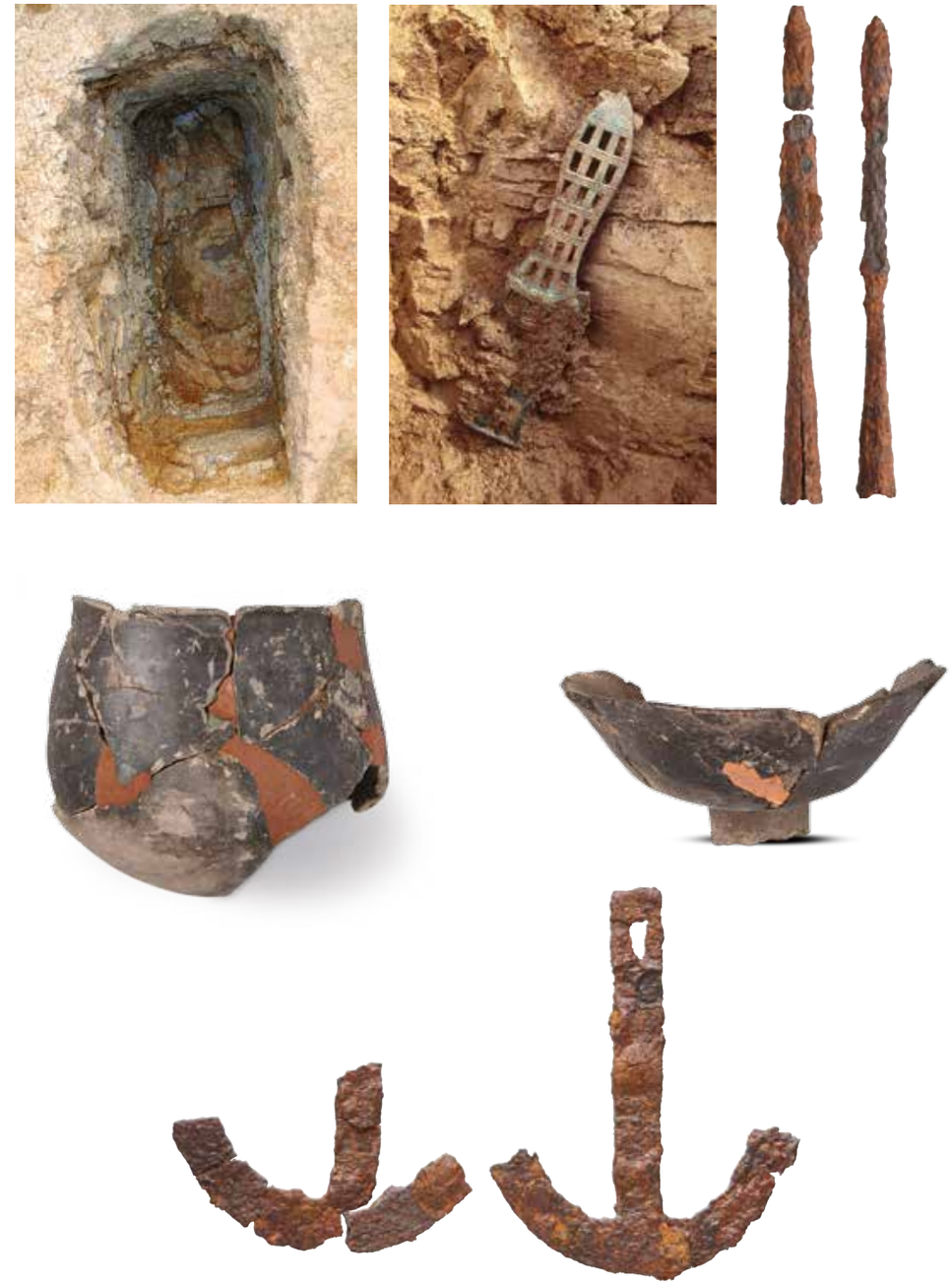

写真 9　永川·竜田里木棺墓調査の様子と出土遺物

角形把手付壺」と「袋状壺」などの場合、一緒に並んで埋納されているので、もしかしたら死後の生活用に埋められたのではないかと推測することもできるが、腐蝕してあまり残っていない明器である漆器の存在を考慮にいれると、結局これらは供献遺物と位置づけることができる。

続いて、斯盧国期後期の木槨墓の築造過程を復元してみると、「墓地の選定と地ならし-土壙の掘削-遺体の安置-木槨の周りに補強土を設置–墳丘の築造」という風に推定できる。ここでは木棺墓とは異なり、埋土の過程が省かれている。前期の木槨墓は木槨の四柱にのみ補強土を設置し、地上に木槨を置いて墳丘を造ったか、木槨を別な土で覆って墳丘を造った可能性がある。一方、後期の木槨墓は木槨の上にも補強土のような土で覆い、墳丘を造った可能性がある。このような段階毎に、木棺墓でのような儀礼が行われたことは、疑う余地はない。少なくとも、土壙の選定の際、土壙の掘削後、木槨の設置中、遺体の安置と遺物の副葬の際、木槨に蓋をする際、墳丘の築造の際、墳丘の完成後などの祭儀や儀礼を推測することができる。

一方、木槨墓の段階では、後期になると被葬者の盛服遺物、儀礼に関連する遺物や被葬者のための供献遺物の外に、死後の生活用品が別に副葬される傾向が見られる。後期木槨墓では、木槨の内部に仕切りをした副槨や、別に設置された副槨が現れる。これらには死後の生活用品が埋葬され、副槨のない場合は被葬者の足元にそれらが副葬される。また、主槨の内部における遺物の配置は次第に定型化していき、被葬者の頭部側に高杯をはじめとする供献遺物が置かれるようになる。これは結局、麻立干期の墓における新羅の遺物配置型式へと受け継がれていく。

3 服飾

「衣」は「食」と「住」とともに、人間が生活する上で最も基本となるものの一つである。しかし、服は人間にとっての必需品であるだけでなく、一人の人間をその人らしくする特徴をも併せ持つ。人類にとって服は、最初はそれこそ寒さを凌ぎ、体温を保つ目的で作られた。それが、次第に認知が発達し、社会が発展していく過程で、人々は服や装身具などを身に付け、おしゃれに目覚めるとともに、服を通じて自らの社会的·個人的個性やアイデンティティーを示そうとした。服飾とは、このような服と装身具類、またはそれらの組み合わせの様式を指す言葉である。

東アジアにおける古代社会の服飾には、それを着用した人物とその時代像が反映されている。当時の社会において支配階級は自らの政治·社会上の排他的地位を可視化するため、高級素材の華やかな服飾を着用した。また、国家は律令制度の下、身分の貴賤や高低を服飾の材質や色の違いで区別した。新羅·興徳王9年(834)に頒布された「禁令」を通じても、そのような様子をうかがい知ることができる。

記録上の服飾

新羅の服飾に関する文献の情報は非常に少ない。『三国史記』「雑志色服条」の記録や中国正史に記された断片的な記録があるのみである。したがって、考古学的資料を考慮に入れる必要がある。しかし、保存状態が良好な遺跡が発掘されたとしても、衣類が完全な状態で出土した例はなく、残っているとしても装身具のみとなっているので、新羅の服飾を理解するには限界がある。

斯盧国の服飾を伝える直接的な記録は残っていない。ただし、3世紀中頃に編纂された中国の歴史書『三国志』「魏書東夷伝」では、斯盧国の属した三韓の服飾全般について知ることのできる次のような断片的な記述がある。

ⓐ その風俗は衣幘を好む。下戸が(楽浪)郡に出向き、謁見する時は皆衣幘を借りる。自ら印綬と衣幘を着用する者は千人に上る。〈韓条〉
ⓑ 玉を貴重な宝と思い、服に縫い付けて装飾を施したり、首輪や耳飾りにすることもある。金銀や刺繍の入った絹織物を貴重な物と考えない。〈韓条〉
ⓒ 彼らは…冠をかぶらずサントゥ(韓国の髷)を露わにしていて、まるで輝く瓶のようである。麻のトゥルマギ(外套)を着用し、革や藁の靴を履く。〈韓条〉
ⓓ 蚕桑に長け、絹織物を作る。〈弁辰条〉
ⓔ また幅広く細かい麻を作る。〈弁辰条〉

ⓐⓑからは、社会の支配階級の服飾が推測できる。三韓に属した国は78カ国ほどあったが、中国風の印綬と衣幘を用いる人が千人ほどいたということから、単純に考えても国別に10人という計算になる。したがって、彼らは各国の支配階級だったはずである。彼らより地位の低かった「下戸」は漢の郡県に入朝する際には、衣幘を借りて着用した。ⓑは、発掘で出土した遺物により立証されている。

ⓒは社会構成員の一般的な様子を記録している。比較的上層部は革の靴を、そうでない人は草鞋を履いたものと考えられる。

ⓓⓔは弁韓の製織技術を示す記録である。桑の木を植えて蚕を飼い、絹の糸を作ったという。弁韓の絹織物は糸がまっすぐ伸びていて幅が広かったといわれている。蚕を飼い、絹の糸で絹織物をつくる技術は中国で始まったはずで、ある時期に三韓にまで伝わったのである。

三韓において絹織物は交易品として活用されるか、あるいは支配階級の占有物であったはずである。しかし、絹織物を製作するほど製織技術に優れていたので、社会構成員の殆どは、衣服の材料は不足していなかったはずである。ただし、経済力や社会的地位によっては、所有することのできる織物の品質や種類には制限があったはずである。

発掘された服飾関連遺物

斯盧国期の墓から出土した服飾関連の資料としてはガラス玉や玉を繋いだ頸飾、青銅製腕輪、動物形青銅製帯鉤のような装身具や衣服の装飾用青銅製ボタンを挙げることができる。この時期は、後代の麻立干期とは異なり、金属器に貼りつく状態で残った織物の事例は報告されていない。

何より、記録が示唆するようにガラス製頸輪が基本の装身具となっていたと見えるが、そのガラスの原料は中国や東南アジアから輸入したものと考えられる。金箔ガラス玉のように完成品を輸入したケースもある。前期は隍城洞2号木棺墓からの出土品のように、多様な色のガラス玉を繋いで作った物が、後期は蔚山下垈(ハデ)44号木槨墓からの出土品のように、水晶を加工してつくった物が大型墳墓を中心に出土している。この時期にはまだ、新羅の文化といえば思い浮かぶような、衣服や身体に装飾を施す黄金文化はまだ出現していなかった。

腕輪は耳飾や指輪と同様、装身具として長い歴史を持つ。頭に被る冠や耳飾、頸輪に比べると目立たないが、多量の腕輪を着用することにより可視性を補おうとした。青銅製腕輪は慶州·塔洞(タプトン)木棺墓から4点、隍城洞15号木棺墓(575番地)から2点、舎羅里130号墓から12点が出土した。すべて青銅を鋳造したものであり、断面は丸いものと平べったいものに分けられる。塔洞木棺墓の出土品の1点は表面に8つの突起があり(〈写真10-③〉)、舎羅里と慶山·新垈里(シンデリ)からの出土品の中には、数条の線分を文様として刻んだ事例が含まれている。輸入品なのか現地製作品なのかは明らかになっていない。

青銅製動物形帯鉤は主に腰帯の部品として使われたもので、鉤部で掛けられ

写真 10　慶州一圓の墓から出土された斯盧国装身具
(①⑦德泉里127号木棺墓, ②德泉里18号木槨墓, ③⑥塔洞木棺墓, ④德泉里124号木棺墓, ⑤朝陽洞60号墓)

るようになっている。中国ではこのような金属製腰帯装飾が春秋時代以降大いに流行り、多様な動物形のものがつくられた。その伝統は戦国時代を経て漢代にまで続いたが、この中原文化が周辺に広まる過程で韓半島と満州一円にまで伝わった。韓半島の中南部地域の辰韓と弁韓地域では、早い時期に登場している。

慶州では塔洞木棺墓(〈写真10-⑥〉)、舎羅里130号墓、德泉里127号木棺墓か

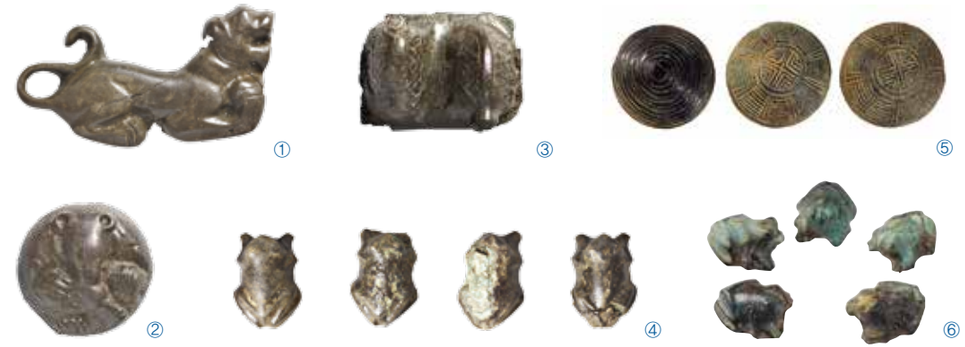

写真 11　慶州·塔洞木棺墓(①~④)と永川·漁隠洞遺跡(⑤~⑥)出土の青銅製ボタン

ら出土した虎形帯鉤装飾が最も早い段階の資料であり、隣接地域である永川·漁隠洞(オウンドン)遺跡、慶山·新垈里(シンデリ)1号木棺墓、同94号木棺墓からの出土品も類似例である。中国·河南省·輝県·琉璃閣152号墓、平壌·中和郡(チュンファグン)·馬場里木槨墓にも類例があるので、前期の資料は、外来系遺物だと考える余地は充分ある。虎形や馬形がいっしょに出土することも、別々に出土することもあり、3世紀の墓などからは馬形が主に出土している。その他、慶山·新垈里55号木棺墓からは、中国の戦国~漢代に流行した曲がった棒の形の帯鉤1点が出土している。このような帯鉤は、平壌·南井里116号墳(彩篋塚)など、楽浪古墳で多数の出土例がある。

1918年、永川·漁隠洞の土砂崩れにより、中国·漢の青銅鏡及び倣製鏡、青銅製帯鉤などとともに青銅製ボタン〔銅泡〕(〈写真11-⑤~⑥〉)が出土した。今まで韓国の学界ではこのボタンを、漠然と北方シベリア及び満州地域における青銅器文化の産物と考えていた。しかし、北方地域においてこれと形態の類例を探すことは今のところできない。ボタンに表現された幾条の線文は韓国式銅剣文化期である青銅器や原三国時代の青銅製腕輪に表現された文様に類似しているので、それらが出土している嶺南地域において製作されたものと考えることもできる。漁隠洞(オウンドン)遺跡と塔洞木棺墓から出土した蛙形のボタン(〈写真11-④と⑥〉)は類例が中国の遼寧省の出土品にあるが、かなり大きいのでこの遺物とは異なる。塔洞木棺墓から出土した虎形、熊形の装飾品(〈写真11-①~②〉)は、中国·春秋~西漢遺跡の出土品に類例がある。

4 器物

発掘資料として知られている斯盧国期の器物は、土器と鉄器が代表的である。これらの器物はほとんど墓からの出土品である。もちろん、土器と鉄器以外にも、装身具として製作された青銅器や漆器もある。ただし、漆器は形が保たれた状態で出土する事例がほとんどないため、記述するほどの証拠がない。慶州市内の塔洞木棺墓から四脚付漆円盤と多数の蓋付円筒形漆器、漆塗りの扇子の骨が出土している点だけを述べておく。青銅器はほぼ服飾と関連があるので、そこで述べる。

土器

1977年、慶州·朝陽洞の遺跡から、当時まで発見されたことのなかった新しい形の土器が偶然発見された。この墓遺跡は1980年代初めまで発掘が続き、それまで知られていなかった新しい様式の土器群が全貌を現した。これらの土器は、瓦のように柔らかいという意味で「瓦質土器」と命名されたが、これらは斯盧国期、中でもおおよそ3世紀中頃までを代表する土器である。

写真 12　初期鉄器時代土器類(慶州·下邱里木棺墓)

これらの土器は前の時代である初期鉄器時代の無文土器の製作技法に基づいていると同時に、中国の戦国時代の土器製作の伝統を受け継いだ漢代土器の影響も受けている。土器をつくる際に轆轤(ろくろ)を用いており、赤褐色を出す従来の酸化炎焼成土器とは異なり、半分密閉された窯という還元炎の中で、この時までは1000℃以下の温度で焼いているので、土器の色は灰白色または灰黄色となっている。このような土器を使用した期間は斯盧国期の墓制の流れと軌を同じくし、木棺墓の段階と木槨墓の段階に大別できる。そして木槨墓の段階では副槨が登場する時代である3世紀中頃になると、1000℃以上の高温で焼き、非常に硬い陶質土器へと次第に発展し、麻立干期において本格的な新羅土器が登場する4世紀中頃まで使われる。麻立干期の新羅土器と区別し、一般的にこれを古式陶質土器と呼ぶ。

瓦質土器は後の古式陶質土器や新羅土器に比べ、器種がシンプルで土器の質が非常に柔らかいという特徴を持つ。また、前段階の土器で、口縁部の断面が円形または三角形の粘土帯土器(〈写真12〉)に比べ、胎土が厳選されていたという重要な特徴を持つ。一部の器種には叩き技法が採用されている。前期と後期に

写真 13　組合牛角形把手付長頸壺(朝陽洞38号墓)

写真 14　袋状壺(朝陽洞38号墓)

大きく分けることができ、それぞれをここでは「古式」と「新式」と呼ぶ。古式瓦質土器は斯盧国が成立する紀元前1世紀前期になると登場する。現在まで知られている代表的な器種は、二本の牛角の先の部分を付けたような形の「組合牛角形把手付長頸壺(〈写真13〉)と、立面が袋のような形の小さい壺(そのため、袋状壺と呼ばれる)(〈写真14〉)があり、その他、叩き文(縄文)短頸壺と外反口縁短頸壺と小鉢のような小さい器がある。古式瓦質土器は木棺墓や甕棺墓から出土し、慶州地域では朝陽洞遺跡をはじめとする全ての木棺墓遺跡から出土している。

古式瓦質土器の製作技術を継承するとともに、新しい器種を導入した新式瓦質土器は高杯(〈写真15〉)、台付広口壺(〈写真16〉)、台付直口壺 (〈写真17〉)、叩き文(格子文)短頸壺、広口小甕、炉形土器を中心とする。これらの土器の最大の特徴は、すべて台付きだという点である。器種が前段階に比べてかなり増えており、結果的にこれは続く古式陶質土器の様式に影響を与えるようになる。これらの新式瓦質土器の様式が中心となる時代は、木棺墓から木槨墓へと変わる2世紀中頃から3世紀中頃に古式陶質土器が発生する時期まである。

新式瓦質土器の製作の特徴を見ると、古式瓦質土器に比べ、比較的高温で焼

写真 15　高坏(上:慶州朝陽洞3号墓 下:慶州·德泉里14号墓)

写真 16　台付広口壺(慶州·德泉里19号木槨墓)

写真 17　台付直口壺(慶州·德泉里16号木槨墓)

写真 18　神仙爐形の土器(慶州·德泉里120号木槨墓)

成しており、器の表面を加工するのに平行叩きの道具を用いている。台脚を取りつけ、透かし穴が穿たれることもあり、蓋がそなわるなど、以前の段階に比べ、一歩進んだ製作技術を反映している。しかし、依然として焼成温度は900℃以下で、吸水性が高いため、日常用品としては使いにくい。特に台付広口壺と炉形土器、そしてその変形である神仙炉形の土器(〈写真18〉)などは一種の威信財だったと推定されるほど、製作に手間がかかっている。実際、墓に副葬されている点から見てもこの説は説得力がある。そして、特に斯盧国地域を中心とする辰韓圏域において、いわゆる鴨形土器(〈写真19~20〉)が集中して出土している点も述べておく必要がある。鴨と言っても本当の鴨形は珍しく、胴体は鴨であるが、頭部に鶏冠の付いた形が典型となっているので、現在は絶滅してしまったカモ科の一種ではないかと考えることもできる。頭部がミミズク形のもの(〈写真21〉)も出土している。

以上のように、新式瓦質土器には製作技術の上で多様な変化と革新がもたらされた。つまり、土器を成形するにあたって轆轤を用い、完璧に左右対称の形を作ることができ、厚さを調節することにより標準化を達成することができた。しかも、整面を行うにあたって、格子文や縄文が刻まれた叩き道具を利用することにより、土器の亀裂や破裂を防止し、美的効果を高めた。また、時間の経過とともに、次第に焼成温度の高い土器がつくられた。このような製作技術の変化は、次の段階に登場する古式陶質土器の生産の礎になったであろう。

新式瓦質土器の製作技術と伝統に基づき、新しい製陶技術を受け入れて成立した古式陶質土器は、新羅·加耶土器の様式が分化する前の約百年間つくられた土器群である。実は、陶質土器は前段階の瓦質土器とは異なり、1000℃以上の高温で焼いたもので、焼き物技術という基準からすると、革命的変化が起きたといっても過言ではない。窯は完全に密閉された構造だったはずである。ただし、これらの土器群がまともに定着するまで、かなり時間がかかったことを考えると、それまでこの新しい土器を生産するための実験を繰り返していたと考えられる。初期段階では一時期、副槨を備えた木槨墓から瓦質土器とともに主に陶質短頸壺が共伴している点を見ると、これを対象にそのような実験を行っていたことがわかる。それらの短頸壺は、形が歪なものや、表面に気泡のあるものなどから、製作技術がまだ完成されていないことがわかる。その次に炉形土器などへと変遷する様子をうかがうことができる。これは、古式陶質土器の製作技術が外部からも

写真 19　鴨形土器(慶州·德泉里80号木槨墓)

写真 20　鴨形土器(慶州·德泉里120号木槨墓)

写真 21　ミミズク形土器(慶州·隍城洞575番地20号木槨墓)

写真 22　初期古式陶質土器の短頸壺(慶州·九於里1号木槨墓)

たらされてはいるが、従来の土器製作の伝統に基づき、生産システムが次第に整っていったことを示している。瓦質土器に比べると、陶質土器は焼成に非常に時間がかかるので、陶質土器を生産するようになると、土器生産の構造も次第に専業化していったはずである。

鉄器

斯盧国期は、考古学における時代区分では「原三国時代」と呼ばれる。この時代を特徴づける重要な要素は、鉄器の全面使用である。斯盧国の中心地域である慶州地域の墓からは、他のどの地域より多くの鉄器が見つかっている。舎羅里130号墓に板状鉄斧が70枚も副葬されているという事実(〈写真23〉)がそのことを物語っている。鉄は斯盧国の成立と発展において、最も重要であり、社会の原動力であった。

前の初期鉄器時代の終わりごろである紀元前2世紀には、従来の青銅器から鉄器へと、ある程度移動していることが確認されている。これは嶺南地域に、今まで考えられていたものより早い段階で鉄器文化が流入し、発展していったことを示している。この時期は、袋部（袋部）の断面が長方形の鋳造鉄斧の他に、鉄製短剣など鍛造鉄器が主流となっている。紀元前1世紀初めには、朝陽洞5号墓出土の鉄器で示されているように、既に鋳造や鍛造製の各種鉄器が完全に定着している。鋳造鉄斧は銎部の断面が梯形(〈写真24〉下)の嶺南地域ならではの形に変化する。これは鉄斧という名称で呼ばれたが、用途は鍬だったと考えられ、鉄器が本格的に生産されていたことを示す証左である。また、この時期の嶺南地域における鉄器の中で、もう一つの特徴といえる種類の板状鉄斧(〈写真24〉上)も、本格的に墓の中に副葬されるようになる。この板状鉄斧は前段階のものに比べ、より一層標準化が進んでおり、そのまま刃をつけることで斧として使われたりもしたはずだが、主に他の鍛造鉄器を作るのに、素材の役割を果たした鉄器と考えられている。その他に農具として鉄鎌(〈写真25〉)と大小の鍛造鉄斧も副葬されており、先に丸い環の付いた環頭刀子は削刀として使われたのではないかと思われる。

武器類としては鉄剣(〈写真26-①~③〉)が最も基本的で、初期鉄器時代から使

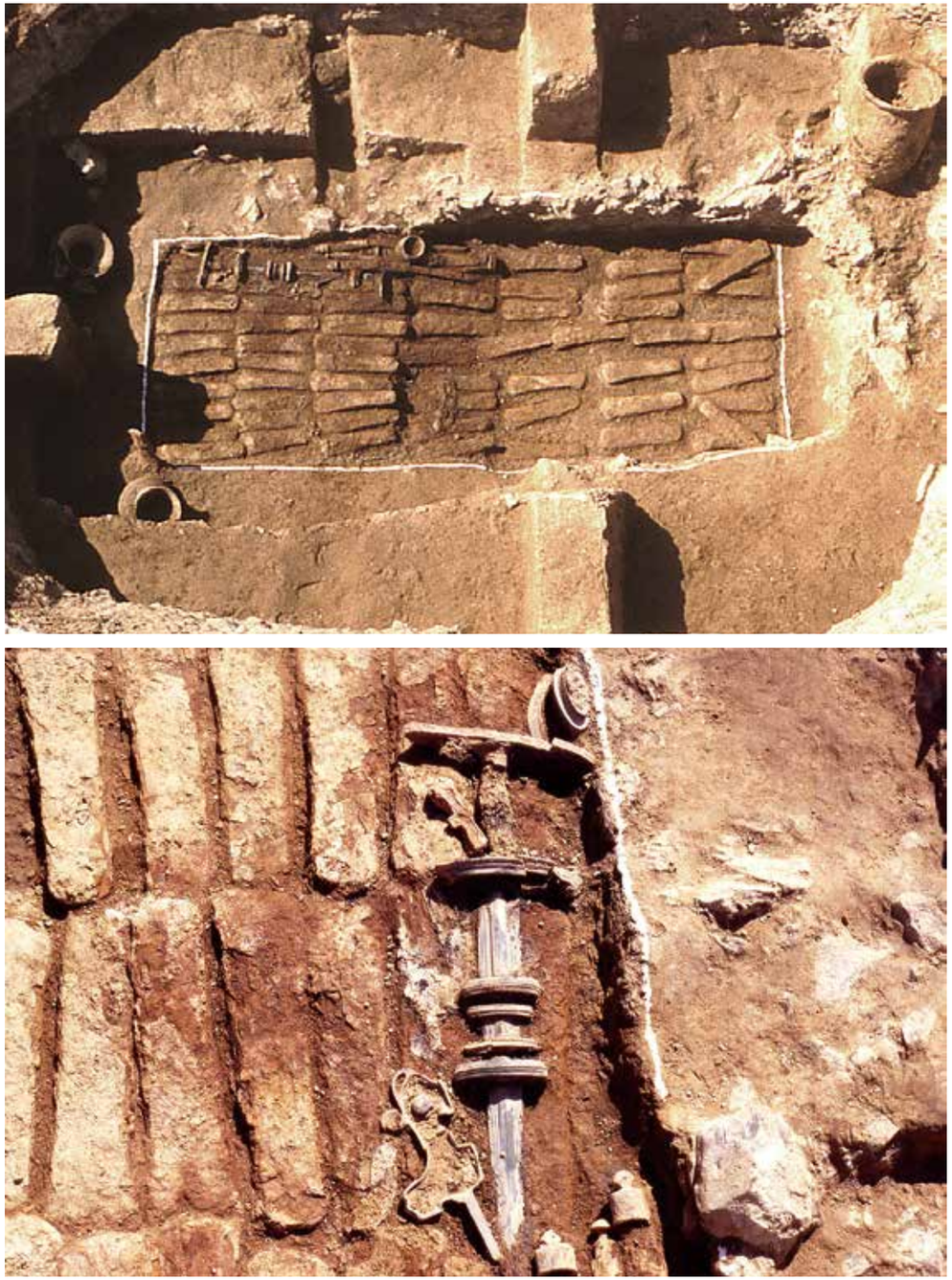

写真 23　慶州·舎羅里130号墓とその細部

写真 24　慶州と周辺の墳墓から出土された板状鉄斧(上)と 鑄造鉄斧(下)

われ、その他、鉄矛(〈写真26-④~⑬〉)があった。これらは以前からあった青銅器のものに代わって造られたが、すべて鍛造製品だった。斯盧国期になると、鉄鏃(てつぞく)が広く副葬されるようになる。鉄剣は短剣が使われ続けたが、2世紀中頃に長剣が一時的に流行し、2世紀末頃に大刀が出現した。この大刀には環頭の付いたものが広く使われたが、大型の木槨墓でのみ副葬されたという特徴を持

写真 25　鉄鎌(上：蔚山·倉坪洞810番地2号墓, 下：慶州·隍城洞575番地64号木槨墓)

つ。鉄矛は嶺南地域ならではの二段冠式鉄矛が流行した。これは木の柄を挿す銎部に関部1段が追加された形である(〈写真26-④〉)。鉄鏃は矢柄に挿す「込み」のない無茎逆刺式(〈写真27〉)が最初から流行っていたが、後に木槨墓段階になると有茎式になる。無茎式鉄鏃は最初は全体が短く、幅の広い特徴を持ったが、その後、全体が長くなり、鏃身部の幅も狭くなる。先史時代に既に有茎式鏃(やじり)を使っていたにもかかわらず、このように原三国時代に無茎式鉄鏃が使われた理由は、製作の容易性のためであろう。

以上の鉄器の所有は斯盧国期の初期から前の時代における青銅器の所有のように、有力者に限られていたようである。その点は舍羅里130号墓で如実に現れている。特に、この時期に無茎式鉄鏃とともに関(まち)が突出した鉄矛が多数副葬される現象は慶州地域のみならず、他の地域でも見られる。この頃、嶺南地域における辰韓·弁韓の支配階級の武力の基盤が本格的に形成されつつあったことを示している。

木槨墓が使われるようになる西暦2世紀頃には、鉄器の様相が画期的に変わる部分が多い。個人の武器としての環頭大刀(〈写真28〉)が従来の鋤以外に熊手鍬、円匙の先のような畑を耕すための農具とともに、大型木槨墓に1つのセットとして副葬される傾向が見られる。鉄製円匙の先と熊手鍬の出現は農業生産力の増加を示すものであり、農具が大型の墓にのみ副葬される現象は、農具が独占

写真 26　慶州一圓の墓から出土された 鉄剣(①~③)と 鉄矛(④~⑬)

写真 27　無莖逆刺式鉄鏃(蔚山·倉坪洞810番地2号墓)

写真 28　環頭大刀
(慶州·隍城洞江
辺路1号木槨墓)

写真 29　渦巻形装飾付鉄矛
(慶州·九於里1号木槨墓)

写真 30　有刺利器(慶州·九於里1号木槨墓)

写真 31　タビ(左：慶州·德泉里19号木槨墓
右：慶州·九於里1号木槨墓)

状態だったことを表している。このような墓には、装身具として大きな水晶製玉類が副葬され、政治･経済的により一層強くなった支配階級が登場していることを物語っている。

一方、徳泉里木槨墓で見られるように、3世紀中頃から長い鉄製の棒を丸くして表現した「蕨手形」の装飾が施された鉄帽を木槨墓の床に敷く埋蔵の風習が、慶州地域でも現れる。これは斯盧国における支配階級の埋葬儀礼の特徴の一つで、このような装飾そのものは、その時代に鉄器制作の技術が非常に発達していたことを示す現象である。この時期に登場する武具の甲や、続いて登場する冑も、鉄器製作技術の発展を如実に現している。甲は縦長の板を並べた「縦長板

写真 32　U字形刃先(浦項･玉城里ナ-101号木槨墓)

写真 33　又鍬(左：浦項･玉城里ナ-101号木槨墓, 右：慶州･隍城洞575番地64号木槨墓)

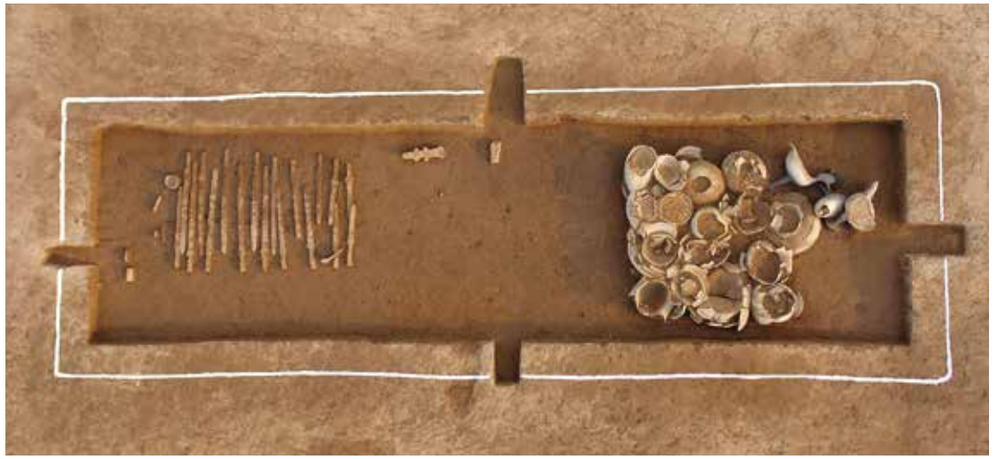

写真 34　徳泉里120号木槨墓

写真 35　頸甲を伴う縦長板甲

写真 36　慶州·舍羅里130号墓出土の轡とハミ

写真 37　慶州·隍城洞江辺路1号木槨墓出土の轡とハミ

甲」の形をしている。このような甲は上体の胴体だけでなく、首を保護する頸甲が付いているものもある。鉄器の製作技術は、すでに3世紀前後の時期に活発に操業が行われたことを示す隍城洞鉄器製作遺跡で溶解·精錬·鍛冶の工程がすべて行われたことからも、十分その発展の様子を推定することができる。

利器や武器以外の鉄器としては馬具がある。斯盧国期の馬具は、その成立期である紀元前1世紀に最初に墓の副葬品として登場する。馬を制御するのに最も効果的な轡(くつわ)が主に確認され、轡を馬の口に固定するための「8」の字形や輪の形の轡の連結具なども出土することがある。轡は馬の口に噛ませ、舌を刺激する銜(はみ)と、銜が馬の口から外れることを防止するための鑣(はみえだ)によって構成される。紀元前1世紀の馬具としては、長い棒状の鑣を採用した轡とハミだけが使われる。鉄棒をねじった2連の銜の先に、丸いプロペラ形や先の角ばったI字形の鑣を繋げたの」のである。鑣の先が平べったい反面、鑣の中間部分は比較的厚く、轡に繋ぐための2つの穴が側面にある。

1世紀~2世紀前半の馬具は、前の時代のものが続く中で、I字形の轡の出土例が増えている。この時期において注目に値する現象は、鑣がS字形で、その先を曲げて蕨形のように装飾を施した轡の登場である。舍羅里130号出土品(〈写真36〉)が最も代表的で、最近では塔洞木棺墓からも出土している。鑣に装飾が施された蕨形は馬具だけでなく、鉄矛などの武器類にも採用されている。これは特に、辰韓·弁韓地域のみで確認される独特な形である。

2世紀中頃~3世紀の馬具は木槨墓という新しい墓制の出現とともに、それ以前とは異なる様相をもって展開する。最大の特徴は、副葬されている轡が、本来の機能を果たすことのできない形と大きさだという点である。それ以前とは異なり、蕨形の装飾が多様化するS字形の轡がほとんどであるが、轡の大きさが30㎝以上に大きくなるなど、馬を制御するという機能は落ちてしまう。また、鑣の正面に1つの穴だけがある点もそうである。この穴では轡を繋ぐことができないだけでなく、轡を繋いだとしても、鑣の機能を果たすことはできない。また、轡が馬の口にくわえさせるにはあまりにも長いか細いので、轡の本来の機能はないものと見え、墓の副葬用として製作されたと思われる。隍城洞江辺路1号木槨墓からの出土品(〈写真37〉)などがその代表である。

5 遺物から見た対外交流

斯盧国期の対外交流を示す遺物には、金属製品とガラス製品がある。金属製品としては中国製の銅鏡が代表的であり、その他に一部の青銅製装身具がある。ガラス製品の中で玉は原料を中国や東南アジアから輸入しているので、対外交流を反映しているといえる。そして、金箔ガラス玉は楽浪または中原地方の製品が馬韓を経て流入した可能性が考えられる。

金属製品

斯盧国期の遺跡から出土した外来系遺物のうち、製作地の判別が容易なものとして、銅鏡を挙げることができる。銅鏡は数が多い上に、漢鏡が多数を占めるためである。代表的な事例として、1982年に発掘された慶州·朝陽洞38号墓出土の西漢鏡一括品がある。4点の完形と1点の再加工品が出土している。すべて「異体字銘帯鏡」である。銘文の内容によって「家常貴富鏡」、「昭明鏡」、「日光鏡」とに分けられる(〈写真38〉)。複数の西漢鏡がセットになって出土している点が注目を集めた。墓の築造年代は紀元前1世紀後半までさかのぼる見解が有力である。

写真 38　朝陽洞38号墓等から出土した漢鏡

2010年には朝陽洞38号墓よりは1世紀ほど遅い時期の西暦1世紀後半のものと考えられる木棺墓が月城の南に隣接した塔洞から発掘された。墓の内部からは瓦質土器とともに細形銅剣、虎形帯鉤、動物形の青銅製ボタン、青銅製腕輪、鉄製轡、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鉄矛、鉄鍑など、多くの遺物が出土した(〈写真39〉)。慶州盆地の中心から外来系遺物が副葬された木棺墓が発掘されたという点で重要な意味を有する。

銅鏡は2点出土した。そのうち1点は典型的な日光鏡であるが、他の1点は1つの字を繰り返して配置し、文様を構成した「倣製鏡」である。この塔洞木棺墓と同

写真 39　慶州·塔洞木棺墓出土外来系遺物と倣製鏡

時期の墓と考えられる舎羅里130号墓からは4点の倣製鏡が出土した。

漢鏡の製作場所は中原地域である。これらの鏡は北朝鮮の西側の楽浪など漢の郡県を経て嶺南地域へと流入したもので、当時の辰韓·弁韓と楽浪との間の交易を実証している。斯盧国の慶州地域では、楽浪が設置されて一定の時間が経過した後になって入ってきたものであるが、周辺の浦項、永川、慶山などではそれより早い時期に製作された星雲文鏡やその再加工品が出土していることから、嶺南地域と北朝鮮の西側との間に、交易システムが早くから働いていたことを物語っている。倣製鏡の制作場所については日本(倭)と考える見解もあるが、辰韓·弁韓地域のものの可能性も無きにしもあらずである。

装身具

この時期の斯盧国地域から出土した金属製装身具としては、青銅製腕輪と青銅製動物形帯鉤がある。金属製装身具を着用する習慣はこの時期に入って始められた現象なので、その初現期の資料の中で輸入品がある程度含まれいていると考えられる。ただし、何をもって輸入品と判断するか、断定はできない。

塔洞木棺墓から出土した4点の青銅製腕輪のうち、1点には8つの螺髪形突起がある。残りの3点は着装品の可能性がある。また、舎羅里(サラリ)130号墓からは被葬者の手首あたりの二カ所から6点ずつ、計12点が出土しているが、そのうち6点には菱型文と集線文の模様が施されている。楽浪遺跡からも類似した銅製腕輪が見つかっているので、一部の遺物は輸入品である可能性がある。

動物の形をした帯鉤も前期では見つかっていない新しい要素である。慶州では塔洞木棺墓、舎羅里130号墓、徳泉里127号木棺墓から出土した虎の形の帯鉤が現在では最古の資料である。中国河南省·輝県·瑠璃閣152号墓、平壌·中和郡·馬場里木槨墓にも類例があるので、輸入品の可能性が高い。

北方の青銅器文化から多く見られる装飾品の一つで「銅泡(青銅製ボタン)」というものがあるが、様々な動物の形をした鋳造が特徴である。塔洞木棺墓から出土した銅泡はすべて青銅製であり、形は虎·熊·蛙の形、円形、亀の装飾、方形に分けることができる。そのうち、蛙の形をしたボタンはその系譜を北方の青銅器文化に求める意見が多数である。虎や熊の形をしたボタンは韓半島では類例がなく、中国において戦国時代の晩期~漢代遺跡の出土品に比肩する資料である。肉眼で見ても通常の青銅器とは銅質も異なるので、輸入品の可能性が高い。

斯盧国~麻立干期の遺跡から見つかった金属製器は概ね中国中原の礼器に起源を持つものが多いが、「銅鍑」のように遊牧民族が好んだ生活の容器もある。慶州では塔洞木棺墓と舎羅里130号墓から「鉄鍑」が見つかっている。塔洞からの出土品は破損状態が激しく、胴体の一部と底部のみ残っているが、器形からして舎羅里からの出土品と非常に類似している。このような鉄鍑は現在では製作場所を特定することは難しいが、その形は基本的に銅鍑を原型にしているので、輸入品の可能性はある。

ガラスと玉の製品

斯盧国期になると、ガラスの活用頻度が高くなり、製品の種類も多様になる。ガラスに対する自然科学的分析の結果、この時期もそれ以前の初期鉄器時代と同様、鉛-バリューム系ガラスが依然として使われたが、カリウムガラス(potash glass)とソーダガラス(soda glass)が次々と登場したことがわかる。ガラスの原料は中国や東南アジアから輸入されたものと考えられる。舎羅里(サラリ)130号墓から水晶玉や藍色ガラス玉を繋いだ首輪が出土し、徳泉里古墳群や浦項·玉城里(オクソンリ)古墳群からも様々な色のガラス玉の首輪が出土している。

この時期のガラス玉の中で、金箔ガラス玉と呼ばれる重層ガラス玉の存在に注目できる。徳泉里15号墓から1点、24号墓から4点(6粒)など、3世紀の木槨墓2基からこのような特殊な玉が出土した。辰韓·弁韓地域全体としては、金海(キムヘ)·良洞里(ヤンドンリ)462号墓から出土しているにすぎない。しかし、馬韓の場合、19基の墓から123点も出土している。したがって、徳泉里出土品は馬韓を経由して流入した可能性も考えられる。

玉を好む伝統が受け継がれているが、その歴史は先史時代までさかのぼる。中でも青銅器時代には「天河石」、原三国時代には水晶と瑪瑙、三国時代には硬玉が代表的である。玉は当時としては非常に貴重な物と思われ、その所有は階級によって制限があったはずである。

徳泉里18号と19号の木槨墓、朝陽洞3号墓などからは非常に上質な水晶製勾玉や多面玉が出土している。これらの水晶製品は、嶺南地方全体では、木槨墓の段階になって主流となる副葬品である。しかし、舎羅里130号墓で見られるように、慶州地域では木棺墓の段階で既に登場し、斯盧国の先進性を物語っている。まだその素材の産地がどこなのか特定できない状態ではあるが、北朝鮮の西側から輸入したものと推定する意見もある。その他、瑪瑙製品も人々に好まれていた。徳泉里36号木槨墓から出土した瑪瑙は完成品が輸入された可能性も、そして輸入した原石を現地で加工した可能性も否定できない。

写真 40　慶州·徳泉里19号木槨墓出土の水精製勾玉と多面玉

第2章

黄金文化の隆盛

麻立干期

都市と城郭
墓と葬送儀礼
服飾
器物
遺物から見た対外交流

紀元前後以降、独立性を維持しながら洛東江(ナクトンガン)の東の各地に散在していた小さな国々は、3世紀後半から4世紀前半頃になると斯盧国に服属し、その後は広範囲にわたる政治体制が成立した。これが新羅の麻立干期の始まりである。慶州地域はこの過程で王都となり、独立小国として対等の関係を築いていた各地域は、新羅の一地方となった。

『三国史記』における初期記録での小国服属の記事と、麻立干期の時に副葬された各地の墓における新羅様式の品々の分布を見ると、新羅の領域は洛東江東岸の釜山(プサン)、梁山(ヤンサン)、密陽(ミリャン)、昌寧(チャンニョン)、大邱(テグ)、星州(ソンジュ)、そしてその以北の慶尚北道(キョンサンプクト)内陸地域だったと推定される。東海岸の盈徳(ヨンドク)、蔚珍(ウルジン)はもとより、三陟(サムチョク)と江陵(カンルン)、そして襄陽(ヤンヤン)も新羅の領域であった。その他にも、忠清北道·報恩(ポウン)·三年山城周辺の古墳からも5世紀以降の、同一様式の土器が出土しているので、新羅の領域が小白(ソベク)山脈を超え、忠清北道一帯にまで達したことがわかる。

350年代から6世紀初めまでの麻立干期における新羅の地方に対する支配方法を、一般的に「間接支配」と呼ぶ。「間接支配」とは、国家が地方に地方官を派遣して支配する方法ではなく、在地的な基盤を持つ各地の支配勢力を温存させ、彼らを通じて貢物を納めることにより当該地域を統治する方法を指す。各地の様々な政治体を服属させたとはいえ、中央の権力はそれほど強くなかったため、地方を直接治めるほどのレベルには達しておらず、止むを得ず既存勢力を適切に利用し、統治したのである。もちろん、そのような相互関係の変化過程では、例えば各地の連合や対外関係が成立しないように監視するために軍官を派遣した。

麻立干期の開始とともに貢納の形で献納される地方の物が王都に集まるようになり、さらに地方からの夫役(人民の労力)の徴発が可能となると、慶州では王城の月城(ウォルソン)が、その周辺の山には防御用·避難用の山城が築造された。そして慶州市内では麻立干をはじめとする「六部長」の墓である巨大な高塚を築造した際にも、地方の物資と人々が動員されたはずである。月城は築造600年後の、新羅滅亡時まで宮殿として使われ続けた。そのことを考えると、麻立干期は新羅の基礎が築かれた時代だったといえる。

地方では、ある程度中央から権力を委任された「干」をはじめとする支配階級

が被支配階級に対し、以前より強く物資や夫役の貢納を要求し、支配の基盤を築いていった。彼らが死後の居住地と考えて築造した巨大な高塚は、このような間接支配の両面性を示す物的証拠である。この高塚は、その存在そのものとしては各地の支配階級の当該地域における権力の強化を示すものであるが、副葬品として中央から授けられた各種服飾や統一された様式の新羅土器などが出土している点は、被葬者たちが新羅という国家に隷属していたことを物語っているのである。

新羅の麻立干期の生活像をうかがい知ることのできるものは、墓域に遺体のために副葬された形で伝えられている。その副葬品は、土器、金属製装身具、武器、武具、馬具、農工具、金属容器、玉製品、漆器、織物、絵画、外来系遺物など、生活のあらゆる部分を網羅する。このような多種多様な品物は、その量から考えると、副葬品が当時の経済や物流に占める割合は少なくなかったはずである。

土器では全般的に直線美が強調され、特に土偶や馬などを模した土製品の存在は、新羅ならではの特徴である。また、古代において新羅は「黄金の国」と呼ばれた。金銀細工が施された装身具は新羅の支配階級の象徴であり、彼らの墓からは最低一対の耳飾は発見されるという特徴を持つ。「山」字形立飾りによって統一性の保たれた金製·金銅冠、多種多様な金製耳飾、ガラス製頸·胸飾、金製·銀製の帯や大刀などは、新羅古墳を代表する遺物である。その他にも、金製·銀製の容器、高句麗に起源を持つ青銅製容器、東ローマやペルシャ産のガラス製容器や硬玉製勾玉の付いた装身具も特徴的である。また、天馬塚の天馬図が描かれた白樺樹皮製品も、三国の中で、他の国では類例を見ない。特に、遠くシルクロードを経て高句麗から流入したはずの中央アジア系統の独特な宝剣は、韓半島の東南地域の隅にあって対外交易の難しかった新羅にとって、対外交流の重要性を知らしめた物の一つだったはずである。

1　都市と城郭

王都の形成と防御システム

麻立干期における王都の都市計画と防御施設は、3世紀末頃以降の遺構や遺物の分布、そして文献を通じてその概略は把握できる。今までの調査結果、遅くとも4世紀のある時点以降になると、現在の慶州市内の空間は、支配集団の宮殿や墳墓群、そして専門的な生産地区に区画されていたことがわかる。月城とその周辺は、支配階級の居住地であり行政の中心地であった。皇南洞(ファンナムドン)と皇吾洞(ファンオドン)一帯は支配階級の墓域で、隍城洞(ファンソンドン)一帯は専門的な生産施設であると同時に、製鉄を専門とする集団の集落·墓域だったことが確認された。また、平地の中心から少し離れた辺りの場所では、日常品を生産した土器の窯跡などが確認された。これらの区域が互いに何らかの関係があったと想定すると、少なくとも長軸3.5~4.0kmの生活圏を推定することができる。この周辺を都市と認めるためにはまだまだ証拠が必要であるが、少なくとも4世紀後半以降、新羅という広域を支配する政治体の中心として機能していたことは間違いない。

宮殿の月城は、慶州盆地の中央に位置した。少なくとも4世紀頃には完成した

写真1　空から見た月城とその周辺

写真2　発掘された明活山城

はずの月城は新羅が滅亡するまで、王を含む王族が居住し、政務を行った場所である。月城内部に対する考古学的調査がまだ行き届いておらず不確かな部分はあるが、記録や周辺の墳墓群などの遺跡は、それを明確に示している。月城周辺は3世紀まで一般の住居として利用されたが、4世紀以降は一般的な住居とは異なる特別な空間へと変化したと見える。月城は5世紀後半に改築が行われた。『三国史記』「新羅本紀」によると、炤知麻立干9年(485)に月城を修理し、屋根葺きをし直したと記されている。

ところで、この記事は明活(ミョンファル)山城の修理記録とも繋がっている。5世紀後半、高句麗からの攻撃の危険性が高まると、新羅は6部を整備するとともに、王都そのものを防御する目的で明活城の修理に取り掛かった。それ以前に存在していた明活城に対し、大々的な修理に着手したのである。たぶん、土城を石城へと変える作業ではなかったかと思われる。 慶州の東に位置する明活山城は、大規模のものである。慶州から吐含山(トハムサン)の麓にある秋嶺(チュリョン)を経て東海岸へと進む場所にあるが、この方面から侵入して来る日本兵を防ぐ要地としての機能を果たしていた。この山城を修理したということはもちろん日本兵だけでなく、高句麗の差し迫った攻撃に備え、避難場所として利用するためのものだったのである。実際、475年に百済が漢城を陥落したという知らせを受けると、直ちに王の居住場所を明活山城へと移した。その後、488年に月城の修理が終わって王がそこに帰るまで、明活山城は約10年間、新羅の王城としての機能を果たした。

新羅の都城一帯における防御施設の遺跡の分布を見ると、月城を中心として東の明活山城、南の南山新城(ナムサンシンソン)、西の西兄(ソヒョン)山城を結ぶ第一圏域を想定することができる。さらに北の北兄(プッキョン)山城、東南の関門城(クァンムンソン)、西の釜山城(プサンソン)を結ぶ第二圏域を考えることができる。現在まで見つかった資料から考え、このような防御ラインが完成するのは、中代以降である。但し、中古期と中代に築造されたものと記された城跡からも麻立干期の土器片が採集される現象に注目してみると、上記の築城の時点以前にも、土城またはそれに準ずる防御施設が存在していた可能性は充分ある。当該城跡が位置する場所が、新羅の王都を守るのに非常に重要な防御の拠点だからである。慶州一帯に分布する城跡の築造順は、月城→第一次圏域→第二次圏域へと拡大

していったか、あるいは最初は複数の土城が並列していたものがある時点で石城に代わり、都城の防御システムへと編制されたか、いずれかである。

全国単位の防御システムの構築

新羅は王都の整備と並行し、地方に対する支配力を強化した。麻立干期における地方に対する支配は、築城事業を通じて大きな進展を見せた。470年、三年(サムニョン)山城を皮切りに、全国で築城工事が実施された。三年山城という名称は、3年にわたる夫役の動員によって完成したから名づけられたもので、築城に心血が注がれたことがわかる。これは新羅が当時の高句麗の攻撃に備えるためにどれほど苦心したかを物語る事例である。『三国史記』によると、471年には芼老城(モロソン)、474年には一牟(イルモ)、沙尸(サシ)など数カ所で築城された。これらの城の具体的な位置は明らかになっていないが、交通上·軍事上の要地だったと推定される。

各地方の築城のための夫役動員の方法や規模などを知る具体的な記録は残っていないが、468年での泥河(ニハ)築城の記事から考えると、15歳以上が主な動員の対象となった。夫役動員の必要性が高まると、国家レベルで年齢や性別について把握するための基礎作業が全国的に行われ、現地において彼らを管理する組織も当然のように整ったはずである。この時、地域の最高首長である「村干」が取りまとめる役割を果たしたが、その下で実務を担当した組織もあったはずである。

現在、嶺南(ヨンナム)の随所に残っている城跡のうち、この時期に築造された可能性のある資料は、洛東江中·下流地域、慶尚北道北部地域、忠清北道地域、そして東海岸に存在する。洛東江中·下流地域は、慶州へ向かう交通路の主な拠点に位置する。洛東江と琴湖江(クムホガン)が合流する場所、大邱(テグ)と慶山(キョンサン)、永川(ヨンチョン)へと続く拠点に位置する城跡は、お互い緊密な関係にあり、体系の一部になっていたと推定できる。そして梁山(ヤンサン)、彦陽(オニャン)、蔚山へと続く線にも多数の城跡が分布しており、やはり体系の一部と考えられる。

写真3　報恩·三年山城の城壁

慶尚北道北部地域の中には金泉(キムチョン)、尚州(サンジュ)、聞慶(ムンギョン)、栄州(ヨンジュ)にとくに城跡が多く残っている。しかし、麻立干期になって築造が初められたかという点は、今後の発掘調査などによる検証の必要がある。聞慶·姑母(コモ)山城は発掘調査により、最初に築造されたのが麻立干期にまで遡ることが明らかとなった。この山城は、二つの川が合流する地点に築造されており、周りは計1,300mである。加工した石材で城壁が築かれている。発掘調査により確認された外壁の高さは7~13.8mに達する。内部施設としては城門、城門の外側に設けられた城壁、胸壁、貯水施設などがあり、特に地下の木造集水池は横12.3m、縦6.6~6.9mにもなる大きさである。姑母山城は小白(ソベク)山脈の向こう、聞慶へ入る要所を守り、そこと尚州を結ぶ主な交通路を防御するために築かれた城郭と推定される。

忠清北道地域には、当時、百済や高句麗との国境地帯に山城があり、報恩(ポ

写真 4　聞慶·姑母山城発掘の様子

ウン)·三年山城はその代表格である。この城は忠清北道·報恩の平野が見渡せる烏頂山(オジョンサン)に築かれた包谷式石積み山城である。三峰(サンボン)と西の谷を結ぶ城郭の周囲は1680mである。城壁の高さは地形によって異なるが、ほぼ13~20mであり、平べったい石を縦横に互い違いに積み、荷重が集中する角の下部を階段状に外側に広がるように築いた。東西南北の四カ所に城門があり、甕

写真 5　江陵·江門洞土城の遠景(砂丘に位置)

城七カ所を始めとし、井戸跡5カ所、排水口などが確認された。慈悲麻立干13年(470)にはじめて築造されたが、炤知麻立干8年(486)に改築されたという。現存する城郭は、その構造から見て麻立干期の城郭を土台に増築と改築が繰り返されたであろう。

東海岸では近年に発掘された江陵·江門洞(カンムンドン)土城がある。この城は江陵·鏡浦台(キョンポデ)や東海に隣接しており、海抜8~26mの竹島峰(チュクトボン)を基盤にして築かれた土城である。大きさは東西404m、南北165m、総周囲約1000mである。城壁の外側の基礎部は砂利や加工された石材をもって最大4段に積み、その上は版築で盛り土をした。内部からは方形竪穴遺構、集水施設とともに多くの土器が出土しており、5世紀後半まで遡ることのできる資料が含まれている。この土城は『三国史記』の炤知麻立干11年(486)の泥河築城の記事、智証王13年(512)、何瑟羅州の設置記事と関連付けることのできる資料である。

2　墓と葬送儀礼

墓制

嶺南地域における墓(古墳)の変遷過程を概観すると、麻立干期の墓を特徴づける最も重要な要素は、巨大な墳丘である。これらは高塚と呼ばれる。大きな墳丘を築いた目的は、被葬者と深い親縁関係にありその墓を築造した人物が自らの権力を誇示することにあったと思われる。この高塚はまるで記念物のように、現在でもほぼ本来の状態を保ち、注目を集めている。高塚は慶州地域を中心にして新羅の地方各地で築かれた。その内部構造はそれ以前の墓とは異なり、石を用いたという点が重要な特徴であるが、大きく見て二種類に分けることができる。慶州地域の積石木槨墳と、その他の地域の竪穴式石槨墳である。竪穴式石槨は土壙を掘り石を積んで石槨を築いたという点は共通しているが、平面の形や石積みの方法は多岐にわたる。

麻立干期になると、慶州では以前の斯盧国期に墓が造られた盆地周辺の谷間地帯の随所に古墳が続けて造営される一方、市内中心の王京地区に新しく大小の高塚が結集するという形で築造されていく。それらは月城の北において大小の墳丘が大きな高塚群となり、主に皇南洞に位置していることから「皇南洞古墳群」と呼ばれ、近年では「月城北古墳群」と呼ばれている。そしてここから西に少し離れた金尺里にも高塚群が造営されている。したがって、慶州地域ではいわば中代の高塚が二カ所に密集しているのである。

写真 6　慶州·皇南洞古墳群の全景(最左側は天馬塚)

写真 7　慶州·金尺里古墳群の全景

この二カ所の高塚群は、今まで行われた発掘調査により、その内部構造は積石木槨墳であることが知られている。積石木槨墳の中で、それ以前の木槨墓から土壙と木槨の間を詰めていた土の代わりに、人頭ほどの石で詰め、また木槨の上に

も石を積み上げたものをその典型とする。但し、石積みの方法は時間の流れによって多様な形になっている。積石木槨墳の中で初期のものは、それ以前の木槨墓の築造方法を継承し、土壙と木槨の間には充填土の代わりに積石が加わった形である。それも最初は土と石を混ぜて詰めていたのが次第に土壙が深くなり、積石の量も増えていって、とうとう木槨の周りをすべて石で詰める石囲墓の形式に発展する。その次は、木槨の上部にも石積みをする形が現れる。最終的には木槨が地上に置かれてその周りに木製の架構が行われ、石積みが行われる形も登場する。

積石木槨墳が主流となった理由は、斯盧国から新羅へと変化する中で慶州盆地の各谷間地帯に住んでいた邑落の支配階級の上層部が市内の王京地区に集結し、自らのアイデンティティーを表す墓制として積石木槨墳を選んだからであろう。言い換えると、新羅六部が形成され、それに属する支配階級が積石木槨を内部の主体とする高塚を造り続けた結果なのである。

慶州市内の高塚の間には積石木槨墳の他に小型の竪穴式石槨墓も存在する。規模の面でも、出土遺物数の面でも積石木槨墳よりかなり小規模で、基本的に積石木槨墳の被葬者より社会的に身分の低い階層の人の墓と思われる。一方、竪穴式石槨墓より早い時期の伝統をそのまま受け継ぐ木槨墓も存在する。これらの木槨墓の被葬者も積石木槨墳より身分の低い人物だったと思われる。舎羅里(サラリ)遺跡のように、積石木槨墳と木槨墓、そして竪穴式石槨墓が同じ場所に造られた様相を見ると明らかである。そして市内の王京地区において比較的規模の大きい主·副槨構造の墓から馬鎧と甲冑一式が出土し、注目を集めたチョクセム地区C10号墓が木槨墓だという点は象徴的である。以前からもそうであったように、甕棺墓は幼児または子供の墓で、他の墓制に付属した形で造られた。

慶州市内の王京地区において、規模の大きい古墳はすべて地上に被葬者を安置した構造の積石木槨墳である。このような大型墳墓をはじめとする高塚は、日本の植民地時代には155基が残っていると把握していたが、その他にも地下に無数の大小の墓がある。それらも麻立干期及び中古期初期の墓で、大きく見ると新羅六部の支配階級を構成していた人々の墓だと理解できる。

王京地区における麻立干期の高塚は、全体的に月城側から西北へと造営されていたと知られているが、そのような傾向はしかし一律的だったとは言い難い。現在、明確にその高塚群を区分することは難しいが、麻立干期の政治が六部体制に

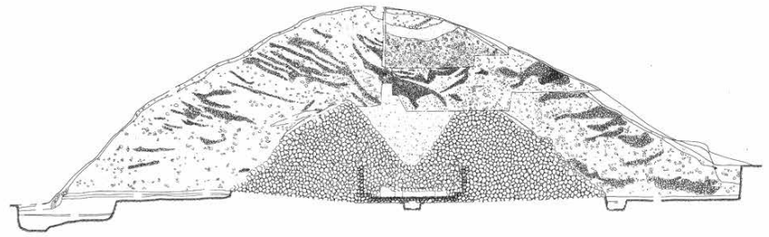

図1　地上に被葬者を安置した積石木槨墳の断面図(天馬塚)

写真8　慶州·皇南大塚·南墳の墳丘を取り除いた後の積石部全景

より行われていたことを考えると、六部別に墓域の区分があり、その墓域に大小の高塚群に時系列に造営された可能性がある。

槨の形は時間の流れに沿って変化したものと思われるが、主槨と副槨が前の時代の木槨墓を受け継いで「昌」、または「日」字形の配置をした主·副槨の、別途の土壙の槨が最初に出現した。続いて単槨の槨に頭部及び足部の両方に副葬する形、主槨と副槨が「明」字形に平行して配置され、主·副槨が同一の土壙の槨が現

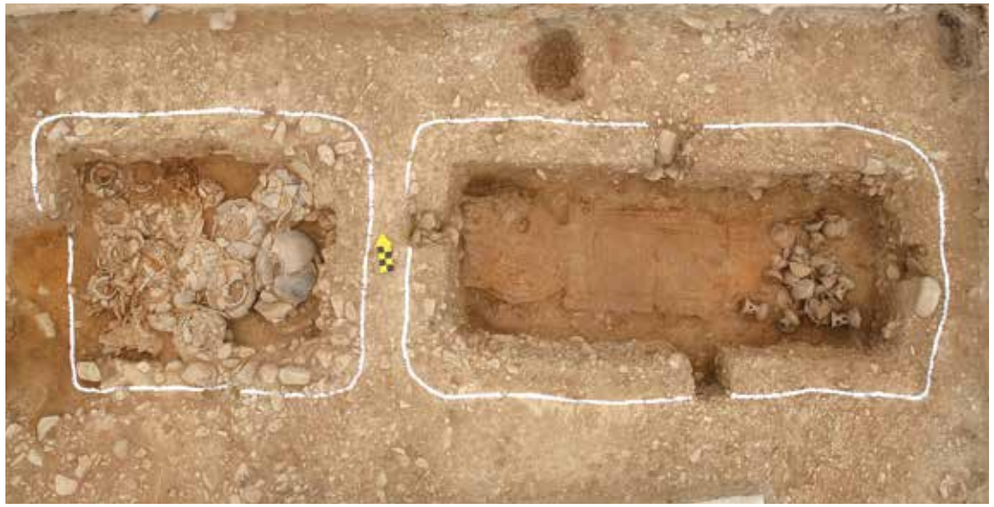

写真 9　慶州·チョクセム地区C10号墓の調査全景

写真 10　慶州·天馬塚の木槨の中の遺物が顕になった様子

れた。さらに頭部副葬の槨、最後に足部副葬の槨が現れた。

　墳墓の形は単葬墓、両葬墓、多葬墓に分けることができる。単葬墓、つまり1つの円墳の他に、瓢形墳、つまり両葬墓があり、さらに3基以上の槨が連接したものがあるという点は慶州地域ならではの積石木槨墳の1つの特徴である。墳墓を築造する時は、連接の回数と方法により、最終的な墳丘の形が多様になる。連接方法の中で最も一般的な基本形は、前に築かれた墓の護石の一部を取り除き、そこに墓を連接して設置する方法である。それが完成すると瓢形墳となる。多葬墓とは、このようにして3基以上連接させたものを指すが、瓢形墳とは異なり、護石を取り除かず続けて墓を設置する場合もあり、時には前に築かれた二つの単墓の間にそれぞれの護石の一部を取り除いて造るケースもあるようである。

　慶州において積石木槨墳が高塚として完全に定着する頃、新羅の地方各地においても高塚が築造され始めた。大きく見て、辰韓時代に各地の小国を構成した邑落のある地区の中心には、高塚群が造営された。その内部の主体は竪穴式

写真 11　瓢形墳の皇南大塚全景

写真 12　5基の墓が連接したチョクセムB地区古墳群(B1~4、6号墳)

石槨墓か、横口式石室墓である。このような高塚の内部構造物である石槨墓は、釜山や慶山のように、以前の木槨墓の形を継承·発展させた場所もあり、以前の木槨墓の形とは関係なく採用されるケースも多いようである。大邱や昌寧(チャンニョン)のように、一地域の中でも地区によってかなり異なる場合もあるからである。このように、麻立干期における新羅の地方の墓制は各地域及び地区において、竪穴式石槨または横口式石室という基本形は共通していながら、それぞれ独特な構造を有していた。

竪穴式石槨墓は木槨墓や積石木槨墳とは異なり、墓の外形がそれほど変形した状態で発掘されていないので、石槨の構造そのものに対する議論はあまりない方である。それを構成する最大の特徴の1つは、蓋石の存在である。これは前段階の木槨墓とは明確に異なる点であり、また慶州地域の積石木槨墳との相違点でもある。木槨墓から竪穴式石槨墓への変化過程を如実に示すのが福泉洞(ポクチョンドン)古墳群である。まず木槨の外郭が石槨に代わる方向へ変わり、最終的に蓋石が被せられる方向へと進むことにより、竪穴式石槨という墓制が完成する。

新羅の一地方である釜山では福泉洞古墳群という高塚以前の段階の墓や高塚群の蓮山洞(ヨンサンドン)古墳群が別な地点に造営されている。蓮山洞古墳

写真 13　釜山·福泉洞古墳群の遠景

群の形は基本的に福泉洞古墳群の形式を受け継ぎ、地下式の長方形竪穴式石槨という特徴を持つ。これとは別に、梁山地域の北亭里(プクチョンリ)古墳群では、今まで半地上式の、いわば竪穴系統の横口式石室だけが確認された。代表となる事例は、日本の植民地時代に発掘され、梁山夫婦塚と名付けられた北亭里10号墳である。類似した構造の横口式石室墳は、慶州市内の皇南洞151号墳からも確認されている。

昌寧地域では、地区別に異なる墳墓のタイプが造られた。桂城(ケソン)·桂南里(ケナムリ)古墳群は、木槨墓の周りに石積みが築かれた過渡的形態の墓制で、木蓋石槨墓として捉えられることもある。校洞(キョドン)古墳群では早い段階から長い墓道の付いた横口式石槨が使われ、その近くからは松峴洞(ソンヒョンドン)古墳群という別な高塚群が形成されており、典型的な地上式の横口式石室である。

大邱地域でも地区別に異なる墓制が用いられた。花園(ファウォン)·城山洞(ソンサンドン)古墳群は、半地上式の竪穴式石槨が内部の主体である反面、達城(タルソン)周辺に造営された大邱地域最大の古墳群である達城古墳群は、割石造石槨墓とともに、特徴的な板石造石槨墓が造られている。後者の構造は日本の

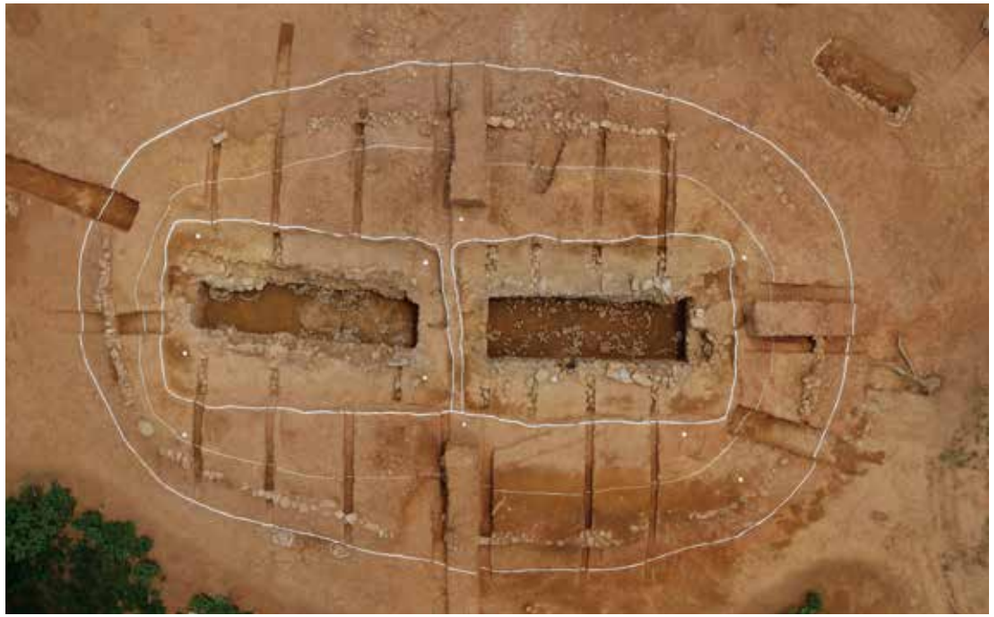

写真 14　釜山·蓮山洞M3号墳の発掘調査の全景(副槨を有する竪穴式石槨)

写真 15　梁山·北亭里古墳群の遠景

写真 16　昌寧·校洞古墳群の全景

植民地時代以来、横口式石室墓とみなされた。しかし、類似した形の星州(ソンジュ)·星山洞(ソンサンドン)古墳群を始めとし、亀尾(クミ)·黄桑洞(ファンサンドン)古墳群など洛東江中流地域の随所から遺跡が発掘され、その結果、竪穴式であることが明らかとなった。一方、大邱地域の漆谷(チルゴク)·鳩岩洞(クアムドン)古墳群からは非常に長い細長方形の竪穴式槨が見つかっており、墳丘を主に石で積んだ「石槨封石墳」であることが確認された。

慶山地域には林堂(イムダン)遺跡の高塚がある。この高塚は珍しくも岩盤を槨の形にくり抜いた土壙をそのまま利用し、中に木槨の構造を設置しているので、岩壙木槨墓と呼んでいる。しかし、蓋石がある上に、福泉洞古墳群で竪穴式石槨の中に木槨が設置されている点を考慮に入れると、木槨墓という名称は適していない面がある。反面、同地域の北四里(プクサリ)古墳群からは通常の竪穴式石槨が用いられているが、新上里(シンサンリ)古墳群からは、珍しくも積石木槨墳が主に使われていたことが確認され、注目を集めている。

義城地域の塔里(タプリ)一帯の金城山(クムソンサン)古墳群からは積石木槨

写真 17　慶山·林堂古墳群発掘調査の全景

墳と、それをある程度変形した「変形積石木槨墳」が使われており、それはあまり類例を見ない。 義城地域は慶州を中心として見た際、新羅の地方としては西北の内陸地方にテコの役割を果たすような地理的位置を占めているため、そのような墓制を採用しているようである。星州地域では星山洞古墳群の墓制が大邱·達城古墳群と非常に類似していて、割石造と板石造の竪穴式石槨であった。善山(ソンサン)地域の洛山洞(ナクサンドン)古墳群では石室の断面が梯形で、非常に長い地上式の横口式石室が内部の主体であることが確認された。また、古墳群の形成が比較的遅い尚州(サンジュ)·屏城洞(ピョンソンドン)古墳群では、非常に長い横口式石室が主に造られた。

一方、東海岸の江陵地域の場合、この地域の中心的な古墳群である草堂洞(チョダンドン)古墳群で竪穴式石槨と木槨墓が共存する。中でもA地区1号墳は巨大な蓋石を持つ細長方形竪穴式石槨であるが、大小の割石を積んで四面の壁をつくり、床の約2/3は砂利を敷いて漆喰を塗り、一部は隔壁にしている。そして、石槨の内部空間には石槨の床よりもう少し低い位置に割石で四面の壁を積

写真 18　義城·大里里2号墳A-1号主·副槨構造の発掘調査の全景

写真 19　星州·星山洞38号墳発掘調査の全景

み、板石で蓋をした石棺を安置している。

以上のように、新羅の地方における高塚は、内部構造が地域によって、延いては一地域の地区によって異なるケースもある。このように高塚内部に独特な墓の構造を持つということの背景には、各地または地区の首長は、この世の暮らしが来世でも続くという思想を持っていて、墓は来世の空間であり、自らのアイデンテ

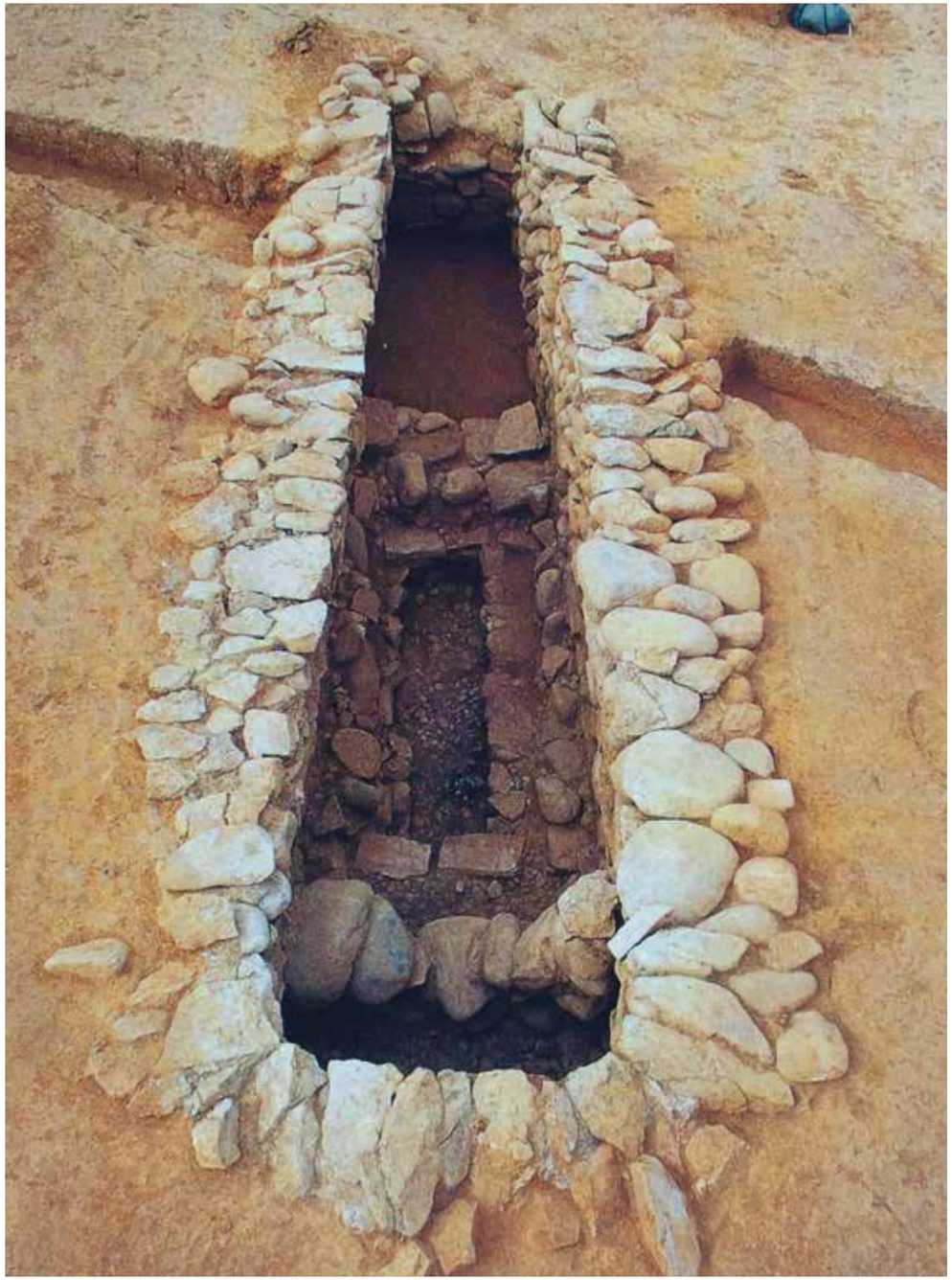

写真 20　江陵·草堂洞A-1号墳発掘調査の全景

ィティーを示すものと考えたからだと理解することができる。そして高塚が、新羅の地方に対する間接支配が進むにつれ現れた現象であることを考えると、結果的にこのような多様性は、各地の支配勢力が独立性への願望を墓に反映させた結果だといえる。

葬送儀礼

今も昔も、人間は、たとえ現世での地位が高く、財を築いたとしても、死を避けることができない。したがって、その死に対する恐れから逃れるため、あの世を想像したりもする。また、両親や家族に死なれた人々がその悲しみを克服し、日常生活に戻ることは難しい。大きな悲しみを乗り越える方法は人によって、社会によって異なったはずだが、古代社会の支配階級は葬送儀礼を盛大に行うことによって悲しみを克服しようとした。彼らは墓を巨大に築き、死者が生前使っていた物や死後使う物、そして従者を共に葬ることもあった。「喪」とは死そのものを意味することもあるが、「死者に対し、哀悼の意を表す行為」を意味することでもある。それに比べ、「葬」とは「死者をほうむる行為」を意味する。人が死ぬと、遺体をすぐ埋葬する場合もあるが、大体は哀悼期間を設け、埋葬までは時間をかけるのが常である。この期間中、遺体を棺の中に収めて安置するが、これを「殯（もがり）」という。

高句麗や百済と同様、新羅の場合も葬送儀礼に関する記録が非常に少ない。但し、『隋書』によると、新羅では喪服を1年間着用したと記されているが、麻立干期まで遡って適用することは難しい。麻立干期の新羅古墳は規模が大きいだけでなく、その中には人々が普段使っていたものか、あるいは死後使うものか、とにかく埋葬された物が多い。また、死後必要だと思われた従者をも殉死させ、埋葬している。したがって、発掘調査の成果を見ると、新羅人の葬送儀礼や来世に関する思想の断面を推論することができるであろう。

厚葬を行った麻立干期の新羅古墳からは、たとえ木や布、紙などの有機物由来の遺物は朽ちてしまうが、土製や金属製の夥しい数の遺物も出土しているので、遺失してしまったものまで入れると、最初にどれほど多くの物が副葬されたかをうかがい知ることができる。このような遺物をすべて死後の生活のために副葬

されたものと断定することはできない。その理由は遺物がはっきりと区別される墓の各空間に配置されており、その空間に別れて納められた遺物の種類も異なるからである。

古墳から出土する遺物は、材質によって金属(青銅器·鉄器)、玉器、陶器、骨角器、竹木漆器などに、用途によって装身具、馬具、武器、農工具、儀器、土器、金属容器などに区別する。しかし、このような分類は遺物そのものを分けるためのものに過ぎない。したがって、墓に埋納される意味としての、機能別分類が必要である。中国の場合、漢代を中心に、礼楽器、生活用具、威信財·意匠の品、鎮墓·辟邪の品、供献遺物、明器という6種によって区別する。

新羅の古墳からは、礼楽器と鎮墓·辟邪の品、明器などは、出土例があることはあるが非常に珍しく、一般的とはいえない。したがって中国のケースを参考に、麻立干期の墓の遺物を生活用具、威信財(主に服飾)、供献遺物(儀礼用遺物)に大別することはできるが、今まで古墳から出土した遺物に対し、厳格な機能上の意味を与えることは難しく、ただ大まかにその意味を把握するしかない。

古墳を築造する時、遺物の副葬は一度に行われるのではなく、築造の各段階によって分けられて副葬が進むという点がわかる。例えば、皇南大塚·南墳の遺物の出土状態を見ると、以下のとおりである。

遺物は木槨の外部に副葬されたものと内部に副葬されたもの、そして副槨に副葬されたものに大別できる。そのうち、副槨に副葬された遺物は、全体が一度に副葬された死後の生活のための遺物と見ることができる。反面、木槨の外部と内部から出土する遺物は、それぞれ細部の位置によってさらに区別できる。木槨の外部の遺物は位置によって、(1)墳丘の頂上に埋納された遺物、(2)墳丘の中に副葬された遺物、(3)積石部被覆層に副葬された遺物、(4) 木槨の上部に副葬された遺物に分けることができる。木槨(主槨)の内部に副葬された遺物は、(5)内槨と中槨の周りの石壇上に副葬された遺物、(6)内槨の上に副葬された遺物、(7) 副葬の場所に副葬された遺物、(8)木棺に副葬された遺物などと区別することができる。

このような遺物の副葬の位置や古墳の築造過程を結びつけ、副葬遺物の意味を分析すると、当時の葬送儀礼の一面を知ることができる。皇南大塚·南墳の築造過程はおおよそ次のような13段階が想定できる。但し、これらはさらに細分することもできるし、細かいところでは築造順が変わることもありうる。

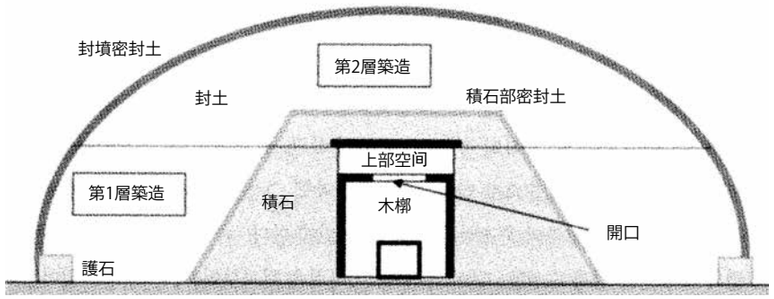

図 2　積石封土墳の地上式積石木槨墳の構造の模式図

(ア) 墓地の選定：先代の墓から近い墓地を選ぶ。

(イ) 墓地の地ならし：主槨と副槨が設置される地面を選ぶ。

(ウ) 土壙の掘削：主槨と副槨が築造される空間を掘削する。

(エ) 外槨の設置：主槨と副槨にそれぞれ木槨を設置する(主槨の外槨は天井部まで築造し、そこに開口部を設け、入り口として用いる)。主槨の外槨と副槨の周辺に、その上面まで積石部を設け、側面の墳丘を造る(護石などの外部施設も一緒に築造する)。

(オ) 中槨の設置：主槨の外槨の内部に中槨を設け、中槨と外槨との間に積石段を設置する。

(カ) 内槨の設置：主槨の中槨の内部に遺体を安置する場所と副葬の場所が仕切りによって区分けされた内槨を設置し、内槨と中槨との間に積石段を設置する。

(キ) 遺体の安置：内槨の遺体が収められる場所の内部に、遺体の入った木棺または遺体そのものを安置する。

(ク) 内槨の蓋をする：内槨である木槨の蓋をする。

(ケ) 中槨の蓋をする。

(コ) 主槨と副槨の蓋をする：主槨の開口部に蓋をし、副槨に木蓋をする。

(サ) 上部積石部の築造：主槨と副槨の上に、一定の高さまで積石を行って積石部を築き、粘土で密閉する。

(シ) 上部墳丘の築造：上部の積石の上に土で土を盛る。(護石はこの時に設置

された可能性もある)。

(ス) 墳丘の密閉：墳丘の表面に泥を覆って密閉する。

このような各段階に、前の遺物の出土場所を結びつけると、(8)は木棺に遺体が安置される時に着装された状態か、その内部に副葬された遺物で、(キ)の過程またはその前に遺体の入棺時に寿衣に着替えさせた時に副葬された遺物で、(7)は(キ)の過程の時に副葬された遺物、(6)は(ク)の過程以降副葬された遺物、(5)は

写真 21　慶山·造永EⅢ-2号墳副槨で発見された殉葬された者の人骨

(ク)と(ケ)の段階と関係のある遺物、(4)は(コ)の過程以降副葬された遺物、(3)は(サ)の過程以降副葬され遺物、(2)は(シ)の過程と関連のある遺物、(1)は(ス)の過程かその後に副葬された遺物と見える。そして副槨の遺物は(コ)の過程の前に副葬されたといえる。

このようにして見ると、少なくとも遺体を安置する時から墳丘を完成するまで、段階別に様々な儀礼行為があり、その結果、様々な遺物が副葬されたことを推測することができる。この全体の過程を遺体が古墳に安置された以降の葬送儀礼といえる。

新羅人は多くの物を墓の中に納めた。古墳に別の副槨を造り、そこに実生活に使われた数々の遺物を副葬したのは、新羅人の死後観と関連のある現象で、この世の暮らしがあの世でも続くという思想に基づいている。つまり、現世における地位や権力が死後も保たれ、死後の世界の暮らしが現世の日常生活とあまり変わらないと考えていたのである。したがって、死後の世界での生活のために多くの生活用具をあの世へ持っていこうと考えたのが副葬の形で現れた。

殉葬もまた然りである。殉葬とは、人が死んだ時に生前関係のあった人を殺し、墓の中に一緒に葬る葬送儀礼のことをいう。残酷に見えるこの風習は、世界各地における古代国家の形成期や初期に存在し、韓国でも例に漏れず、扶余、高句麗、新羅、加耶でも存在した。扶余や高句麗の場合、『三国志』、『三国史記』などの記録に残っており、扶余では王が死亡すると百人もの人が殉葬されたといわれている。新羅の場合、智証王の時に殉葬を禁ずるという記事があり、皇南大塚、天馬塚をはじめとする超大型の積石木槨墳の発掘により、殉葬の存在を確認することができた。

殉葬の風習が新羅成立以前から独自に存在していたか、あるいは外部から取り入れられた要素なのかについては明らかになっていない。新羅の殉葬の時期は扶余や高句麗よりは遅く、加耶の時期に近いが、高塚の築造及び黄金文化の導入と時期が重なる。新羅と加耶の支配階級は華やかな黄金の装身具や巨大な高塚をもって自らの地位を神々しいものにし、現世の暮らしが来世にも続くことを願ったのである。墓の中に多くの物を副葬し、生きた人を殺して殉葬する風習が流行ったのも、同様の意味合いを持つと考えられる。

3

服飾

記録に見る服飾

麻立干期の服飾に関する記録は『三国史記』だけでなく、中国の史書にも記されていない。新羅は4世紀後半、前秦へ使臣を送ったが、その後の麻立干期の時は中国への使臣の派遣は行われていない。南朝との外交関係は依然として樹立していない状態だったのである。『梁書』「新羅伝」には「普通(梁)2年(521)、新羅·法興王がはじめて使臣を送ってきたが、百済の使臣に付いてきて方物を献上した」と記されており、当時の事情をうかがい知ることができる。

『周書』には高句麗について、「官職に就いている者は冠の上に鳥の羽根を2本挿し、他の人と区別できるようにした」とし、百済については「朝会や祭祀の時は、冠の両側に鳥の羽を付けた」と記している。『隋書』には「新羅の衣服は高句麗や百済のものに類似ている」となっている。『周書』や『隋書』の記録にある「鳥羽冠」が麻立干期にも共通していると断定はできないが、遺物からも実際鳥羽冠が確認されているので、この記述は麻立干期にまで遡って適用することができる。要するの、この時期において、新羅の支配階級の男性は普段、あるいは重要な行事がある場合は鳥羽冠をかぶっていたと推定される。

忠州高句麗碑の前面には「寐錦に衣服を下賜し、…諸位に教を与え上下の衣服を下賜した」という文があり、注目に値する。この碑の建てられた年代は5世紀の前半説と後半説とがあるが、どちらにしてもこの碑文は、高句麗の太子が新羅王とその臣下に衣服を下賜したと書かれているのであり、中国、特に北魏が高句麗に対して衣服を下賜したことと同様、高句麗が新羅の支配階級に衣服を賜与したことを意味する。ここでいう衣服とは、日常服ではなく、高句麗の官服だったはずである。したがって、高句麗の官服が新羅の官服に影響を及ぼしたはずである。

黄金の装身具

記録はない代わりに、新羅古墳からは数々の服飾の構成品が出土している。墓の被葬者の頭から足先まで装飾を施した各種装身具のことである。残念なことに衣服は殆ど残っておらず、僅かな織物片のみが検出されている。

新羅の金属製装身具文化の典型は、皇南大塚·南墳段階に完成される。しかし、この時期における黄金の装身具が所有できる人は非常に少なかった。多くの人が黄金の装身具を所有し、その装飾が新羅ならではのデザインに変わる時期は、皇南大塚·北墳が築造された時点である。金銅冠に代わり、新しい金冠を作って、死んだ王や王族の頭に装飾を施したり、金製腕輪を製作したりもした。それだけでなく、帯金具、耳飾、頸飾、指輪、飾履など装身具の種類が豊富になり、装飾も華やかになる。

新羅の装身具を代表する物は金冠である。新羅の金冠は千年の新羅史のうち、麻立干期の王族の墓からのみ出土している。このように、金冠の所有が非常に限られていたことは、当時の新羅社会において金冠が王族の地位を神々しいものにする代表的な威信財だったことを示している。帯輪の上に樹枝形立飾り3つと鹿角形立飾りの2つが付けられているのが特徴である。韓国では「帯冠」と呼ばれる。この冠は日常品というよりは、儀礼用だったと考えられる。ところが樹枝形立飾りは、樹枝が「山」または「出」字形に完全に様式化されており、鹿角形立飾りと呼ばれるものがむしろ自然な樹枝の形のように見受けられる。とにかく、時代が下るにつれ樹枝形立飾りの形と、それに付いている勾玉や歩揺の数が変化し

写真 22　皇南大塚·北墳出土の金冠

写真 23　金冠塚出土の金冠

たり、帯輪と立飾りに刻まれた紋様がより一層複雑になっていく。

麻立干期における新羅の冠は、材質によって金冠、金銅冠、銀冠に分けられる。現在まで発掘された金冠は、皇南大塚·北墳、金冠塚、瑞鳳塚、金鈴塚、天馬塚の出土品計5点であり、慶州でのみ出土している。銀冠は出土例が少なく、皇南大塚·南墳の出土品しかない。金銅冠は地方の高塚で出土したものまで入れると、数十点に上る。金冠に表現されている立飾りは、地上と天上を結ぶ媒介としての木や鹿をシンボルにしていると考える意見が一般的である。金銅冠は慶州の王族や貴族の墓だけでなく、地方に所在する首長レベルの人物の墓からも多数出土している。金銅冠の形は、金冠とほぼ類似しているが、「出」字形立飾りを3つつけているものが殆どで、金冠のように鹿角型立飾り2つまでつけているものは少数である。

古墳から出土している冠の中で、帯冠と呼ばれるものと異なり、山形の帽子(冠帽)に鳥の翼または羽の形をした装飾(冠飾)が組み合わされたものがある。こ

の山形の帽子、または帽子と冠飾の両方を韓国では「帽冠」と呼んでいる。時には被る部分がなく冠飾のみ出土することもあるが、白樺樹皮や錦のような布で造られた帽冠が朽ちてしまい、その装飾のみが残ったものである。この帽冠は、新羅の支配階級の日常用の冠で、男性の髷のようなものを隠したものと考えられる。

帽冠は今までかなり多くが出土しており、材質によって金·銀·金銅·白樺樹皮に分けられる。帽冠を構成する冠帽や冠飾のうち、冠帽の場合は白樺樹皮のような有機物由来の物が最も多く、それに次ぐ銀製品や、金製や金銅製もある。冠帽に挿す冠飾の場合、慶州では金製·金銅製·銀製が出土しているが、地方では銀製がほとんどであり、金銅製は非常に珍しい。金製が組み合わせられている場合は、金冠塚と天馬塚からの出土品に限られており、銀製と金銅製は慶州以外の地域でも広く分布している。形態的に見ると、鳥翼形に見えるものが多い。

慶州地域では、大きい墓を発掘すると、必ずと言ってよいほど金製耳飾が出土する。新羅の耳飾には、新羅人の美意識と最高潮に達した金属工芸技術が一体となっている。新羅の支配階級に属する男女は自らの社会的地位を誇示するために装身具を着用したが、中で最も基本的なものがこの耳飾であった。耳飾は身分や地位が常民とは異なるということを、視覚的に区別するのに必ず必要だったのである。墓域を発掘してみると、耳飾だけ出てくる墓はあっても、耳飾はなく冠帽や腰帯の装飾だけが出土するような墓はない。支配階級は地位が高くなるにつれ、耳飾に、冠や腰帯などを加えていったのである。

新羅の耳飾は、耳に触れる「耳環部」と、それに付く「中間飾」、さらに垂らした「垂下飾」の三つの部分からなり、その系譜を高句麗の耳飾に求めることができる。しかし、中間飾が多様である点が新羅の耳飾の特徴といえる。耳飾は耳環部の形によって、太く中空の太環式耳飾と細環式耳飾に分けられる。太環式耳飾は種類がシンプルであるのとは対照的に、細環式耳飾は多くの種類が存在した。ところが、墓から出土している装身具の組み合わせをみると、細環式耳飾を着用した場合のみ、腰に大刀をつけている。この事実により、細環式耳飾の着用者は男性で、太環式耳飾の着用者は女性だったことがわかる。

太環式耳飾は皇南大塚·北墳段階になると、耳環部が大きくなり、製作に使われる金属板の数が増える。中間飾は非常にパターン化していた。細環式耳飾も初期は太環式耳飾と同様、中間飾と垂下飾を持つタイプのものが流行った。それが

写真 24　天馬塚出土の金冠

写真 25　金冠塚出土の金製冠飾

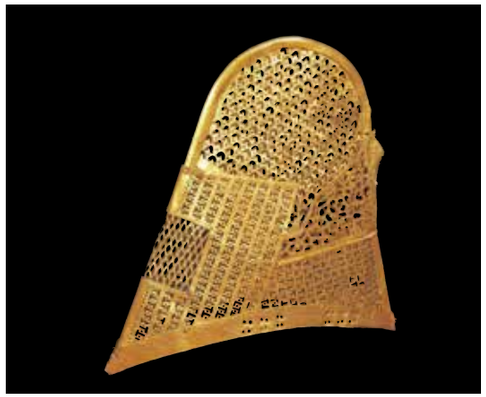

写真 26　天馬塚出土の金製冠帽

写真 27　皇吾里古墳出土の金製耳飾

写真 28　普門里古墳出土の金製耳飾

5世紀後半以降多彩になり、華やかな装飾が施されるようになる。

新羅古墳出土の装身具の中で、頸飾と胸飾も耳飾に劣らず華やかである。慶州の大きな墳墓からは藍色のガラス玉頸飾が度々出土し、金の鎖と金の玉を連結させたものが混ざっていることもある。皇南大塚·南墳と北墳、天馬塚に埋葬された被葬者の胸付近からは数千のガラス玉と金板を連結させてつくられた華やかな胸飾が出土している。

帯金具とは、腰帯に装飾を施した金属製品のことをいう。古代社会において腰帯は官服の一部で、非常に重要視された。そのため、腰帯の表面を宝石によって装飾を施した。金製品は皇南大塚·南墳と北墳、金冠塚、瑞鳳塚、金鈴塚、天馬塚の、慶州所在の積石木槨墳6基からのみ出土している。そのうち、皇南大塚·南墳を除くと、すべて金冠とともに出土している。金冠が王だけでなく王族の所有物でもあったように、金製帯金具も同様だった。新羅の帯金具のうち、金製品すべてと銀製品の一部には腰牌が付いている。腰牌は香袋、薬筒、魚、砥石、鋏、勾玉、陶磁器などを形象化した装飾物からなる。

腕輪のうち、古い例は皇南大塚·北墳のものが挙げられる。この腕輪は表面に装

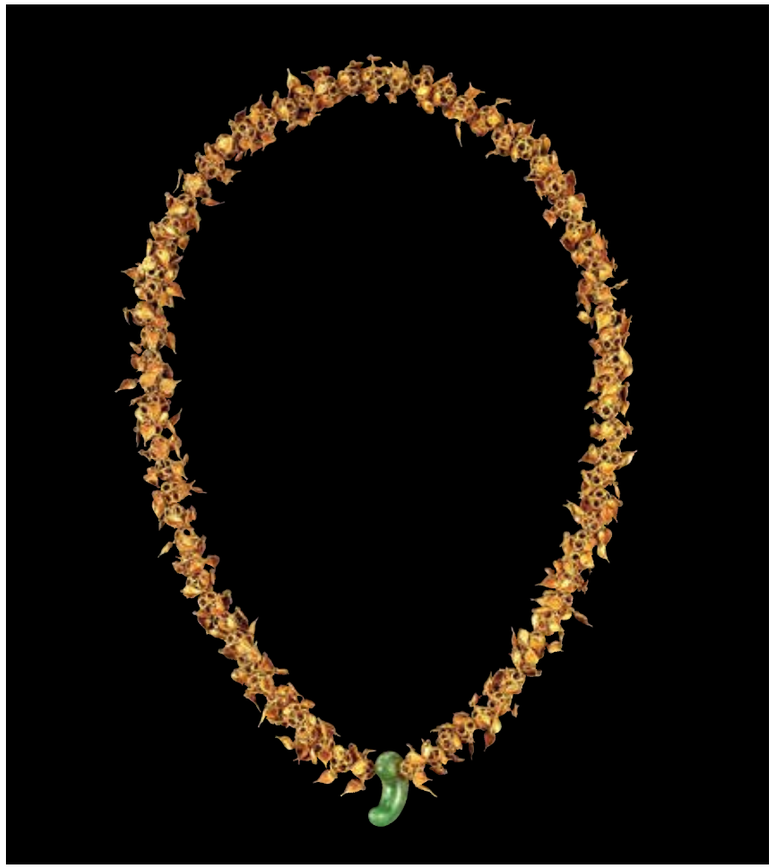

写真 29　路西里215番地古墳出土の金製頸飾

飾がまったくなく、中の詰まった金棒を曲げて作っている。反面、部分的にパイプのように中空のものもある。6世紀の腕輪は金鈴塚の出土品のように表面の突起にガラスを挟んで装飾を施すか、天馬塚の出土品のように突起のみを表現するケースもある。指輪は6世紀の製作品の中で最も華やかである。指輪の上の部分は菱型か花びらのように広くなっている。その表面には金板を付けて突起をつくるか、数十の金粒を細かく付けて装飾を施す一方、藍色や緑のガラス玉をつけたりもした。

飾履は百済のものに比べ、紋様がシンプルである。皇南大塚·南墳、義城·塔里古墳Ⅱ槨出土の飾履のように、「凸」字形を透かし彫りにしたものもあり、金鈴塚、梁山夫婦塚の出土品のように、紋様のないものもある。新羅の飾履は、百済のも

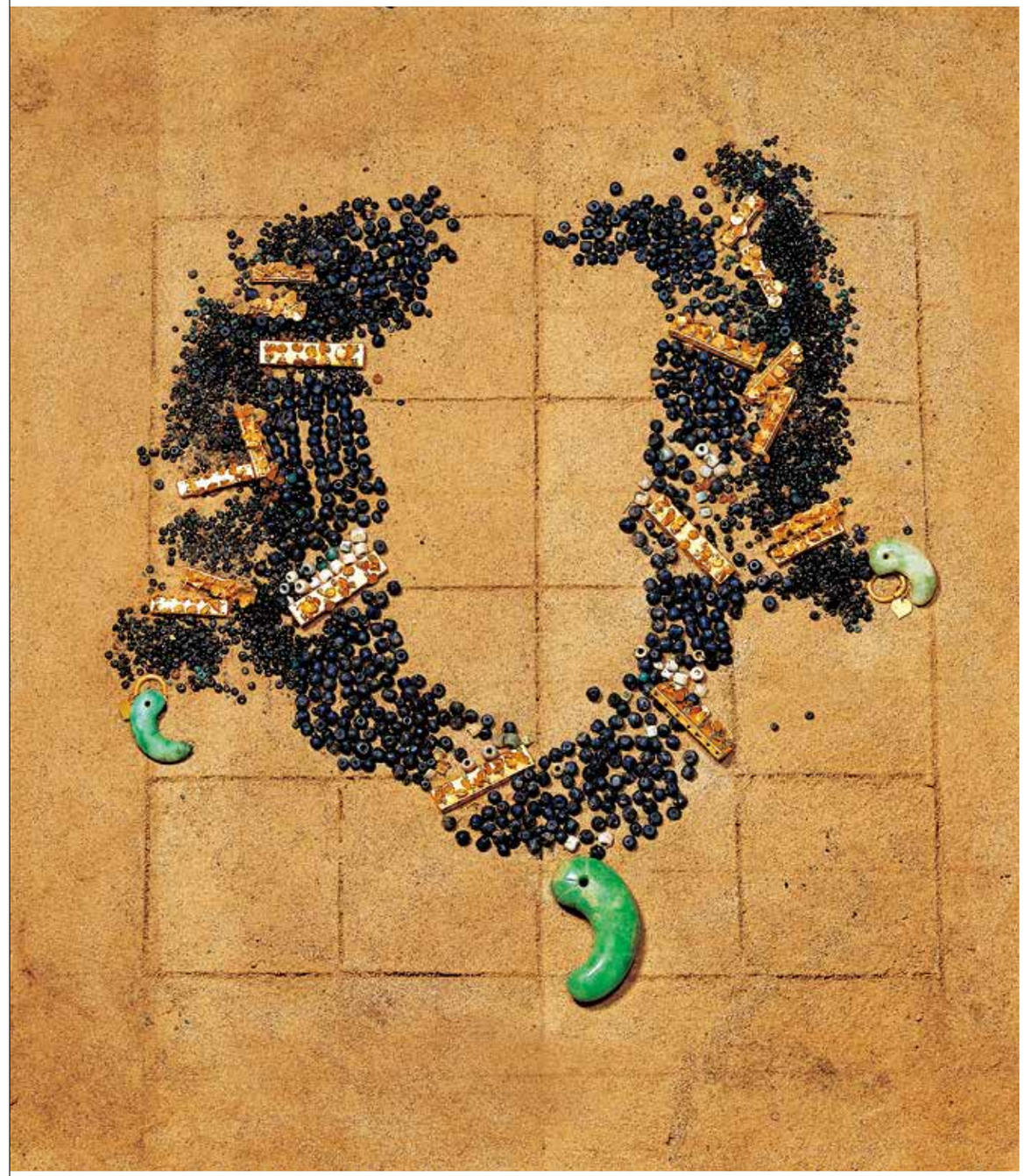

写真 30　皇南大塚·南墳出土の胸飾

写真 31　天馬塚出土の金製帶金具

写真 32　皇南大塚·南墳出土の金製指輪

写真 33　天馬塚出土の金製腕輪

のと同様、金属板3枚を組み立てて完成させたものであるが、側板の組み合わせの位置は、根本的に異なる。つまり、百済の飾履は底板の上に左右の側板の両端を靴の前後で連結させるが、新羅の飾履は靴の前の部分を包む板と後の部分を包む板を左右で重ねた後、縦に金銅製釘を打って固定した。新羅の飾履はすべて金銅製であるため実用的でないという点は、底の装飾を見ると一目瞭然である。

写真 34　皇南大塚·南墳出土の金銅飾履

皇南大塚·南墳出土の飾履の底には歩揺が多く付いており、金冠塚の飾履には数輪の蓮華が表現されている。したがってこれらの飾履は普段履くためのものではなく、この世を去った人のために特別製作されたものである。

以上のような各種装身具は王族や貴族、そして地方の有力者の墓から出土しているが、物の材質やレベル、数などに差がある。中でも地位の違いを如実に表す物は冠と金銅飾履であり、指輪も重要なものである。金銅飾履は耳飾、頸輪、腰帯、腕輪と組み合わされることが多い。金属製装身具の中で、耳飾、頸輪、腰帯が最も出土例が多く、一般的な所有物であった。王陵のように大型墳墓では冠、耳飾、頸飾、腰帯、腕輪、指輪、金銅飾履がすべて出土している。そのうち、冠、頸飾、腰帯、腕輪、指輪は共通して埋葬されている。注目に値するものは被葬者の髪飾りである。皇南大塚 北墳、金冠塚、瑞鳳塚、天馬塚、金鈴塚の被葬者はすべて金製帯冠を被った状態で埋葬されている。出土状況が明確な皇南大塚·北墳と金鈴塚、天馬塚の場合、金冠は顔全体を覆った状態で出土している。

地方は慶州に比べ、あまり形式化されていないという特徴を持つ。地域社会

写真 35　皇南大塚·北墳から金冠が出土した様子

において最も重要な金属製装身具もやはり冠であった。冠を中心に考えると、冠を副葬した場合と帽冠を副葬した場合に大別できる。帽冠を副葬した例は皇南大塚·北墳と同様の時期に集中しており、冠と帽冠を共に副葬した例は梁山夫婦塚における男性の遺体部分と昌寧·桂南里1号墳のみである。その他には、冠と帽冠のうちどちらかを副葬している。地方の墓域から金属装身具が本格的に見つかっているのは5世紀前半頃であり、5世紀後半から6世紀前半になると、冠、耳飾、腰帯、金銅飾履の全セットが副葬されるようになる。

騎馬人物形土器と彩画板の服飾

金鈴塚出土の騎馬人物形土器は、新羅人の顔や服装を写実的に表現してい

写真 36　金鈴塚出土の騎馬人物形土器

写真 37　騎馬人物形土器の人物像の細部

て、注目に値する。高い鼻梁と鋭い顎の線のため、顔の印象が若干鋭く感じられるが、少し閉じた両眼と太目の馬を見ると、親近感が湧いてくる。静かに見えながらも活気の感じられる「静中動」が、その魅力である。土器を横から見ると、前の方の注口、人物像の顔、馬の尻尾が弧線を描いている。乗っている馬を太目に表現したのは、安定感を与えるための配慮と考えられる。

この人物像の表現の中で、今まで多く注目されてきたのは、頭の冠である。土器で造られているので、表現された冠の材質が何なのかは特定できないが、織物と考えられ、下辺の随所には貴金属をつけていたと見える。形は三角帽で、三角帽の前面にも何か付いているが、具体的にはわかっていない。冠の下辺には厚目の装飾が施され、後ろは上の方へ尖っている。冠を深くかぶっているのではなく、軽く頭に載せているように表現しており、左右に付着した二条ずつの紐を耳の前後にたらし、顎の下で強く結んでいる。まだ資料は多くないが、麻立干期における新羅の支配階級が日常生活の中で着用した冠、つまり帽冠もこれと似ていたであろう。

写真 38　天馬塚の彩画板人物像の細部

一方、天馬塚からは、一般に知られている天馬図とともに、騎馬人物像や瑞鳥、草花文や菱形文の描かれた彩画板が1点発掘されている。この遺物の性格は明らかになっていないが、馬具の一種か、冠帽のつばだったと推定される。丸い腕輪の形の白樺樹皮2枚を重ねて縫い付けた後、表裏に絵を描いている。多様な場面の絵の中でも、馬に乗った人物の頭と服が注目に値する。頭部はサントゥ(韓国の髷)をせず、長髪である。上衣はチョゴリ、下衣は幅の広いズボンで、記録にある三国時代の服飾の基本形に従っている。上衣と下衣は色が違う。

4 器物

土器

4世紀後半になると、嶺南地域の土器文化に変化が起きる。おおよそ洛東江を境界に、その以東地域では新羅様式、以西地域では加耶様式の土器文化が成立する。このような現象は、この時期になって両地域の政治体制や土器の生産システムに大きな変化が訪れたからである。つまり、両地域の中心勢力が成長し、東では新羅が古代国家を形成し、西では加耶が古代国家へと成長することにより、各圏域に対する支配力が強まり、土器の生産システムに対する統制もより一層強力になったことにより、圏域内における土器様式の統一性が高まったからだと考えられる。

新羅土器と加耶土器は、高句麗土器や百済土器に比べると、器種の構成や器形において類似点があるが、詳しく見ると、かなり異なる部分もある。最大の違いは脚台の透穴の形である。新羅土器は透穴が上下が互い違いに配置されているが、加耶土器は一列に配置されている。新羅の高杯は器が深いが、加耶の高杯は比較的器が浅い。蓋のつまみも新羅のものはまるで脚台を逆さまにした形であるのに比べ、加耶のものはつまみがほとんどボタン形である。土器の表面の紋様

も新羅のものはヘラで三角形、網文、円文、各種動物などを刻んでいるが、加耶は点列文をもって装飾を施している。

新羅土器が本格的に成立する時期の様相を呈している墓は慶州·月城カ-13号墓である。この墓では、脚台に互い違いの透穴が配置された高杯がはじめて出現しており、王陵である皇南大塚·南墳の被葬者を奈勿王(356~401)と見るか訥祇王(417~458)と見るかで、4世紀中頃のものとも、5世紀初めのものとも推定される。

麻立干期は土器を多く生産し、またそれを積石木槨墳のような墓に多く埋葬した時期である。主な器種は高杯と台付長頸壺である。他にも円筒形器台や鉢形器台、台付直口壺、蓋杯、カップ型土器、赤褐色軟質鉢なども製作された。

写真 39　慶州·月城路カ-13号墓の有蓋高杯

土器の中で形の変化速度が比較的速いものは高杯である。全体的に見ると、皇南洞109号墳の3·4槨からの出土品など、初期のものは脚台が細長く曲線を描いており、4~3段に区画されたものである。一方、皇南大塚·南墳以降の高杯は脚台が短く直線になっており、2段に区切られている。脚台の先の形も変化している。初期は先が尖っていたが、皇南大塚·南墳段階になると尖ったものと丸いものが共存しており、次第に丸いものへと変化していく。さらに、器壁も次第に薄くなっていく傾向がある。

色も時期によって差がある。初期高杯の中には高火度焼成により断面が暗紫色を帯びるものが多い。しかし、皇南大塚·南墳段階になると、灰色を帯びるようになるが、大型高塚の出土品の中には黒い光沢を示すものも、ある程度混ざっている。蓋の場合、初期は蓋のつまみがボタン形か宝珠形だったが、皇南大塚·南墳段階以降は、縮小した脚台の形をしたつまみが一般的となる。このような形のつまみは高杯だけでなく蓋杯、長頸壺などにも幅広く採用される。

高杯ほどではないが、長頸壺も麻立干期における新羅土器の特徴を如実に表している器種である。長頸壺の変化は頸の長さと口縁の形に現れている。高杯は脚台が次第に短くなるという変化が起き、長頸壺は頸の部分が長くなるという方向へと変わっていく。初期は頸が比較的短く、蓋のない事例が多かった。皇南大塚·南墳の出土品の中には蓋付きの事例があったが、典型的な蓋支えは確認され

写真 40　慶州·皇南大塚·南墳の土器類1

写真 41　皇南大塚·南墳の土器類2

写真 42　皇南大塚·南墳の高杯類

写真 43　慶州·天馬塚の土器一括

ていない。その次の段階になると、頸が曲線上に外側に反るか完全な形の蓋支えが作られ、天馬塚段階以降は口縁部が盤口形を持つ、いわゆる付加口縁長頸壺が出現する。

土器表面には幾何学的模様の装飾が施される。最初は杯身と蓋に様々な紋様が施されていたが、6世紀になると、三角形と円文を上下配置する単純な形に変わる。時に小さな人形や動物形の土偶を貼り付けたものも出土している。これは慶州ならではの特徴である。

新羅土器は、初期は洛東江の東の嶺南地域でのみ出土したが、次第に忠州(チュンジュ)、清州(チョンジュ)などの忠清道圏域、そして東海岸に沿って江陵以北からも見つかっている。各地の古墳においては、新羅の装身具であり服飾の器物が一緒に出土している。このような様相は新羅領域の拡大とともにこの地域に進出した新羅人が直接土器を持ち込んだか、新羅土器が受け入れられ、現地で製作されたためであろう。一方、この時期の土器の様相は、地域別に少しずつ異なる。例えば、昌寧、星州、義城では、広意では新羅様式に属するが、細部の形では違いがあるので、各地域を1つの小さな地域の様式として一括りにして把握すること

写真 44　皇南大塚·南墳の器台と長頸壺

写真 45　昌寧·校洞古墳群出土の高杯

もできる。しかし、慶山、大邱、蔚山、釜山の土器は慶州のものとほぼ同様のもので、当該地域が慶州地域と様々な点において密接な関係にあったことがわかる。

武器と馬具

嶺南地域において4~5世紀は、激変期であった。辰韓·弁韓時代の小国の間で統合戦争が本格化し、武器だけでなく甲冑などの防具の製作も活発に行われた。その頃、各国の命運は戦争遂行能力にかかっていた。新羅は早くから最高レベルの武器と馬具の開発に努めた。

武器としては、刀剣や槍などの攻撃用の武器、甲冑類や盾などの防御用の武具がある。武器はさらに近接戦闘で使うことのできるものと、遠距離攻撃に活用できるものに分けられる。武器の中で装飾大刀は最高級の品物に入る。この装飾大刀は、皇南大塚·南墳の被葬者の佩用刀に注目してみると、武器としての機能というより儀装用の刀としての性格が強い。したがって、装飾大刀は冠、腰帯などとともに服飾の構成要素の1つであった。新羅の装飾大刀としては三葉大刀、三累大刀、龍鳳文大刀などがある。

鉄製鎧は「板甲」と「札甲(さつこう)」とに大別できる。前者は大小の鉄板を数枚つくって釘や革で繋いで完成した鎧である。一方、後者は数百枚の鉄製小札を革で綴り合わせた鎧である。高句麗の古墳壁画に多く描かれている騎馬武士の鎧は札甲である。

馬具には馬を制御するための轡、馬に乗る時に足を踏みかけたり馬の上で体のバランスを取るための鐙(あぶみ)、馬の背に乗せて座るための鞍(くら)、馬に装飾を施すための鈴·雲珠·杏葉などが含まれる。鐙としては足を踏みかける部分が丸い輪のようになっている輪鐙が流行った。それが次第に踏みかける部分が広くなっていく変化が現れ、木心がなく鉄のみで製作する場合、踏みかける部分が二つにわかれるものも登場する。馬具の中で最も華やかなものは鞍である。ほとんどの場合、その前後の鞍輪(くらわ)のみ出土している。皇南大塚·南墳から出土した金銅製鞍輪は全面に龍文の装飾が施されているが、透彫板の内側に玉虫の羽の形を細かく付けて華やかさを極限まで引き出している。

写真 46　三累大刀(①皇南大塚南墳, ②金冠塚, ③大邱·達城郡汶山里M1号墳)と三葉大刀(④釜山·福泉洞10·11号墳, ⑤皇南大塚北墳, ⑥義城·鶴尾里1号墳)

雲珠とは、馬の背に載せる連続した革紐の交錯する部分に装飾を施す馬具のことである。初期の雲珠は紐が絡まないようにするための本来の機能に充実させるためにシンプルだったが、次第に盛装した馬の背が華やかに見えるよう、金銀などの貴金属をもって装飾を施した。特に、高句麗系の歩搖付雲珠がその代表である。丸い雲珠の上に歩搖が付いているのでこのように名づけられた。杏葉とは、馬の背にある革紐の下の方に掛けて垂らした装飾品のことである。新羅の

写真 47　天馬塚の木心鉄板被輪鐙

写真 48　皇南大塚·南墳の玉虫装飾鞍

写真 49　皇南大塚·南墳の金銅製歩揺付雲珠

写真 50　皇南大塚·南墳の扁円魚尾形杏葉

写真 51　天馬塚の心葉形杏葉

写真 52　天馬塚の天馬図(左：赤外線写真)

写真 53　天馬塚の竹製天馬文金銅装飾障泥

杏葉は種類が豊富であるが、扁円魚尾形杏葉が最も特徴的である。杏葉の上部が横長の楕円形で、下部が魚の尾のような形だということでこのように名づけられた。他にもハートの形ということで心葉形と呼ばれる杏葉も独特である。

一方、天馬塚からは数点の障泥(あおり)が出土している。障泥は本来、蹴上がる泥を防ぐ機能を持つ馬具である。中でも2枚1組の白樺樹皮製品が注目に値する。表面に天馬が描かれているからである。絵の描かれた白樺樹皮は何枚も重ねてあり、数条縫い付けられていて、縁の部分は革が付いている。天馬の絵は赤く塗られた白樺の樹皮に白で描かれているが、たてがみと尻尾が立っている状態で非常に力強く表現されており、口からは瑞気(ずいき)が吐き出されている。縁には赤･黒･白･緑の色が塗られた忍冬文が描かれている。最近では、天馬塚の出土遺物に対し、新しく保存処理を行う過程で、竹に透かし彫りの天馬が表現された金銅板の銅版が付いている障泥が一点確認された。

金属容器

慶州にある中･大型古墳からは様々な種類の金属容器が見つかっている。現在まで出土している金属容器は約100点に上る。金属を融解し、枠に入れて造ったり(鋳造)、槌で叩いて造った(鍛造)器がほとんどである。盒･碗･熨斗･鐎斗･鼎･壺･洗･盤･おたま･甑がある。金属容器の中には王族や貴族の生活用品も含まれているが、各種儀礼において使われた礼器がほとんどである。金銀などをもって典型的な新羅様式の高杯を造ったケースがあり、青銅製の長頸壺を製作した例もある。しかし、殆どは中国の中原王朝や高句麗の礼器に類似した器形である。

金属容器の中でもっとも数の多い盒は基本的に高句麗の影響を受けているが、高句麗のものより小さく、装飾的という点が異なる。蓋のつまみの形は時間の流れによって変わる。初期は高句麗のもののような十字形が多く、6世紀には宝珠形や鳥形が流行る。金冠塚と飾履塚が築造される時期になると、金属容器に華やかな紋様が加わる。金冠塚出土の鐎斗は製作技術が精巧であるだけでなく、表面に刻まれた様々な紋様も非常に美しい。丸い胴部についている注口には龍頭があり、柄の両端に一頭ずつ竜頭が陽刻で表現されており、ボリューム感

写真 54　皇南大塚·北墳の金製高杯

写真 55　金冠塚の銅製鐎斗

写真 56　皇南大塚·南墳の銀盒

写真 57　皇南大塚·北墳の銀盒

が際立つ。飾履塚から出土しているおたまは器の表面に龍、鳥、忍冬唐草文を彫金技法をもって表現している。一方、皇南大塚北墳からは底の平らな銀盃が出土しているが、表面全体に様々な模様が打出技法により表現されている。この銀盃の紋様は飾履塚から出土しており、名称の由来となった金銅製飾履の紋様とともに、外来系の要素を示すものとなっている。

農工具

三国時代の発展の大きなきっかけは、鉄器使用の本格化といえる。鉄器は戦争に必要な武器の製作にも使われたが、多様な農工具の材料となり、生産力を飛躍的に発展させた。これは社会の分化と国家の形成を牽引した重要な原動力となった。新羅の製鉄技術は斯盧国期から抜きん出ていたので、その技術に基づき、各種鉄製農工具が早くから普及した。麻立干期になると、起耕具、摩田具、除

写真 58　天馬塚出土の各種農具·工具

写真 59　皇南大塚·南墳出土の鋳造鉄斧

草具、収穫具など農耕の全過程で使われる様々な農機具がつくられ、前近代社会における農機具の枠組みが確立した。特に4世紀以降は、田んぼの水を引く際に使われた柄の長い鋤と鎌が登場し、そして6世紀には犁が使用され、牛耕農法が全国に普及している。

鉄製工具としては、各種武器や農機具をつくるための鍛冶具、金銀細工品を加工するのに使われる繊細な工具類が代表的である。鉄鎌や鉄刀子(てつとうす)などの農具類は小規模の墓からも出土している。しかし、熊手鍬、犁、鋤などの主な農機具や鍛冶工具類は、一部の墓でのみ出土している。これらは慶州の場合、王族や一部の貴族の墓でしか出土しておらず、地方でも首長レベルの墓でのみ見つかっている。この事実は当時、農具類工具類を所有するのに、基本的に社会的位階の差が働いていたことを物語っている。麻立干期における新羅の支配階級はこのような差別を通じて、当時の社会を保っていたのである。

漆器と織物

慶州市内における王陵レベルの墓に対する発掘調査の過程で数点の漆器が見つかっている。金冠塚、金鈴塚、天馬塚から出土している漆器には赤、青、黄色の顔料による瑞鳥、蓮華文、唐草文、三角形火炎の装飾が残っている。皇南大

写真 60　皇南大塚·南墳から漆器出土の様子

塚·南墳出土の漆器には「馬朗」という銘文が朱書により書かれており、皇南大塚·北墳出土の漆器には鳳凰をはじめとする様々な形の鳥や牛、犬などの動物文が残っている。このような絵は新羅絵画史を研究する上で貴重な資料となっている。壺杆塚出土の矢筒付属具には黒の地塗りが施されており、慶州·芳内里(パンネリ)古墳出土の朱漆函からは地塗りのために骨粉を使っている証拠が確認された。この遺物から見て、この時期の漆工芸はすでに眼を見張るほどのレベルに達していたことがわかる。

新羅の支配階級は自らの排他的地位を可視化するため、様々な面で努力を重ねた。中でも最も目立つものは服飾であった。韓国の古代社会において最も閉鎖的で強固な身分社会を築いたと考えられる新羅は、早くから社会的地位の高低により、布の種類や服飾の色を厳しく規制し、その一面を示す記事が『三国史記』「職官志」に掲載されている。

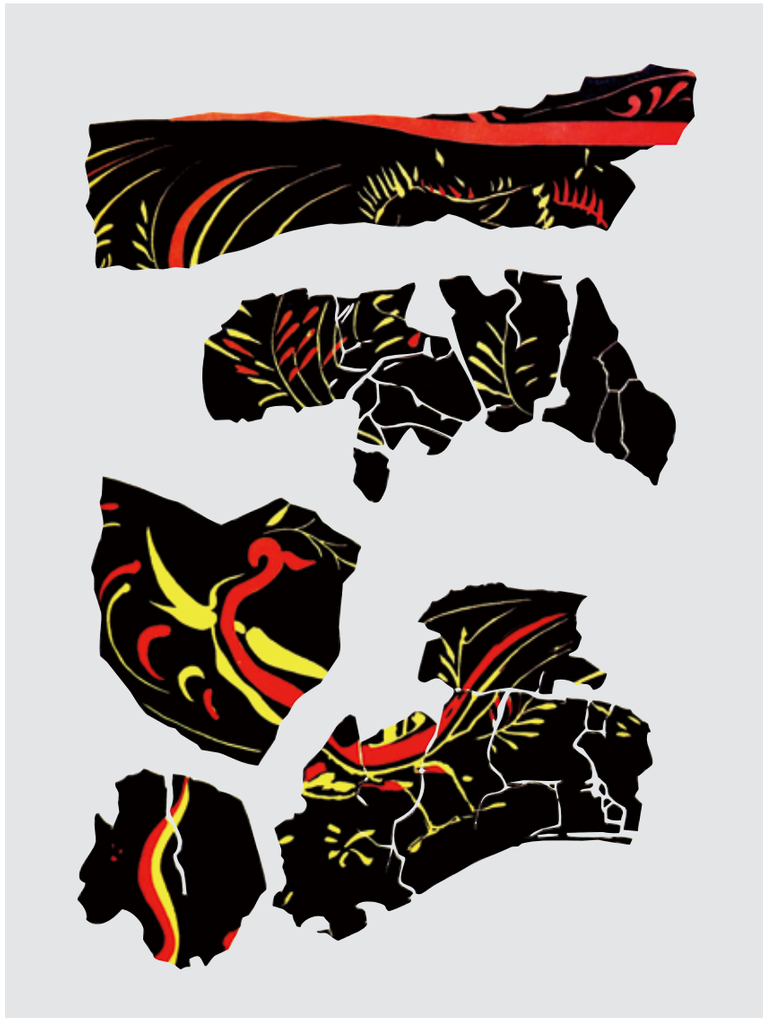

写真 61　飾履塚出土の漆器の文様

しかし、具体的に実像を知るには現存する新羅の衣服や織物の事例があまりにも少ない。天馬塚出土の馬具には、様々な色の糸により紋様を表現した錦が使われている。また、慶山·林堂(イムダン)古墳群出土の銹着(しゅうちゃく)の織物の中には、麻でS字縒りの糸を使って織った麻布と苧麻があり、絹織物は縒りのない糸によって作られていることが明らかとなった。

5 遺物から見た対外交流

中国王朝との交流

積石木槨墳を築造した初めの頃は、新羅の対外関係は高句麗に偏った傾向がある。しかし、5世紀中頃以降は百済、加耶との関係が緊密になる。文献に記されたこのような外交関係は考古学資料にもしっかり反映されている。ただし、高句麗を介した北朝との交流の様子は明らかになっていない。麻立干期の間、南朝と新羅は、直接的な外交関係を結んでいなかったと見える。

ところが、皇南大塚·南墳と北墳には東晋~劉宋時代に製作されたものと見える銅鏡、青銅製熨斗、黒釉盤口小壺が出土した。これらの遺物は、同時期の百済遺跡では魏普南北朝時代の中国の物が多く出土している点と、433年以降、新羅と百済がいわゆる「羅済同盟」の関係にあった点などを考慮にいれると、百済経由で新羅に伝わったと推測することができる。

写真 62　慶州·皇南大塚·北墳の黒釉盤口小壺

高句麗、百済、加耶との交流

新羅は4世紀の中後半から周辺の国々の中でも高句麗と特に緊密な関係を保っていた。そのような外交関係を反映するかのように、新羅古墳からは高句麗産または高句麗系遺物が多く出土している。代表的なものは壺杅塚の青銅製盒、瑞鳳塚の銀盒、金冠塚の銅製四耳壺などを挙げることができる。この3点の金属容器は高句麗産の完成品である。それに比べ、大型古墳から多く出土している鼎·盤·鐎斗(しょうと)、熨斗、盒、鋺などの金属容器の組合せは高句麗の影響を受けた祭器と考えられる。

壺杅塚の青銅製盒は胴部と蓋からなる。この盒の場合、脚台の底部表面に「乙卯年国岡上広開土地好太王壺杅十」という16字の鋳出し文字がある。その意は「乙卯年である415年に国岡上広開土地好太王を記念して作った十個目の器」と解釈される。「国岡上広開土地好太王」とは、高句麗の広開土王の諡号である。字体も広開土大王碑と同じものである。

瑞鳳塚出土の銀盒には、蓋の内側に「延寿元年、太王治世の卯三月に太王の教旨により合杅を作ったが、銀を3斤6両使った(延寿元年太歳在卯三月中太王教造合杅用三斤六両)」の22字がドライポイントの技法により刻まれている。底の表

写真 63　慶州·壺杅塚の青銅製盒

面にも「延寿元年、太王治世の辛三月に太王の教旨により合杅を作ったが、銀を3斤を使った(延壽元年太歳在辛三月□太王教造合杅三斤)」(□：不明の字)の20字が刻まれている。蓋のつまみが十字形である点、延寿という年号が新羅には存在しないという点、太王という呼称が使われている点などを考え合わせ、高句麗産と見る見解が多数である。「辛」の字と「卯」の字を合わせると辛卯年、つまり451年となり、これが銀盒の製作年代と推定される。

装身具の中にも高句麗産が含まれている。皇南大塚·北墳出土の太環式耳飾は太い輪の下に瓢箪形の垂下式が付いている。これは新羅の他の耳飾とは異なる形である反面、集安·麻線溝1号墳の出土品に非常に類似している。高句麗産の完成品が伝わった例である。北墳出土の「y」字形髪飾も、麻線溝1号墳の出土品とほぼ同様の形である。その他、新羅古墳には高句麗の要素を持つ遺物が多量出土している。月城路カ-5号墳出土の鉛釉壺は、高句麗産の完成品の可能性が高いが、まだ高句麗遺跡から同様の遺物が出土していないため、断定はできない。その他の古墳から出土している数々の武器や馬具からも高句麗遺物の特徴が見られる。

積石木槨墳築造期の新羅文化の中から高句麗ならではの要素が多く確認されるのは4世紀後半以降、高句麗と新羅が友好関係を保っていたからであろう。

写真 64　瑞鳳塚出土の銀盒

写真 65　慶州·瑞鳳塚出土の銀盒銘文

写真 66　皇南大塚·北墳の金製耳飾

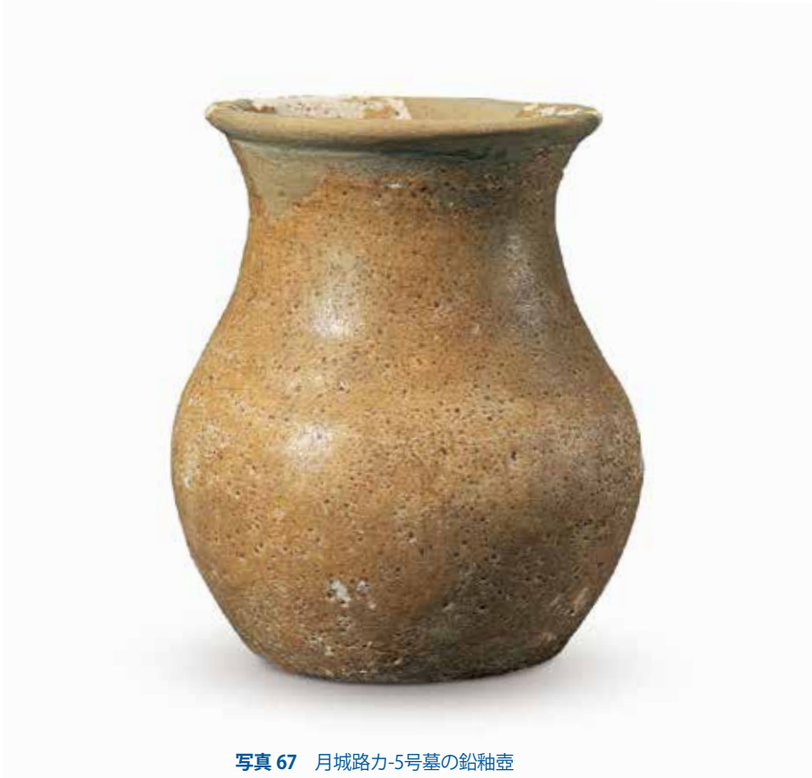

写真 67　月城路カ-5号墓の鉛釉壺

西暦400年、高句麗軍の南征を経て、強い絆で結ばれた両国の友好関係は5世紀中頃まで続く。この期間中、高句麗の工芸品が慶州へ多数流入したと見え、またそれを新羅の物に吸収・発展させた器物の製作も盛んに行われたと考えられる。

このように、新羅は高句麗と活発な交渉と交流を行ったが、高句麗遺跡において積石木槨墳築造期に新羅の器物が埋葬された例はまだ確認されていない。これは中国・南北朝時代の遺跡から百済と新羅の遺物は出土しない現象と同様の意味で考えることができる。

新羅と百済は、韓半島中南部地域の覇権を巡って対立する場面もあったが、高句麗の南進に対し、歩調を合わせて対処した。したがって両国は、相手国に技術者を派遣し、国家間で婚姻関係が結ばれたりもした。その過程では、当然、それに伴って文物の交流があったはずである。新羅の遺跡からは百済産遺物が出土し、逆に百済の遺跡から新羅産遺物が発掘されることもある。

飾履塚金銅飾履は、厚くメッキされた薄い銅板3枚を繋いで作ったものであるが、左右対称で金銅板1枚ずつさらに当てて側板とし、底には1枚の金銅板を当てている。底には亀甲紋とともに計11枚の8葉蓮華文が表現されている。亀甲紋の中には鬼面と双鳥文が交互に配置されており、人面鳥身、鳥、麒麟、羽のある魚が対称となって配列されている。この飾履の紋様から見て百済・漢城期後半の資料である高敞(コチャン)・鳳徳里(ポンドクリ)1号墳4号石室出土の飾履に類似している。そして側板が靴の前後で釘によって固定されており、底の金属釘がスパイクのように突出している点も、基本的に百済の金銅飾履と軌を一にしている。

一方、公州・宋山里旧1号墳出土の2点の銙板は典型的な新羅の帯金具の構成品である。四角い銀板に簡素化された忍冬草を透かし彫りで表現している。これは、金冠塚出土の帯金具と特に類似している。金冠塚からはこれと同一の図案を持つ金製品と銀製品が1組ずつ出土している。したがって、宋山里旧1号墳の出土品は新羅から百済へと伝わったものと推定される。この帯金具が百済へと伝わったきっかけは、430年代から553年まで保たれていた羅済同盟と見てよいであろう。

新羅と加耶は洛東江を境界に接していたので、他のどの国よりも密接な関係にあった。加耶は新羅と異なり、幾つかの小国が分立した状態だったので、新羅と加耶を同じように考えるのは難しい。しかし、新羅と加耶は、辰韓・弁韓時代から類似した文化を共有しており、長年文化的に類似性を持っていた。4世紀以降、

国際関係が変化していく中で、加耶は百済-倭との同盟関係を保ち、新羅は高句麗との同盟を通じて、それに対抗していた。対抗の絶頂は400年に行われた国際戦といえる。その戦争で新羅を攻撃した加耶、百済、倭の連合軍は大敗した。高句麗が新羅を支援したことにより、新羅は高句麗から政治的干渉を受けるようになった。しかし、430年代に入り、高句麗の干渉から逃れようとしていた新羅が、

写真 68　慶州・飾履塚の金銅飾履(底)

写真 69　公州·宋山里旧1号墳の銀製銙板(新羅産)

写真 70　高霊·池山洞45号墳三葉大刀(新羅産)

百済との和親政策を取ることにより、新羅と加耶との関係も、基本的に平和期に入る。相手国で製作された完成品が支配階級の墓域から出土する点などがそのような外交関係を示している。

飾履塚と壺杅塚からは大加耶の龍鳳文大刀と同一の技法により製作された大刀が出土している。特に飾履塚の大刀は、陜川·玉田M3号墳出土の龍鳳文大刀に酷似している。したがって、飾履塚及び壺杅塚の大刀は、大加耶から流入したものと推定することができる。飾履塚は金鈴塚とともに鳳凰台古墳の陪塚(ばいちょう)である。そして出土遺物は品格が高いだけでなく、中には中国南朝や百済と結びつけることのできる資料が多い。その事実を考慮にいれると、墓の被葬者は王族で、生前、大加耶-百済-南朝の交流にかかわった人物だった可能性がある。当時、大加耶と新羅の国勢から見てこの大刀を大加耶が下賜したと考えることは難しく、恵贈によるものか、被葬者が個人的に収集した物と見える。

大加耶古墳からも新羅産のものが出土している。新羅から完成品が輸入された事例として池山洞(チサンドン)45号墳の三葉大刀を挙げることができる。三葉は三国時代の各国で大刀に表現されている共通の図案である。ただ、新羅にお

いて製作された大刀の場合、環頭の形がいわゆる上円下方形で、その中に三葉文の装飾が施されているものが多い。池山洞45号墳の大刀は、外形や製作技法からみて慶州において製作されたものと見ても間違いないであろう。その他、陜川·玉田古墳群出土の耳飾の中に新羅の特徴を持つものがある。但し、慶州の出土品とは微妙な違いがあり、新羅の影響を受けて大加耶圏域において製作されたものと考えることもできる。その他、池山洞古墳群や玉田古墳群出土の土器から見られる新羅様式の土器は、慶州において製作されたというより、洛東江以東の玄風や昌寧地域の土器と見ることが妥当であろう。

新羅と倭との交流の様相を知ることのできる資料は少ない。その理由は、400年の国際戦でもわかるように、平和より葛藤の期間が長かったからであろう。ただ、それでも4世紀前後の慶州·月城路カ-29号墓から日本産石製腕輪(石釧、いしくしろ)が、カ-31号墓から土師器系の土器が出土している。一方、金鈴塚出土の銅鏡は、いわゆる「百乳鏡」と呼ばれるもので、倭において流行した鏡であるため、倭からの流入品である可能性がある。日本では5世紀前半と6世紀以降、各地から新羅遺物が散見される。

新羅と倭との交流は、新羅が高句麗の影響力を排除するため、百済と加耶、そして倭との和親政策を進めた430年代以降、新羅と倭との文物交流がもっとも活発に行われていたようである。日本列島において、5世紀中頃の古墳から出土している三燕または新羅系馬具類、そして装身具は、その時期における両国の交流の様相を端的に物語っている。

新羅の古墳からは「黄金の国」という名にふさわしく、数々の黄金装飾が出土している。中でもデザインや製作技法の特徴を持つ遺物が数点含まれている。皇南大塚·北墳の嵌玉腕輪と鶏林路14号墳の装飾宝剣がその代表作である。

嵌玉腕輪は皇南大塚·北墳出土の数点の腕輪の中で際立つもので、被葬者の右腕周辺で出土している。新羅をはじめとする三国時代の腕輪は、輪の部分が細く、断面が丸いか四角いものがほとんどである。ところが、この腕輪は金板が長く平べったい上に、細線と細粒細工の装飾が施されており、トルコ石などの宝石が嵌められている。腕輪の胴部も、金の玉と宝石が嵌められた板の裏に金板1枚をかぶせ、上下に丸めてかぶせている。このような技法は、東アジアの腕輪には類例がなく、ペルシアの腕輪では、断面の形は異なるが、外形上類例が確認できる。

写真 71　月城路カ-29号墓の石製腕輪

写真 72　月城路カ-31号墓の土師器系の土器

この腕輪の製作地を東ローマとする意見もある。しかし、西域工芸品の中で、同一の製作技法により作られたものは存在しない。それに比べ、北魏の工芸品である内モンゴル·西河子郷出土の歩搖冠は嵌玉に使われた部品、嵌玉技法、中空の捲糸が使われている点などから、北墳出土の嵌玉腕輪と共通点を持つ。したがって、北魏に居住していた西域系の職人がこの腕輪の製作に関わった可能性は排除できない。

装飾宝剣は東アジアで唯一出土している独特な宝剣である。鉄剣の鞘と柄(つか)は金製である。鞘の表面に輪郭をつくり、その中に透明で赤黒い柘榴石を嵌めて装飾を施している。装飾の中間部分と縁に金粒を貼って華やかさを添えている。柄の先は半円形で、柄の装飾は縦長である。鞘の入口の装飾は横長の長方形装飾と、その下部に台の形をした装飾が加わり、鞘の先は梯形である。側面にはベルトに掛けることができるよう、2つの突出部が作られているが、上部の装飾はP字形であり、下部の装飾は半円形である。これと非常に類似した意匠を持つ

写真 73　皇南大塚·北墳の嵌玉腕輪

写真 74　鶏林路14号墓の装飾宝剣

写真 75　味鄒王陵地区の頸飾(象嵌瑠璃玉を含む)(右：象嵌瑠璃玉)

写真 76　天馬塚のガラス杯

写真 77　皇南大塚·南墳の鳳首形ガラス瓶

剣の実物例は、ロシア·エルミタージュ美術館収蔵のカザフスタン·Borovoyeからの出土品があり、5世紀代のものと考えられている。鶏林路(ケリムロ)宝剣の製作地は、イランまたは中央アジアと推定される。

新羅の積石木槨墳出土のガラス製品の中で瑠璃容器と象嵌瑠璃玉は、ともに外来系遺物である。象嵌瑠璃玉は味鄒王陵地区のC地区4号墓から出土している。青い地に白い顔、そして赤い唇の4人がモザイク技法により表現されている。このように精巧に表現された人々の間で鳥や雲も配置されている。小さなガラス玉に小さく精巧な図案をいくつも象嵌技法を施すことにより、ガラス工芸における美の真髄を示している。このガラス玉も西域から流入したものと見えるが、製作地はインドネシアのジャワ島と見る見解もある。

慶州の墓からは計24点の瑠璃容器が出土している。慶州外郭の安渓里(アンゲリ)4号墳の出土品を除くと、すべて金冠をはじめとする黄金遺物とともに、王族の墓からのみ見つかっている。つまり、瑠璃容器は王とその一族の墓に限り副葬されるという特徴を持つ。この点は、当時の新羅社会において瑠璃容器が最上品として思われていたことを象徴している。

このような瑠璃容器は、ソーダガラス系であり、吹きガラス技法により成形された。ほとんど、ロマングラス製作の中心地においてつくられ、具体的にはシリア-パレスチナ地域のどこかで作られたものとされている。類似した容器類の分布から見てシルクロードの中で中央アジアのステップ地帯を通るいわゆる「草原の道」を経て新羅に伝わったものと推定されている。

以上のように、麻立干期までの新羅遺跡からは西域、中国南朝、高句麗、百済、加耶、倭において製作された遺物が出土している。中でも西域や南朝からの器物は高句麗または百済経由のものの可能性がある。一方、百済、加耶、倭の遺跡からは新羅産の器物が出土しているが、高句麗や南朝では新羅産の器物が見つかっていない。新羅は外交関係を結んだことにより輸入した外来系遺物を王室が独占し、王族や高位貴族には下賜したと見えるが、地方の首長に下賜した事例は確認されていない。昌寧のように新羅の辺境地域には隣接した大加耶産の器物が伝わっている。

第3章

外来系文物の受容と発展

中古期

金石文
墓と葬送儀礼
仏教美術
服飾
農耕と物品の生産
遺物から見た対外交流

中古期とは、23代王の法興王が即位した514年から、28代王の真徳女王が死亡し武烈王が即位する654年までの期間をいう。ちょうど140年間となるこの時期は、新羅の千年の歴史の中で飛躍的な成長と発展を遂げた。その発展の過程で、従来の共同体のような性格から脱皮し、新羅固有の特徴を確立していった時期でもある。中古期を新羅の立場から概観すれば、三国の中で古代国家としての出発が最も遅れた新羅が、政治的·社会的な後進性を克服し、他の二国に追いつき、さらには三国統一を達成する基盤を築く時期である、と評価できる。それは社会的·経済的だけでなく、文化的にも大いに成熟した時期だったからこそ可能であった。文献だけでなく、新しく発見された6世紀の幾つかの金石文の資料や遺跡、遺物など様々な考古学的資料から確認することができる。

6世紀初め、王位に就いた智証王(500~514)は様々な方面にわたり注目に値する政治改革を断行した。その内容は、それまでの、いわゆる六部を中心として運営されていた秩序を、国王を頂点にする強力な中央集権的支配体制へと変化させるための予備的な措置であった。

智証王に続いて法興王(514~540)は父の政策を受け継ぎ、さらに具体的な実践に移す作業を行った。517年には新羅ではじめての官府である兵部を設置した。軍事力の強化が最重要課題だった時代、その要望に応えた措置だった。520年には律令を頒布し、新しく整備した国家としての新羅をどのように運営していくか、その方向を示した。最終的に十七等にわかれた官位をはじめとし、様々な国家の基礎がつくられたと推定されている。最近発見された金石文に見られる「佃舎法」や「奴人法」などは、そのような事情を物語る。528年には国家として仏教を公認した。仏教は5世紀前半の訥祗王の代に、すでに伝来していたが、定着の過程で内部の熾烈な葛藤と摩擦があった。法興王の時も新羅最初の寺院である興輪寺の創建をめぐって、これを推し進めた貴族と反対勢力との間で大きな争いがあった。法興王を中心とする推進勢力が最終的に勝利したことで、仏教は国家の宗教として公認された。

仏教の公認は、様々な面において新羅社会の根本的な変化をもたらした一大事件であった。具体的には、制度の整備により定着していく中央集権的な支配体制を、理念的に支えるイデオロギーとして機能したという点、死後の世界に対する理念的変化をもたらし、慶州盆地では墓の構造(横穴式石室)および墓群の位

置(周辺の山地)の変化までうみ出した点、文字の使用レベルを急速に向上させた点、その他、仏教と関連した様々な新たな文化が本格的に受容された点などを挙げることができる。つまり、新羅文化のほぼ全般にわたって変化が起きたのである。536年には、はじめて年号を用いるようになり、王号を以前の「寐錦王」に代わって「大王」と呼ぶなど、新羅は名実ともに中央集権的な貴族国家へと変貌を遂げた。

このように整備された支配体制に基づき、その後、本格的に領土拡大を図った。551年に成年となった真興王(540~576)は親政を行い。「開国」という年号を使用することにより、実質的な新時代の到来を宣言した。ちょうどその年、百済とともに漢江(ハンガン)流域への進出に成功し、さらに553年にはその一帯を独占した。554年、百済の聖王が報復の目的で引き起こした全面戦争にも新羅は勝利した。新羅はその勢いで562年に、とうとう加耶勢力全体を服属させるという、念願の目標を達成した。これにより新羅は人的·物的基盤を確保しただけでなく、中国との直接交易への道が開けた。領土拡大により領民と支配地を増やし、地方に対する支配を強化させていくということは、必然の手順であった。真興王はその服属民を新羅人として編入させるため、「すべての領土は王土であり、その住人はすべて王民」だという理念に基づいた「王道政治」の実現を標榜した。

在位期間の短かった真智王(576~579)の後を継いだ真平王(579~632)は、法興王と真興王の時代を経て成立した体制を正常に保つため、制度整備をさらに進めた。新羅にそれまで根付いていた固有の体制を根幹に置きながらも、中国の南北朝と直接交流し、様々な先進的文物を受け入れることにより、体制を補完·整備し、いわゆる律令に基づいた統治を行った。これにより新羅社会は統一のための土台を着実に築いていった。中古期の終わりを迎えることに、はじめての女王の統治期を経ることとなった。この頃は中代への過渡期だった。

1 金石文

碑文の世紀 - 6世紀

6世紀に入り、国王を頂点にする支配制度を整備していった様子は文献に記されているが、細部までは記録されてはいない。それを具体的に補うとともにその実像に迫る手がかりは、断片的ではあるが、当時立てられた多くの石碑の銘文からうかがうことができる。

新羅の領土となった各地から、6世紀の碑が多く発見されている。したがって、この世紀を「碑文の世紀」と名づけてもよいであろう。もちろん、この時期の木簡の出土も次第に増えているが、断片的な情報のみであり、石碑が支配体制が整備されていく様相を鮮やかに浮かび上がらせる最適の資料となっている。6世紀初めの金石文は、浦項(ポハン)中城里(チュンソンリ)新羅碑(501年)、浦項冷水里(ネンスリ)新羅碑(503年)、蔚珍(ウルジン)鳳坪里(ポンピョンリ)新羅碑(524年)がある。この中で最古の中城里碑(〈写真1〉)は高さ105.6cmであり、碑文は12行である。1行の冒頭にある申巳という字を根拠に、501年に建てられたものとされる。字数は全部で203字前後と考えられている。字の大きさは一定でなく、小さい字は2㎝、大きい字は5㎝と、その差は大きい。字は楷書体であるが、隷書の痕跡も

写真1　浦項·中城里新羅碑

写真2　浦項·冷水里新羅碑

多く残っている。碑文の内容は中央の六部の支配勢力を中心に、地方の有力者まで関わった紛争が起きたため、中央政府が直接介入し、それを評決·執行したことが記されている。最後には、決定事項に違反した場合、重罪とみなし厳罰すると書かれており、成文法としての律令が頒布される以前、制定の必要性が高まっていた諸事情を物語っている。

冷水里碑(〈写真2〉)は幅70cmであり、碑文が前面·裏面·上面の三面に刻まれた独特な形式のものである。碑文は前面12行125字など、全部で231字が刻まれている。一般的に、3行目の最初の部分に「癸未」と書かれており、それを根拠として503年に建てられたものとされる。碑が発見された一帯と思われる珍而麻村の有力者、「節居利」という人が保有する財産をめぐって、彼と関係のある人との間で生まれた争いを中央が解決した後、その執行を目的に作成した一種の判決文である。この石碑によって、智証王が即位する前に葛文王を歴任した事実がはじめて

明らかとなるなど、当時の政治や社会について新たに理解できる端緒が示されている。

鳳坪里碑(〈写真3〉)は高さ204cmであり、幅は碑文の部分が32~36cm、下部が54.5cmと不定形である。書体は隷書から楷書へと移行する過渡的な書体であり、全部で10行、字数は計398字(または399字)と推定される。524年に立てられた。碑文にはその前年に中央から大軍を送り込まないとならないような重大なことがこの地域で勃発していた。中央政府はその事態を解決し、国王をはじめとする14人の中央の貴族が集まって会議をし、その結果を布告·執行したことが書かれている。この碑では、律令と見られる法の名称が見られる点など、碑の発見以前には知られていなかった内容が多く含まれているので、注目を集めている。

上述の碑はすべて東海岸で見つかっており、興味深い。この地域は長年、北方の人々や文化が南へ下ってくる際の重要な交通路の要衝のようなところだったので、新羅の初期から非常に重視されていた。さらに、5世紀中頃以降は高句麗がこの交通路によって勢力を拡大した。また、新羅が北方へ進出し、高句麗と国境を接するようになると、衝突が頻繁に起きるようになった。524年に立てられた蔚珍(ウルジン)鳳坪(ポンピョン)里新羅碑は、そのような状況を反映している。

6世紀中頃、新羅の領土拡大と関連した以下の碑は、一種の記念碑のような性格を持つ。まず、丹陽(タニャン)新羅赤城碑(〈写真4〉)は南漢江(ナムハンガン)上流地域に建っている。高さ93cmで、上部の先が一部破損している。一面のみ削られており、そこに字が刻まれている。字体は楷書体で、字の大きさは約2cmである。碑文は22行で、全体は約430字だったと推定されるが、現在、残っている字は288字である。第1行の冒頭部分が破損しているので明確ではないが、建碑の年代は545年~551年頃とされている。文献に記された新羅の漢江下流地域への進出の以前に、真興王の命を受けた名将の異斯夫が軍事作戦を主導し、高句麗の赤城を攻略したという新たな事実が明らかとなった。この碑は、官位制度の発達と律令制がどの程度だったのかを知る上でも貴重な史料となっている。

昌寧(チャンニョン)真興王碑(〈写真5〉)は561年に立てられた。高さは176cm、幅175cmほどであり、大きな自然石の一面のみを整え、直線の縁をつくり、その内部に文字を刻む。隷書の痕跡が残っている楷書体であり、計27行で、1行あたり26字が基本となっている。碑文の前半は、真興王が幼くして即位したことや、その

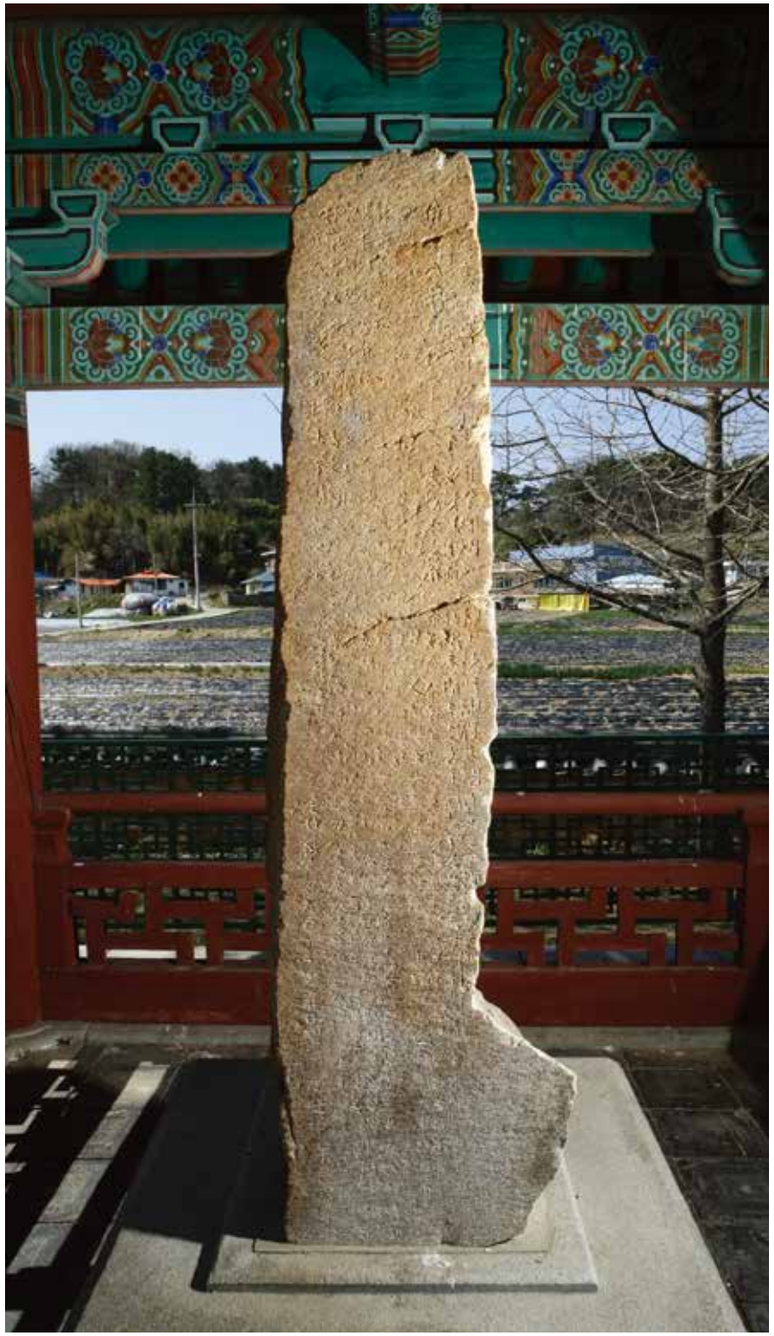

写真 3　蔚珍·鳳坪里新羅碑

写真 4　丹陽·新羅赤城碑

写真 5　昌寧·真興王碑

後の政治の基本方針や四方への領土拡大、領民の管理などに関する内容などが記されている。後半は真興王にしたがって王京から訪れた中央の高位貴族や他の地方の勤務先から参加してきた地方官や軍官、そして地方の有力者の村主などの人名が並んでいる。翌年、大加耶をはじめとする加耶勢力が新羅に併合されたことを考慮すると、この碑は新羅の洛東江(ナクトンガン)以西地域への進出と密接な関わりのあることがわかる。

漢江下流地域への進出を示す碑としては、北漢山(プッカンサン)真興王巡狩碑(〈写真6〉)が挙げられる。本来、北漢山の碑峰(ピボン)に建っていたが、現在は国立中央博物館に移設・管理されている。この碑は1816年に、秋史・金正喜(キム・ジョンヒ)が碑峰に登り、真興王巡狩碑であることを確認しており、その後、再び訪れて調査を行った事実を、側面に親筆で刻み入れている(〈写真7〉)。

碑の材質は頑丈な花崗岩であり、最近では石質を調査した結果に基づき、慶

写真6　北漢山・真興王巡狩碑(復元碑全景)

写真7　北漢山・真興王巡狩碑拓本

州から持ち込まれたという驚きの主張もある。碑峰の頂の岩に設置された碑座に立ててあり、本来、碑身の上には笠石もあったようだが、現在は無くなっている。碑身は高さ155㎝で、4面を丁寧に削っているが、一面にのみ字が刻まれている。字体は楷書体であり、12行で摩耗が激しく、全体の字数はわからない。建碑を555年頃と見る見解もあるが、568年と見る見解が一般的である。この碑は新羅が漢江を渡って北上していたことを示す確かな証拠である。また、製作に多大な労力を費やしたにもかかわらず、なぜ人々の目に触れにくい碑峰の頂上に立てたのか、が問題となるが、それについては、この立てられたところまでが国境であり、真興王の領土であることを天に知らしめる意図だったと解釈できる。

新羅が東海岸へ北進していたことを示す碑は、黄草嶺(ファンチョリョン)および摩雲嶺(マウンリョン)真興王巡狩碑である。黄草嶺碑は本来、咸鏡南道(ハムギョンナムド)・長津郡(チャンジングン)の黄草嶺に立てられたが、現在は咸興市(ハムフンシ)・沙捕口(サポグ)の咸興本宮へと移設・管理されている。1行の上の部分が欠けているが、本来の高さは151㎝と推定されており、全体12行で、一行あたりの字数は35字と考えられる。

摩雲嶺碑(〈写真8〉)は本来、咸鏡南道・利原郡(イウォングン)・雲施山(ウンシサン)・摩雲嶺に立っていたものを、咸興市の咸興本宮に移設され、黄草嶺碑とともに展示されている。碑の材質は黄草嶺碑と同様、花崗岩である。高さ136㎝・幅45㎝・厚さ30㎝であり、趺(石碑の台)と笠石まですべてそなえた定型的な碑である。黄草嶺碑とは異なり、表と裏に字が刻まれている。表は計10行で一行当たり26字、裏は計8行で一行当たり25字となっている。碑文は、真興王が「巡狩」を行ったという事実、その目的、随行の僧侶2人と臣下の名前、という三つの部分で構成されている。真興王が568年8月、臣下たちをつれて北の国境地帯を巡幸し、境界を確認するとともに民心を把握・慰撫し、新羅人として積極的に懐柔する目的で、この碑を立てたことがわかる。

中古期の間、このような碑以外でも様々な性格の銘文の刻まれた碑と刻石がつくられた。まず、首都防御のための築城の際に立てられた明活(ミョンファル)山城作城碑(551年)と南山新城(ナムサンシンソン)碑(591年)(〈写真9〉)を挙げることができる。南山新城は1934年から2000年までの間に、10点が発見されている。碑文は南山新城の築城に関する事実だけでなく、新羅の地方統治と関連のある

写真 8　摩雲嶺真興王巡狩碑

写真 9　南山新城碑 第1碑

重要な内容が盛り込まれている。これらの碑文には「辛亥年に南山新城を法律に基づいて築いており、3年以内に崩れた場合は罰せられることを誓約する」と記されていて、築城に関わる人々の出身地·官等·氏名などが刻まれている。すべての碑文の冒頭部分は同一であるが、関係者がすべて異なる点から見て、築城の際に担当の区間別に石碑が刻まれたと考えられる。

さらに、仏教関連の記録が見られる代表例は、大邱戊戌銘塢作碑(578年)(〈写真10〉)が挙げられる。另冬里村に塢、つまり貯水池を築造し、それに関わる責任者の官職と氏名、貯水池の規模、動員された人数、作業期間など、工事と関連のある内容全般が記されている。工事の責任者は地方官吏ではなく僧侶である。その理由は、この貯水池が寺院と関連した施設であるだけでなく、僧侶たちが専門知識を保有していたからと考えられる。先進的な技術と知識を備えた階層だった僧

写真 10　大邱·戊戌銘塢作碑

写真 11　壬申誓記石

侶たちは、仏教が公認されたことにより、国家を統治する上で、様々な分野において一役買っていたことを物語る。僧侶の名は蔚州(ウルジュ)·川前里(チョンジョンリ)刻石(535年)と黄草嶺碑、摩雲嶺碑にも登場している。摩雲嶺碑では、王に随行した臣下の中でも、二人の名が最初に登場している。この他に、貯水池を築造して立てられた碑としては、永川(ヨンチョン)菁堤碑(丙辰銘536年)がある。

蔚州川前里刻石(〈写真12〉)は高さ約2.7m·幅9.5mの大きい岩の面に、幾何文、動植物文、人物文、行列図など様々な紋様の彫刻や銘文が刻まれている。銘文が刻まれた時期は三国時代から新羅末期まで、様々である。僧侶の名は535年と推定される「乙卯銘」に登場する。この刻石には、花郎の名も散見される。堤川(チェチョン)チョンマル洞窟刻石でも花郎と郎徒関連の字が確認された。

一方、儒学関連記録が見られる代表例として、壬申誓記石(〈写真11〉)を挙げることができる。この碑の名称は、冒頭に「壬申」という干支が刻まれており、内容の中に忠誠を誓うという文が多数書かれていることで名付けられた。確実ではない

が、612年頃立てられたと推定されている。とくにその前年の7月22日に、『詩経』、『尚書』、『礼記』、『春秋左伝』などを3年で次々と習得することを誓ったことから、新羅の中古期において、青少年が儒教道徳の実践にどれほど強い意志を持っていたかについてうかがうことができる。

儒教関連記録は、それ以前の鳳坪碑、黄草嶺碑、そして摩雲嶺碑にも見られる。鳳坪里碑には「獲罪於天」という部分が見えるが、これは「罪を天に獲ば」、つまり「天に対して罪を犯すと」という意味で、『論語』「八佾」からの引用である。これは、当時の社会において儒教の経典に対する理解が深まっていたことを示している。また、黄草嶺碑と摩雲嶺碑に書かれている「巡狩」、「朕」などの表現、『論語』「憲問」からの引用である「修己以安百姓」という語句は、真興王の時における儒教の統治理念やその水準を示している。

写真 12　蔚州川前里刻石

統一新羅期の金石文

三国の統一とともに、漢文使用のレベルも大いに高くなった。仏教や儒学の経典が普及し、漢字や漢文の使用人口が増え、人々の文章作成能力が格段に向上した。特に、国の制度教育により組織的に漢文能力を高めた結果、7世紀になると相当なレベルにまで達した。このような背景のもと、元暁や強首のような名文家が現れ、その水準は飛躍的に高まった。8世紀になると、唐では新羅の文章力が唐のそれと肩を並べていると考え、「君子国」と呼んだことは、そのような事情を如実に現している。

最初は石や木に漢字が刻まれて、碑文、刻石、木簡、竹簡のような形をとっていたが、製紙技術が導入され、その技術が次第に向上することにより、行政文書や書籍は紙に書かれるようになった。それ以外の目的では様々な材料が利用され

写真 13　皇福寺址三重石塔舎利函銘文

た。例えば、土器に字を刻み、または墨書したもの、瓦に印を付けたもの、様々な形の印章や金属容器などに字が刻まれたもの、舎利容器と塔址などに銘文のあるもの、仏像や銅鐘に鋳物で記したものなどが挙げられる。

このように金石文は統一新羅期にも広く使われた。特に、中古期にはあまりなかった新しい現象は、「金文」の流行である。金銅板に字を刻み、それを舎利容器の中に奉納した例や銅鐘の銘文などがある。舎利容器の例としては、皇福寺址三重石塔の舎利函に刻まれた銘文(706)(〈写真13〉)と、造塔の来歴が刻まれた昌林寺址塔址(855年)、そして「咸通六年」銘の金鼓などがある。

銅鐘の代表例は、聖徳大王神鐘(771)がある。上院寺鐘も同様で、725年に製作された現存最古の銅鐘である。日本に移設され、破損しているものや残存する銘文鋳出しの新羅の鐘としては、无尽寺鍾(745)(〈写真14〉)、蓮池寺鍾(833)などもある。銘文が鋳造された鉄仏もある。仏身の左腕の裏側に銘文が鋳出しされた全羅南道(チョルラナムド)·長興郡(チャンフングン)·宝林寺鉄仏は、銘文の冒頭に、造仏時期を釈迦如来入滅1808年後としており、当時の国王(憲安王)が在位3年(858)目であることを明記している。一方、高さ91cmの仏像の背に楷書体銘文が鋳出しされた江原(カンウォン)·鉄原(チョルォン)到彼岸寺鉄仏(865)(〈写真15〉)もある。その他、月池(雁鴨池)から「東宮衙鎰」と刻まれた錠が出土しており、国立慶州博物館の南側の拡大敷地からは「辛審東宮洗宅」と刻まれた青銅製皿1点が発掘されている。

写真 14　江陵·无尽寺鐘拓本

石文(いしぶみ)は次第に多様なものとなっていく。まず碑銘としては新しく陵碑が登場する。武烈王陵碑そのものは遺失しているが、その螭首(ちしゅ)の中央部分に「太宗武烈大王之碑」という篆額(てんがく、石碑などの上部に篆書で書かれた題字、〈写真17〉) がある。さらに、文武王陵碑と金仁問碑があり、他にも残片ではあるが、聖徳王陵碑片、興徳王陵碑片などがある。その他の石文は仏教関連の器物に刻まれているのがほとんどで、9世紀のものが多く、この時代の特徴となっている。実際、陵碑の銘

写真 15　鉄原·到彼岸寺鉄仏背の銘文

写真 16　武烈王陵碑螭首の題額部分

写真 17　武烈王陵碑螭首の題額拓本

写真 18　燕岐·癸酉銘全氏阿弥陀仏碑像

文以外の石文はほとんどこれに当たる。まず独特な事例として石を碑の形で削り出し、表や四面にわたって仏像を彫刻し、銘文を刻み入れた仏碑像がある。これらは石碑の形と光背の形に両分できる。前者としては癸酉銘全氏阿弥陀仏碑像(673)(〈写真18〉)が、後者としては己丑銘阿弥陀仏碑像(689)がある。これらの仏碑像は制作当時、阿弥陀浄土信仰が流行っていたことを示している。さらに、甘山寺阿弥陀如来立像(720)(〈写真19〉)と弥勒菩薩像の裏面にはそれぞれ造像記が書かれており、漢文学の項目でも述べるが、当時における漢文能力の高さを雄弁に語っている。

和尚碑では伝統として新羅末期·高麗初期まで受け継がれていく。中でも哀荘王(800~808)の代に立てら

写真 19　慶州·甘山寺阿弥陀如来立像

写真 20　保寧·聖住寺址郎慧和尚碑

れ、元暁が686年3月30日、70歳の時に入滅したことを記す唯一の資料である高仙寺誓幢和尚碑は、新羅の地方軍の十停の一つである音里火停の存在を示す資料として高い価値を有する。その他の和尚碑は、禅宗と関連のある9世紀のもので、忠清南道·保寧(ポリョン)·聖住寺址に残る郎彗和尚碑(〈写真20〉)が代表的である。その

写真 21　陜川·海印寺妙吉祥塔記

写真 22　大邱·桐華寺敏哀大王舎利壺

碑文は崔致遠が作成した「4山碑銘」の一つである。武烈王の8代孫の郎彗和尚は哀荘王元年(800)に生まれ、真聖王2年(888)に89歳で入滅した。彼の仏教に関する研究と国王への諮問の内容、骨品制などについて記されており、新羅史を研究する上で貴重な資料となっている。碑文は890年頃書かれたものであり、建碑年度はその直後だと考えられる。類似した性格の碑として長興·宝林寺普照禅師塔碑、昌原·鳳林寺真鏡大師塔碑、聞慶(ムンギョン)鳳岩寺智証大師塔碑などがある。これらの碑は下代に禅宗が盛んだったことを物語っている。

塔址の中には銘文を「塼」に刻み入れた海印寺妙吉祥塔記(〈写真21〉)がきわだつ。これは崔致遠が895年に書いたものだが、激しい戦乱のために死亡した多くの僧侶の魂を慰めるために造塔したという、由来を記している。その他、法光寺塔址(846)、宝林寺塔址(869)などがある。

蝋石製舎利壺に刻まれた銘文も少なくない。8世紀のものもあるが、ほとんどは9世紀のものである。例えば、大邱(テグ)桐華寺·毘盧庵における三重石塔の中に奉納されていた敏哀大王舎利壺(〈写真22〉)は黒塗りをした蝋石製(高さ8.3cm)で、非業の死を遂げた敏哀大王の冥福を祈るために863年に造塔し、塔の中に奉納したものである。銘文には造塔の功徳、敏哀大王の生涯や造塔の経緯、発願文と関連のある人々の位階や氏名が刻まれている。桐華寺が新羅王室の寺院としての機能を果たしていたことを示す貴重な資料である。その他、「永泰二年

写真 23　ソウル·舎堂洞出土「器村」銘土器片

(766)」銘舎利壺、「咸通六年(865)」銘舎利壺などがある。

安養(アニャン)·中初寺址幢竿支柱(827)と潭陽(タミャン)·開仙寺石燈(868)にも銘文があり、咸安·郡北面(クンブクミョン)·防禦山(パンオサン)磨崖仏の下にも銘文(801)が刻まれている。8世紀初め、日本の攻撃から首都を守るために築かれた慶州·新垈里城(シンデリソン)の石材には、一定の築城距離毎に、夫役を動員した地域と距離などが記され、特に「金京」という字が注目を集めている。この金京とは、慶州を指すものである。一方、土器の銘文を代表するものとしては、ソウル舎堂洞(サダンドン)窯跡出土の「△縣器村何支爲」という銘文の刻まれた土器片(〈写真23〉)がある。「器村」は、上記の「△県」に所属する村名で、窯跡の一帯を指すものと考えられる。7世紀において、土器を専門的に生産した村落が存在したことを示す貴重な資料である。

2　墓と葬送儀礼

6世紀中頃から統一新羅期までの墓制

6世紀中頃から統一新羅期までの墓制は、横穴式石室墳と火葬墓が主となり、その他に小型の石槨墓などもある。横穴式石室墳の墳丘は麻立干(まりつかん)期の高塚のように高大だが、石室が基本的に地上式であるため、石室と内護石のような構造を一体として構築し、墳丘全体を外護石とともに覆っている。おおむね6世紀中頃には、慶州周辺の山地で造営が始まっている。

横穴式石室墳は追葬を前提にした墓制である。したがって、遺体を安置する空間である玄室と、外部から玄室へアクセスしやすくするために天井の設けられた羨道、羨道の外端から墓の外部へと続く通路である墓道(〈図1〉の④を参照)、そして墳丘、この四つの要素によって構成される。もちろん、墓道は土で埋められる。新羅の横穴式石室墳の葬礼では棺を使用しないのが一般的である。したがって内部には様々な形の「屍床(ししょう)」(〈図1〉)を備えている点も重要な構成要素といえる。

玄室を縦長の直方体に築いてしまうと、天井の架構が難しいので、四面の壁を内側に積み上げながら幅を狭めることで天井石を置いている。この場合、羨道

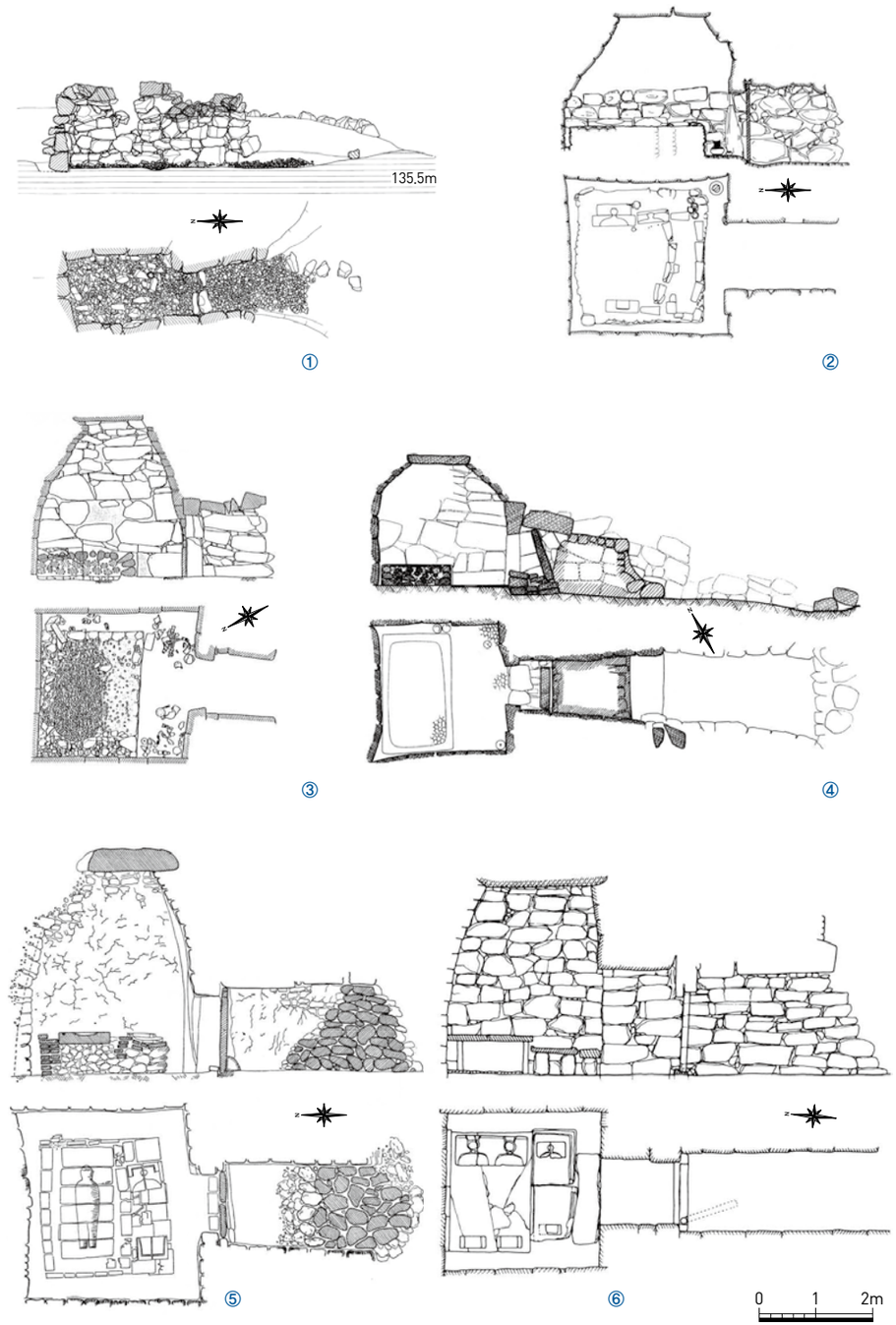

図1　慶州地域における横穴式石室墳の平面図と立面図

の玄門の高さから幅を狭める方法をとる場合が大半である。したがって自然と、羨道の天井は石室の天井より低くなり、段差が生じる。

横穴式石室墳は、おおむね石室の平面形と羨道の位置によって分類できる。羨道の位置は、玄室中央に付設されるものを「両袖式」、一方にかたよるものを「片袖式」と呼ぶ。石室の平面形は長方形石室と方形石室にわけられる。そのうち、導入初期の横穴式石室墓は、平面が長方形の可能性が高い。それに続いて平面が方形のものも導入された。方形石室墓の場合、時代が下るにつれてその高さが高くなる。そして玄門と羨道の間に門扉を設け、いわゆる扉道を備えたものもある。

新羅の横穴式石室墳における最大の特徴は、多様な屍床にある。屍床の存在は、棺のない状態で遺体を安置した可能性を示す。高さが低いものからしだいに高いものへと変化したと考えられる。 屍床は一般的に大きな割石で縁をつくった後、内側を小石で詰めたものが多いが、獐山(チャンサン)土偶塚の例のように、非常に大きな板石でベッドのように作ったものもある。屍床の上には、遺体の頭部·上体·足を載せる頭枕·肩台·足座を備えたものと、双床塚のように遺体の全身を支える台を備えたものなどがある。このように遺体を支えるものには加工した凝灰岩を使っている。

写真 24　慶州一帯から出土した新羅蔵骨器

火葬墓には、火葬した骨を入れた蔵骨器(一般的に骨壺と呼ばれる)を穴の中にそのまま安置する墓と、骨壺器を保護するための別の施設や容器をそなえた墓にわけられる。地方では前者がほとんどである。後者は王京地域で主に確認できるが、そのような施設や容器には石棺、石函、石穴、土器などがある。蔵骨器には、は華やかな印花文の装飾が施された土器や中国の磁器などが使われた。特に8世紀頃からは、蓋と胴部に結ぶ輪が取りつけられた火葬専用の蔵骨器が用いられることもあった(〈写真24〉)。

火葬墓の外観がどのようなものだったのかを示す証拠は、今までほとんど見つかっていなかった。しかし、慶州·錫杖洞(ソクチャンドン)から発掘された61号火葬墓には、墳丘の存在を示すほぼ確実な痕跡がある。この墓(〈図2〉と〈写真25〉)の築造過程を復元すると、まず直径200cm、深さ50cmの平面円形の穴を掘った後、その中央に平たい小石を敷く。次に、その周囲に割石と河原石を四つずつ組み合わせて方形の石槨をきずく。その周囲の一部分を他の石材で支え、最初の穴を平坦に埋め戻す。そして、石槨の中に蓋の付いた印花文骨壺を安置した後、石槨の周囲に再び石材をめぐらし、その上に蓋石を載

写真 25　慶州·錫杖洞火葬墓発掘様子と蔵骨器

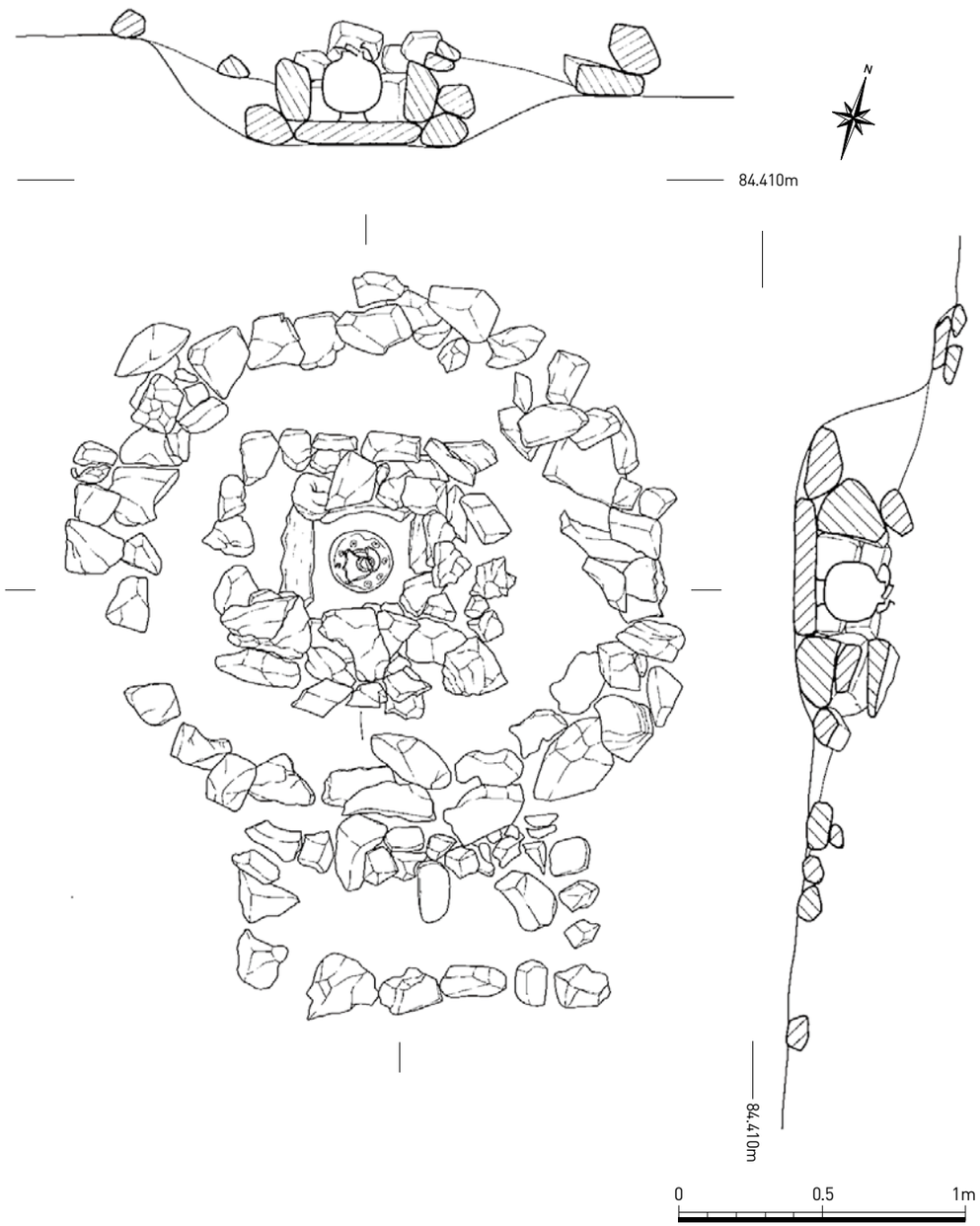

図 2　慶州·錫杖洞火葬墓

せた、このように考えられている。最後に、最初の穴の周りに大きさ20cm前後の割石を用いて径200cmの平面円形の護石をめぐらせ、その内側に小さな墳丘をきずいたのであろう。この墳丘の南東側には石をめぐらせた長方形の区画が取りついており、その内側を土で固めた上で供物台のようなものを置いていた可能性がある。

東川洞(トンチョンドン)火葬墓は、小金剛山(ソグムガンサン)の南端の丘陵に位置する横穴式石室墳の墳丘の端に造られているが、石室墳とそれほど年代差がないということから、小さな墳丘があった可能性がある。小型の石槨の中に蔵骨器と副葬品が入っている。年代は6世紀の第3四半期の末に比定される。

中古期以降の葬送儀礼

石室墓は玄室への通路を備えた横穴式または横口式構造である。これは、麻立干期までの竪穴式の墓制が閉鎖的であるのに比べると、開放式といえる。これにより、葬祭にも急激な変化が訪れた。このような開放式の墓制では遺体を墓の築造が完成した後に安置することができる。追葬も可能で、遺体を安置した後、墓室の内部空間で祭祀を行うことができる。このような変化は周辺の高句麗、百済、中国の南北朝の影響によりもたらされたものとされ、葬祭の場合は中古期に石室が流行した点から見て、中国の南北朝の影響が大きかったと見える。

石室墓では、麻立干期の厚葬から、薄葬へと急激な変化が起き、副葬品が非常に簡略になる。副葬品としては、死後の生活用品が消え、寿衣関連の一部の遺物と麻立干期に被葬者の頭部周辺に置かれていた供献遺物の一部のみが埋納されるようになる。また、一部の墓では実用品にかたどって葬礼に使用した模型遺物や、人物を縮小して作った陶俑などの明器、そして十二支俑などの辟邪の品が新しく登場している。葬法にも変化が起き、石室の一郭に屍床を設置し、その上に頭枕·肩台·足座などを設け、直接遺体を安置する「直葬」が主流となる。

石室内部から出土した遺物は、遺体の頭部周辺に素朴な供献遺物が置かれ、遺体には腰帯装飾をはじめとする寿衣関連遺物が残っている。供献遺物は、玄室内部の屍床の前面や隅に集まっている現象が見られる。このように一カ所に集

写真 26　慶州·獐山土偶塚の墓道及羨道(上)と玄室内部(下)

まっている供献遺物は、ほとんど高杯·長頸壺·瓶などの土器であり、被葬者のための供献祭祀に使われたものである。

以上から考えると、中古期以降の石室墓の葬礼の過程は、次のようにまとめることができる。まず墓の築造を完了し、葬地へ運ばれた遺体を墓道や羨道を通じて玄室内部の屍床に安置し、寿衣関連遺物と供献遺物を副葬する。続いて祭壇や祭卓に供献遺物を並べ、最後に別れの祭祀を行って退室し、羨道と墓道を閉鎖した。追葬の場合、以前の埋葬の時に埋めた墓道を再び掘り、羨道を通じて入室し、屍床を増築した後、同様の過程を経て遺体を安置し、同様の儀礼を行って退室した後、再び墓道と羨道を閉鎖した。

このような葬礼過程を念頭に置くと、石室墳の葬送儀礼は墓地の選定~副葬品の準備~(后土祭 地鎮のための祭り)~墓地の整地－墓壙の掘削~石室の築造~(方相氏による鬼祓い)~(任置)~遺体の安置~寿衣関連の儀式~(幣帛)~遺物の副葬~(平土祭　地ならし後の祭祀)~石室の閉鎖の順で行われたと推測できる。また、墳丘の周辺や周溝などから祭祀に使われたと思われる遺物が出土し、大型の陵墓クラスの古墳からは、その前庭の周辺で石製供物台と拝礼空間が発見されていることから、墓祭が続いたものと考えられる。

退室の際に祭壇や祭卓に供え物をした祭祀は、かつての平土祭のようなものと考えられる。また、それ以前に重視された遺体の頭部周辺の供献遺物よりは、この平土祭での供献遺物がさらに重要な位置を占めている。これは、死後の生活用品の遺物の消滅とともに、死後観の変化を示していると考えられる。墓は死後居住する「陰宅」であり、そこでの暮らしは現在の暮らしとは異なり、死後の世界を象徴的な世界として認識していたといえる。明器の登場、遺体を霊魂として認識した点なども、軌を一にする。 中国の場合を含め、このような変化は葬祭の歴史における根本的な変化と呼ばれる「槨墓から室墓へ」の転換とともに、墓室の中に祭祀空間が確保されることによって起きた。

3 仏教美術

528年、新羅は仏教を公認した。高句麗に仏教が流入して150余年も過ぎた後のことである。この仏教公認は、新羅の文化と美術にも画期的な変化をもたらした。その変化の始まりは、王京に寺院が建立されたことである。544年、真興王(在位540~576)5年に新羅ではじめて興輪寺が創建され、続いて皇龍寺、芬皇寺などの王室の寺院が建てられた。中でも最大規模のものは皇龍寺である。皇龍寺は総面積が2万坪(約7万m^2)に達する大規模の寺院だった。553年に地ならしを開始し、584年には巨大な金銅釈迦三尊像を安置した中金堂が完成した。現在、皇龍寺·中金堂跡(〈写真27〉)に残っている台座を見ると、釈迦仏立像をはじめとし、計19躯に達する様々な彫像が安置されていたことがわかる。高さ5mに達する大きさだったと推定される中央の釈迦仏立像は、新羅三宝の一つとして、長い間新羅人に尊崇されていた。しかし、この記念すべき作品は1238年のモンゴル侵略によって焼失してしまい、歴史の彼方へ消えてしまった。

1976年から8年かけて行われた皇龍寺址の発掘調査では、釈迦仏立像の本来の様子が推察できる資料の発見が期待されたが、出土した仏像関連の遺物はわずか47点であった。中でも中金堂に安置された巨大な釈迦仏立像の一部だったと推定される遺物は、螺髪片一点(〈写真28〉)のみである。それでも螺髪4つの重

写真 27 慶州·皇龍寺址中金堂跡

さだけで6.2kgに達していることから、釈迦仏立像が非常に大きかったことは十分知ることができる。

釈迦仏立像以外にも小さな仏立像(〈写真29〉)が出土している。皇龍寺木塔址の東側で収拾されたこの像は、高さわずか17.5cmである。左の足を少し曲げ、右の臀部を突き出す姿勢、そして右肩が露わになっていて薄い偏袒右肩の袈裟を掛け、右手をおろして宝珠を握る、興味深い仏立像である。首と腰を反対側にひねった姿勢、偏袒右肩、宝珠が調和をみせる、このような仏像は、栄州(ヨンジュ)·宿水寺址から出土した3点をはじめとし、新羅時代のものだけで15点ほど発見されている。このようなタイプの像は、高句麗や百済のものは現存せず、新羅でのみ発見される中古期の異色の仏像の一つといえる。

講堂址周辺で見つかった鴟尾(しび、〈写真30〉)は、高さ182cmにも達する。鴟尾は通常、建物の大きさに合わせて製作されるため、この鴟尾の大きさからだけ

写真 28　皇龍寺址出土の青銅製螺髪片

写真 29　皇龍寺址出土の仏立像

写真 30　皇龍寺址出土の鴟尾

写真 31　伝霊廟寺址出土の人面文瓦

でも、建物が壮大だったことがわかる。鴟尾は韓国では「望瓦」とも呼ばれ、建物の大棟の両端に配置され、辟邪の機能とともに建物の装飾の機能を果たした。鴟尾の裏面には、男女の顔の彫刻が表現され、素朴ながらも表情が生き生きとひょうげんされており、霊廟寺址出土の人面文瓦当(〈写真31〉)とともに、新羅を代表する顔とされている。

金堂の完成から約60年過ぎた645年、金堂の前面に高さ80mに達する巨大な九重木塔が建てられた。皇龍寺の九重木塔については、『三国遺事』にその来歴が詳しく記されている。その記録によると、慈蔵法師の提案により、善徳女王(在位632~647)が百済の阿非知を招待し、200人余りの職人とともに建設したとされる。皇龍寺の九重木塔は1238年にモンゴルの侵略により全焼しており、その痕跡のみが今に残る(〈写真32〉)。

芬皇寺は善徳女王在位3年目の634年に創建されており、切り出された安山岩の石板を煉瓦のように積み重ねてつくられた模塼石塔(〈写真33〉)が特徴的である。この塔は現存する新羅の塔の中で最古のものである。本来9層であったが、現

写真 32　皇龍寺址九重木塔跡

写真 33　慶州·芬皇寺模塼石塔

写真 34　芬皇寺模塼石塔金剛力士像

在は3層のみが残る。数度にわたって補修と復元工事が行われたため、現在の塔が当初の様子をどれだけ反映しているのかについてはわかっていない。ただし、同時代に建てられた百済·弥勒寺石塔と比べると、全く別の形である点は興味深い。

芬皇寺模塼石塔の1階には各面に扉が付いており、その入口の左右には金剛力士像が配されている(〈写真34〉)。金剛力士像は四等身でX字形の天衣をまとっているなど、7世紀前半の仏教彫刻の特徴を如実に示す。3次にわたる発掘調査の結果、創建当時の芬皇寺は、模塼石塔の背後三つの金堂が「品」字形に配された「三金堂」式だったことが確認された。模塼石塔と普光殿という現在の伽藍配置がいつ構成されたかについては定かではないが、三回目に重修された際の配置であることは明らかにされた。

芬皇寺模塼石塔の修理の過程で、2層と3層の間から石箱とその中の舎利荘厳具が発見された。この舎利荘厳具は新羅最古の例で、非常に重要な資料である。しかし、残念ながら発掘当時の具体的な状況が伝わっておらず、一部の出土品も消失している。銀製盒をはじめとし、日本の沖縄産貝殻や銀製針筒、金銀製針、銀製円板型耳飾、金銅製装飾板、様々なガラスや玉石製玉などが出土している。出土品は主に女性の実用品で、善徳女王関連の奉献遺物だと考えられている(〈写真35、36〉)。

中古期の仏教美術の白眉は、やはり半跏思惟像である。半跏思惟とは、椅子に座り、片足をもう一方の足のももの上に組んで座る半跏趺坐の姿勢をとり、右の指を頬に当てて思索にふける様子ことである。この時期、新羅ではかなりの半跏思惟像が製作されたが、中でも抜きん出ているのは国宝第83号である(〈写真37〉)。金銅で仏像を製作することは、決して容易なことではない。まして、半跏思惟像のように指を頬に当て片足を上げた複雑な姿勢の像は、なおのことである。それにも関わらず、国宝第83号金銅半跏思惟像は完璧な造形美を示し、石窟庵の彫刻とともに新羅美術の真髄を見せている。頭部には三つの山が連なる形の冠を被り、頭部の裏には光背を挿し込んだほぞが残る。安らぎに満ちた目と口元の柔らかい微笑みが特徴的であり、首には三本の線である「三道」がくっきりと刻まれる。上体は天衣をまとわず、二条の簡素な首輪のみが表現された。下半身は「裙」といわれるスカートを履き、左膝の上にのる右足の下には、流れ落ちるようなスカートのひだが、豊かに描写されている。左足の下にある蓮華座は消失してしまったが、現在の

写真 35　芬皇寺石塔舎利荘厳具

写真 36　芬皇寺石塔舎利荘厳具

座は、新羅時代のものを推定して、新しく製作したものである。

国宝第83号半跏思惟像は、日本の京都にある広隆寺の木造半跏思惟像(〈写真38〉)とは、材質と大きさを除けば、その表現は酷似している。頭上には両方とも「三山宝冠」を被っており、台座(墩子)の形や両足の上の服のひだも同じような表現である。両者の違いは材質で、国宝第83号は金銅製である一方で、広隆寺像は赤松でつくられている。日本の他の木造仏の材料がクスノキであることとも異なる。

この二つの像が深い関係にあることを示す作品として、慶尚北道(キョンサンブクト)・奉化郡(ポンファグン)・物野面(ムルヤミョン)・北枝里(プクジリ)の半跏思惟像がある(〈写真39〉)。流麗な3段の襞が流れ落ちる様子と、右の足首にそっと触れる左手の表現が国宝第83号金銅半跏思惟像と類似している。上半身は消失してしまい、下半身のみ残っているが、その下半身の高さだけで175cmに達する、

写真 37　国宝第83号半跏思惟像

写真 38　日本広隆寺半跏思惟像

写真 39　奉化:北枝里半跏思惟像

巨大な新羅の作品である。上半身が残っていれば、約3mに達する新羅を代表する半跏思惟像だったはずである。半跏思惟像は600年頃にのみ流行し、その後は姿を消してしまう。それにもかかわらず、3mに達する巨大な石造半跏思惟像や金銅製の最高傑作の半跏思惟像が今に残っている。 このように、仏教美術史において、半跏思惟像は非常に大きくそしてさまざまな意味を持つ。

中古期の仏教美術を語る時、慶州·南山(ナムサン)の仏像は欠かすことのできない作品である。2000年にユネスコ世界遺産に登録された南山からは、約60の渓谷に150余りの寺院跡が確認された。107躯の石仏と磨崖仏が現存しており、この地が1つの博物館になっているとしても過言ではない。南山の仏像はごく一部のみが中古期に製作されたもので、他はほとんど統一新羅期につくられた。中古期に製作された仏像としては、拝洞(ペドン)石造三尊仏像、チャンチャンゴル石造三尊仏像、仏谷(プルゴク)龕室仏像がある。

南山における中古期の仏像はほとんど西側に集中しており、西側から仏像がつくられはじめたと推測できる。中でも最古のものは、幼児のような顔の拝洞石造三尊仏像仏像(〈写真40〉)と長倉谷(チャンチャンゴル)石造三尊仏像(〈写真41〉)である。これらは新羅初の丸彫りの仏像でもある。拝洞石造三尊仏像は慶州·南山の西側の麓に散見されたものが、1923年に現在の場所に集められた。三尊石仏の近くからは、禅房寺という字の銘じられた塔誌石が見つかっていることから、禅房寺三尊仏と呼ばれた時期もあった。しかし、塔誌石が発見された遺構は高麗時代以降のものであるため、7世紀に製作されたこの三尊仏とは無関係であることが後に判明した。また、三躯が並べられているため、「三体石仏」とも呼ばれるが、中央の仏像を中心に、左右に菩薩像が配されているので、三尊仏と呼ぶべきであろう。中央の本尊仏像は阿弥陀仏像と推定されるので、阿弥陀三尊と見ることもできるが、確証はない。

拝洞石造三尊仏立像と類似した特徴を持つ例として、チャンチャンゴル石造三尊仏像がある。1925年、南山チャンチャンゴルへと通ずる道ばたの石室から発見されたが、現在は国立慶州博物館に移設·展示されている。中央の本尊仏が椅子に座っている点、『三国遺事』「生義寺石弥勒條」の内容から、『三国遺事』に記された三花嶺弥勒三尊仏と見る見解もある。中央の本尊仏が椅子に座っている様子は、韓国の彫刻において非常に稀な例である。子供のような顔、大きな頭部、屈曲がなくふっくらとした体の表現が特徴的であり、仏像の体に表現された帯状

の襞や膝の上の渦巻きのような襞は、中国では6世紀後半の彫刻に多く見られる特徴の一つである。これらに基づき、本作の制作時期は中古期末期である7世紀前半~中頃と推定される。童仏と呼ばれる愛らしい姿の脇侍菩薩は、まるで双子のように似ているが、宝冠や首飾、両手の位置、布の裾の流れが異なるので、部分的に変化を与えようとした造形への意志が感じられる。子供の体のような身体比例と天真爛漫な微笑みのため、冷たい花崗岩という素材にもかかわらず、温かさが感じられる作品である。

新羅の花崗岩石仏を代表する二つの三尊石仏のうち、拝洞石造三尊仏像の方がチャンチャンゴル石造三尊仏像より早い時期に製作されたものと推定される。やや

写真 40　慶州·拝洞三尊石仏像

写真 41　慶州·南山長倉谷石造三尊仏像

粗く感じられる拝洞石造三尊仏像に比べ、チャンチャンゴル石造三尊仏像の方が比較的精密と言えるからである。二つの三尊石仏は屈曲のない身体のモデリングと子供の体のような身体比例が、中古期ならではの造形感覚を如実に表している。

南山の東北麓に位置する仏谷龕室仏坐像(〈写真42〉)は、石窟に対する新羅人の思いがどれほど強かったかを示している。1mの深さを持つ龕室の中に、瞑想にふけるような姿で彫刻が施された仏坐像がある。顔は丸彫りに近い高浮彫で彫刻されているが、身体と台座は浅く彫刻され、単純化されている。両手は裾に隠れて見えないが、一般的な禅定印(ぜんじょういん)とは異なり、袖の中で両手を握っていて、拱手(きょうしゅ)の姿勢を連想させる。腫れぼったい目にふっくらした唇が全体的に柔らかく女性的で、岩の中から外の世界へ出て全ての衆生の悩みを聞いてもらえそうな気がする。丸く柔らかいボリュームの顔がまるで女性のようであり、体が平面的で線だけで表現された服の襞から、7世紀中頃彫刻されたものと推定できる。このような石窟への思いが集まって、後に石窟庵が誕生したのであろう。

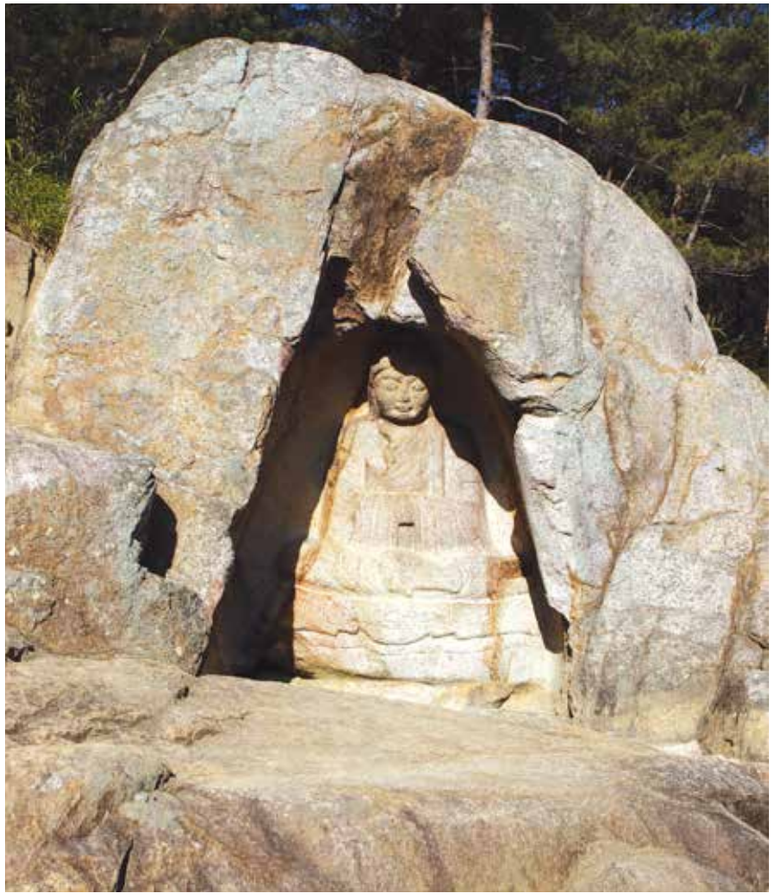

写真 42　慶州·南山仏谷龕室仏坐像の細部

慶州の南山だけでなく、断石山(タンソクサン)でも巨大な磨崖仏がつくられた。断石山·神仙寺磨崖仏像群は、断石山中腹にある「コ」の字形の岸壁四面に仏·菩薩·人物像10躯が刻まれている(〈写真43、44〉)。岸壁の上には本来覆屋があり、礼拝空間として利用されたと考えられる。東北には仏立像が、東には菩薩立像が、南には菩薩像が配されている。北には計7躯の仏像·菩薩像·人物像が彫刻されているが、すべて東北の仏立像を向いているので、断石山磨崖仏像群の主尊が東北の仏立像であることがわかる。南に残っている200字余りの銘文の中に「神仙寺で弥勒石一躯と菩薩二躯を製作した」という内容があることから、弥勒三尊像

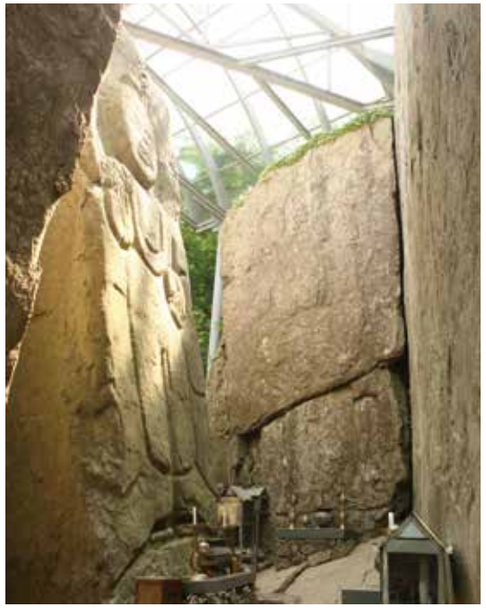

写真 43　慶州·断石山·神仙寺磨崖仏像群

写真 44　断石山·神仙寺磨崖半跏思惟像

を彫刻していることが確認できる。銘文の弥勒三尊像とは直接的に関係はないが、ここにも半跏思惟像がある。この像は新羅の半跏思惟像における最古例である。東北の仏立像の横に刻まれており、弥勒道場に位置している点を考慮に入れると、半跏思惟像が弥勒と不可分の関係にあることがわかる。

王京の西に位置する仙桃山(ソンドサン)も、頂上の近くの岸壁に巨大な仏像が製作されている(〈写真45〉)。中央の本尊仏は岸壁に直接刻んだ磨崖仏であり、左右の脇侍菩薩像は別な石材で製作し、三尊としての構成を整えている。このように、磨崖仏と別な立像を一組として構成する例は非常に稀であるが、それは仙桃山の岩が裂けやすい性質だったためであろう。この仙桃山磨崖三尊像は、王京の西に位置している点、左の菩薩像が浄瓶を持っている点から、西方浄土において衆生を見ている阿弥陀三尊像と推定される。『三国遺事』の記録から推察すると、阿弥陀信仰はおおむね7世紀後半から現れている。阿弥陀信仰の大衆化に寄与した元暁(617~686)と、留学先の唐から帰国し華厳思想の中で弥陀浄土信仰を提唱した義湘の役割とも関わりがあると思われる。

写真 45　慶州·仙桃山磨崖如来三尊立像

4 服飾

法興王時代の服制整備とその関連遺物

中古期以降になると、麻立干期とは異なり、新羅の服飾に関する記録が多くなる。最も注目できるのは、法興王の代の律令制頒布に伴う服制整備である。『三国史記』と中国の正史、そして『日本書紀』には、6世紀における新羅の服飾に関する記録がある。

周知のとおり、法興王の在位7年(520)は、律令が頒布された年である。律令の主な内容の一つに、朝服制定がある。官位の高低により紫·緋·青·黄の順の服色を規定した。「新羅本記」ではこれを「朱紫之秩」と表現している。『三国史記』の編纂者である金富軾(キム·プシク)は、唐や宋の服飾をはじめとする中国中原王朝の服飾が「華」で、法興王の時の服飾は「夷」の服飾と考え、「猶是夷俗」と評価した。

この服制で注目に値するのは、「色服尊卑制」の施行対象が六部の住民だという点である。6世紀前半までは地方民に対する差別の認識が非常に強く、王京の六部の住民が新羅を導く主体であり、彼らの中から官吏が選ばれたという現実を考慮すると、これは当然の措置だったといえる。したがって、六部民を対象に服色以外に「笏」のような持ち物や冠の材質まで規定している。

6世紀初め、『梁書』によると、新羅人は冠を遺子礼、上衣を尉解(ウィヘ)、下衣を柯半(カバン)、靴を洗(セ)と呼んだ。『隋書』では新羅の服色は白を尊び、女性は髪を編んで後ろで結び、様々な色の錦や玉をもって装飾を施したと記している。

一方、『日本書紀』「継体紀」23年(529年)条によると、大加耶の王は新羅との関係を改善するため、新羅の王女と結婚した。新羅が王女を送る際に従者百人を付随させたが、その際に従者に新羅の衣冠を着用させたという。「新羅衣冠」という表現を見ると新羅と大加耶の衣冠は、外見上かなり異なっていたことがわかる。

この時期の遺物としては、服飾の特徴を示す資料が一部残っている。まずは冠である。6世紀中頃になると、慶州の墓から金冠が消えている。金銅冠や銅冠が発見されることはあるが、地方の中·小型の墓からのみ出土しており、形や製作の技法も一変している。つまり、台輪が非常に広く、樹枝の段数は6世紀前半の金銅冠と同様4段であるが、立飾りが上下に伸びて長くなっている。鹿角形立飾りが消え、立飾りの数が4つ、または5つに増える。代表例は、安東(アンドン)·枝洞(チドン)2号墓金銅冠、東海(トンヘ)·湫岩洞(チュアムドン)カ−21号墓の銅冠、丹陽(タニャン)·下里(ハリ)遺跡の銅冠である(〈写真46〉)。これらの冠は形も統一されておらず、製作技法も粗いので、それぞれの地でつくられたものと考えられる。人骨が出土した湫岩洞銅冠は女性の持ち物であり、小型の墓から出土している点から、シャーマンのような宗教的な職能者のものと見ることができる。

第二に、6世紀後半以降、垂飾付耳飾の出土例はほとんどない。積石木槨墳からは頻繁に出土した基本的な装身具だった金製耳飾が、その他の金属装身具とともに姿を消す。ただ、皇龍寺址から出土した金銅製太環耳飾、慶州·東川洞·僧三(スンサム)村37号墓から出土した金銅製細環耳飾が確認できるのみである。皇龍寺址の耳飾は7世紀前半頃に製作されたものであり、6世紀に流行った太環耳飾が「簡略化·形式化」していく過程を経て、7世紀前半まで製作され続けたことを示す重要な資料である。

第三に、6世紀中頃になると、楼岩里(ヌアムリ)型帯金具と呼ばれる新しいタイプのものが流行する。この帯金具は比較的小規模の墓から出土しており、鉸具·銙板·帯端装飾具など、簡単な部品により構成されている(〈写真47〉)。しかし、7世紀前半のある時点になると、新しいタイプの帯金具が登場する。645年に完成した慶州皇龍寺木塔址心礎石の下部から出土しており、それが典型となっているので、皇

写真 46　退化期における新羅の冠(①伝尚州、②枝洞2号墓、③湫岩洞カ-21号墓、④下里)

龍寺型帯金具と呼ぶ。つまり、皇龍寺址の一括遺物の中には楼岩里型帯金具もあるが、このような新しいタイプのものも含まれている。両者は形式の変化が連続的でなく、異質的である。この新しい帯金具は中国の隋または唐のものと相通じるところがあるので、それを受け入れて製作したと推定される。

写真 47　楼岩里型帯金具(左：尚州·青里A-ナ19号墓, 右：大邱·達城総合スポーツパーク敷地1-B-165号石室墓)

唐からの衣冠制度の導入と、その関連遺物

7世紀前半は三国間の対立が激化した時期であった。このような状況で、新羅は積極的に中国との外交により自国の安泰を図る一方、統一の夢を育んでいた。この頃の服飾において最も目を引くものは、真徳女王3年(在位：647~654)に行われた唐からの衣冠制度の導入である。

写真 48　慶州·隍城洞石室墳土俑

『三国史記』によると、真徳女王2年(648)、金春秋(キム·チュンチュ)が唐を訪れ、唐の儀礼の導入を請い、太宗皇帝が詔書によりその許可を与えると同時に、衣服と冠帯を下賜したと記されている。そして同3年(649)の春の正月にはじめて中国の衣冠を着用し、4年(650)の夏の4月には校書を出して職位をもつ「真骨(王族)」には象牙の笏を持たせたと記されている。『日本書紀』によると、白雉2年(651)に日本を訪れた新羅の使臣が唐の衣服を着用したことで追い出されたという記事が載っており、その事実を裏付けている。文武王4年(664)には官吏だけでなく、その夫人たちの服飾まで変えたことが記されている。

金春秋が唐から持ち込んだ衣服と冠帯が、どのようなものだったのかについては、不明である。ただ、7世紀後半の初めに築造された慶州·隍城洞(ファンソンドン)石室墳や、7世紀末から8世紀初めに築造された龍江洞(ヨンガンドン)石室墳から出土した土俑の官服に近かったということは推定できる。官服の付属品の一つである官帯には、「唐式帯金具」と呼ばれる金具が取りつけられていただろう。この時期の服飾は土俑に表現されている。土俑とは、当初から埋葬用として製作されたという点が、土偶とは異なる。この時期の墓は石室墳である。その中に死者の家族や官吏、兵士、従者などの人形を土俑として埋納した。この風習は隋や唐から伝わっている。

中古期の隍城洞石室墳では6点の人物像が出土している。文官像が3点、武官像が1点、女性像が2点である。男性は頭部に幞頭(ぼくとう)をかぶり、下衣のズボンと上着(袍)を着用しているが、これは唐の衣服に該当する。靴は服がかかっているのではっきりは見えないが、革靴のようである。文官像と武官像はともに表現が簡略であり、表面には彩色が施されていない。人物像の中で完成形として出土している女性像(〈写真48〉下)は、酒瓶または水瓶を一方の手に持ち、微笑んでいる。この女性の衣服は新羅のもともとの形で表現され、髪は後ろでしばっている。したがって、官吏の夫人も中国の衣装を着用するよう規定された664年以前に製作されたと見られる。ただし、これらの土俑を官吏の夫人像と確定するには少し無理もあり、妓女のような特殊な身分の人物像の可能性もある。一方で、男性像の中には独特な帽子をかぶり、目鼻立ちがはっきりとした人物像がある(〈写真48〉上)。その帽子を「胡帽」と呼びその人物を「胡人」とみる説もあるが、着用した上着の襟が通常の胡人の服とは異なり、円い襟(団領)なので、その説は説得力に欠ける。

5 農耕と物品の生産

農耕

新羅·中古期における農耕について知ることのできる遺跡の事例で、慶州·金丈里(クムジャンリ)遺跡の畑跡を挙げることができる。この遺跡は慶州盆地の西側を南北に流れる兄山江(ヒョンサンガン)の西岸に位置し、地形的には山谷の間に形成された「谷低平野」の麓にある。畝間と畦が並列してつくられた畝を持つ畑であり、時代によって畝の進行方向が異なる。流路の変更のためか、あるいは地力の回復のための可能性もある。

遺物としては、畑の畝間と畦から6世紀の土器の蓋や高杯の杯部、土器の台脚、短頸壺の口縁部片、把手、土錘、土球などが出土している。また、土壌の標本を水洗いしたことで、禾本類38点(米6点、殻麦16点、小麦16点)、豆類15点(小豆12点、豆1点、未詳種2点)、雑草の種子27点、計80点の炭化した植物類を採集した。金丈里耕作遺跡出土の炭化穀粒類は、新羅王京の周辺における6世紀以降の耕作層から実際に出土しているので、当時の畑で栽培された作物の種を知るうえでの根拠となっている。

この耕作遺跡は新羅王京と隣接した河床の氾濫原という耕作に適した土壌

写真 49　慶州·金丈里遺跡

条件にあり、王京の人々が一時的に耕作地を開墾し、作物を収穫したのではなく、6世紀以前から可耕地の確保を目的に開墾し持続的に耕作されており、王京地区と区別された、いうなれば食料の生産区域の様子をうかがうことができる。そして慶州においてはじめて確認された農耕関連の生産遺構という点で、今までは実態を確かめることができなかった新羅社会の農業技術と食文化、農業生産力の問題など、新羅における農業史および社会経済史を研究する上で、重要な資料となっている。

安定的な農耕のためには、灌漑施設の拡大が重要である。新羅の中古期では、国家レベルで堰や堤を築造した。このような工事によって、天水田(てんすいでん、天水だけに依存している水田)中心の谷間平野から離れ、広い沖積平野を耕作地として開拓することができた。永川(ヨンチョン)の菁堤(チョンジェ)周辺から発見された「菁堤碑」の碑文によると、536年にはじめて築造され、琴湖江(クムホガン)氾濫原を蒙利範囲(水利などのある利益·めぐみを受ける区域)としている。同碑に8世紀末に刻まれた銘文(貞元銘)から見ても、この貯水池は立碑当時のみならず、統一新羅期にも管理が続けられたことがわかる。今も灌漑用として使われている。戊戌塢作碑は大邱(テグ)新川(シンチョン)氾濫原を貫流する川に

灌漑用の堰を設置したことが記された碑で、578年に立てられた。同碑には「大工尺」という技術者が記され、建造の責任者は僧侶であったことも記録されている。この事実は、日本の大阪府にのこる古代貯水池「狭山池」を建造した技術監督官が僧侶である点とも相通ずる。仏教が公認されて以来、僧侶は新しいイデオロギーの普及を担当しただけでなく、重要な技術者集団としても活動していたことを示している。一方、尚州(サンジュ)恭儉池(コンゴムジ)からは敷葉工法により軟弱地盤を補強して貯水池の土手をつくり、木樋によって用水を排出していたことが明らかとなった。恭儉池の年代はおおよそ8世紀以降とみなしてきたが、この遺跡から出土した木材の年輪年代を測定した結果、7世紀後半の年代を示したことから、中古期後半にまで造成時代をさかのぼらせて考えることができる。蔚山(ウルサン)·薬泗洞(ヤクサドン)堤防の場合も、発掘調査の結果、中古期後半に築造されたことが明らかとなった。

写真 50　永川菁堤碑(貞元銘)

生産施設

慶州外郭に分布する土器や瓦の製作所の中で、中古期に該当するものとして、蓀谷洞(ソンゴクドン)·勿川里(ムルチョンリ)遺跡と花谷里(ファゴンリ)遺跡を挙げることができる。ただし、二つの生産遺跡とも操業時期は麻立干期から統一新羅期までと、非常に長く、中古期はその間に該当するが、土器と瓦がどのように生産され、消費地まで伝わったかについては不明である。

中古期の7世紀前半、操業が行われた瓦の窯跡としては慶州·花川里(ファチョンリ)窯跡を挙げることができる。この遺跡では瓦·陶兼業の窯9基と工房遺構が調査された。窯の構造は半地下式であり、床の傾斜度は10° 以内、焼成室内部に階段設備は作られていない。規模は長さ426~570cm、幅182~274cmほどである。単弁蓮華文軒丸瓦と超大型短板の叩かれた平瓦が出土している。

製品を仕上げる鍛冶施設をのぞく製鉄施設は、麻立干期には王京から離れた地方の鉄鉱山の近くへと移設されていた。新羅中古期の製鉄遺跡は、洛東江(ナクトンガン)下流で主に確認される。密陽(ミリャン)から梁山(ヤンサン)に至るまで、洛東江周辺の谷間の各所には選鑛遺跡と製鉄遺跡が分布する。梁山勿禁(ムルグム)の選鑛遺跡は、長い溝に採掘した鉄鉱石を入れ、水を流して鉱石を大

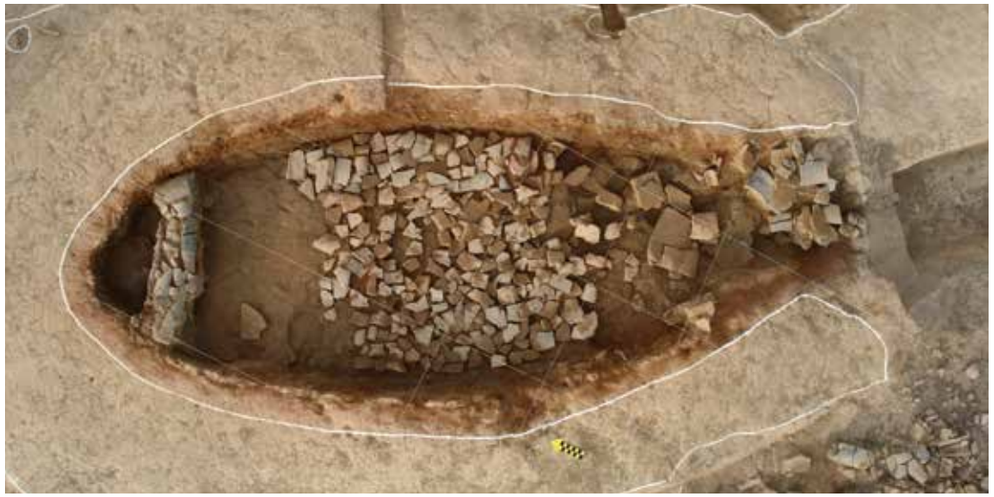

写真 51　慶州·花川里窯跡

きさによって区別する施設と推定される。密陽·沙村(サチョン)遺跡は廃棄されたスラグを分析した結果、鉄鉱石を融解して鉄を作った製錬施設であることがわかった。この二つの遺跡は麻立干期末期に操業をはじめ、中古期に本格的に運営された生産施設であった。ここが製鉄生産の中心地となった理由は、早くから新羅によって政治的に支配され、豊かな原料と便利な水利が可能な地であったからであろう。

一方、密陽金谷(クムゴク)遺跡は、今まで発掘された新羅中古期の製鉄遺跡の中で最大規模を誇る。製鉄炉が86基に達し、鉄の製錬から鉄器の生産までの全工程を知ることのできる遺跡である。製鉄炉には精錬鍛冶炉と融解炉も含まれており、焙焼(ばいしょう)施設、廃棄場、粘土保存施設、窯、竪穴、作業場など製鉄工房の全ての構成要素が発掘された。炉周辺からは、鍛造剥片(たんぞうはくへん)、鋳型、様々な種類のスラグも出土した。廃棄場には製錬過程で生じたおびただしい量の流出滓とともに、炉壁片、送風管片、スラグが廃棄されている。遺跡の中心年代は6世紀で、7世紀初めが下限である。

写真 52　密陽·金谷遺跡精錬鍛冶炉

物品

麻立干期に大型古墳は、慶州市内の平地や地方各地に造られていたが、6世紀中頃以降、慶州の場合は周辺の山地に移され、地方では造営自体がおこなわれなくなる。墓の内部構造も横穴式石室墓に統一されていく。これにより、1つの墓をつくって多くの人を埋葬する「家族葬」が流行するが、これは来世に関する観念に画期的な変化があったことを物語っている。これにより、墓におさめる遺物の種類や数も急激に減る。

この時期の墓から一般的に出土する土器は、脚が非常に短くなった高杯と口縁の端が「L」字状に折れ曲がる二重口縁の長頸壺である。高杯はそれ以前に流行した脚の高い高杯が変化したものも存続するが、その割合はいちじるしく減少する。そして、蓋のついた球形に近い盒(台付碗)に置き換わっていく。盒の蓋は高く盛り上がる新しい形である。また、頸の細い台付瓶が流行するのも特徴的で、胴部には様々な紋様の装飾が施される。その紋様は、最初に小刀で線を引き、三角文と円文が上下に配していたが、6世紀末になると、それと同じような文様をスタンプで押す方法が登場する。台付瓶の初期の形は頸が短く、胴部は楕円形でボリューム感があったが、次第に頸が長くなり胴部が扁平になっていく。

中古期に入ると、麻立干期において中央と地方の土器の間に存在していた様式の違いが急速に消え、土器の形が均一化する。器形だけでなく製作技法も規格化したようであるが、これは全国の専業の工房が中央の統制を受け、互いに技術情報を共有したことによって可能になったのだろう。器の形は低く小さく、簡素な方向へと変化していった。最初はコンパスや錐のような工具による紋様が等分の区画が規則的に配されていたが、このような紋様をスタンプで表現する技法へ変化するなど、ますます規格化していく。縮約した器形と規格化した製作技法は、工程の単純化による大量生産が行われたことを意味する。

仏教の公認以降、国家レベルで寺院を建てたことにより本格的に使われるようになる。初期の軒丸瓦は先の尖った形の花びらを表現した蓮華文のもので、王宮の月城で使われはじめ、皇龍寺でも使われるようになる。その蓮華文が与える強健なイメージからして高句麗の影響とみる意見も存在するが、未熟な技法を考えると、新羅において創案されたものの可能性もある。花びらの先を少し上向け

写真 53　忠州·楼岩里カ-60号墓土器

写真 54　慶州·芳内里石室墳出土の土器類

にした写実的な表現の蓮華文軒丸瓦は、月城と皇龍寺址から出土している。中古期に寺院を建築する祭、百済の職人集団が参加した事実が文献に記されていることを考慮に入れると、このような軒丸瓦は百済の影響を受けたと考えられる。その反面、新羅の独創的な蓮華文軒丸瓦は、柔らかさを少し抑え、花びらに稜線が刻まれている。6世紀後半に完成したこの軒丸瓦は、強さと穏やかさが調和した、新羅の中古期における美意識を表現したものという評価を得ている。

6世紀中頃になると、以前の時代に威信財として機能していた冠の形や製作技法が変化する。台輪が広くなり、鹿角形の立飾りが消えると同時に、立飾りの数が4つまたは5つに増える。丹陽(タニャン)·下里(ハリ)銅冠はこの時代の金銅冠の特徴を如実に表している。台輪が広く、4つの立飾りを銅製の糸で固定している。樹枝型立飾りが無くなっていき、鑿(のみ)をもって丸い穴を空けて装飾を施している。

写真 55　慶州·花川里窯跡軒丸瓦類

写真 56　皇龍寺址古式瓦

写真 57　皇龍寺址百済系瓦当

写真 58　皇龍寺址蓮花文瓦当

6世紀後半以降になると、垂飾付耳飾の出土例はほとんどない。積石木槨墳からは金製耳飾が姿を消す。現在まで、皇龍寺址出土の太環耳飾、慶州·東川洞·僧三(スンサム)村37号墓出土の細環耳飾、この二例があるのみである。

皇龍寺址木塔址の下部の版築層から出土した耳飾は、木塔をきずいた際に埋納した鎮壇具である。皇龍寺木塔は643年に造られはじめ645年に完成しているので、この遺物は643年前後には埋納されたはずである。よって、おおよそ7世紀前半に製作されたものと考えられる。麻立干期の耳飾と比べると、垂飾が非常に簡略化したことを示す。

このように、新羅古墳から黄金の装身具が消えていく6世紀中頃になると、帯装身具も従来の三葉文帯金具でなく、鉸具(かこ)や帯先金具が強調された新しいタイプの帯金具が流行する。中原(チュンウォン)·楼岩里(ヌアムリ)古墳群や尚州(サンジュ)·青里(チョンリ)古墳群など、前の時代とは異なり、この帯金具は比較的小規模の墓から出土している。

写真 59　慶州·花谷里窯跡軒丸瓦類

しかし、7世紀前半のある時点になると、さらに新しいタイプの帯金具が登場する。皇龍寺木塔址の心礎石(塔の心柱を受ける礎石)下部の出土品がその代表である。銙板には草花文が表現されている。金海(キムヘ)·礼安里(イェアンリ)49号墓や尚州·青里A-カ-9号墓と10号石室、A-ナ-2号石室、南原·斗洛里(トゥランリ)3号墓などからも出土している。このタイプの帯金具は、鉸具や銙板の外形から見て、中国の隋または唐の帯金具にその系譜を求めることができる。

墓から出土する鉄器としては刀子が中心を占め、1、2点の鏃や農工具が副葬された事例がある。装飾武器や馬具が副葬される例はほとんど見られなくなる。律令制による規制、薄葬という葬礼風習の変化がもたらした現象であろう。新羅

写真 60　皇龍寺址出土の太環耳飾

写真 61　尚州·菁里A-カ-11号墓出土の皇龍寺型帯金具(右：文様細部)

写真 62　皇龍寺型帯金具に表現された紋様

写真 63　鉄鐸(安東·枝洞2号墓)

は中古期以降も多くの戦争を準備·遂行した。その過程で、それまでの武器を改良する一方、新しい武器も製作したことは、容易に推定できる。『三国史記』によると、特殊な武器を取り扱う部隊名が記されている。弩幢、雲梯幢、衝幢、石投幢などである。その他、騎馬隊を防御するために必要な鉄菱に関する記録も記載されている。今後、防御施設を積極的に発掘していけば、その関連遺物が出土すると期待している。

この時代の鉄器の中でも目を引くものは鉄鐸である。横口式または横穴式石室墓から時々出土するこの遺物は、主に6世紀の製作品である。6世紀前半には主に洛東江以東地域にその分布が限られていたが、6世紀中頃以降は、固城(コソン)·蓮塘里(ヨンダンリ)や泗川(サチョン)·月城里、陜川(ハプチョン)·苧浦里(チョポリ)の事例のように、洛東江以西地域にある加耶の故地へも普及していく。鉄鐸が鍛冶具と共伴する点に注目し、所有者を製鉄関連の職人とみる見解もあるが、シャーマンのような宗教的な職能者の巫具と見るのが妥当ではないかとも考えられる。上述の退化した金銅冠や銅冠もまた、そのような性格の人物の着用品だったと思われる。

6 遺物から見た対外交流

北朝~唐との交流

新羅は553年、漢江(ハンガン)流域を掌握した。これによって、新羅に中国と直接交流する門がはじめて開かれた。『三国史記』に、中古期に中国の各王朝と本格的に交流を重ねていた記録が残っている。また、三国統一の直後は唐と関係が疎遠だったが、しばらくして友好関係が回復し、新しい文物を輸入する窓口としている。海をへだてた日本との交流も続いた。新羅の遺跡からは中国からの輸入品や、それをモデルに新羅の様式として変容させたものが多数出土している。その代表的な遺物は、次のとおりである。

第一に、これらは北朝~唐からの輸入品である。芬皇寺の舎利荘厳具には、北斉の常平五銖銭が含まれている。また、7世紀初めに築造された慶州·龍江洞(ヨンガンドン)古墳群の6号石室墳からは、南北朝時代に流行した墓誌石をはじめ碁石、施釉陶器、帯鉤が出土した。古墳の主は生前、中国にわたったことのある新羅人で、そこに長期滞在した人物か、あるいは中国出身者だった可能性もある。

一方、慶州月池の建物跡からは唐の開元通宝が出土している(〈写真64-②〉)。

写真 64　中国との交流を示す遺物(①芬皇寺、②月池、③④皇龍寺址)

写真 65　慶州·龍江洞古墳群6号石室墳出土の中国系遺物(①墓誌石, ②碁石, ③施釉陶器, ④帶鉤)

写真 66　楼岩里型帶金具(①大邱·舌化洞5号石室墓, ②慶州·東川洞354番地1号石室墓)と皇龍寺型帶金具(③皇龍寺址, ④金海·礼安里49号墓)

また、皇龍寺·木塔趾心礎石(塔の心柱を受ける礎石)の下部から出土した「四神鏡」(〈写真64-③〉)は、隋の鏡の特徴が忠実にあらわれている。

第二に、服飾の一部である帶金具である。6世紀中頃は新しいタイプの帶金具である楼岩里(ノアムリ)型帶金具が出現している(〈写真66-①~②〉)。そして、7世紀前半からは皇龍寺型帶金具が登場するが(〈写真66-③~④〉)、この帶金具の系譜は、隋のものとの関連が考えられる。

日本との交流

蔚珍·徳川里(トクチョンリ)古墳群I区域1地点24号石室墓からは、日本産の子持勾玉1点が出土している。楼岩里型帯金具の鉸具と共伴している点から見て、6世紀後半という編年が可能である。日本では、沖ノ島の祭祀遺跡から新羅で製作された金製指輪が出土し、奈良県石神遺跡(〈写真67-②〉)からは、新羅土器が多数出土している。

一方、群馬県金冠塚古墳出土の金銅冠1点は、広い帯輪に計5つの出字形立飾りが付着しているが、中央に幹があってその左右に4段の枝が突出した新羅様式のものである。ただし、新羅ならではのモチーフではあるが、細部の図案や製作技法に相違点がある。この冠は6世紀中頃以降、新羅の冠の影響を受け、日本で製作されたものと推定される。

日本の奈良県東大寺の正倉院は本来、王室の宝物を納める倉庫であった。正倉院に所蔵されている重要な新羅の遺物としては「新羅琴」がある。この新羅琴は木箱に入っており、琴柱(ことじ)まで揃えていた。大加耶の加耶琴とは異なる新羅固有の弦楽器であったことが推定できる。他の新羅の遺物としては墨がある。細長い形の墨には、新羅の楊家と武家が作った上質な墨、という意味の「新羅楊家上墨」、「新羅武家上墨」の字が浮彫で記されている。新羅や日本では漢字文化が普及するとともに、墨の受容も急増したことを物語っている。

一方、月池出土の精巧な金銅製鋏と非常に類似した金銅製鋏が、やはり正倉院に所蔵されている。月池出土品ほど精巧ではないが、新羅において製作されたとみて間違いないであろう。

写真 67　新羅と日本(倭)との交流を示す遺物 (①蔚珍·徳川里I区域1地点24号石室墓、②奈良県石神遺跡、③⑤正倉院、④慶州月池)

第II篇

統一新羅

三国文化の融合と新羅文化の最盛

統一新羅期

第１章

三国文化の融合と新羅文化の最盛

統一新羅期

王京と地方の都市
王陵
宗教と祭儀
仏教美術
儒学と文学
音楽
科学と技術
生活文化
農耕と物品の生産
海外との文物交流

新羅史はいくつかの段階に分けて理解することができるが、特に７世紀中頃に本格化した三国間の抗争は、最も重要な分岐点として捉えることができる。新羅史は当時期を基準に戦争前と戦争後に大きくわけることができる。つまり、新羅の発展過程において、三国統一戦争の持つ意味が非常に大きかったことを示している。統一以前を三国時代の新羅または古新羅と呼び、それ以降を統一新羅と呼んで区別するのはそのためである。もちろん、当時は統一新羅に対してそれ以前の「新羅」とは異なる呼称を用いて区別することはなかった。統一新羅はあくまでも近代歴史学の成立後、新羅史に対する新しい解釈を試みる過程で生まれた便宜上の用語である。しかし、『三国史記』や『三国遺事』の中で既に統一を起点に新羅史を2つの時代に分けようとする試みがあったことを考えると、統一新羅期は単なる近代の産物ではない、長い歴史を持つ観点であることがわかる。

歴史学においては、統一新羅の起点は統一戦争が完了した文武王代ではなく、戦争を開始した29代武烈王が即位した654年であるとしている。政治が目指した方向が、武烈王代以前と以後でかなり異なるためであるということが重要な根拠である。しかし、文化面では統一という課題が達成された676年とすべきという意見も首肯できる。戦争の終結により社会が安定を取り戻し、それに基づいて三国の文化が本格的に融合し、統一新羅独自の文化が発展していったと考えられるためである。

統一新羅は政治･社会状況によりさらに二つの時期に分けられる。前期は武烈王代から36代恵恭王代(765~780)までの8代127年間であり、後期は37代宣徳王代(780~785)から末期までの20代155年間である。このような時代区分は『三国史記』に見える「中代」と「下代」の区分を受容したことに始まっている。

中代と下代の存続期間と国王の在位期間を比べると大きな差がある。中代は国王の平均在位期間が16年であるが、下代はわずか7.2年とその半分にも満たない。下代はそれほど政治的混乱が多く、社会的･経済的に非常に不安定な時期であったことを示している。当然ながら国王の在位期間が長いことが必ずしも政治的安定を物語るものではないが、全般的な流れとして上の判断は間違いではないであろう。

統一新羅の前期には、新羅が政治･社会面において大きく発展したと評価することができる。統一が相乗効果を生み出したといえるが、諸文化面の発展がその

状況を物語っている。従って、中代は新羅千年の歴史の中でも最盛期とされている。一方、下代は非常に不安定な時期であったため、衰退の道を辿った時期との評価が下されている。その状況は様々な分野に反映されている。

政治と社会が変化すると、それに合わせて生活文化も自ずと変わっていく。新羅では三国統一後、領土と領民が何倍にも増えており、当時先進的だった高句麗や百済の文化を受容·融合することにより大きな変貌を遂げた。加えて新羅は軍事同盟を結んだ唐から文物を受容し、さらに唐を媒介として、シルクロードを通じ中央アジアやアラブ、ローマ帝国圏域の文物までも積極的に取り入れた。このような背景のもと、新羅の文化は質量ともに目覚ましい成長を遂げ、国際性を獲得する。彗超をはじめとする多数の新羅の僧侶が求法活動を目的に仏教の発祥地であるインドまで陸路または海路を用いて渡っており、新羅の国名がその周辺国まで知られていたことを考えると、新羅人の海外交易や交流活動は我々の予想を遥かに超えるものだったはずである。例えば、アラブの商人、ソグド人が新羅に住んでいた痕跡も残っている。9世紀のことであるが、張保皐が清海鎮を拠点に海上交易の帝国を築くことのできたのも偶然ではなく、このような背景と長年の経験が蓄積した結果といえよう。

このように、統一新羅期の諸文化と日常生活のレベルは目に見えて向上し、より成熟していった様子を窺うことができる。文化を享受する階層の底辺も広くなった。その実状は諸文献だけでなく、実際の物質資料からも確認できる。

1 王京と地方の都市

新羅で都市が形成されはじめた時期は、中央と地方で大きく異なる。中央である慶州(キョンジュ)では麻立干期になると中央集権化が進み、地方の人的·物的資源が都に集まることにより徐々に都市化が進んだと考えられる。慈悲王代の469年に王京の坊里名を定め、487年に官道を修理したという記録は、そのような変化を示している。ただし、ある程度体系的な街路区画など、本格的な都市計画が実行された時期は6世紀中頃である。一方、地方において都市が出現したのはそれよりかなり遅れ、統一新羅期に9州5小京が設置されてからである。当然ながら9州5小京も全く基盤がない場所に設置されてはおらず、それ以前から当該地域の中心では都市化が進んでいたはずであるが、今となってはその痕跡を見つけることはできない。9州の「州治」と5小京が所在した各地で、ほぼ同時に都市計画が実行されたためである。

王京の都市区画と景観

慶州は麻立干期に入って王都として機能するようになり、盆地の中心部に人口

が集中した。その中心にあったのが宮殿の月城である。王京の象徴であるこの宮殿は、文献に斯盧国初期の中心とされた南山(ナムサン)北西麓に近い場所、南川(ナムチョン)沿いに、自然地形を生かして平面が独特な半月形に築かれた。この宮殿は当時の王をはじめとする支配階級の墳墓がある北西の墓域を意識して築かれており、現世の王の生活空間として築造されたものと考えられる。城の規模は周囲2,340m、東西の長さ890m、南北幅260m、総面積193,845㎡である。この月城とともに待避·防御用施設として機能した明活(ミョンファル)山城(土城)や南山土城、都堂山(トダンサン)土城なども都の周辺に築かれた。明活山城には、5世紀後半に高句麗の南下に備え、王が自ら10年以上居住している。

月城は上空から俯瞰した姿が半月または三日月(新月)に似ることから半月城または新月城などとも呼ばれている。内部から「在城」銘の瓦が出土しており、この地が王宮であったことがわかる。これまで数回にわたり城壁や東門跡、外郭地域、一般建物跡、掘立柱建物跡、周溝や建物跡などが発掘調査され、地表面に対する精密調査が実施されている。さらに月城内部の地下物理探査が実施(〈写真1〉)され、近年内部の発掘が始められ、宮殿内外の様子がある程度具体的に把握されている。

おそらく麻立干期の開始とともに土や石によって築造されたと考えられる月城

写真 1　慶州月城の航空写真と地下物理探査による遺構配置図

には、当初から周溝が巡らされ、その外郭に沿って木柵のような施設が立てられたと推定される。その後の5世紀後半頃に周溝が廃棄され、平面でやや曲線を描く北西城壁に沿って平面長方形の池型の石積周溝5基が設置された。一方、向かい側の城郭北西では5~7世紀の掘立柱建物跡23棟が確認され、早くから宮殿の近くに官衙ないし軍事用の建物が立地したと推定される。月城の石積みの周溝は時間の経過とともに2·3度縮小改築され、統一直後まで存続したようである。

『三国史記』新羅本紀では、文武王19年(679)に宮殿を再び修理し、東宮を建て、宮殿の内外の門の名称を初めて定めたとする。さらに、王京の随所で「儀鳳四年皆土」銘の瓦が出土している点などから考えると、当時王京の面貌が一新する工事が大々的に行われたことが推測される。その際、月城の石積み周溝の北側に礎石を持つ建物が城壁方向に沿って配置され、瞻星台(チョムソンデ)南側と鶏林(ケリム) 北側にあたる場所では宗廟と推定される建物など多くの施設が建てられた。この頃に王宮が現在の月池(雁鴨池)とその西側の建物群、そして東の東宮を含む場所まで含み大きく拡大していったと推定される(〈写真2〉)。

月池の東及び北東の隣接地で計26棟の建物跡が確認されたが(〈写真3〉)、そのうち月池北東で見つかった、南北に整然と配された3棟の大型建物跡は東宮の中心部と考えられる(〈写真4〉)。

新羅の王京は、このような王宮の変化と軌を一にして発展していったのであろう。王京が一定の単位により区画されていたであろうことは、朝鮮時代末期の『増補文献備考』に慶州地域に新羅時代の井田跡が残っているという記録からもわかり、実際の発掘結果もそれを裏付けている。都城の内側はおおよそ東西南北に走る道路によって区画されているが、このように四方の道路によって囲まれたそれぞれの空間は、記録にある「坊」という基本単位に該当する。しかし、坊の規模は同一ではない。皇龍寺址東側のS1E1地区では、道路の中心間距離を基準にして考えると南北172.5m、東西167.5mである反面、城東洞(ソンドンドン)及び西部洞(ソブドン)一帯では南北150m、東西120mほどである。さらに、4つの坊によって構成された皇龍寺址の敷地は、東西および南北すべてががそれぞれ約140mである。

このような違いは、当該の坊が造られた時期自体が異なるためでもあるが、城の坊里区画が一斉に行われたのではなく、地区ごと段階的に行われたためであると考えられる。大陵苑一帯で確認された坊の中心軸の方向が、北川(プクチョン)以

写真 2　拡大した王宮の最大推定範囲

写真 3　月池と東宮址(写真の中央が発掘区域)の遠景

写真 4　推定東宮址における建物跡の基礎

北や南川、狼山(ナンサン)一帯で確認されたものとは明確な差を見せるのも、このような推測を裏付けている。前者の東西道路や排水路の角度は、北西ー南東方向にかなり傾いているが、それは慶州の地形が東が高く西が低いため、自然に排水が行われることを念頭に置いた都市計画であったためと解釈されることもある。

王京の坊里区画が始まった時期はおおよそ6世紀中頃とされており、全体的な完成の時期は8世紀頃と推定されている。まず6世紀中頃に月城の北東に皇龍寺を建てる際、その一帯から本格的に直線的都市計画である坊制が施行され、7世紀前半までに九黄洞(クファンドン)、仁旺洞(インワンドン)一帯など周辺へと次第に拡大していった。そして7世紀前半から後半にかけて皇龍寺北側や西部洞一帯へ、そして8世紀以降には城乾洞(ソンゴンドン)や東川洞(トンチョンドン)一帯へと拡大していったとされる。文献によると、智証王10年(509)に東市を設置し、孝昭王4年(695)には西市と南市を開設したと記されており、このような拡大の方向性を示している。

新羅王京の坊は発掘結果や衛星写真、地図などから判断すると、盆地全面に広まっており、北は隍城洞(ファンソンドン)から龍江洞(ヨンガンドン)一帯の北川の北岸、西南は鮑石亭周辺、東は明活山周辺、南東は四天王寺址から望徳寺址周辺までとなっている(〈図1〉)。これは、当時の唐や日本の坊里制が碁盤の目の

ように規定範囲の市街全域を格子状に正確に区画し、さらに坊をいくつかを合わせた上位単位があったことに比べると、かなり様相が異なっている。このような特徴を持つ理由としては、王宮が盆地の南に位置していることを考慮に入れて都市計画が行われた上に、当初から一定の計画で全面的に施行されておらず、段階的に拡大していった点が挙げられる。

王京の空間範囲は『三国史記』や『三国遺事』によると、南北3,075歩、東西3,018歩、1,360坊または360坊、そして3.5里または5.5里などと記されている。新羅の最盛期には178,936戸が王京に存在したといわれている。今まで発掘された範囲から見ると、南北約6㎞、東西5.5㎞の範囲で道路遺構が確認されており、現在の市街地を中心にある程度範囲を割り出すことが可能である。

月城から北へ約600m離れた北川(別名閼川)の南岸で確認された城東洞殿廊

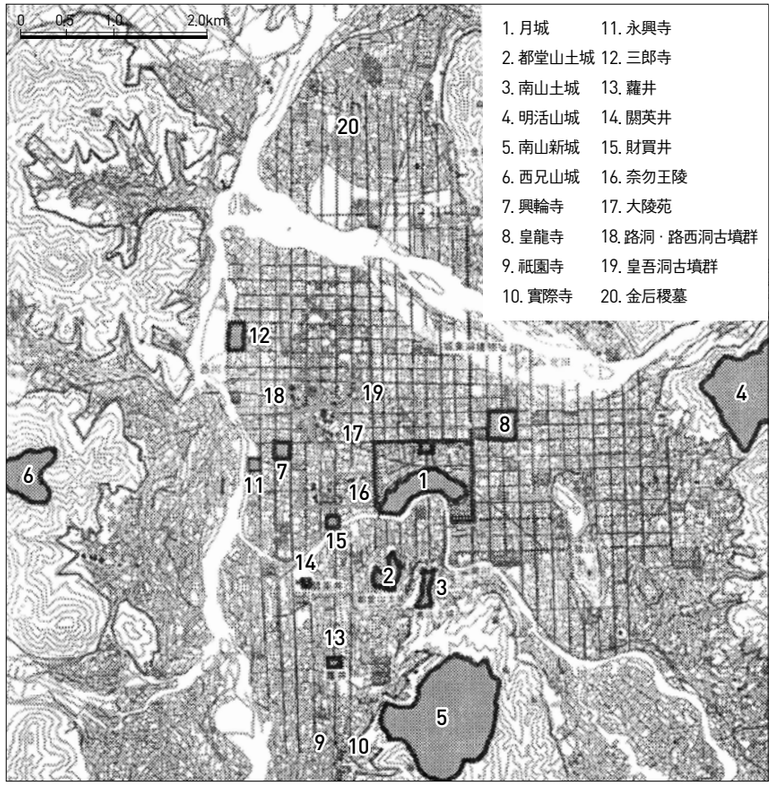

図 1　新羅都城の坊里區劃

址は、文武王代に王京を大々的に整備した時期の遺跡で、これが文献に見える北宮の痕跡であるならば、この時期に王京の範囲が日本や唐のように碁盤状に規格化されていった可能性が考えられる。ただしその説が正しいとすれば、現在北川や月城以南に見える坊は、その後に拡張した住居地域であるはずである。また、文武王21年(681)に「王が京城を新しく造ろうと欲した(「王欲新京城」)」が義湘大師の意見を容れて断念したという記録は、そのような計画のもと大々的に新しく坊里制を適用しようとした試みを断念したことを表すと考えられる。一方、近年市内から西側にやや離れた牟梁里(モリャンリ)で確認された統一新羅期の坊里区画の痕跡は、6部のうち「岑啄部」に属した人々の住居地域と考えることができる。これらも記録にある「新羅最盛期の1360坊」に含まれるのであろう。

これらの坊は、四方に区画される道路と不可分の関係にある。現在までに王京内の多くの遺跡で道路遺構が確認されている。これらの道路は基本的に通行のための機能と同時に、居住区域を分割する基準、つまり都市空間を一定の単位に分割する基準となっていた。道路は基本的に幅15m以上の大型道路、10m前後の中型道路、そして5m前後の小型道路の3つに分けることができる。皇龍寺址の隣にあるS1E1地区の場合、坊の南側の東西道路(〈写真5〉)は幅15m前後で、中央部分は大きめの石で地均しされており、両側は小石や砂などが用いられている。道路面で発見された境界石の位置からみて、当時は道路内が車道と人道に分けられていたとみられる。そして道路の両端には砂利で幅1.4~1.45mの排水溝が設けられている。一方、北川の東西道路は幅5.5~7.5mで、西側の南北道路はその西に位置する皇龍寺との境界線となっている。西側の南北道路は幅12m前後であり、東側の南北道路は幅約5.5m前後であった。

川の位置で道路を結ぶ橋梁の遺構も発掘されているが、これらはすべて南川で見つかっている。橋そのものは残っておらず、橋脚と付属施設の基礎部分だけが残っていた。文献に記された8世紀の春陽橋(別名日精橋)(〈写真6〉)と月精橋がその代表例である。これらの橋は7世紀末に拡大されたと推定される王宮地区内に位置していることから、貴族専用のものであった可能性もある。橋脚の基礎を平面舟形に造り、水流を最大限緩和するように努めている。

王京周辺には当初より防護用または退避用の城が築城された。麻立干期の山城はすべて土城であるという共通点を持ち、慶州盆地周辺では東と南にのみ分

写真 5　S1E1地区遺跡南側の東西道路全景

写真 6　春陽橋橋脚の基礎部

布するという特徴がある。中古期に入ると明活山城(石城)、西兄(ソヒョン)山城、南山新城、北兄(プクヒョン)山城、高墟(コホ)城などが築造された。これらのうち北兄山城を除いたすべてが石城で、山に造られた大型の城郭である。王京から西へやや離れた場所に築かれた富山城は、城内から出土した土器から遅くとも中古期には初築され、文武王3年(663)に改築されたとみられる。城壁の延長が7.5㎞に達する大規模な山城で、二重城という独特な構造を持つ。

写真 7　明活山城門址周辺の発掘の様子

明活山城は土城であったが、551年に石城へと改築されたとみられる(〈写真7〉)。西兄山城は西兄山(仙桃山)の中腹を巡る鉢巻式石城である。真平王15年(593)に明活山城とともに改築されたと記されているため、それ以前に築城されたことがわかる。つまり真平王代以前から、明活山城とともに新羅王京の東と西を防備する城郭システムが構築されていたことを意味する。南山新城は南山の北峰に包谷式に築かれた石城で、従来の南山土城の代わりに築城されたものである。これは月城ないし王京の防御システム(〈図2〉)を強化するための施設であった。築城時期は真平王13年(591)で、このことは南山新城碑(10点)の銘文からも裏付けられる。

統一新羅期に入って新垈里(シンデリ)城、関門(クァンムン)城が築造された。この時期に新たに築かれた城郭が2城しかない理由は、それ以前に築城された北兄山城、南山新城、明活山城、西兄山城などが依然として都を守る役割を果たしていたからである。

新垈里城は関門城の東の山頂に別途築造された石城である。改築の痕跡が多く、後代にも使われ続けたことがわかる。この城は東海岸と蔚山(ウルサン)湾の両方を眺望できる地理的位置にあるため、東海岸から侵入する日本の勢力から王京を守る役割を果たした。7世紀後半に築造されたこの城に加え、機能上の必要に応じてさらに関門城が築かれたものとみられる。この新垈里城の城壁で

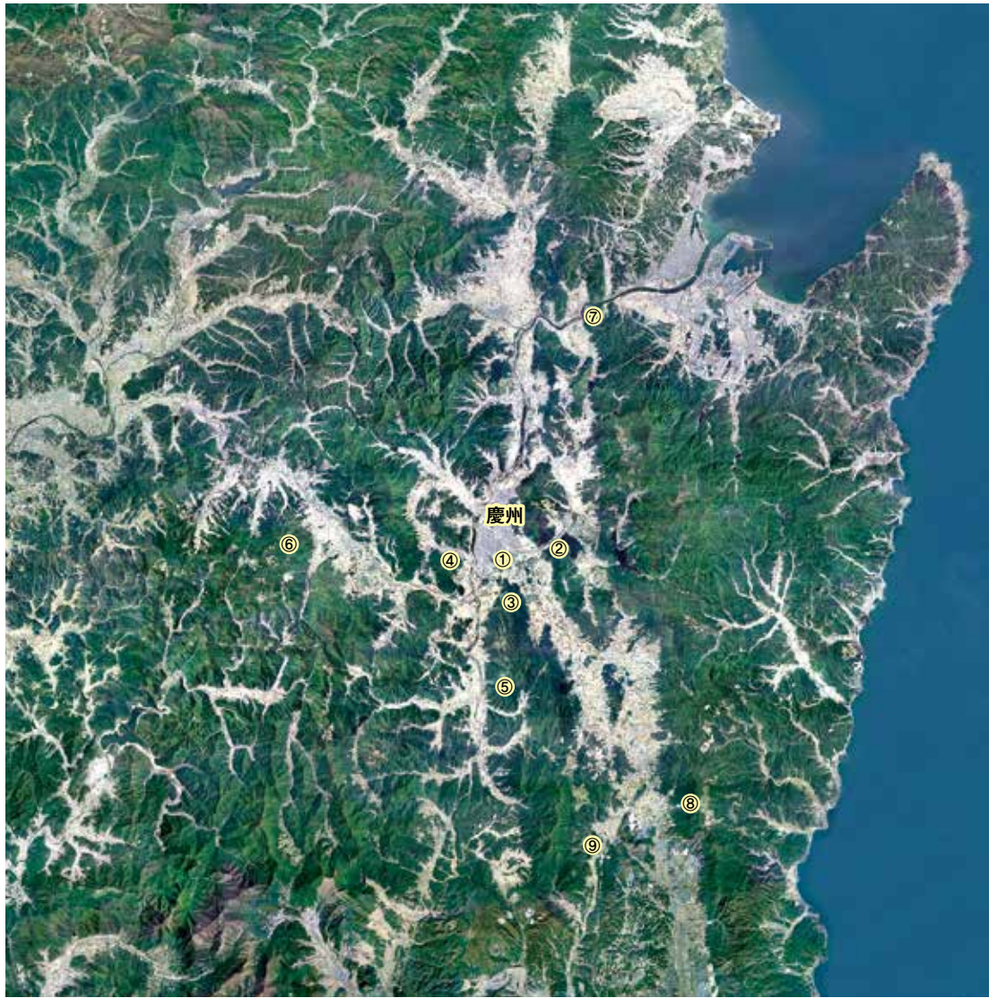

図 2　王京の防御システム(①月城, ②明活山城, ③南山新城, ④西兄山城, ⑤高墟城 ⑥富山城, ⑦北兄山城, ⑧新垈里城, ⑨関門城)

は銘文石(〈図3〉)10点が発見されており、築造に使用された尺度や作業分担距離などが把握できる資料となっている。

関門城は聖徳王21年(722)10月、日本の侵入を防ぐために築造された。この城は山と山を結んで長城の形式で築かれているため、形態上、他の山城とは大きな違いがある。この城は、憲徳王代に金憲昌(キムホンチャン)が反乱を起こしたとき、反乱軍が王京へと入る道の南東方向を防御する際にも使用された。

王京は人口が密集する都市であるため、生活用品を生産･供給する後背地を必要とする。後背地は斯盧国時代から人々が居住していた周辺の谷あいの地域であり、その後王畿に属するようになった。それらの地域の中で王京に隣接した地区には、手工業を専門とする特殊な村落である「成」が立地する。それら「成」が運営した土器･瓦生産の窯跡や畠作跡(〈写真8〉)などが、王京外郭北東の川北面(チョンブクミョン)や西北の金丈里(クムジャンリ)、そして南東の花谷里(ファゴン

図 3　新垈里城の銘文石拓本

写真 8　慶州･金丈里畑跡遺跡細部

写真 9　皇龍寺址の全景

リ)などで発掘されている。

王京の中で、宮殿地区以外で最も重要な位置を占めた施設は、言うまでもなく寺院である。記録に残された皇龍寺址と芬皇寺址は全面発掘されており、興輪寺址は一部のみ調査されている。皇龍寺(〈写真9〉)は、東西·南北それぞれ約280m四方の石垣の内部に有名な九重木塔を前面中央に置き、その後ろに3つの金堂を配した、いわゆる一塔三金堂の伽藍配置であることが明らかとなった。

その他に慶州の平地では、文献にある「四節遊宅」や「金入宅」などの大邸宅に属する苑池が発掘された。龍江洞苑池と九黄洞苑池がその代表である。龍江洞苑池は王京の都市区画範囲の外郭である北川の北の平地に位置する。南北に長い苑池(長さ100m以上と推定)の半分程度のみが発掘された(〈写真10〉)。確認された遺構には建物跡、石築列、石築護岸を持つ人工島2カ所(この島を含む全体の石築護岸の延長は236m)、取水路、受水施設、護岸内の造景石、橋脚施設、周辺道路、溝などがある。石築護岸は加工した割石や河原石を用いて築かれ、曲線と直線部分が混在するなど、自然の美しさが最大限生かされている。建物と人工島の間には木橋が設置されて往来できるようになっている点、雁鴨池とは異な

写真 10　龍江洞苑池遺跡

写真 11　九黄洞苑池遺跡

る。7世紀末に築造されており、中心年代は8世紀である。

九黄洞苑池遺跡は芬皇寺東の北川南岸に位置する。池、取水·排水路、S字形水路、六角形建物跡など、様々な遺構が確認された(〈写真11〉)。1次池、S字形水路、1次石垣、六角形建物跡などが共存した時期と、2次池、2次石垣、集水槽、小型排水路が共存した時期に大きく分けられる。第1次の時期は7世紀中頃、第2次

の時期は8世紀中頃と推定される。確認された池の大きさは南北46.3m、石築護岸の長さが192mで、雁鴨池の約1/15にあたる規模である。内部には龍江洞苑池と同様、2つの人工島が並んでいる。

地方都市の構造

新羅は、676年に唐の軍隊の撤収により統一戦争を終結させ、その後すぐに地方行政組織を9州5小京として整備した。三国時代の新羅·加耶にあたる地域に沙伐州(尚州)·歃良州(良州)·菁州(康州)、百済にあたる地域に熊川州(熊州)·完山州(全州)·武珍州(武州)、高句麗にあたる地域に漢山州(漢州)·牛首州(朔州)·河西州(溟州)の3州ずつ計9州を置き、政治·文化的に重視される拠点として中原小京(中原京)·北原小京(北原京)·金官小京(金官京)·西原小京(西原京)·南原小京(南原京)の5小京を配した(〈図4〉)。州と小京の治所には城を築造している。

新羅は地方拠点に対して王京のような都市計画を施行し、坊里制を適用した。人工衛星写真や航空写真などに見られる道路区画の痕跡や、ごく一部ではあるが発掘調査の実施により、新羅時代に計画的に実践された都市計画を窺うことができる。

沙伐州の州治には687年(神文王7)頃に坊里制が施行されたと推定されるが、その位置は現在の尚州市の中心にあたる。それにあたる伏龍洞からは統一新羅期の都市遺跡が発掘された。発掘調査の成果と地籍図などを見ると、沙伐州の都市区画体系は全体を大きく9等分し、さらにその中を小さく9等分したものと考えられる。大区域の単位を「里」、小区域の単位を「坊」とすると、南北の幅約1,440m、東西の幅約1,400mの平面が9坊×9坊に区画され、全体は9里81坊に編制されていたと考えられる(〈図5〉)。

現在のように地形が変形する前の地図である1913年製図の地籍図で坊の規模や平面形を見ると、中央の1列に属する坊は東西約120m×南北約160mの縦長方形で、その東西の残りの行·列の坊は約160m×160mの正方形である。つまり、東西の幅120mの単位区域を中央に置き、その東と西にそれぞれ一辺160mの4区域の坊が配されている。従って、統一新羅期の尚州の中心部は、坊里区画が施行された中核区域と、その周辺および背後の主城である慈山(チャサン)山城が調和

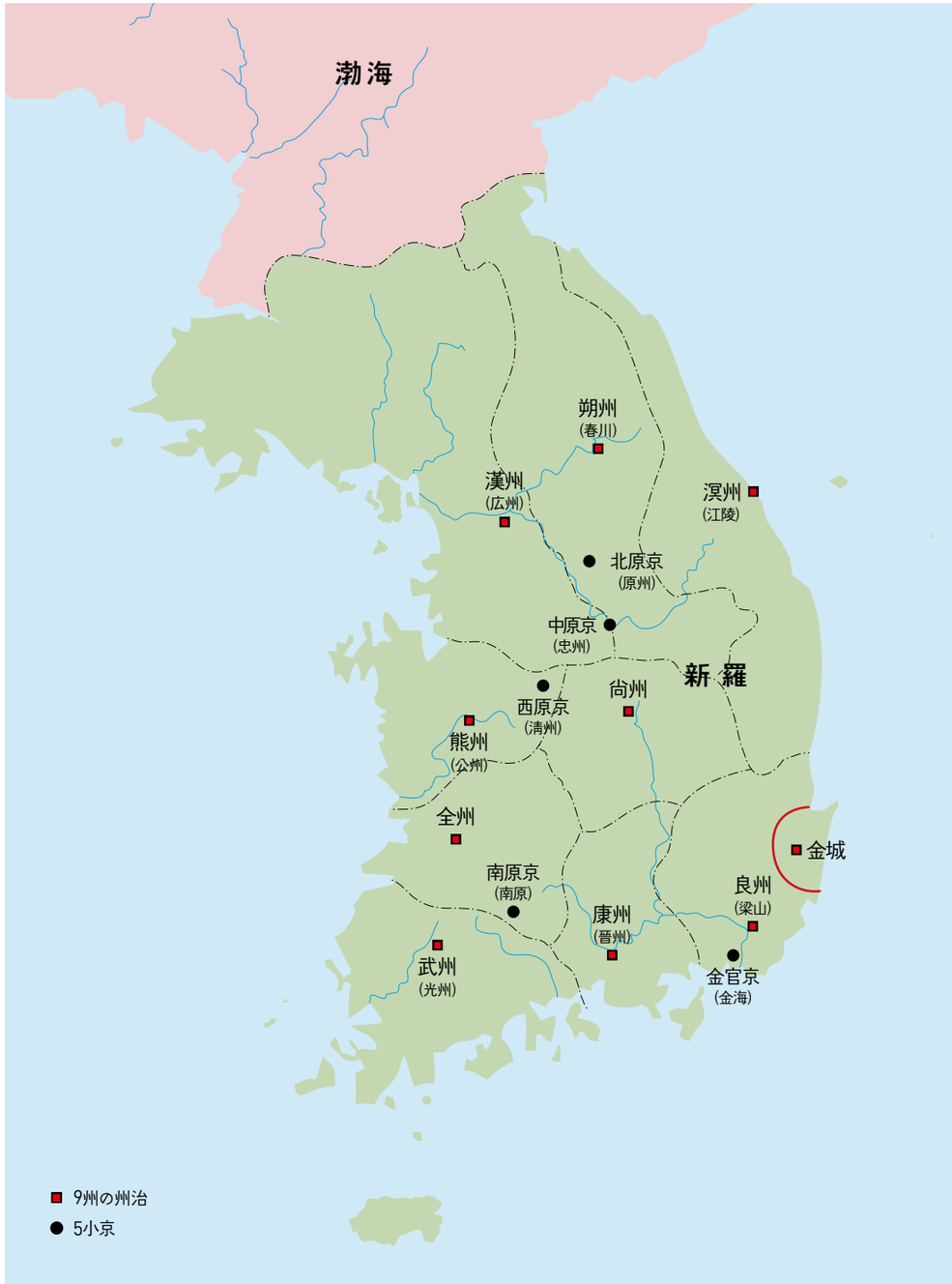

図4　九州五小京図

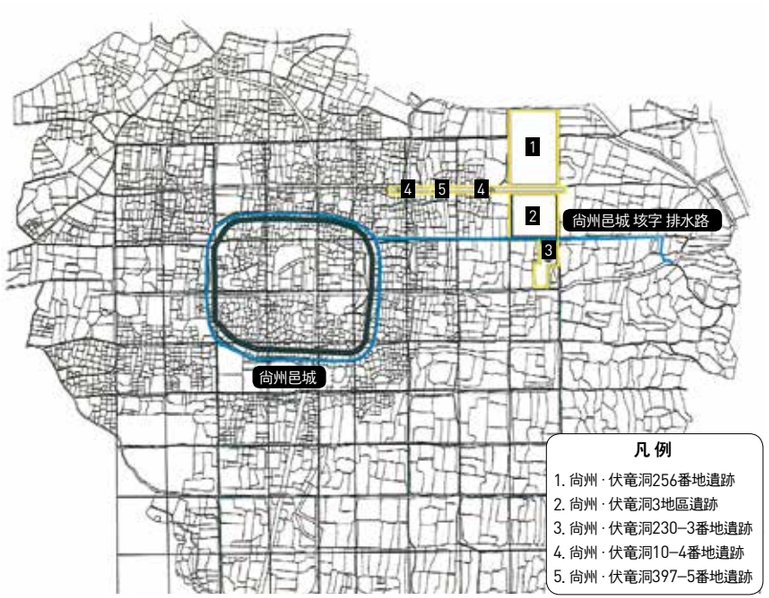

図 5　沙伐州の坊里区画復元図

する形の都市であったと考えられる。

南原小京は神文王5年(685)に設置され、神文王11年(691)には南原城が築かれた。その位置は現在の南原市街地の中心部を形成する鄕校洞、東忠洞、道通洞、王亭洞、竹巷洞一帯である。当地には道路や旧居により区画された、整然とした格子状土地区画と、朝鮮時代の南原邑城の形跡が残っている。

区画範囲は南北約1.12㎞、東西約1.36㎞で、単位区画の一辺の長さは中央部の1列を除くと約160mである。つまり、中央部の1列に属する坊は約80m(東西)×約160m(南北)の縦長方形で、残りの坊は約160×160mの正方形である。坊里制の痕跡が残る東忠洞(トンチュンドン)·龍城(ヨンソン)小学校一帯には、神文王11年(691)に建てられた龍城館址があったと伝えられている。また坊里区画範囲の東外郭には、憲康王元年(875)に創建されたとされる禅源寺、西外郭には高麗時代の「万福寺」が位置する。そして朝鮮時代の「南原邑城」は、坊里区画線を中心に正方形の範囲に築造された。このように南原小京は、坊里制の施行後、高麗時代や朝鮮時代を経て当該地が中心であり続け、坊里区画によって格子状に設置された道路は後代の邑城の築造や道路造成に利用されたものと考えられる。

2 王陵

慶州地域の墳墓のうち、2世紀中頃以降の斯盧国期の木槨墓では、規模や副葬面で王墓といえるものはまだ発見されていない。1世紀後半、慶州西部に築造された舎羅里(サラリ)130号木棺墓と市内の塔洞(タプドン)木棺墓(〈写真12〉)は、その規模や副葬遺物の面で同時期における嶺南地域で築造された墓の中では抜きん出ているが、邑落の首長クラスの人物の墓であり、斯盧国全体を代表する王の墓と断定することはできない。

麻立干期になると新羅の都となった慶州地域の支配階級は市内に集まり、自らの墓を巨大で高い墳丘を持つ高塚とした。現在の市内、平地の中心部にある古墳群や金尺里(クムチョクリ)の古墳群などがそれである。そのうち麻立干期の王陵は市内中心部の高塚に含まれていると思われる。また西方の金尺里に集中する高塚群は、六部の中

写真 12　慶州·塔洞木棺墓

で比較的勢力の弱かった岑啄部の墓と考えられるため、そこに王陵が含まれている可能性は低い。当該時期の王である麻立干は、六部の中の有力な部であった啄部と沙啄部の長が就いたためである。

市内の中心に築造された墓群の様相からみて、有力な部であった啄部や沙啄部の墓は大陵苑地域とその北の路東洞(ノドンドン)および路西洞(ノソドン)に集中分布する墓である可能性が非常に高い。これらの墳墓の中に麻立干期の王陵が含まれているのであろう。

麻立干期の王陵の条件について、現在の発掘成果から具体的に示すことは困難である。現在まで金製の「山」字形立飾り帯冠が出土した墓(〈写真13〉)に注目し、その一部を麻立干期の奈勿王·実聖王·訥祇王·慈悲王·炤知王·智証王の陵に比定する見解もあった。しかし、金冠が出土しているということですべてを王陵と断定することはできない。まだ発掘されていない大型墳の中には、これまで金冠が

写真 13　大陵苑および路西·路東洞の金冠出土古墳

出土した墳墓より規模の面ではるかに大きいものも多いためである。〈表1〉に見るように、天馬塚より規模の大きい古墳は9基も存在する。

表1. 慶州市内大型高塚の規模順位

古墳番号(名称)	直径(m)	古墳番号(名称)	直径(m)
125号(鳳凰台)	82.3	119号(西墳)	53.7
98号(皇南大塚·南墳)	76.0	119号(中墳)	48.9
98号(皇南大塚·北墳)	76.0	119号(東墳)	42.3
130号(西鳳凰台)	74.6	99号	51.2
90号(北墳)	56.5	105号	51.0
90号(南墳)	54.3	155号(天馬塚)	49.6
106号(伝味鄒王陵)	56.1	129号(南墳 デイビッド塚)	36.1
134号(北墳)	54.1	97号(西墳)	45.5
134号(南墳)	44.0	97号(東墳)	38.0

墓の規模を王陵の第一条件とした場合、発掘された98号墓を見ると王陵の判別基準の一つを知ることができる。つまり、大型でかつ双墳の墓の中には王陵が含まれている可能性が高いということである。逆に王陵が双墳として造られていない場合は、王妃の墓が必ずしも大きい必要はない。そう考えると、〈表1〉から90号と134号墓が王陵の有力といえる。その他、単独墳で最大の125号墓と130号墓は王陵とみることができる。

規模の他に王陵を判断するもう一つの基準は、男性の墓でなくてはならないという点である。高塚の被葬者の性別を推定する主な基準は、着用した耳飾の型式である。細環耳飾であれば被葬者は男性、太環耳飾であれば女性とみることができる。この基準によれば、金冠塚は、日本の植民地時代の収拾調査であるため不確かではあるが、太環耳飾を着用していたと報告されている点、規模がさほど大きくない点から、王陵ではないと考えることができる。

また、現在までの発掘例から推測すると、儀礼用冠であれ葬礼用冠であれ、金冠が出土した墳墓は王陵と見ることができる。ただし98号(皇南大塚)双墳の南墳は、その規模が圧倒的に大きい上に夫人の墓である北墳から金冠が出土してい

写真 14　大陵苑一帯および路西·路東洞の古墳群分布

る点から、間違いなく王陵であると判断されるが、例外的に金冠が見つかっておらず、その理由は明らかになっていない。この南墳の被葬者については、奈勿王または訥祇王とみる見解が主流であるが、実聖王陵に比定する説もある。

麻立干期の墳墓の分布を見ると、王陵ではない大小の墳墓も混在する。つまり、同じ部に属していたであろう王族やその他の有力者たちと同じ墓域を共有しているのである。このことは、麻立干期の王が超越的な存在ではなく、王の属した部の代表者であり、かつ王であったという事情を物語っている。

中古期になると王は所属の部を代表する部の長としての地位を超えて六部を超越した存在となり、呼び名も大王となった。また王の葬地は、例えば「永敬寺の北」などのように具体的に記されるようになる。そして王と貴族たちの墓は従来の慶州市内の平地から離れ、周辺の山地へと移る。代表的な古墳群の例として、中

写真 15　西岳洞·武烈王陵(下方の木々に囲まれている墓)一帯の古墳

代の最初の王である武烈王の陵の後方に一列に並ぶ古墳群(〈写真15〉)がある。

武烈王陵から最も近い古墳(4号墳)は、護石を基準にすると推定直径が62.9mであり、墳丘平面形も後代の横穴式石室墳のような円形ではなく、麻立干期のもののように楕円形であるため、内部構造は積石木槨墓の可能性が非常に高い。そしてその上の3号墳·2号墳·1号墳は、それぞれ直径が50.3m、46.2m、46.0mである。これらは規模や状況からみて王陵級の墳墓であることは疑いない。4号墳はこの地に最初に築造された法興王陵で、残りの3基の中に真興王陵と真智王陵が含まれていると考えられる。

真平王陵と真徳女王陵は、その位置がそれぞれ漢祗部と沙梁部と記されているため、平地に位置しているのではないかと推定される。善徳女王陵は四天王寺の北側にある狼山の南麓にある単独の古墳と考えられる。

このように、中古期の王陵は超越的な存在に昇華された王の地位にふさわしく他の貴族の墓とは離れた場所に墓域が形成され、その後次第に独立していく状況が見られる。これは王権の強化を象徴する現象といえる。

中代の最初の王である武烈王の陵は、陵碑の螭首(ちしゅ)に刻まれた「太宗武烈大王之碑」の題額によって古墳の被葬者とその位置を知ることができる稀有な例である。この陵碑は優れた彫刻美術としての価値と同時に、唐から入った陵碑文化の始まりを物語る注目すべき事例である(〈写真16〉)。

写真 16 武烈王陵の亀趺と螭首

写真 17 興徳王陵十二支像の午像

写真 18 元聖王陵前の石造物

中代および下代の王陵として伝わるいくつかのものは、慶州の中心からやや離れた盆地周辺部に散在する。これらはほとんど18世紀前半に慶州の氏族によって比定されたものであるため、そのまま受け入れることはできない。閔哀王陵といわれていた王陵級の墳墓は、この墓を築造する際に掘削した背後の表土面に埋納された火葬墓に元和10年(815)銘の蔵骨器が用いられていたため、839年に死亡した

写真 19 神文王陵

閔哀王の陵ではあり得ないことが明らかになっている。武烈王陵以外で王陵であることが明らかなのは、陵碑によって確認される興徳王(826~836)の陵と、崇福寺碑文によって推定される元聖王(785~798)の陵(掛陵)程度である。

中代および下代の王陵と推定されるものには十二支像が浮彫された護石(外護列石)が巡り、欄干が備えられ、陵の前には石人像や獅子像が配されている(〈写真18〉)。これらは王陵として最も完備された形式である。護石の起源は塊石であり、段を築き支持石をもたせかけた武烈王陵が初源的な形態を持つ。その後、長方形の切石を積むようになり、さらに切石をもたせかけた神文王陵(〈写真19〉)のような形式へと発展していく。さらに板石をはめ込んだ形式へと変わり、そこに十二支像を表現するものへと発展した。十二支像を刻む前に板石の護石を巡らせ、周辺に丸彫りの十二支像を別途に配した墳墓があり、聖徳王(702~737)の陵と推定されている。彫刻自体は陵の造営より多少遅れる時期、景徳王代に造られたと推定される。

十二支像の起源は中国にある。隋代に初めて十二方位を示す丑(北)、卯(東)、午(南)、酉(西)など人間の体に各種獣面を持つ小像を墓内に納める風習が生まれ、唐代に継承された。新羅はこの風習を導入し、さらに王陵の護石にも十二支を刻んだのである。彩色俑の出土で知られる龍江洞(ヨンガンドン)石室墳からは青銅像

写真 20　慶州出土の十二支銘蔵骨器

も見つかっており、花谷里(ファゴンリ)火葬墓では扁平な土製十二支像が蔵骨器の周囲に配されていた。また、蔵骨器の蓋に十二支の銘文がある例や(〈写真20〉)、鉄製の分銅に鋳造したものなど、様々な器物に多様な方法によって十二支が表現されている。当時の新羅社会に一種の十二支信仰があったことを示している。

護石に刻まれた十二支像を見ると、甲を着装した例があり、常服のものもある。中国では墓内に埋納された十二支像が、新羅で墓外の護石に武器を持った姿で表現されているのは、永遠への願望という十二支像本来の意味に加え、仏教における神将像のような守護神のような役割が持たされていたといえる。王陵に設置された獅子像など他の彫刻も基本的な役割は王陵の守護である。このように王陵の護石における十二支像は、王陵彫刻の重要な特徴であると同時に、外国文化を受け入れる際にそこに変化を加え新羅文化として変容させた新羅人の創造性を物語っている。

3 宗教と祭儀

新羅時代には仏教の他に道教や儒教も受容された。儒教は思想的側面が強く、宗教として信仰の対象となったとは言い難い。道教も体系立った具体的宗教として機能したかについては、ほとんど知られていない。従ってここでは、普遍的宗教としての仏教と、仏教が伝来する以前からの伝統的な宗教である土着宗教、そしてそれらに関連する国家祭儀について述べたい。

土着宗教

どのような社会であれ、その社会を取り巻く世界についての理解とそれを説明する体系、つまり世界観もしくは宗教体系を持っている。早くから韓半島東南部一帯に住み、後に新羅という国の構成員となった人々も、独自の宗教体系を持っていた。彼らの伝統的な宗教は初期の新羅社会を形作ってそれを動かし、国家の成長とともに変化していった。外国の宗教である仏教という普遍的宗教が取り入れられるようになり、土着宗教の伝統は、一方では外国宗教との関連の中で、もう一方では独自性を伝承する中で変化していった。

古代韓国における土着宗教の歴史的文化的背景となったのは、シャーマニズムの伝統である。シャーマニズムとは、シャーマンを中心とした宗教文化の現象を指す。シャーマンは古代中国では「巫」と記された。シャーマンは脱魂や憑霊などによる意識のトランス状態で別の世界と直接接触することにより、人間が抱える問題を解決しようとする宗教専門家の一形態である。シャーマニズムは、このような人間と世界に対する観点や説明から生まれた宗教文化である。

人々は、シャーマンのような特別な存在は、その魂が肉体を離れて別世界と通ずる能力を備えており、それによって人間世界の問題を解決することができると信じていた。従って彼らは、新羅を含む古代韓国においても重要な役割を果たした。特に初期国家段階で権力を行使するにあたり、「巫」の能力への期待と信頼が重要視された。「巫」という意味を持つ「次次雄」という王号を持つ第2代の南解王の例からも分かるように、新羅の初期の王は「巫」の能力の持ち主として認識された。そのような能力の発揮が期待された痕跡が諸資料に見られることはその傍証である。

新羅人の土着宗教の観念について考える際には、まず世界の存在や構造に対する認識と説明について理解する必要がある。檀君神話やその後の満州および韓半島の古代の神話によると、新羅人を含む古代韓国人は、世界は人間だけのものではなく、動植物などの自然と神々が共存する調和の世界であると認識していた。従って、人間の幸せはこのような様々な世界との交流と調和により達成できると考えていた。このような世界観はシャーマニズムの世界観と共通するものである。

新羅人は、神々の世界である天上界と豊穣と再生の根源であり死者の世界でもある地下界を合わせた垂直世界と、地上と連続する彼方の場所を想定する水平世界が合致した空間的世界観を持っていた。また、消滅と再生を繰り返す月に関する様々な象徴や、それと関連した時間観念も持っていた。

新羅人は他の古代人たちと同様、人間を肉体と魂によって構成された存在とみなし、肉体が消えた後も魂は冥界で存在し続けると信じていた。肉体には、物質的特徴を持つ肉体魂と、肉体から離れて別世界へ行く自由魂があるという観念も持っていたため、このような観念に基づいて死者の処理にも様々な工夫をこらした。

新羅人はこの世界を動かす様々な神の存在についてある観念を持っていたが、特に天に対する観念と信仰が重要であった。天神を至高神とみなしたため、地上の代表である君主の権威を天神との関連の中から見出そうとした。新羅人は至高の天の権能が地上における人間、とくに始祖神を通じて具現化すると考えていたため、天神と始祖神を明確に区分せず、神の観念が未分化の状態であった。新羅人の人格的神性に対する考え方は、亡者あるいは先祖に対する観念とも結び付き、始祖神に特に重要な神聖性を与えた。重要な社会的役割を果たした人物は、死後も現実世界へ影響を及ぼす守護神の役割を果たすと考えたのである。各地を守護するという概念に関連する山神は、新羅の統治体制において地域集団の編制という問題ともからみ、重要な政治的·社会的意味を持った。また新羅人は、社会の生産と豊穣に関して、神々にその責任を付した。先史時代から続く豊穣のシンボルであった女性と、生産性のシンボルであった水に関する観念は、女神と水神の役割に結び付いた。

新羅人はこのような観念体系に基づいた様々な宗教儀礼を行った。新羅人の儀礼体系は山岳祭祀、井戸祭祀、水辺祭祀、農耕儀礼、海の祭祀に分けることができる。井戸祭祀を見ると、新羅人にとって井戸は王権に関連するものであるため、井戸の周囲で即位の礼を執り行ったと推定される。水は生命のシンボルであるため、水による浄化儀式も行われた。さらに、海における生産活動や海外との交流のため、豊漁と航海を司る神への祭祀である海の祭祀も多く行われた。

井戸祭祀に関連して、慶州博物館の敷地から見つかった井戸址は注目に値する。井戸の深さは10m以上であり、8.5m下から約10歳未満と推定される1体の幼児の遺

写真 21　慶州博物館の敷地で発見された井戸址

骨をはじめ、犬·猫·牛·猪·鹿·キバノロ·馬などの獣、烏·鴨·雉などの鳥類、鯖·鯛·ニベなどの魚や蛇の他、つるべ、印花文土器、瓦などが出土している。特に「南宮之印」銘の瓦は、この周辺が月城の南宮であり、井戸祭祀の主体が王権と関連する可能性を示唆している。各種動物の骨とともに見つかった幼児の遺骨は、単純事故による溺死というより、動物や土器とともに生け贄として捧げられたものとみられる(〈写真21〉)。

国家祭祀

人類の初期段階の社会において、宗教的信念と公共の儀礼が共同体の統合に大きな役割を果たしたことは周知の事実である。従って社会では、特に古代国家となって以来、中央集権化を目指す中で、それまで様々な方法で行われた多様な宗教儀礼やそれらを支えた宗教的観念を統合·体系化し、取りまとめる作業が行われた。古代中国では早くからその作業に取り組み、あらゆるレベルの宗教儀礼を政治的·社会的重要度によって編制し、大祀·中祀·小祀の体系を骨子とした国家レベルの「祀典」を完成させた。

新羅でも中央集権的な支配体制を整備していく中で、国家祭祀の編制に関心を寄せた。そして智証王代に一時的に祀典を整備した。中古期に入り、新しい支配体制をどのように整備していくべきかという問題とともに、それを支えるべき例祭への関心が深まり、再び国家祭祀が編纂された。その後、新羅社会の変化に合わせ、中代末期の恵恭王代に宗廟の改編が、下代初めの善徳王代に社稷壇の設置や3度目の代表的な祀典の整備も行われた。

こうして整備された新羅における国家祭祀の詳細は、『三国史記』祭祀志にその概要がまとめられており、その輪郭を把握することができる。祭祀志によると、新羅では始祖を含む先祖祭祀、農耕儀礼、山川祭祀、王京における祈福·民俗の性格を持つ儀礼が、王室と中央政府が司る国家レベルの祭儀として編制された。すなわち、宗教儀礼とその背景となる宗教観念が、新羅人にとって重要な意味を持っていたことを示している。

国家の始祖を祀る祭祀は、象徴としての国家や現実における王室の存立のため、最も重要な国家祭祀とみなされ執行された。新羅の支配階級は、出自の違いによって政治的利害関係の異なる様々な集団で構成されていたため、その体制の安定のためにも、彼らを一つにまとめるための国家レベルの観念的始祖神を祀る特別な儀礼が必要であったのである。

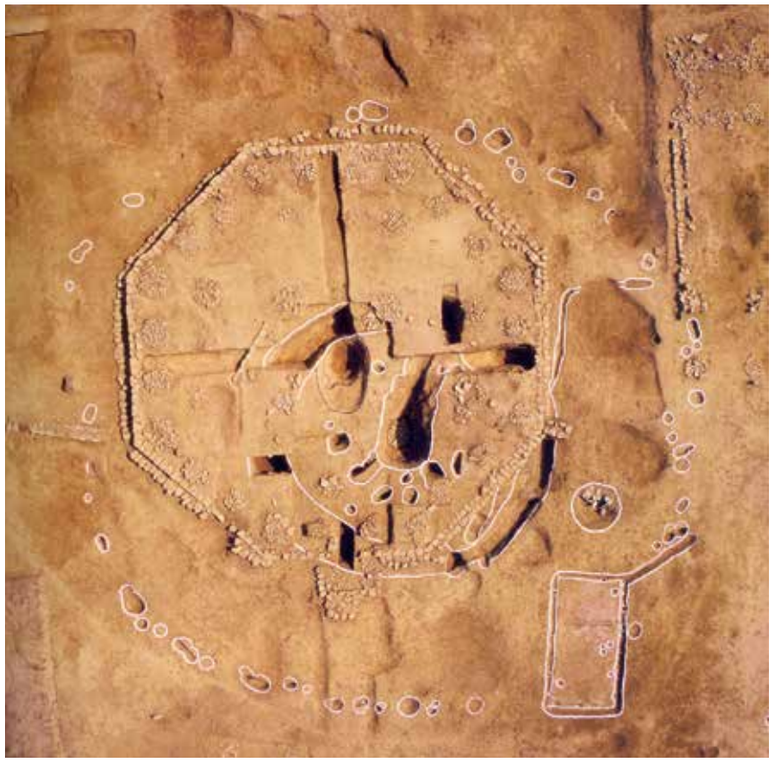

写真 22　慶州蘿井遺跡の発掘状況全景

新羅の始祖祭祀が行われた場所は蘿井(ナジョン)にあった。記録の中の蘿井は、新羅の始祖である朴赫居世が生まれた場所とされている。蘿井に対する発掘調査の結果、斯盧国期以降、7世紀末までの3時期に造営された遺構が重なっていることがわかった。そのうち6世紀後半に造成された第2次遺構は、文武王代に築造された第3次遺構である独特な八角形建物跡へと継承されていることが明らかになった。この八角形建物跡は、花崗岩を削って二重基壇をつくり、外郭に塀を、南の入口に回廊を設けたものである。この点から、この施設は国家的祭祀施設であった可能性が高い。

一方、王室勢力が確固たる地位を築いたことにより、彼らを一致団結させその権

写真 23　瞻星台南側にある建物址(皇南洞123-2番地)の航空写真

威を高めることで、他の貴族たちより優位にあることを誇示するため、王室の直系血統に対する祭祀を整備する必要性が生じた。中古期以降の王室の直系血統に対する祭祀は様々な形で試みられ、統一直後は唐の宗廟制度を導入することにより、一層権威的かつ高度の形式性を持つ宗廟祭祀が行われるようになった。

新羅の宗廟跡は、瞻星台の南、鶏林(ケリム)の北にある皇南洞(ファンナムドン)123-2番地の遺跡が有力候補である。遺跡の中心年代は7世紀後半と推定される。この遺跡は王京の中心である月城に近く、礎石の直径が約1mと大型であり、一般的な行政官衙の建物とは異なる配置および礎石の配列になっている。また、その位置は月城の中心を基準にすると、正北ではなく西北、つまり左に偏って配置されている。北魏洛陽や唐長安城の都城制を参考にすると、太廟、つまり宗廟は左に位置しており、この状況と合致する。

農耕国家であった新羅にとって、農業によってもたらされる豊穣は、国家レベルで最も重要な生存に欠かせない条件であった。だからこそ新羅では、土着宗教に基づく農耕儀礼に、形式的象徴的な洗練された中国式の農耕儀礼を加え、様々な農耕儀礼を執り行った。一方、王京をはじめとする全国各地の守護神を祀る「名山大川祭祀」は、中央集権的統治体制が完成する中で、重要度順に「大祀·中祀·小祀」に編制した。それは新羅の中央政府が祭祀を通じて各地の集団をその勢力規模によって編制するという意味を持つもので、現実には郡県祭祀の整備と軌を一にするものであった。

仏教

王権中心の強力な国を目指した三国では、王室を中心に高度な思想体系を持つ仏教深い関心を寄せ、これを国の発展の礎にしようと積極的に取り入れた。4世紀頃に三国に入った仏教は、インド仏教が中国に達し、中国文化と交じり合うことで定着した中国仏教である。三国の仏教は、高句麗·百済·新羅においてそれぞれ異なる形で理解され、受容された。高句麗と百済は4世紀後半のほぼ同時期に南北朝の仏教を受容した。新羅はそれよりだいぶ遅れた528年(法興王15)に、法興王の主導のもとで、異次頓の殉教を契機にようやく公認された。

中古期の仏教

法興王は律令を公布し、地方制度と中央の統治組織を改編することで集権化を図り、それに相応しい新しい理念体系として普遍的宗教である仏教を取り入れた。仏教はこの時期の社会変化による新たな国家精神の確立に寄与し、強化された王権の優越性を維持するための力となった。また、仏教とともに中国の諸般文化現象が幅広く伝わり、新しい文化を生み出すのにも大きな役割を果たした。

仏教の定着により、正法によって世の中を統一し善政を施すという「転輪聖王」が理想の君主とされ、従来の天の権威を借りた「聖王」の観念に取って代わった。そして王名なども仏教風のものを用いるようになった。法興王と真興王は一時的に出家する「捨身」を行い、晩年には正式に出家した。真興王は自らの領土を僧侶とともに視察し、百高座講会、八関会を催したりもした。真平王代には、仏教が新羅社会の中心理念として定着した。中国への留学僧である円光が活躍し、安含などを中国へ派遣して中国仏教を本格的に受け入れたのもこの頃である。

円光は南朝の陳と隋に留学して帰国し、儒教的道徳を推奨する「世俗五戒」を定め、当時の新羅社会が必要としていた倫理観を示した。また円光は皇龍寺で開かれた百高座法会に上首として参加した。百高座法会とは、外敵の侵入や火災·洪水などの国難から国を守るため、100人の法師を招待して般若波羅蜜の講義を行う行事を指す。円光は国王から地方の下層民までの全階層の新羅人に仏の教えを伝えるために生涯を捧げた。

慈蔵は善徳女王の代に唐に留学し、新羅と唐との関係を築くことに寄与した。さ

らに大蔵経を持ち帰り、新羅の仏教教学の根幹を築いた。慈蔵は仏教界の綱紀を正すことに務め、僧侶たちを統制する方法を確立し、守るべき「戒律」を熟知させた。さらに慈蔵は、新羅が仏菩薩の存在する場所であるとする「新羅仏国土説」を説いた。王室の権威を高め、外国の侵略を阻止する目的で建てられた皇龍寺九重塔は、新羅仏国土説を具現化したものである。

新羅の王京に寺院が建てられると、新羅の人々の出家が許された。また、留学僧が中国を往来するなど直接的な交流が活発になり、さらに多くの寺院と塔が建立された。仏国土の観念に基づいて過去七仏の伽藍として寺院が建てられるなど、数々の寺院が造営され、王京の各所で仏国(浄土)であることを示そうとする活動が行われた。七処伽藍とは、興輪寺·曇厳寺·永興寺·皇龍寺·芬皇寺·霊妙寺·四天王寺のことで、これらは新羅王京の中心に位置し、従来の土着宗教の聖所として知られた場所に創建されている。新羅末期まで重要な役割を果たし、その位置も都の区画や方位において重要な場所であった。

中代の仏教

中代に入ると教学が盛んになり、仏教思想に関する研究が多く蓄積された。円光·慈蔵などの攝論思想と、普徳などの一乗思想、恵空などの般若空観が多様な教学を成熟させ、宗教としての基礎を固めた。このような思想の追求とともに、信仰と実践のための宗教運動が多様な形で展開した。

新羅仏教における思想の浄化は、元暁に求めることができる。元暁思想の最大の特徴は「和諍思想」である。これは仏教の論争を和解させるという意味を持つ。元暁は、『華厳経疏』において普遍的世界に関する精緻な思想体系を樹立することにより、新羅における仏教哲学を確立した。さらに彼は、教学研究とともに衆生済度を強調し、生産に携わる階層を対象にした大衆の教化活動に専念することにより、多くの民衆を仏教徒として教化した。

円測は、当時東アジアの仏教界において激しく拮抗していた旧唯識と新唯識との対立を調和することのできる「和諍的唯識思想」を提示した。彼の唯識思想は道証と大賢に受け継がれた。また、憬興など別の傾向の唯識思想家も多く登場し、7世紀後半に唯識思想は新羅の仏教における重要な軸となった。唯識思想界は、弥勒と阿弥陀を信仰する大賢系と、弥勒と地蔵を信仰する真表系とに大別される。

義湘は華厳思想を先導した。華厳は、従来の様々な思想をまとめることによって最高の円満な教え(円教)を強調した思想である。彼は、衆生が中道の求道を通じてそれぞれの立場で成仏することができるという「本来成仏」を強調した。彼の華厳思想は、特に教団の平等な運営を実践することによって社会の安定の礎を築いた。弟子たちが師匠の講義を記録して『講義記』として編纂することで、学説の議論も続けられた。これらは教学の進展の基礎となった。華厳教団を代表する人々は「十大弟子」と呼ばれ、彼らが全国各地で建立したのが華厳寺·浮石寺·海印寺などの「華厳十刹」である。

新羅の仏教に少なくない影響力を及ぼしたのが密教である。中古期初期の密教は、災難を取り除き、福をもたらすことを願う人間の基本的な欲求を反映させたものである。従って、密教は治病活動を通じて影響力を強め、その過程で『薬師経』が活用された。中代以降の中期の密教は初期密教に基づいていたが、成仏という仏教の究極の目的に体系的にアプローチしようとした。新羅の密教は円光·安弘·密本などを元祖として展開され、その後、護国密教系と除病密教系とに分かれて発展した。聖徳王代以降は、追福のための『無垢浄光大陀羅尼経』を塔の中に安置する習慣が広まった。

7世紀前半になると石仏や寺院が多く造られた。これは寺院に布施を行う余裕のある階層が増えたことを意味する。寺院に対する国家や王室、貴族による関心と経済的な支援は、寺院を運営する上で重要な土台となった。次第に僧侶の数が増え、大衆の教化活動が活発になっていくと、国家が仏教教団に対する規制を強化する必要性がますます大きくなった。僧侶の出家に一定の形式が設けられ、個人が財貨の布施を投じて寺院を建てたり仏像などを奉納したりする行為を規制したのである。

このような業務を取り仕切った機関が僧政機構である。6世紀中頃に国統·都維那·大書省などの中央の僧官職が設置されはじめ、7世紀中頃には地方の僧官職である州統·郡統が設置されると同時に、仏教界の行政事務を司る実務官員が現れた。785年に政官が成立し、実務官員に僧侶が割り当てられるようになり、ようやく僧官制が定着した。国統は仏教教団のシンボルとしての代表者であり、都維那は新羅社会に先進的文化を伝えた技術担当で、州統は地方に仏事があるときに臨時でその行事を執り行った。成典は成典寺院の維持や田荘·奴婢の管理を行った。成典寺院は仏教界の統制という機能と、王室の寺院への奉仕の機能を持つ機構であった。

仏教儀礼としては、定期的な儀礼で毎日行われる日常の儀礼と、毎年一定の時期に行われる儀礼があった。前者には1日6回行う「六時礼懺」があり、後者には講経法会

や燃灯会、八関会などがあった。八関会は当初は戦死者慰霊の性格を持っていたが、善徳女王代以降は外敵を退けるための儀礼の性格が強くなった。統一以降は祝祭の色が濃くなる。燃灯会は灯籠を仏に供養する儀礼で、伝統的な宗教儀礼と先祖崇拝の行事が仏教儀礼の色彩を帯びて行われたものである。

7世紀中頃、百済と新羅において半跏思惟像が多く作られたことからもうかがえるように、中代は貴族や一般民衆すべてが弥勒を信仰の対象とみなした。これはつまり仏教が大衆化し、一般民衆にまで浸透した結果である。信仰の大衆化が進むと弥陀信仰と観音信仰も流行した。弥陀信仰は、人々が阿弥陀仏を真心込めて念仏すると、死後に極楽往生を遂げるという来世への信仰である。中代には僧侶たちによる経典の研究に後押しされ、阿弥陀信仰はさらに隆盛し、死後の追善と現世の往生を目的に広まった。観音信仰は国家の安寧を祈り、個人の現世での利益を願う現実救済の性格が強かったが、一方では弥陀の浄土往生と結び付く来世指向の傾向もあったため、当時の人々が最も傾倒した信仰の一つとなった。

下代の仏教

9世紀に入り、新羅社会は中央において貴族の分裂が激しくなっていく中で、地方勢力が反乱を起こす変革の時代を迎える。それとともに、それまでの新羅社会の指導理念であった華厳と唯識の教理中心の仏教は、新しく登場した禅宗にその指導力を奪われるようになった。

経典に対する理解で悟りを追求するこれらの仏教に比べ、禅宗は究竟の目標へと導く方便として、文字を超えた禅の具体的な実践と修行を通じて直接悟りを得るという仏教である。これは、従来の教理中心の仏教体制を否定する革新的なものであり、新羅社会の変化への必要に応じ、仏教界の根本的な改革への要望に応えるものであった。

新羅には憲徳王と興徳王のときに道義·洪陟らが中国から帰国し、南宗禅が本格的に伝来した。禅宗は全ての人に成仏の方法を教え、王室仏教の権威を縮小させた。道義は王京における反応が芳しくなかったため雪岳山(ソラクサン)に隠居したが、洪陟は王室から支援を受け、実相山門を開創した。このように、中国の南宗禅を伝え、新羅において独自の山門を開創したのが「九山禅門」である。慶州から遠く離れた辺鄙な場所に成立した九山禅門は、最初の禅宗山門である迦知山門(〈写真24〉)はじめ、実相山門·闍崛山門·桐裏山門·聖柱山門·獅子山門·曦陽山門·鳳林山門·須弥山門を指す。これらの山門は、新羅末期·高麗初期に仏教界に大きな影響力を行使した。禅宗が一世を風靡するとともに、文化にも新しい風が吹いた。禅僧の茶の文化が王室や真骨貴族の日常生活にも影響を及ぼしたのである。

禅宗寺院では鉄仏が主に造られた。仏像製作に必要な銅が足りなかったため、比較的容易に手に入れることのできた鉄を利用したのである。これらの鉄仏はほとんどが毘盧遮那仏である。毘盧遮那仏は本来華厳の中心となる仏である。それが禅宗で主に鋳造されたことを考えると、禅宗の由来は華厳宗に関連すると考えることができる。弟子たちは国家の承認を得た祖師の僧塔と塔碑を華やかに建てることによって、師匠の死を哀悼すると同時に、門派の影響力を誇示するという目的も達成した。

禅宗の一世風靡とともに、禅僧による風水説が大いに流行した。風水とは、地の気を調べることによってその地の性格を読み取り、地と人間がどのように結び付きを保っていくべきかを探る学問である。禅僧たちは、創建した自らの山門をそれぞれ新羅随一の勝地と自認し、そこを中心に新しい教団の勢力を確立するとともに、教化の中心として成長させ、地方文化の中心的役割を果たすよう試みた。九山禅門の各寺院は山と川が調和しており、風水説の特性がよく表されている。

写真 24　長興·宝林寺全景

下代における禅宗の流行は、教理を中心とした教団に大きな刺激を与えた。華厳教団は新羅における華厳思想の伝統を確認し、祖師を追悼すると同時に、無益な解釈に翻弄される問題点を自ら批判し、一方では祖師崇拝信仰と結社運動をもって信仰の形態を整備して対応しようとした。一方、下代の僧政は政官を中心に運営された。政法典の僧侶は国王の側近となって仏教界の仕事に携わる僧官であり、寺院と関連のある土地を調整し、また国家や王室が建立する仏寺の造営に深く関わった。中央の僧官は国統·都維那娘·大都維那·大書省·少年書省で構成され、地方の僧官は州統9人と郡統18人によって構成された。

新羅仏教の対外交流

新羅を含む東アジアの仏教は、求法僧の活動によって繁栄を謳歌した。仏教の発祥地インドを含む西域と中国が主な求法の対象となった。新羅の求法僧は7世紀前半から天竺、すなわちインドの様々な聖地を巡礼しており、那爛陀大学に留学することもあった。唐の義浄は『大唐西域求法高僧伝』に阿離耶跋摩·慧業·玄太·玄恪·慧輪ら新羅の求法僧7人の伝記を収録している。慧超は密教の経典を研究し、金剛智―不空と続く密教の伝統を確立した。彼はインド全域や中央アジアの様々な地域を旅し、『往五天竺国伝』という3巻の見聞録を著した。

インドに渡った新羅の求法僧の目的は、中国に輸入されなかった梵本の仏典や、輸入されたものであっても解釈に問題がある原本を手に入れ、仏教の聖地を参拝することにあった。新羅の天竺への求法僧は、そのほとんどが生きて帰ることはなかった。一方、中国への求法僧はほとんどが本国に帰ることができた。しかし、中には帰国せずに中国で一生を終えた僧侶もいた。彼らは中国において経典の翻訳や教理の解釈·実践などを行い、中国仏教の発展に多大な貢献をした。中国での求法を終えて帰った僧侶の多くは新羅で大いに歓迎され、王侯貴族や一般民衆から歓待を受け尊崇を集めた。

求法僧は新羅仏教の発展に貢献した。新羅仏教は伝来初期には呪術的要素が多く含まれていたが、次第に普遍的宗教として認識され、さらに仏教思想が本格的に紹介されると、一層の体系的理解を求めるようになった。そこで新羅王室は政策として求法僧を中国へ送り、先進的な仏教を学ばせた。求法僧が本国に帰る時には経典·仏像·仏舎利などを持ち込み、新羅文化の発展に寄与した。新羅·唐·日本の仏教は典籍を通じて相互交流を行ったが、その活発な交流があったからこそ、各国の仏教は国際色

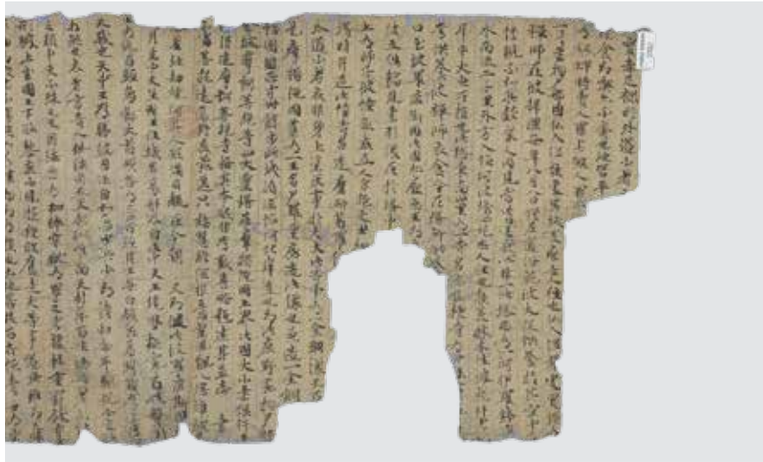

写真 25　慧超、『往五天竺国伝』の前部、フランスのパリ国立図書館

豊かに発展することができた。求法僧がもたらした中国の先進的な仏教思想は、新羅の宗派仏教の礎となった。

新羅の僧侶の著作も唐に紹介された。『十門和諍論』、『起信論疏』、『華厳経疏』など、元暁の多くの著作が唐に伝わり、広く読まれた。新羅の僧侶は唐全域を巡り、禅の知識を問い、聖蹟を巡礼した。彼らの多くが訪れた中国仏教の聖地は、文殊菩薩がとどまるとされた五台山、天台宗の本山である国清寺、慧能の舎利塔がある曹渓山、数々の寺院があった終南山を含む長安一帯など、広範囲にわたった。新羅の求法僧は東アジアの仏教の発展にも寄与した。一例として日本の仏教にも影響を与え、真言宗と天台宗の開創と発展に貢献した。

新羅は、政治的に対立していた高句麗や百済とも仏教を媒介として文化交流をかなりのレベルまで深めた。元暁と義湘が高句麗の普徳から涅槃学を学び、皇龍寺九重塔の建立時には百済の職人の阿非知が惜しみない助力を提供した。新羅朝廷と唐·日本との間の外交関係にも仏教が関わり、相互に仏像を贈ったり、使臣が寺院を参拝したりした。8世紀、新羅仏教は日本の仏教に多大な影響を与えた。多くの日本の僧侶が新羅に留学し、また新羅の僧侶が日本へ渡ったが、新羅の僧侶が日本に行ったのはほとんどが伝法のためである。新羅の学僧の多くの著作は日本に伝わって広まり、日本における古代の仏教学の発展に多大な影響を与えた。

4 仏教美術

統一新羅期の美術は、周知のようにほとんどが仏教美術といえる。絵画や書画も製作されたが、残念ながらほとんどが失われている。そのため、統一新羅の美術については仏教美術を中心に語らざるを得ない。仏教美術は寺院に残る。統一新羅期の寺院としては、おおよそ160寺が確認されている。なかでも現在慶州において実際に確認されている寺院は30寺余りで、現存する遺物はかなり少ない。しかし限られた遺物から新羅期の美術について推定することは十分可能である。

統一新羅期の仏教美術は、当時の教理中心の仏教と禅宗という、二つの柱に分けて見ることができる。ただし、慶州南山と仏国寺·石窟庵は遺物の数も多く、統一新羅期の美術における意味も特に重要であるため、それぞれ個別に見ていきたい。仏教美術品は東宮や月池のような王室関連の遺跡から発見される例もあるが、そのような特殊なケースを除くと、ほとんどが寺院に安置された仏像·仏塔·舎利器が中心で、梵鐘·金鼓などの法具、石燈などが多い。

教理中心の仏教の発展と仏教美術の開花

王京

新羅の寺院は当初は王京内で多く建てられたが、次第に地方へと広まっていった。王京には皇龍寺·四天王寺·奉徳寺などの成典寺院をはじめ、芬皇寺·望徳寺·皇福寺·三郎寺·仏国寺·甘山寺など数々の寺院があった。『三国遺事』には、「寺は星のように広がり、塔は雁が飛ぶ姿のように立ち並ぶ(寺寺星張·塔塔雁行)」と記されている。仏教の信仰が広まり、貴族による寺院や塔の建立が盛行し、地方にも多くの寺院が創建された。

新羅では、統一後まず四天王寺が創建された。義湘法師が唐から帰国した際、文武王(在位661~681)に唐の侵略を知らせ、それに備えて679年に四天王寺が建立された。龍宮に入って秘法を授かったといわれる明朗が四天王寺の創建を提案したとされる。四天王寺は護国寺院として創建されただけでなく、寺院の管理機構である成典が設置された非常に格式の高い寺院であった。

四天王寺は新羅で初めて双塔が建てられた寺院である。どのような理由でもともと一つであった塔を双塔にしたのかについては定かではない。これについては、三国の統一に関連付けて、新羅の独創的な試みであるとする解釈もあるが、同時期に中国や日本でも双塔が建てられた例があるため、統一新羅期独自の特殊なケースとみる見解は一般的ではない。四天王寺の双塔は方形基壇の各面に階段が付いていることから、本来内部へ入ることができる木塔であったことがわかる。

統一新羅期において、「四天王」は唐の侵略を防ぐことができる存在とされていた。中古期に建てられた巨大な護国寺院としては皇龍寺があったが、「四天王」がその位置に代わったのである。皇龍寺や金光寺など従来の寺院に道場を設けたのではなく、わざわざ「四天王寺」という名称の寺院を創建したことからも、この時期の四天王の重要な位置付けがわかる。3年後に建てられた護国寺院である感恩寺の東西双塔の舎利器にも四天王像が納められていた。感恩寺は、護国の龍となって国を守護するとした父文武王のために、神文王が建てた寺院である。このように統一後間もなく、護国に関連する寺院では、四天王の名称ないし四天王寺には特別な意味が与えられた。

護国寺院である四天王寺址に対する発掘の結果、期待されていた四天王像は

見つからなかった。逆に、従来木塔の基壇部に装飾されていた像が、推定されていた四天王像ではなく、神将像であることが明らかとなった(〈図6〉、〈写真26〉)。この神将像は甲冑を身に着け武器を持つ将帥の姿をして生霊座(しょうりょうざ)の上に座っており、型を用いて作られたものである。割れた状態であるが、細部に至るまで造形と完成度に優れ、石窟庵の仏像とともに統一新羅の仏像の代表作となっている。特に『三国遺事』に記載された「良志」という仏師と何らかの関連がある可能性が浮上し、韓国古代仏教彫刻史における重要な研究対象となっている。

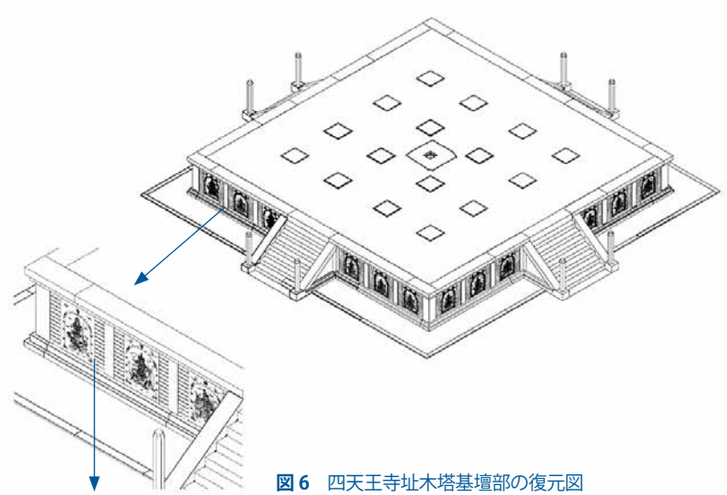

図 6　四天王寺址木塔基壇部の復元図

写真 26　四天王寺址木塔基壇部神将像

682年に神文王(在位681~692)は父文武王を称え、感恩寺の東西に三重石塔を建てた(〈写真27〉)。塔は二段の基壇の上に三層の塔身が立つもので、規模や様式面で同一の双塔である。四天王寺の双塔は木塔であったが、感恩寺の双塔は石塔で、現存する双塔の中では最古の例である。三国の統一を成し遂げた新羅の気迫を遺憾なく示す壮大な石塔である。東西の二つの塔から発見された舎利器も、力強さと精巧さを兼ね備えた新羅工芸技術の白眉である。その舎利器の外箱に四天王像が表現されている。

四天王像は別作りされて舎利器に取り付けられており、四天王像としては現存最古である(〈写真28〉)。四天王像の主な役割は舎利器の中に安置された舎利

写真 27　慶州·感恩寺址東·西三重石塔

写真 28　感恩寺址東·西塔舎利器

の守護にあったが、感恩寺が護国寺院であるだけに、護国との関連性もある。図像は、一方の手に宝塔を持つ北方の多聞天があり、四天王像の特徴を明確に備えている。甲を着用し、手には宝塔や各種武器を持つが、冑は被っていない。約20cmの小さな四天王像であるにもかかわらず、顔の表現、甲の細部に至るまで正確に刻まれており、新羅における四天王像の代表作と言っても過言ではない。

月池、すなわち雁鴨池の発掘により、10点の金銅板仏が出土している。金銅三尊板仏が2点、菩薩板仏が8点である。金銅板仏には銘文はないが、月池の造成時期と周辺の建物の完成時期がおおよそ680年である点、建物址から調露2年(680)銘の塼が出土している点などを根拠に、近い時期に製作されたものと考えられる。特に金銅三尊板仏は、統一新羅期以前には見られない新しい形式·様式を備えている(〈写真29〉)。中央の仏像は両肩を覆う通肩式の袈裟に転法輪印の印相を持ち、両側の菩薩像は腰をひねる姿勢が特徴的である。このように、身体表現が非常に積極的な金銅板仏の形式が突如として現れたのは、中国から新たに流入した模本の影響を受けたためと推定される。

これら金銅板仏は東宮·内仏殿に安置されたものである。光背の縁に孔がある

写真 29　慶州·月池出土の金銅板

写真 30　青銅塼仏の型

ため、日本の玉虫厨子などのような厨子や、法隆寺献納宝物第198号の例のような小型木製仏龕などの構造物に取り付け、礼拝用として使用したと推定される。同形式の板仏に九黄洞(クファンドン)苑池出土の金銅仏菩薩坐像があり、同一の印を結ぶ華厳寺西五重石塔の青銅製塼仏の型(〈写真30〉)もあるが、非常に稀な例である。このことから、この板仏の形式や仏像の印形はそれほど流行していなかったものとみられる。

皇福寺址三重石塔の舎利函に安置された純金仏立像も中国から新しいモデルを早々に受容し製作された新しい様式の作品である(〈写真31〉)。この仏立像が安置された舎利函の蓋の内側には350字にわたる長い銘文が刻まれている。その記録により、孝昭王元年(692)に神文王の妃と子の孝昭王が先王の冥福を祈るために石塔(〈写真32〉)を建てたものであったことがわかる。その後、706年には聖徳王が神文王と神文王妃、孝昭王のために仏舎利、純金製弥陀像、『無垢浄光大陀羅尼経』(略称『無垢浄経』)などを石塔に安置し、王室の繁栄と太平の世を祈願している。なかでも純金仏立像は通肩式の袈裟にU字形の服の襞が胸から膝下まで波打って流れ、左手は胸部に上げ袈裟を握っている。新羅の仏立像の中で、インドの仏像のように一方の手で袈裟を握った姿が表現されたものは非常に珍しい。

一方、銘文の中の『無垢浄経』という字は、特に注目に値する。これは704年、

写真 31　皇福寺址石塔安置純金仏立像

写真 32　慶州·皇福寺址三重石塔

中国の弥陀山と法蔵が翻訳した経典で、翻訳してわずか2年で新羅の王室に伝わっているからである。この事実により、当時、新しい彫刻様式がどれほど迅速に新羅に受け入れられていたかを知ることができる。新羅王室の建てた皇福寺の純金仏立像は、舎利荘厳具に仏像を安置した最初の例である。唐との活発な交流を通じて、新しい仏教文化を取り入れるのに積極的だった新羅の彫刻の特徴を理解する上で重要な資料となっている。

慶州市外東邑(ウェドンウプ)掛陵里(ケルンリ)の甘山寺は、聖徳王18年(719)に重阿飡の金志誠が、両親の冥福を祈り国王と王族の安寧を祈願するために創建した寺院である。彼は母のために弥勒菩薩を、父のために阿弥陀仏を製作した(〈写真33、34〉)。光背の裏面の造像記には製作時期と製作者が明記されており、韓国の仏教彫刻史において非常に重要な作品となっている。

このうち阿弥陀仏は独特な服の襞を持つことで広く知られている。慶州博物館が所蔵する砂岩製の仏立像もほぼ同様の特徴を持つ。この2つの作品は、厚い肩、

写真 33　慶州·甘山寺阿弥陀如来立像

写真 34　甘山寺弥勒菩薩立像

発達した胸、くびれのある腰、太い腿の立派な体格の立像であり、密着した服の襞が体のボリューム感を一層引き立てている。さらに注目すべきは袈裟の襞である。U字形を呈する襞が胸から腹部にわたっており、両足にかけてY字形に分かれて流れる。このような服の襞は通称「優填王(うでんのう)式」と呼ばれる。この2つの仏立像を起点に、数々の統一新羅期の金銅仏立像が同一形式で作られた。

弥勒菩薩像にもいくつか興味深い点がある。通常この時期の弥勒菩薩像は半跏思惟の姿勢が一般的であったにもかかわらず、あえて立像の形で造形している点、また弥勒菩薩像であるにもかかわらず、同時期の観世音菩薩における図像の特徴の一つである宝冠化仏を持つ点などが挙げられる。

写真 35　慶州·掘仏寺址四面仏像

慶州の掘仏寺址にある四面仏像(〈写真35〉)は、大きな岩の四面に様々な仏像や菩薩像が刻まれている。東に薬師仏、西に阿弥陀仏、そして南と北にはそれぞれ釈迦牟尼仏と弥勒仏と推定されるものが配されている。また、北面の弥勒仏(推定)の隣には、線刻の十一面観世音菩薩像がある。丸彫·浮彫·線刻など彫刻の技法も様々であると同時に、座像や立像などその種類も多岐にわたっている。柔らかくダイナミックな彫刻の技術は、統一新羅前期の仏教彫刻の特徴を如実に表している。

慶州遠願寺址の双塔は、塔身と基壇に四天王像と十二支神像の彫刻が施されている点が特徴である(〈写真36〉)。上段の基壇には十二支神像が刻まれているが、頭部は獣で体は常服を着用した人間の姿である。1層目の塔身には甲をまとい武器を携えた四天王像が表現されており、遠願寺を「王京を向き、倭寇の侵略を防ぐための護国寺院」と記した『三国遺事』の記事と関連付けている。

遠願寺塔と同時期に建てられた注目すべき塔として、獐項里(チャンハンリ)の西五重石塔がある(〈写真37〉)。吐含山(トハムサン)東南麓にある寺跡に西塔がほぼ完全な状態に保たれている。5層の塔身がスマートな比率を保ち、1層目の塔

写真 36　慶州·遠願寺址西三重石塔

身に躍動的な金剛力士像が刻まれた優れた石塔である。ここでは吐含山の石材を用いて製作された仏像が破損した状態で見つかったため、復元されて国立慶州博物館の庭に置かれている(〈写真38〉)。

7世紀後半から8世紀初め頃には、韓国だけでなく、東洋三国において梵鐘がすでに独自の形式を持って定着·発展していた。統一新羅時代に作られた鐘は計9点が確認されている。韓国に残る5点のうち2点は破損しており、残りの4点は日

写真 37　慶州·獐項里西五重石塔

写真 38　獐項里石造仏立像

写真 37　慶州·獐項里西五重石塔　**写真 38**　獐項里石造仏立像

本にある。その中の上院寺鐘(725年)は韓国現存最古の鐘である(〈写真39〉)。その完成度から、上院寺鐘が製作される以前に、韓国ではすでに梵鐘が完全に定着していたことがわかる。

上院寺鐘が製作された40年余り後に聖徳大王神鐘(771年)が完成した(〈写真40〉)。高さが3.75mに及ぶ記念すべき作品といえる。聖徳王の功徳を称え、中代における王室と国家の繁栄を祈願するために景徳王代に製作が計画されたが、完成は恵恭王7年(771)にようやく実現した。銘文によると、「大凡深遠なる真理は目に見える形象以外のものまでも含まれる。目で見てもわからず、真理の音が天地に轟いてもそのこだまの根本を知らず。従って、仏陀が時代と人によって比喩を用いて真理に気付かせるため、神鍾を下げて真理の円い音(円音)を聞かせた」とある。大きさ·形·文様·音のすべての面において新羅時代を代表する梵鐘である。

統一新羅期には、栢栗寺の金銅薬師仏立像、仏国寺の毘盧遮那仏像と阿弥

写真 39　上院寺銅鐘

写真 40　聖徳大王神鐘

写真 39　上院寺銅鐘　**写真 40**　聖徳大王神鐘

陀仏像の三大金銅仏がある。仏国寺の2つの金銅仏については後述し、ここでは栢栗寺金銅薬師仏立像(〈写真41〉)についてのみ説明する。高さ1.77mのこの立像は、528年の仏教公認のために殉教した異次頓を称えるための寺院である栢栗寺にあったものを、現在は国立慶州博物館で展示している。身体の性格な比率や流麗な服の襞が優れた造形技法により表現された仏像で、韓国の彫刻史および服飾史における非常に重要な資料となっている。

新羅時代の絵画は、残念ながら754~755年に製作された「大方広仏華厳経写経」変相図1点しか残っていない(〈写真42〉)。この写経は、造成記によると、慶州皇龍寺の僧侶、縁起法師の発願により製作されたものである。皇龍寺の縁起法師と華厳寺を創建した縁起法師を同一人物とみる見解もあるが、確かなことはわかっていない。写経は実叉難陀(652~710)が翻訳した『新訳華厳経』80巻のうち、第1~10巻と第43~50巻を筆写したもので、変相図は写経の前に貼られていたもの

写真 41　慶州·栢栗寺金銅薬師仏立像

写真 42　大方広仏華厳経写経変相図

である。絵は紫色の楮の紙に金泥と銀泥、そして墨により描かれている。表紙には表と裏があり、現在2つに分かれている。表には神将像が、裏には獅子座に座った毘盧遮那仏や上首菩薩などが描かれている。菩薩の豊満で優雅な身体を写実的に表現すると同時に、仏陀の理想世界を忠実に描写した、新羅を代表する絵画である。

新羅の絵画は、この変相図1点しか残っていないが、下代の新羅末期に至るまで多様な仏画が製作されていたことが記録に残っている。仏画の形式では、掛け軸より建物の内部または外壁に描かれた壁画が流行したようである。仏画のテーマとしては十一面観音、千手観音などの観音菩薩図と弥勒菩薩および弥勒仏画が多かったが、これは観音信仰と弥勒信仰がより流行していた統一新羅期の仏教信仰の傾向とも一致するものである。

地方

統一新羅期の地方のうち、嶺南地域は文化財の宝庫といわれるほど遺跡·遺物が多く残っている。なかでも北部地域に統一新羅期以降も中古期の美術の特徴を残した作品がかなり多いという点は興味深い。奉化(ポンファ)北枝里(プクジリ)磨崖仏(〈写真43〉)と栄州(ヨンジュ)可興里(カフンリ)の磨崖仏がその代表である。奉化北枝里寺跡の磨崖仏は、自然の岸壁を削って空間を作り、その中に仏像をはっきりと浮彫している。頭部と手が大きく全体的に円い姿は、南山(ナムサン)拝洞(ペドン)や長倉谷(チャンチャンゴル)出土の中古期における仏像の特徴を如実に示している。仏像の製作時期は7世紀後半と推定される。同様式の磨崖三尊仏に、栄州市可興里の西川の川岸の岩に表された磨崖三尊仏がある。

慶尚北道軍威(グンイ)八公山(パルゴンサン)の絶壁にある軍威三尊石仏も過渡期の特徴を示している。本尊は中古期の仏像の特徴を備えているが、左右の菩薩立像は腰をひねった姿勢の新しいタイプのものである(〈写真44〉)。左右の菩薩像は類似した様式であるが、宝冠にそれぞれ化仏と浄瓶が刻まれているため、観世音菩薩と大勢至菩薩であることがわかる。

金泉葛項寺の東西三重石塔と石仏坐像も注目に値する(〈写真45、46〉)。東塔の基壇に758年(景徳王17)に言寂法師の三兄妹が建立したとする銘文があり、正確な年代を知ることができる。言寂法師の三兄妹は、後に第38代元聖王となる金敬信の叔母と叔父である。ただし、字が刻まれたのはそれより30年ほど後の元聖王の時と推定される。丸い顔に口元に微笑みを湛えた小さな石仏坐像は、塔と同じ758年頃に製作されたものと考えられる。

山清(サンチョン)石南岩寺址の石造毘盧遮那仏像は、韓国最古の毘盧遮那仏である(〈写真47〉)。この像は現在、山清の内院寺に移されている。舎利壺(〈写真48〉)はこの仏像の台座の中央の孔から発見されたと伝わっており、銘文に「永泰二年丙午」と記されていることから766年(恵恭王2)に作られたことがわかり、現存最古の毘盧遮那仏像として認められている。山清断俗寺は率居が維摩居士像

写真 43　奉化·北枝里磨崖仏

写真 44　軍威·三尊石仏

写真 45　金泉·葛項寺東三重石塔

写真 46　葛項寺石仏坐像

写真 47　山淸·石南岩寺石造毘盧遮那仏像

写真 48　永泰二年銘舎利壺

写真 49　昌寧·述亭里東三重石塔

写真 50　昌寧·仁陽寺造成碑

を描いた場所としても名高い。率居は新羅最高の画家で、景徳王(在位742~765)代の8世紀中頃に活動したことが知られている。率居の描いた皇龍寺の老松図に、本物の木だと思い込んだ鳥がとまろうとしてぶつかったという説話が残されている。王京から遠い断俗寺を訪れて作品活動を行ったといわれるが、残念ながら記録が残るのみである。

統一新羅期、慶南の昌寧(チャンニョン)でも重要な寺院が多く建てられた。ここには述亭里の東三重石塔と西三重石塔がある。東三重石塔はスマートな外観でありながら堂々たる印象を与え、優れた技術が見られる王京以外では珍しい秀作である(〈写真49〉)。810年頃に建てられた昌寧仁陽寺造成碑(〈写真50〉)は、前面に僧像があり、側面と裏面に銘文がある独特な形式を持つ。特に僧像は類例が少なく、銘文には771年(恵恭王7年)に仁陽寺の梵鐘を製作したときからこの碑を建てた憲徳王2年(810)までの40年間について記している。

昌寧観龍寺薬師殿石仏坐像は寺院の境内に、龍船台石仏坐像は西に約500メートル離れた山頂に位置する(〈写真51、52〉)。近年にはそれぞれの台座から銘

写真 51　昌寧·観龍寺薬師殿石仏坐像

写真 52　昌寧·龍船台石仏坐像

文が発見され、前者は恵恭王8年(772)に作られた弥勒像で、後者は聖徳王21年(722)から聖徳王30年(730)の間に作られたことが記されている。しかし仏像と台座が一体のものであるのか、銘文は後代に追刻されたものである可能性はないかなどについて議論されている。一方、昌寧末屹里(マルフルリ)寺址からは柄香炉·風鐸·錠·把手装飾など、多くの金属工芸品が入った縦長の鉄製釜が出土している(〈写真53〉)。埋められたのは高麗以降とみられるが、出土遺物は統一新羅時代に使われた工芸品が主流である。

9世紀に入ると、正確な製作時期がわかる作品が多くなる。慶南咸安(ハムアン)防禦山(パンオサン)の絶壁に線刻で刻まれた三尊仏立像は、801年(哀荘王2)の銘文がある薬師三尊である。本尊は左手に薬壺を持っており、薬師如来像であることが分かる。左右菩薩はその脇侍の日光·月光菩薩である。同じく9世紀の仏像に、八公山冠峰の石造如来坐像(〈写真54〉)がある。頭の上に平らな石を載せている姿がまるで笠(カッ)を被っているようであるということから、カッパウィ仏陀とも呼ばれる。仏像の後ろに広がる屏風のような岸壁が光背のようにも見える。豊満でありな

写真 53 昌寧·末屹里寺址の柄香炉

写真 54 大邱·八公山石造如来坐像

がら厳かな顔の表情、形式化された服の襞、平面的な身体は、8世紀の仏像とは異なる9世紀の仏像ならではの特徴である。

統一新羅期の地方で甎塔が多く建てられた点は興味深い。甎塔は特に安東地域に多く分布している。漆谷の松林寺五重甎塔は統一新羅初期に建てられたものを高麗時代に建て直している。基壇は花崗岩であるが、塔身は土煉瓦によって建てられている。1959年、この塔を解体·修理した際に、2層目の塔身から亀形の石函が現れ、中に舎利荘厳具が納められていた。建物形の舎利器(〈写真55〉)、ガラス瓶、ガラス杯が注目を集めている。ガラス杯の形は麻立干期の古墳から出土している西域系のガラス器に通じるところがある。安東地域の甎塔は、造塔里五重甎塔(〈写真56〉)と法興寺址七重甎塔がその代表である。

大邱の桐華寺毘盧庵にも9世紀の三重石塔や舎利壺、そして毘盧遮那仏坐像など重要な作品がある(〈写真57〉)。石塔は863年(景文王3年)に建てられたもので、同時に作られたと推定される石造毘盧遮那仏坐像は智拳印の印相、化仏が配された光背、7頭の獅子像がある台座の中台が特徴的である。

この時期の仏教工芸品は末屹里寺址をはじめ、軍威麟角寺出土の一括遺物、梵鐘、幢竿龍頭など様々な種類がある。麟角寺の推定僧塔址遺構からは柄香炉·香盒·浄瓶·円筒形二重盒·金鼓·皿·小型金銅迦陵頻伽像などの金属製品や、中国越州窯

写真 55 漆谷·松林寺舎利器

写真 56 安東·造塔里五重石塔

写真 57 大邱·桐華寺毘盧遮那仏坐像

写真 58　軍威･麟角寺僧塔址出土の遺物

青磁平鉢など各種遺物が出土している(〈写真58〉)。その中には唐から輸入したものが多い。

833年(興徳王8)に作られたとされる銘文がある晋州(チンジュ)蓮池寺梵鐘(〈写真59〉)は、16世紀末期、慶長の役の際に日本軍が略奪しており、現在は日本の福井県敦賀市常宮神社に収蔵されている。日本にある韓国の梵鐘約50点の中で、唯一日本の国宝(第78号)に指定されているものである。金鼓は青銅製鼓で、寺院で時刻を知らせ、または民衆を集める必要がある時に使われた単純な道具で、横に刻まれた「咸通陸歳乙酉」の銘文から865年(景文王5)に製作されたことがわかる金鼓(〈写真60〉)は、同心円文の素朴な装飾が施されている。栄州豊基出土の幢竿龍頭は、幡を幢竿の頂部に掛けることができるように作られた道具である(〈写真61〉)。今にも飛びかからんばかりのダイナミックな龍の姿と、口の内側に滑車を付けた構造から、新羅工芸の美意識と技術の高さを窺うことができる。

京畿地域では、ソウル鍾路区(チョンノグ)の蔵義寺址と安養(アンヤン)の中初寺址の幢竿支柱が名高い。莊義寺址の莊竿支柱はあまり装飾がなく素朴であ

写真 59　晋州(菁州)･蓮池寺梵鐘

写真 60　「咸通」銘金鼓

写真 61　栄州出土の幢竿龍頭

写真 62　安養·中初寺址幢竿支柱

写真 63　鉄原·到彼岸寺鉄造毘盧遮那仏像

るが、現在ソウルにある唯一の幢竿支柱という点で意味深い。中初寺址の幢竿支柱は、銘文により寺院名と製作時期を知ることができる唯一の幢竿支柱である(〈写真62〉)。外面の上部を広く削っていること以外はほとんど装飾が施されておらず、幢竿を固定するための孔や溝を上下に設けている。銘文により、興徳王元年(826)8月28日に作業に取りかかり、翌年2月30日に完成したことがわかっている。

江原地域の注目すべき仏像としては、865年(景文王5)に製作された到彼岸寺の鉄造毘盧遮那仏坐像がある(〈写真63〉)。この作品は台座まですべて鉄製であることも特徴的であるが、背面に銘文があることが最も重要である。銘文には、約1500人に上る地方の民衆の信徒組織によりこの仏像が製作されたことが記されており、当時の仏教界の変化を示している。三和寺鉄造盧舎那仏坐像は、背面で発見された銘文により、統一新羅後期に作られた盧舎那仏像であることが明らかとなった。銘文が逆に刻まれている点が特徴的であり、吏読を用い漢字を韓国語の語順で配列した文章など、様々な分野の研究にとって重要な資料となっている。

湖南(ホナム)·湖西(ホソ)地域では、仏碑像をはじめ、仏像·僧塔·石塔·石燈·幢

写真 64　燕岐·癸酉銘阿弥陀仏碑像

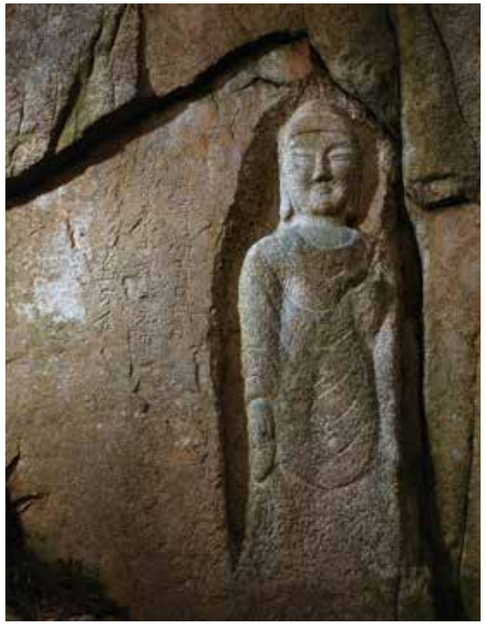

写真 65　洪城·竜鳳寺磨崖仏立像

竿支柱·舎利荘厳具·銅鐘·鉄製幢竿·鉄製釜·木造仏龕など非常に多様な遺物が残っている。まず、680年頃に製作された仏碑像が忠清南道(チュンチョンナムド)燕岐(ヨンギ)地方で集中して発見されている点が注目される(〈写真64〉)。これらは碑形の石に仏像と文字を刻んでいることから仏碑像と呼ばれる。燕岐地方出土の仏碑像は計7点である。「阿弥陀」尊名の銘文により、中国との交流が容易であった燕岐地方に新しい信仰と図像が導入されたことや、新羅に編入された旧百済人の祈願を垣間見ることができる資料である。

忠清南道洪城(ホンソン)の龍鳳寺には、仏像の隣に799年(昭聖王1)に作られたことが記された銘文がある磨崖仏立像がある(〈写真65〉)。岩を龕室の形に削り、その中に仏像を刻んでいる。左手は上に上げ、右手は下ろして体に密着させた独特な形である。このような素朴な表現は、地方において仏像を作りはじめた初期段階において見ることができる。

全羅南道(チョルラナムド)求礼(クレ)の華厳寺の四獅子石塔は、湖南地方における石塔の白眉である(〈写真66〉)。華厳寺覚皇殿の裏手にある丘、すなわち孝

写真 66　求礼·華厳寺四獅子石塔

写真 67　報恩·法住寺双獅子石燈

臺(ヒョデ)にある。上段の基壇に四頭の獅子が3層の塔身を支えており、その中心に僧侶とみられる人物が供養物をもって佇む姿が表現された独特な石塔である。下段の基壇には天人像12体が、1層の塔身には扉の横に金剛力士像·四天王像·菩薩像が刻まれている。相対する覚皇殿前の石燈は、2頭の獅子が支えている形であり、高さ6.4mで韓国最大の規模である。

湖西·湖南地域には石燈が多く残る。光陽(クァンヤン)中興山城の双獅子石燈、潭陽(タミャン)開仙寺石燈、そして扶餘(プヨ)無量寺石燈、報恩(ポウン)法住寺の双獅子石燈などである。特に法住寺双獅子石燈は、2頭の獅子が互いに胸を突き合わせて立ち、前足と口で火袋を支えている。鬣と緊張感みなぎる脚の筋肉が優れて写実的である(〈写真67〉)。開仙寺の石燈は火袋に868年(景文王8)と891年(真聖女王5)の銘文が刻まれた貴重な事例である(〈写真68〉)。

この地域の独特な遺物に、法住寺石造喜見菩薩立像がある(〈写真69〉)。喜見

写真 68　潭陽·開仙寺石燈

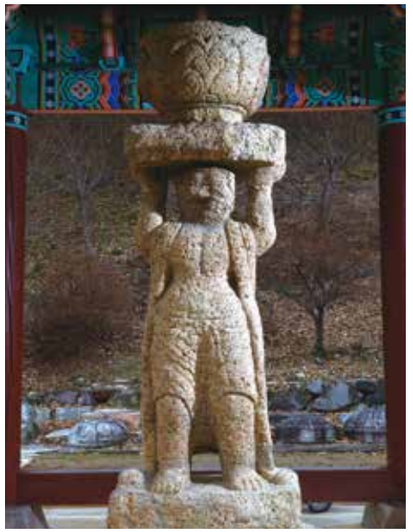

写真 69　法住寺石造喜見菩薩立像

写真 70　益山·弥勒寺址金銅香炉

菩薩とは、『法華経』に記される苦行を楽しむ菩薩のことを指す。この像は両手と頭部で大きな香炉を支える珍しい彫像である。この像は同寺院の双獅子石燈と同一作者の作品と推定される。

金属工芸品としては益山(イクサン)弥勒寺址の金銅獣脚香炉、清州(チョンジュ)雲泉洞梵鐘がある。香炉は、半円形に高く聳える蓋、平たい盥形の胴部、4本の脚で構成されている(〈写真70〉)。特徴的な獣形脚は別作りして鋲留めされている。唐の慶山寺址出土品に類似するため、唐からの搬入品か、あるいはその影響を受けて新羅において製作されたものとみられる。雲泉洞梵鐘(〈写真71〉)は、頂部に韓国の梵鐘の特徴である龍鈕と音筒を備えており、その下に天人像のある蓮郭帯、裾を翻して琵琶と笛を演奏する天人像が配されている。

幢竿支柱は公州(コンジュ)の甲寺にある鉄製幢竿と石製支柱、大通寺址である班竹洞(パンジュクトン)弥勒寺幢竿支柱が挙げられる。甲寺の鉄製幢竿は現在鉄筒24本が繋げられているが、従来は28本だったものが高宗30年(1893)に稲妻に打たれて4本が損傷したとされる。鉄製幢竿と石製支柱がほぼ完全な状態に保たれている貴重な資料である(〈写真72〉)。

写真 71　清州·雲泉洞梵鐘

写真 72　公州·甲寺鉄幢竿

仏教美術の博物館、慶州南山

慶州の南山は、仏国寺や石窟庵とともに慶州を代表する仏教遺跡である(〈写真73〉)。南山の麓には多くの寺跡が残り、そこには仏像や塔が散在している。二峰を中心に、約30の渓谷や稜線が形成されており、東南山(トンナムサン)と西南山(ソナムサン)に大別される。東南山は急傾斜であるが、西南山は傾斜が緩慢で長いため、ほとんどの仏教遺跡は後者に集中している。慶州南山の仏跡は7世紀頃に造営が始まり、9~10世紀まで稜線と渓谷にそって随所に造られた。現在までに確認されている仏教遺跡だけで140ヶ所に達し、約100体の仏教彫刻と数十基の仏塔が存在する。2000年、慶州南山が世界遺産「慶州歴史遺跡地区」の一つに選ばれたのも、ここが新羅千年の息吹を感じさせる歴史の宝庫であるためである。

写真 73　慶州·南山

東南山の仏跡

東南山を代表する作品は、壮麗な彫刻を誇るタプコル磨崖四方仏である(〈写真74〉)。高さ約9mの大岩の四面に計20基の仏教尊像が彫刻されている。岩の各面には仏像や菩薩像、天人像、供養像、九重と七重の木塔、牡と牝の獅子像など、様々な仏教尊像が調和して描かれている。現在、三重石塔が復元されている岩の西に平地式の木造構造物の痕跡が残っており、この場所に寺院があったことがわかる。

東南弥勒谷には、高さ2.44mの仏坐像がある(〈写真75〉)。この仏像は菩提寺石仏坐像として知られ、その名は『三国史記』と『東京雑記』に記されているが、現在菩提寺とされる場所が正確であるのか確証はない。この仏像は仏身·光背·台座をすべて備えているだけでなく、顔も損傷を受けたところがない。印相は、右手を膝下まで下ろした降魔触地印である。光背は花文·火焔文化仏で華やかに装飾されており、背面には薬壺を持つ薬師仏坐像が浅い浮彫で刻まれている。作品の状態も良好であり、顔や台座などに表された技量も秀でたものである。

1959年の第一宮古島台風(サラ台風)の時、南山鉄瓦谷(チョルワゴル)の入口で発見された仏像頭部(〈写真76〉)は、頭部の高さだけで150㎝を超える巨大さを誇る。髪が刻まれていない素髪の頭部に、高い肉髻を持つ。切れ長の目と厚い唇、そして唇の下に半月形に太く刻まれた線が特徴的であるが、耳が明確に表現されていないため、未完成品とみる説もある。

東南山だけでなく南山全体を代表する奉化谷七仏庵四面仏(〈写真77〉)は、中央本尊の高さが2.66mに達する。東を向く広い岩の面に磨崖三尊像が刻まれ、その前面に置かれた巨大な石柱の四面に1体ずつ仏像が彫刻されている。磨崖三尊仏の本尊像は蓮華座の上に座っており、左右の脇侍菩薩像は本尊を向いている。本尊仏は統一新羅期に大いに流行した降魔触地印の印相を示す。この四面仏はその後展開する新羅石塔の四面仏の様式の前兆であるという点で、新羅仏教彫刻史において重要な意味を持つ。

この七仏庵から頂上に向かって登ったところに、神仙岩磨崖菩薩像がある(〈写真78〉)。東南向きの岩に浅く掘った龕室が設けられ、その中に高浮彫の菩薩像が彫刻されている。菩薩像は雲上の台座に腰掛けており、安楽な姿勢で左足を置いた、いわゆる「遊戯座」となっている。慶州が眺望できる山頂の岩面に、雲に乗った菩薩坐像の彫刻が施されており、あたかも天から舞い降りたような神秘的な雰囲気を醸している。

写真 74　タプコル磨崖四面仏

写真 75　弥勒谷仏坐像

写真 76　鉄瓦谷大仏頭

写真 77　七仏庵四面仏

写真 78　神仙岩磨崖菩薩像

西南山の仏跡

西南山には、東南山に比べるとかなり多くの仏教彫刻や塔が残っている。南山西側の麓の寺跡には、昌林寺三重石塔が立つ(〈写真79〉)。この石塔の中から、陀羅尼経写経文とともに、「無垢浄塔」と記された銅板の「塔誌」が発見された。それにより、この塔は無垢浄塔とも呼ばれた。この時代に流行した無垢浄塔の製作とその信仰を知ることができる。製作時期は文聖王17年(855)で、塔誌の文字は王羲之の字体が集められ刻まれている(〈写真80〉)。

潤乙谷の鉤形の自然岩壁には、計3体の仏像が刻まれている(〈写真81〉)。南向きの「一」字形の岩壁に2対の仏像が、西向きの棒状の岩壁には1体の仏像が配されている。中央の仏像の左肩付近には「太和乙卯九年」の銘文があり、製作年代

写真 79　慶州·昌林寺址三重石塔

写真 80　無垢浄塔願記

写真 81　潤乙谷磨崖仏

写真 82　三陵谷仏坐像

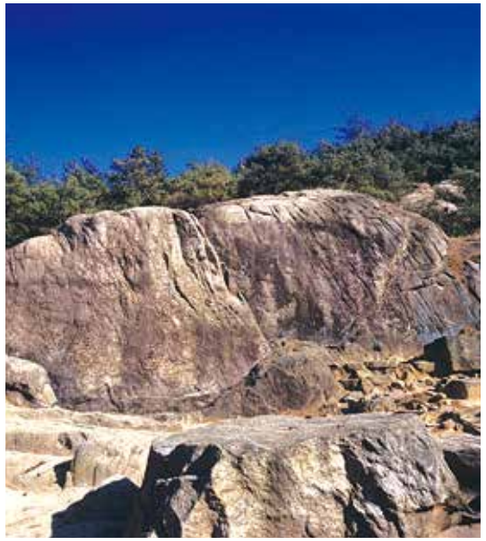

写真 83　三陵谷線刻六尊仏立像

は835年頃と推定されている。しかし3体すべて彫刻技法が異なり、同時期に作られたかどうかは定かでない。

三陵谷には、渓谷にそって仏像が随所に作られている。渓谷に沿って登ると最初に見える頭部のない仏坐像(〈写真82〉)は、左肩と胸の下部に精巧に彫刻された帯の結び目が特徴的である。そこからもう少し登ると、1枚の絵のような三陵谷線刻三尊仏立像が見える。広い自然岩壁に6体の菩薩像が線刻されている。正面に向かって左には仏立像と供養菩薩像が、右には仏坐像と脇侍菩薩立像が刻まれている(〈写真83〉)。新羅で線刻の磨崖仏は8世紀後半から製作されるようになるが、その代表作がこの三陵谷線刻六尊仏と、慶南咸安の防禦山磨崖仏(801)である。

三陵谷石仏坐像は堂々とした肩部と胸部、そして下半身が特徴的である(〈写真84〉)。台座は上·中·下台で構成された三段八角蓮華座で、中台の各面には卓脚模様の彫刻が施されている。三陵谷の頂上付近にあり、国立中央博物館に移されている薬師仏坐像(〈写真85〉)は、仏像の胴体·光背·台座をすべて備えており、全体的にほぼ損傷がなく、完全な状態である。腹部の前で左の掌を上に向けて宝珠を持つ薬師仏坐像で、八角台座の中台の香炉と供養天人像の彫刻が独特な南山の代表作である。

写真 84　三陵谷石仏坐像

写真 85　三陵谷薬師仏坐像

三陵谷の頂上の上禅庵には、巨大な自然岩壁に磨崖仏坐像の彫刻が施されている(〈写真86〉)。これは仏像の顔だけが高浮彫で、体は線で表現しているが、このような形式は統一新羅後期の大型磨崖仏像に度々見られる。類似した大型仏としては、高さ8mを超える薬水谷磨崖大仏がある。慶州南山最大の仏像であるが、現在頭部は遺失している(〈写真87〉)。

三陵谷とともに西南山を代表する谷として茸長谷(ヨンジャンゴル)が挙げられる。ここには茸長谷石造如来坐像(〈写真88〉)と磨崖如来坐像がある。独特な円盤形をした台座で有名な仏坐像である。仏像の頭部はないが、左肩で袈裟を結んだ結び目が特徴的である。この石造仏坐像の北側の岩面には磨崖仏坐像1体が南向きに刻まれている。

列岩谷の仏坐像は頭部が消失したまま胴部のみ残っていたが、幸いにも2005年に頭部が発見され、2007年に復元されて本来の姿を取り戻している(〈写真89〉)。仏像の胴部は堂々としたもので、光背と台座の彫刻が精巧である。台座

写真 86　三陵谷磨崖仏坐像

写真 87　薬水谷磨崖大仏

写真 88　茸長谷石造如来坐像

写真 89　列岩谷石仏坐像

は三段八角蓮華座であったと推定され、仰蓮弁の上台と覆蓮弁の下台のみ残っており、八角の中台は失われている。近年、新たに推定復元がなされている。

この列岩谷石仏坐像から30m離れた場所に位置する磨崖仏立像(〈写真90〉)は、四等身の身体比例を持ち、頭部と上半身は高浮彫で、下半身は低浮彫である。足元には5枚の花びらを薄く彫刻した仰蓮の台座がある。いかなる理由で倒されたのかは不明であるが、目鼻が完全な状態に保たれていたため、「5cmの奇跡」と呼ばれている。

慶州南山の岩壁面に刻まれた大小の磨崖仏や、巨大な石材を刻んで作られた石塔·石仏は、隆盛した新羅の仏教文化を物語っている。新羅時代にも旧暦の4月8日に各寺院が現在のように灯籠を掲げていたならば、慶州市内から眺めると、あたかも南山全体が華やかな仏国土のように見えたはずである。

写真 90　列岩谷磨崖仏立像

仏国寺と石窟庵の世界

仏国寺は景徳王10年(751)に宰相の金大城が創建した。仏国寺と石窟庵にまつわる創建説話は、『三国遺事』孝善条に詳しく記されている。記録によると金大城は、「現世の両親のために仏国寺を建て、前世の両親のために石仏寺(現在の石窟庵)を建て、神琳と表訓の二人の僧侶をそれぞれ住まわせた」とされている。仏国寺と石窟庵の主要な創建の動機が基本的に「孝善」、つまり両親への「孝」と仏陀への「善」であったことを示している。

仏国寺

仏国寺の構造は、高い塀の上の仏の世界と、その下の人間界に大別できる。この二つの世界を結ぶのが青雲橋と白雲橋、蓮華橋と七宝橋である(〈写真91〉)。これらは正面から見ると階段であるが、横から見ると仏の世界へ登っていくための

写真 91　仏国寺蓮華橋·七宝橋

写真 92　無垢浄光大陀羅尼経

梯子のように見える。青雲橋·白雲橋は紫霞門と繋がっており、蓮華橋と七宝橋は極楽殿の安養門と繋がっている。

仏の世界は、中に入るとさらに3つの領域に分かれるが、紫霞門の中の大雄殿の領域は釈迦牟尼仏が教化を行う娑婆の世界を、安養門の中の極楽殿の領域は阿弥陀仏の住む極楽世界を象徴する。また、裏の毘盧殿の領域は毘盧遮那仏の住処である蓮華蔵の世界を象徴する。仏国寺の創建時に既にこのような3つの領域に分かれていたかどうかは不明であるが、遺存する金銅毘盧遮那仏像と金銅阿弥陀仏像から判断すると、少なくとも蓮華蔵の世界と極楽世界は最初から別々の空間として分かれていたはずである。

現在の大雄殿域には、釈迦塔と多宝塔と呼ばれる双塔がある(〈写真93、94〉)。そのうち西側の釈迦塔からは、1966年の解体·補修の過程で2層目の塔身の舎利孔から舎利器を含む様々な遺物が発見された(〈写真95〉)。舎利孔の中央には金銅製舎利外函があり、その中には銀製盒と鋺が重ねられて置かれていた。銀製鋺の中にはさらに舎利の入った緑色のガラス瓶があり、その周辺に金銅製舎利盒と『無垢浄光大陀羅尼経』(〈写真92〉)などの遺物があった。舎利外函の基壇部の底には「墨書紙片」があった。110枚に上る墨書紙片は、近年の保存処理の結果、『宝篋印陀羅尼経』の残片と、仏国寺無垢浄光塔重修記(1024年)、仏国寺西石塔重修形止記(1038年)など4件の古文書であることが確認された。

写真 93　仏国寺釈迦塔

写真 94　仏国寺多宝塔

写真 95　釈迦塔舎利荘厳具

この古文書を通じて、釈迦塔は高麗時代に慶州地域で発生した地震のため、顕宗15年(1024)と靖宗4年(1038)の2回にわたって解体·補修したこと、釈迦塔と多宝塔の本来の名称が仏国寺西石塔と無垢浄光塔であったことが明らかになった。出土品の中で最も注目を集めている『無垢浄経』は、現存最古の木版印刷本

とされている。統一新羅期には、この経典を塔の中に納めて経文を唱えると、「罪深く、地獄に落ちるような人でも、その罪業が消えて長寿を全うし、死しても極楽世界に生まれ変わり、成仏する」という信仰が流行った。

仏国寺の西石塔、すなわち釈迦塔は、感恩寺址および高仙寺址の三重石塔の様式を簡略にした構造、適切な比率と規模へと発展させたもので、その後の石塔の発展の道を開いた8世紀随一の作品である。現在の相輪部は宝物第37号の実相寺三重石塔を象って復元したものである。この三重石塔と並ぶ無垢浄光塔、すなわち多宝塔も韓国を代表する石塔である。優れた石工技術で自由自在に加工し、精巧に築き上げた美しい塔である。1925年頃、日本人が塔を完全に解体·補修する過程で、基壇の上にあった石造の4点の獅子像のうち3点がなくなり、現在までその行方は知られていない。

仏国寺は文禄·慶長の役の時に義兵の拠点となった。1593年、大火災の被害を受け、戦争が終わると1612年から大々的な復旧工事が行われた。当時、仏国寺は蓮華橋と七宝橋、青雲橋と白雲橋、双塔、仏像など、ごく一部の遺物を除くすべてが焼失してしまっていた。火災を免れた2体の括目すべき金銅仏像が、毘盧殿

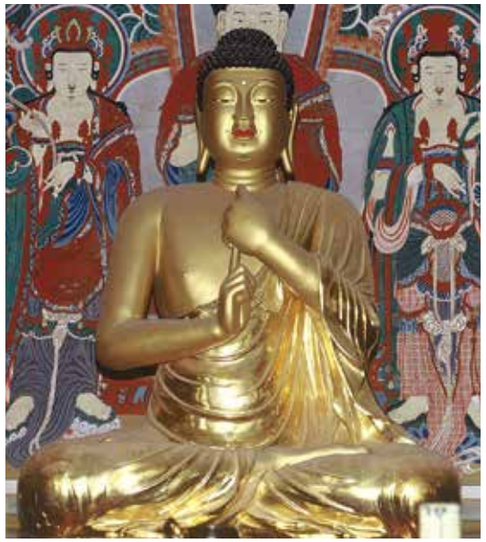

写真 96　毘盧遮那仏坐像

写真 97　阿弥陀仏坐像

の毘盧遮那仏坐像と極楽殿の阿弥陀仏坐像である(〈写真96、97〉)。新羅の三大金銅仏に数えられる逸品である。金銅毘盧遮那仏は真理を形象化したもので、顔は威厳に満ちているが慈悲を湛えた印象であり、自然に流れる服の襞の表現が非常に写実的である。手の形は左手で右手の人差指を包み込んでおり、毘盧遮那仏の一般的な印相とは反対になっている。毘盧遮那仏と双子のような金銅阿弥陀仏は、高さ1.66mの仏像である。円満で慈悲に満ちた顔は正面を向いており、眉は半月形で鼻は高い。洗練された写実的な統一新羅期仏像の代表作である。

石窟庵

『三国遺事』によると、石窟庵は石仏寺と呼ばれていた。当初は仏国寺とは別の寺院として創建されたが、現在は仏国寺に属している。吐含山の東の中腹、海抜

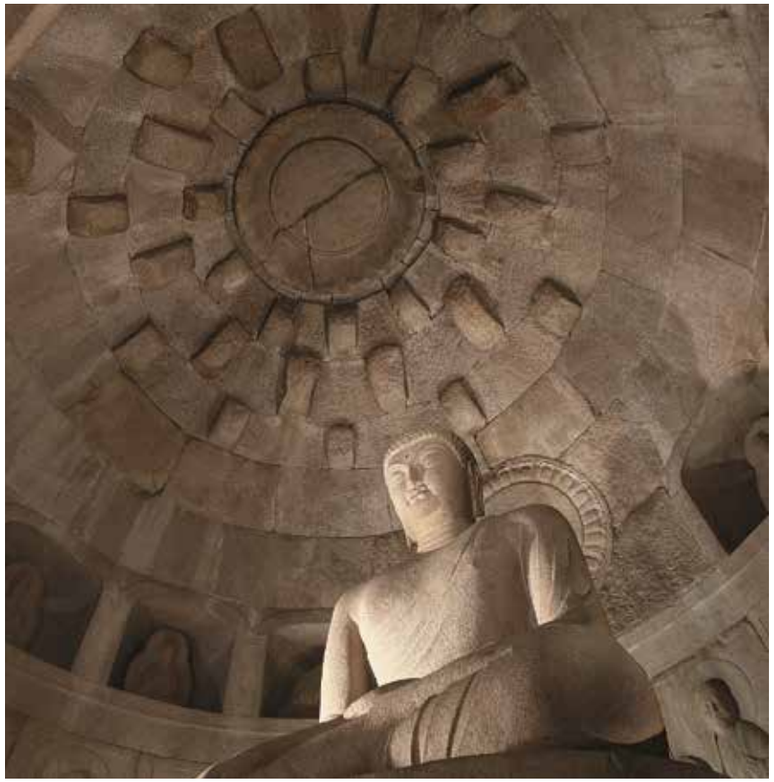

写真 98　慶州·石窟庵本尊仏とドーム天井近景

565mの場所に位置する石窟庵の彫刻は、統一新羅期の彫刻を代表すると同時に、最も「国際的」であると言っても過言ではない、韓国仏教美術における最高傑作である。仏教思想と神観を、独創的な設計と優れた技術をもって精密かつ美しく実現した秀逸な作品で、新羅に限らず、韓国の古代文化と韓国美術史を代表するシンボル的な作品である。

8世紀中頃~後半に製作された石窟庵は、緻密な構造や38体に及ぶ彫刻など、すべてが新しい形式のものである(〈写真98〉)。韓半島の花崗岩の石質は硬過ぎるため、中国やインドのような荘厳な雰囲気の石窟を造ることは不可能に近かった。しかし、インドや中国で石窟寺院を見た何者かが、「石窟の再現」のアイデアを創出したのであろう。そのため、新羅人は石窟を穿つのではなく、それより遥かに高度な技術を要する人工石窟の造成という方法を選んだ。751年から工事期間だけで20年以上をかけたことを考えると、その工事がどれだけ難航したかを推し量ることができる。このように人工石窟であるという点も特別であるが、円形平面の上にドーム形の天井が覆う点は、東アジアでは類例を見ない。円形の主室は中央の本尊の周りを巡る礼拝の空間を設けるためであった。

写真 99　石窟庵八部衆-左面

このような独創性は構造のみに表されたものではない。石窟庵の中には仏·菩薩·仏弟子·神衆など40体の尊像が位階に応じて配されている。石窟庵の彫刻は、様式の面において中国盛唐期の仏教彫刻の影響が見られるが、それらの例とも比較にならないほど緻密で体系的であると同時に、繊細な彫刻が施されている。

前室の左右の壁に飾られている8つの浮彫には、仏教で八部衆と呼ばれる天·龍·夜叉·乾闥婆·阿修羅·迦楼羅·緊那羅·摩睺羅伽(まごらか)の立像が刻まれている(〈写真99〉)。仏教の神観ではこれらは下位の神々で、仏法を守護する役割を果たす。石塔の主に基壇部に刻まれたもののように、石窟庵でも位階上最も外側に配され、礼拝空間を保護している。

前室から円形の空間へ続く通路入口の両側には、金剛力士立像が表現されている(〈写真100〉)。金剛力士はガンダーラに由来する仏の守護者で、本来金剛杵を持つ姿であったが、中国を経て来る過程で髷が高くなり、金剛杵を省略するなど、図像に大きな変化が表れた。石窟庵の金剛力士は、口を開けた阿形と、口を閉じた吽形が対になって立っている。簡潔に描写された体と闊達な表情で、力がみなぎる様子を感じさせる。

写真 100　金剛力士

写真 101　四天王像-北·東

写真 102　梵天

写真 103　帝釈天

前室と円形の主室の間にある通路の両壁には、四天王が2体ずつ刻まれている(〈写真101〉)。仏教の世界観によると、四天王は須弥山の中腹を守る神で、その図像はインドに始まり、中央アジアと中国を経る過程で甲をまとった武装型に変わった。なかでも北方の多聞天は右手で宝塔を支えており、残りはすべて手に刀を持っている。

円形主室の入口左右にある像は梵天と帝釈天である。梵天は欲界の上にある色界、第2天に住む神で、左手に清浄な修業を象徴する浄瓶を持っている(〈写真102〉)。

帝釈天は欲界の下から2番目の世界、須弥山の頂上の天宮に住む神であり、手に稲妻を意味する剛杵(vajra)を持っている(〈写真103〉)。梵天と帝釈天の隣にはそれぞれ文殊菩薩と普賢菩薩が立っている。これらの菩薩は大乗仏教において非常に重要な位置にある存在で、それぞれ智慧と実践を象徴している。それぞれ経典と円い杯を持っているが、どちらが文殊菩薩でどちらが普賢菩薩かについては異見がある。蓮華の上に立ち本尊の方向にやや体をひねる姿勢と、柔らかく流れる服の襞の表現が美しい作品である。

梵天と帝釈天の内側の左右には5人ずつ計10人の僧侶の立像が刻まれている

写真 104　十大弟子

(〈写真104〉)。多くがエキゾチックな顔にインドの服をまとい、把手付き香炉や鉢のように見える容器を持っている。人物の数が10人であるところから、釈迦牟尼の十大弟子を表現したものとみる見解、あるいは中国の龍門石窟のように祖師像を配したものみる見解もある。

石窟庵本尊像は円形の主室の中心から少し後ろに下がった場所に安置されている。仏像の座る台座の高さ160cmに及び、その上の仏坐像は340cmに達するため、全体の高さは5mの巨大さである(〈写真105〉)。統一新羅期に流行した仰蓮と覆蓮が八角石で繋がった台座の上で結跏趺坐を組み、右手を地面につける触地印の印相を示している。花崗岩の彫刻とは信じ難いほど精巧で、完璧な比率を示している。頭光は普通の仏像とは異なり、頭部ではなく後ろ壁に付いている。この仏像の尊名については、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、毘盧遮那仏など様々な異見があるが、ある特定の認識を植え付けるような尊名を超えた、究極の世界と存在を実体として視覚的に表現したシンボルと考えるべきであろう。人体の有り様を最大限生かすと同時に、華麗さを極力抑えた表現により、超越的存在としての仏を繊細かつ精密に表現している。

本尊像の後ろ、円形の主室の最も奥側に位置する像は十一面観音菩薩像で

写真 105　本尊仏

写真 106　十一面観音

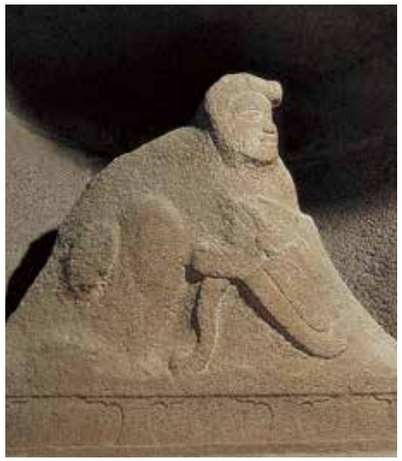

写真 107　維摩居士･文殊菩薩

ある(〈写真106〉)。石窟庵の十一面観音は、衆生の様々な状況を見極め、それぞれに合わせて救済を行う仏の化身としての役割が強調されている。一方、円形の主室の周りの壁上に龕室10室を設け、その中にそれぞれ坐像を納めているが、現在、2つの龕室は空いている。頭光を中心に、左右の龕室にはそれぞれ維摩居士と文殊菩薩が相対しており、他の空間には観音菩薩･金剛手菩薩･地蔵菩薩などが安置されている(〈写真107〉)。

石窟庵は中央の本尊仏と周囲の眷属が調和し、えも言われぬ荘厳さを醸し出し、見る人の想念すべてを一気に取り除くような、崇高な宗教的力を持っている。石窟庵は東アジア仏教美術の最高傑作といえよう。

禅宗の普及と仏教美術の変化

新羅下代には、中央の真骨貴族たちの熾烈な王位争奪戦が繰り広げられた。これにより、六頭品出身が新たな知識人階級として台頭し、地方では豪族が独立勢力として成長した。仏教界では華厳宗中心、教理中心の仏教への反省の声が上がり、禅宗が新たな実践仏教として流行するようになった。禅宗は、教理を中心とした仏教に比べ、個人的･民衆的･進歩的性格を持っていた。文字や経典に中心をおかず、禅を通じて人間の中にある本来の心に気付かせようとしたのである。禅宗は地方の豪族に受け入れられ、彼らによって経済的支援を受けたため、禅宗寺院は主に王京から遠く離れた地方に建立された。

禅宗は師と弟子との関係を重んじたため、弟子たちが師を称える僧塔や塔碑を建てることが非常に増えた。禅宗は礼拝より禅を重視し、仏像の製作には重きを置かなかったが、教理が相通ずる華厳の毘盧遮那仏は度々製作した。ただし、現存する毘盧遮那仏の実物は菩提寺のもののみである。

嶺南(ヨンナム)を代表する禅宗寺院は、清道(チョンド)雲門寺、河東(ハドン)双谿寺、聞慶(ムンギョン)鳳岩寺、昌原(チャンウォン)鳳林寺である。そこには塔･僧塔･碑などが建てられ保存状態も良好であるため、塔をはじめとする金石文の研究上、重要な資料となっている。雲門寺大雄宝殿前の東西の双塔は、雲門寺を代表する遺構である(〈写真108〉)。上下二段の基壇に3層の塔身を持つ。上段

の基壇には八部衆像がはっきりと刻まれており、一部は日本の植民地時代に補修されたものである。笠石を支える笠下の5段は直線的であるため、スマートな造形美を感じさせる。慶州昌林寺址の三重石塔と同様、統一新羅時代の典型的な三重石塔の形に浮彫像を加えた作品である。

慶南河東郡(ハドングン)花開面(ファゲミョン)の双谿寺には真鑑禅師慧昭(774-850)の碑(〈写真109〉)がある。真鑑禅師は唐へ留学して帰国し、当時の王らの尊崇を集め、仏教音楽である梵唄を取り入れて大衆化した。彼が入滅すると憲康王は寺院に「双谿」の名を授け、崔致遠(チェ·チウォン)に碑文を作らせた。崔致遠による四山碑銘の一つである。

聞慶の鳳岩寺は曦陽山門の中心寺院で、智証大師道憲(824-882)が開創した。智証大師道憲の僧塔は、当時の一般的な形式である八角円堂型で、横に塔

写真 108 清道·雲門寺石塔

写真 109 河東·双谿寺真鑑禅師塔碑

碑が並べられており、彼の生涯と業績を知ることができる(〈写真110〉)。彼の塔碑は真聖女王7年(893)頃に碑文が作成されて景哀王元年(924)に建てられたもので、真鑑禅師碑とともに崔致遠による文章として名高い。

昌原の鳳林寺は鳳林山門の中心で、真鏡大師審希(855-923)が開いた。彼の僧塔と塔碑は現在国立中央博物館に移設されている(〈写真111〉)。碑は景明王8年(924)に建てられ、王自ら碑文を作成した。僧塔は典型的な八角円堂型で、碑と同時期に建てられたものである。

京畿道(キョンギド)江原(カンウォン)地域における禅宗寺院の中で注目すべき美術が残る寺院には、原州(ウォンジュ)興法寺、襄陽(ヤンヤン)陳田寺と禅林院、江陵(カンヌン)崛山寺、驪州(ヨジュ)高達寺がある。襄陽の陳田寺に隠居した道義は、新羅下代に禅宗をはじめて伝えた僧侶である。彼は784年(宣徳王5)

写真 110 聞慶·鳳岩寺智証大師塔碑

写真 111 昌原·鳳林寺真鏡大師塔碑

写真 112　襄陽·陳田寺道義禅師塔

写真 113　原州·興法寺廉巨和尚塔

に唐で禅宗に接し、821年に帰国したが、当時の新羅では教理を中心とした仏教を重視していたため受け入れられず、王京を離れて襄陽陳田寺に隠居し、40年間の修道の後に入滅した。彼は廉巨和尚(?-844)に法灯を伝えた。そのため陳田寺にはこの2人に関連する僧塔がある。道義禅師の僧塔(〈写真112〉)は、平面方形の石塔基壇の上に八角形の小さな塔身を載せた形で、韓国の石造僧塔の出発点となっている。建立時期は9世紀中頃と推定される。その後、新羅僧塔が八角堂へと定着していく過渡期の様相を窺うことができる。

八角堂型として初めて出現する僧塔は、興法寺にあったと伝えられる廉巨和尚塔である(〈写真113〉)。廉巨和尚は雪岳山(ソラクサン)億聖寺、すなわち禅林院に滞在し、禅の普及に務め、844年に入滅した。僧塔の中から廉巨和尚の金銅塔誌が発見されたため、この時に同塔が建てられたことがわかる。僧塔の形は平面が八角形で、基壇は下·中·上台を組み合わせ、下台には獅子、中台には香炉と

写真 114　弘覚禅師塔碑

写真 115　襄陽·禅林院址破鐘

花文、上台には蓮華文の装飾を施している。塔身には四天王像と門が刻まれており、笠石は軒下に垂木を刻み、笠石の上には瓦を刻んで、瓦葺を象っている。これに若干変化を加えた僧塔として、驪州高達寺址僧塔(現在の元宗大師慧真塔)、禅林院址僧塔、江陵崛山寺址僧塔などが挙げられる。

江原道襄陽郡にある禅林院址には、弘覚禅師僧塔をはじめ、弘覚禅師塔碑、三重石塔、石燈などの遺構·遺物が残る。禅林院の弘覚禅師(814-880)塔碑は886年(定康王1)に建てられた(〈写真114〉)。碑身は破損し、破片のみが残っている。

禅林院鐘は、近隣の五台山(オデサン)月精舎に移設され保管されていたが、韓国戦争で寺院が焼けた際に破損した(〈写真115〉)。鐘身の両側に「804年、忠清北道沃川(オクチョン)地方の豪族の経済的支援を受け、慶州霊廟寺の僧侶を招待して製作した」という銘文が吏読で記されている貴重な資料である。8世紀の統一新羅期の梵鐘とは異なり、規模がかなり縮小している。

江陵崛山寺は闍崛山門の中心となる寺院で、847年(文聖王9)に梵日が創建した。崛山寺には梵日国師(?-889)の僧塔があり、韓国で最古最大の幢竿支柱もある(〈写真116〉)。この幢竿支柱は高さ5.4mで、2つの柱が1m間隔で立っており、ほぼ加工されていない巨大な自然石が壮大な造形美を感じさせる。

写真 116　江陵·崛山寺幢竿支柱

湖南·湖西地域の禅宗寺院としては、実相寺·聖住寺·月光寺·泰安寺·宝林寺·双峰寺がある。新羅末期、湖西·湖南地域には様々な禅宗の山門が存在した。そのうち、南原実相寺を中心とする証覚大師洪陟の実相山門が最初に開かれたものである。

実相寺には東西三重石塔をはじめ、百丈庵三重石塔、鉄仏など重要な遺構·遺物が多く残っている。石塔は宝光殿前の東西に位置する双塔で、石燈とともに実相寺の重要な遺構である(〈写真117〉)。特にこの塔は、相輪部がほぼ完全な状態で保たれている点において高い価値を有する。百丈庵の三重石塔(〈写真118〉)は、1層の基壇に3層の塔身と相輪部を備えている点において他の石塔に類似するが、基壇が低いのに対し1層目の塔身が高く、2層·3層の部分も幅と高さがほぼ変わらない独特な構造になっている。塔身には菩薩·神将·天人が、欄干には彫刻が施されており、笠石の下まで蓮華と三尊像が表現されている。

写真 117　南原·実相寺東西石塔

写真 118　実相寺百丈庵三重石塔

現在、実相寺薬師殿にある高さ約270cmの鉄仏坐像は、分割鋳造技法により製作された大型仏像である(〈写真119〉)。統一新羅時代の後期、地方の禅宗寺院において盛んに作られた鉄製仏像の一例で、9世紀における仏像様式の特徴を如実に表している。

禅宗初の山門である実相山派を開いた証覚大師洪陟の僧塔は、典型的な八角円堂型で、9世紀中頃に製作されたものである(〈写真120〉)。塔碑は碑身がなくなり、亀趺と螭首のみが残る。螭首の前面中央には「凝蓼塔碑」という碑名が刻まれている。

保寧の聖住寺址には、郎慧和尚無染の塔碑(〈写真121〉)と4基の塔がある。碑文には真骨の家系であった郎慧和尚の家が、父の代になって六頭品に格下げされたことを伝えており、重要な骨品制の研究資料となっている。崔致遠が碑文を作成し、彼の従兄弟である崔仁滉が字を書いているため、建碑の時代はそれ以降と考えられる。

写真 119　実相寺鉄仏坐像

迦知山門の長興(チャンフン)宝林寺には、双塔と智拳印を結んだ鉄造毘盧遮那仏像、そして石燈がある。双塔は両者とも2段の基壇に3層の塔身を持つ典型的な新羅石塔で、相輪部が完全な状態に保たれており貴重である(〈写真122〉)。さらに塔内から塔誌が発見されており、その価値を高めている。「北塔誌」によると、製作時期は景文王10年(870)5月で、景文王が先王の憲安王の往生を願って

写真 120　南原·実相寺証覚大師塔

写真 121　保寧·聖住寺址郎慧和尚塔碑

写真 122　長興·宝林寺双塔

写真 123　宝林寺鉄仏坐像

建てたと記されている。9世紀には王室の主導によって寺院を建てることが多かったが、この塔もその一例といえる。大寂光殿にある鉄仏坐像は、左手の人差指を右手で包み込んだ毘盧遮那仏である(〈写真123〉)。左腕の裏側に、憲安王2年(858)、武州長沙県(現在の光州と長興)の副官であった金遂宗が発願し仏像を作ったという内容の銘文がある。

迦智山門を開創した普照禅師体澄(〈写真124〉)は、唐からの帰国後、憲安王3年(859)に王の要請で宝林寺の住職となり、77歳で入滅した。王は彼に「普照禅師」の諡号と「彰聖」という塔名を下賜した。碑が建てられた時期は884年(憲康王10)であり、舎利塔は当時流行した典型的な八角円堂型である(〈写真124〉)。

和順双峰寺の澈鑒禅師道允(?-868)は、唐に留学して帰国した後、和順に双峰寺を創建して滞在し、71歳に入滅した。澈鑒禅師の僧塔は、新羅下代の僧塔の中でも最高の完成度を見せることで名高い。典型的な八角円堂型で、建てられた時期は同禅師が入滅した868年(景文王8)頃と推定される。塔碑には碑身が失われており、亀趺と螭首のみが残っている。笠石の前面中央に「澈鑒禅師碑銘」の碑名が刻まれている(〈写真125〉)。

写真 124　長興·宝林寺普照禅師僧塔(左)と塔碑(右)

写真 125　和順·双峯寺澈鑒禅師僧塔(左)と塔碑(右)

5 儒学と文学

儒学

儒学は「仁」を最高の徳目とし、その実現を追求する思想である。儒学は韓国の近代以前の社会において、長い間支配的なイデオロギーであった。従って、儒学に関する理解は、当時の社会を理解する上で中核となる部分の一つだと言っても過言ではない。

中国の春秋時代に生まれ、発展を遂げた儒学が、いつ、どのような過程を経て韓国の社会に受容されたのかについては明らかになっていない。漠然と漢字の伝来とともに古朝鮮または三国時代に流入したとする見解もあるが、具体的根拠が示されているわけではない。政治的･社会的性格の強い儒学が早くから知られていたとしても、当時の社会がそれを受け入れる成熟した体制でない限り、真の受容とは言い難い。従って、古代国家としての面貌をある程度整えていた三国時代になって、ようやく儒学が受容される条件が成立したとみるのが妥当であろう。

三国の中で、全ての面において遅れを取っていた新羅において、儒学を受け入れる政治的･社会的条件が整いはじめたのは4世紀後半頃と考えられるが、当初から受容されていたという証拠はどこにもない。新羅史において儒学受容の具体的な根拠が確認できるのは、様々な状況を考慮に入れると、6世紀になってからであるといえる。

6世紀は共同体的性格が強かった「部」システムの秩序が崩れ、中央集権的貴族国家へと展開しようとしていた時期である。そのような雰囲気の中で儒学が本格的に受容される基盤が築かれ、儒教の受容とともに次第に広まり、根付いていったものと考えられる。その初期には儒学に関する理解のレベルが非常に浅く断片的だったが、やがて内部から受容の必要性が高まり、急速に深く豊かなものになった。発展の主なきっかけは法興王7年(520)の律令の頒布と、15年(528)の仏教公認である。

律令は、外面的にはあたかも法家思想の実現に目的があるように見えるが、その実、儒学の「仁」を実現する手段として作られたものである。帝王の恣意的権力の行使を抑えるだけでなく、民衆に対する貴族･官僚の横暴を防ぐことが主たる目的であった。当時が国王を頂点とした中央集権的国家が定着しつつあった時代であったことを考えると、法興王が成文法としてはじめて頒布した律令の中に、そのような意識と目的があったとしても決して不自然なことではない。524年に作成された蔚珍(ウルチン)鳳坪碑の中心内容が、「奴人法」という律令に関係するものであることは周知の事実であり、末尾の「獲罪於天」という『論語』からの引用は、それを示唆している。

一方、仏教の公認は、儒学の受容を具体的に知ることのできる実例である。難解な仏教の経典を読み、理解するためには、何より漢文に対する理解が前提となる。漢文を学ぶ過程で、漢文で書かれたものの根底に流れる儒学についても、自然と理解できるようになる。従って新羅の儒学は、仏教という宗教の枠組みの中で発展していく基礎が設けられたといえる。その傍証となる例が、535年に作成された「蔚州(ウルジュ)川前里(チョンジョンリ)書石」の乙卯銘である。ここには、安及という僧侶が沙弥僧と居智伐村の衆士たちを連れてその地を訪れた事実が記されている。衆士とは、すなわち安及の門徒のことで、彼から文字や学問を学ぶ人々の総称であろう。僧侶が当時の新しい思想であった儒学を普及させる主役となったことを物語っている。

このことは、真興王が新羅初の歴史書である『国史』を編纂した事実からも確認することができる。当時、幼い真興王を補佐して政務を執った異斯夫の建議に

より、『国史』の編纂作業が行われた。その作業を実際に行ったのは、異斯夫が推挙した居柒夫であった。居柒夫は幼くして出家した経験を持ち、その経験は歴史書の編纂業務を務めるほどの実力を付けるきっかけとなった。居柒夫は歴史書の編纂のために広く文士を集めたが、この時、僧侶であった前歴が大いに役立ったのである。事実、『国史』の編纂には、君臣の善悪を記録することによって後代にまで褒貶を示そうとする、至って儒学的な考え方が働いている。そのような任務を果たすことができる文士たちがある程度形成されていたわけであるが、その文士たちを教えたのはほとんどが僧侶であった。その後、新しい時代に相応しい人材を養成する目的で、花郎徒の組織を教育する教旨(花郎徒の教師)としても、僧侶が選ばれた。

儒学は仏教が公認された後、その傘下で急速に拡大・発展した。そのことを示唆するのが、真興王29年(568)に建てられた黄草嶺(ファンチョリョン)碑と摩雲嶺(マウンリョン)碑である。この2つの碑は、製作時期がわずか2カ月しか異なっておらず、内容はほぼ同様である。真興王が辺境の地方を巡行した際、多くの臣下たちが付き随ったが、その中に2人の僧侶も含まれていた。その僧侶の名が最初に記載されているという点は特筆すべきである。碑文の前半の内容はほとんど『書経』からの引用で、王道政治の理想を標榜したものである。そのような儒教の経典をもって、真興王の近くで王道政治の実現を手伝ったのは僧侶たちであった。当時、仏教と儒学は対立する関係ではなく、相補う関係にあったといえる。

儒学は、仏教の発展とともに、次第に成長の一途を辿った。仏教に転輪聖王儀式、釈迦族信仰のような支配的イデオロギーとしての役割が増えれば増えるほど、そこに占める儒学の役割も自ずと増えていった。官僚組織の整備は儒学と直結するためである。一部の官僚貴族の中に儒学に関連する名を用いる人物がいたことも、そのことを示している。例えば、真平王の時に兵部令を歴任した金后稷は、いかにも儒学式の名である。彼はその名にふさわしく、真平王の過ちを『書経』の内容を引用しながらはばからずに直言し、死してなお真平王が過ちに気付くよう努めた。これは、儒学がすでに政治と深く関わっていた状況の一端を示している。やや後の時代のことであるが、三国統一の偉業を成し遂げた金春秋や金庾信も儒学式の名である。彼らの行動から推して、儒学は次第に主流となっていったことがわかる。

そのような実状と雰囲気を如実に表すのが、強首の例である。強首は任那加羅、つまり大加耶出身の人物で、彼の先祖は新羅に投降し中原地域の私民となった。強首が成長して文章を本格的に読みはじめた頃、彼の父が仏教と儒学のうちどの道に進むかを聞いた時、彼は世外教である仏教の代わりに、現実的な儒学を選んだ。7世紀前半頃には、すでに儒学が仏教に比肩するまでに成長していたのである。

このような状況は、高僧円光の例からにも見られる。円光は出家の前からすでに道学と儒学を深く学んでいた。589年、25歳の年に南朝の陳に留学し、出家した。円光は儒学を先に学び、後に僧侶になったが、幼くして儒学に接する機会が多かったことを示唆している。600年に帰国した際には真平王から大いに歓待を受け、その後まもなく貴山と箒項という若者が訪れ、死ぬまで守るべき教えを請うた。この時に作成した「世俗五戒」の中にも、儒学の認識が色濃く反映している。そこには「殺生有択」のような仏教的要素もあるが、忠孝と信義を強調した儒教の徳目が主流となっている。この「世俗五戒」は彼らだけに限られた道理ではなく、その後、新羅人すべてが守るべき徳目とされた。当時、社会が分化し、忠孝とともに義理が根底から必要とされる時代へと変わっていったのである。そのような状況に適切な思想体系は儒学であった。6~7世紀を経て、根本から変わっていく社会秩序が切実に必要とした指針が儒学の中にあったため、儒学は急速に発展を遂げた。

612年頃に作成されたとされる「壬申誓記石」に見られるように、2人の若者が自ら『詩経』、『書経』、『礼記』、『春秋』を学ぼうとした事実は、当時儒教の経典が広く読まれていた実状を反映している。つまり、儒学が社会の規範を提供する源泉として大きく成長していたことがわかる。この頃、様々な国家儀礼や教育を司る「礼部」が設置されたのも、そのような事情を物語っている。

儒学の急成長は、従来の伝統に固執しようとする側との葛藤を生じさせた。647年に起きた毗曇の乱は、事実上、仏教中心の支配体制に固執しようとする一派と、儒学に基づく一派との間の、政治的対決だったのである。結局、後者が勝利したことにより、その後の新羅が進むべき道は決まった。それを主導した金春秋は、新しい時代を切り開くために新しい人材が必要と考えた。そのため、従来の人材養成機構である花郎徒に代わる、新しい教育機構としての国学の受容と定

着に大きな関心が寄せられた。支配的なイデオロギーはもはや仏教から儒学へと移り変わっており、それを実現する新たな人材が官僚となる新時代が幕を開けたのである。

文学

現在の韓国語がいつ頃から形成されたかについてはわかっていないが、文字が使われる以前にも、当然ながら口伝された文学が存在したはずである。しかし、その口承文学は時間の経過とともに次第に消え、わずかに残ったものも、かなり後の時代になってようやく文字で記録された。新羅の文学もこのような過程を経て我々に伝わっており、韓国史上初の定型詩である郷歌文学、後代になって定着した説話文学、そして漢文学の3つのジャンルに分けることができる。

韓国初の定型詩・郷歌文学

郷歌とは、6世紀から10世紀にわたって作られた新羅と高麗初めの詩歌作品を指す。新羅第3代王の儒理王(1世紀)の時に作られたもので、今は歌詞が伝わっていない率歌がある。この歌を「宮廷音楽の始まり」とする記録からみて、この時から郷歌文学が作られはじめ、統一新羅期の7·8世紀に最盛期を迎えたと考えられる。この郷歌文学があるからこそ、韓国は世界の文学史上、10世紀以前に自国語で表現された文学作品を持つ数少ない国の一つとなった。郷歌文学は韓国の詩歌文学史における初めての定型詩であり、長形の10句体(10行)と8句体(8行)、短形の4句体(4行)がある。『三国遺事』に掲載されたこれらの作品は、すべて背景となる説話を持っているため、歴史的にも叙事文学としても高い価値を有する。

郷歌は郷札文字により漢字の音と訓を借りて表現しているが、韓国語の音で表現しているため、韓国の詩であり、歌であるといえる。ただし、韓国の古代語に関する情報が少ないため、解読は難しい。韓国語をハングルで記した最古の資料は15世紀の『訓民正音』である。従って、研究者たちは郷歌を解読する際、ハングルで書かれた最古の韓国語資料である15世紀の中世国語に基づいて解釈を試みている。

新羅の時に、魏弘と大矩和尚が郷歌集である『三代目』を編纂したといわれるが現存せず、新羅郷歌は現在『三国遺事』に14首が記されているのみである。また、高麗時代初めに均如大師が仏教の普及のために作った「普賢十願歌」11首が『均如伝』に伝わっている。

郷歌作品はテーマによって1)王宮の郷歌、2)祈りの人生、3)儚い人生、4)道端で、5)徐羅伐の恋歌に分けることができる。現存する郷歌作品を、何世紀のものであるのか、作られた時代の王名、推定される作家によって分類したのが以下の表である。郷歌文学は王·老人·女性など多様な人々が創作したとされているが、作家については議論が多く、断定し難い。郷歌の作品名は記録によって伝わるものよりは、現在の研究者によって付けられたものが多いことを断っておく。以下では、「処容歌」を代表として挙げ、作品の背景と内容について述べたい。

表 2. 『三國遺事』所載 郷歌

郷歌名	世紀	王名	推定作家または歌の性格
薯童謠	6世紀	真平王(600年頃)	薯童百済武王、伝承歌謡
彗星歌	6世紀	真平王(600年頃)	融天師
風謠	7世紀	善徳女王(632~646)	良志、伝承歌謡、労働謡
願往生歌	7世紀	文武王(661~680)	広徳またはその妻、伝承歌謡
慕竹旨郎歌	7世紀	考昭王(692~701)	得烏
献花歌	8世紀	聖徳王(702~736)	無名老人
怨歌(737)	8世紀	孝成王(737~741)	信忠
兜率歌(760)	8世紀	景徳王(742~765)	月明師
祭亡妹歌	8世紀	景徳王(742~765)	月明師
安民歌(765)	8世紀	景徳王(742~765)	忠談師
耆婆郎歌 (讃耆婆郎歌)	8世紀	景徳王(742~765)	忠談師
千手大悲歌 (祷千手大悲歌)	8世紀	景徳王(742~765)	子供(5歳)または 希明婦人伝承歌謡
遇賊歌	8世紀	景徳王(742~765)	永才
処容歌(879)	9世紀	憲康王(875~886)	処容
普賢十願歌	10世紀	新羅神徳王6年~ 高麗光宗24 (917~973)	均如大師

新羅第49代憲康王が蔚州郡の東海岸を訪れた際、海を眺めていると、突然東海の龍王の仕業により雲と霧がかかってあたりが暗くなり、道に迷ってしまった。日官(三国時代、天文観測と占星を担当した官職)の言に従い、龍王のために寺院を建てる約束をするとようやく明るくなった。その時、東海の龍王が七人の子供を連れて現れ、舞を舞いながら王の徳を讃えた。消える前に龍王は一人の息子を王に預けて国政の手伝いをさせたが、それが処容である。王は処容を王京に住まわせて官職を与え、美しい娘と結婚させた。

ある月の明るい夜、処容が家に帰ってみると、何者かが妻と同衾していた。処容がそれを見て「徐羅伐(新羅の旧名)の明るい日に/夜遅くまで遊んで/帰ってみると/脚が四本だ/二本は妻のものだが/二本は誰のものなのか/本来自分のものであるはずだが/奪われたのはどうしようもない」と、事を荒らげることなく、歌いながら舞を舞った。それを見て恐れをなした相手は退散した。この郷歌は巫歌の一種と考えられる。つまり、「処容歌」は言葉通り解釈すると淫らな歌に聞こえるが、実は相手は疫神で、相手と同衾したというのは妻が病気になったという意味である。処容がそれを見て歌を歌って退けたということから、この歌は病気を治すための呪術的な巫歌だと解釈するのが妥当である。この歌を巫歌と解釈しないまでも、最後の部分は処容が超脱の境地に達していることを暗示している。

その後、疫神は処容の姿を見ただけで逃げたといわれ、厄払いの象徴として広く知られるようになった。この時に詠んだ8句体の郷歌を「処容歌」といい、疫神を退けるために舞う舞を「処容舞」という。処容歌とともに処容舞は高麗・朝鮮時代まで伝承され、仮面と絵も伝わっている。また処容の語源は、龍王の子がこの世に住んだので、人間の世界に滞在(処)した龍、つまり「処龍」という言葉が人間の顔である「容」に変わり、「処容」となったのではないかと推定される。

説話文学

新羅の説話は、千年の新羅が見た夢の旅路である。説話は、歴史が示すことのできなかった真実を、隠喩をもって我々に伝えてくれる。従って、ある意味説話は歴史より真実に近いともいえる。歴史の浮き沈みの中で起きる勝利や敗北という現実だけでなく、人生に対する深い洞察が、その時代の物語の中ににじみ出ているためである。神話と伝説、民譚の昔話の世界は、歴史の内側と言えなくもない。歴史が目に見える真実であるとするならば、説話は目に見えない真実といえる。物語は現世を超えた彼岸の世界を描くこともある。『三国遺事』などに載せられた物語で、新羅を最も新羅らしく描き出している説話は、大きく4つの事実に関連するものである。

第一に、新羅が3人の女王による統治を経験した国であったという点である。同時代の百済や高句麗、あるいは後代の王朝において、女王が国を治めた例はない。新羅はこのような独特な政治史を持つ国であったため、関連する説話が多く残っている。第二に、新羅は豆豆里(トゥドゥリ)トッケビを崇拝した国であるという点である。豆豆里は鉄を扱う鍛冶の神である。新羅初期の斯盧国の王、すなわち居西干の朴赫居世、尼師今の昔脱解、金氏王統の始祖である金閼智は、鉄器文化の展開を主導した英雄たちである。第三に、新羅は他の文化圏の宗教を受容する過程で常に固有の信仰との葛藤が生じながら、結局は外来の宗教を内在化していった国であるという点である。特に仏教が、古来の信仰との摩擦を抱えながらも定着していく過程が、物語の中に展開している。第四に、新羅は底辺の民衆が持つ社会的な力と地位を尊重した国であるという点である。『三国遺事』では、「女王に恋した志鬼」や「真聖女大王・居陀知」の物語などに、下層民の人々が矜持をもって生き抜く姿が描かれている。

新羅の説話の中の善徳女王の「知幾三事」、すなわち3つの予知に関わる物語は、女王が指導者として、また超人的な人間としての能力を伝えている。

まず、香りのない牡丹の花の物語である。唐の太宗が赤・紫・白の三色の牡丹の絵とその種3斗を女王に贈った。女王はその絵を見て、牡丹の花に香りがないことを予言した。案の定、翌年咲いた牡丹の花には香りがなかった。善徳女王は花の絵に蝶が描きこまれていないのを見て、その花には香りがないことを知ったのである。女王は独身である自らのことを唐の太宗が皮肉った意図を見抜いた。唐の太宗と新羅女王という二人の統治者の間に流れる暗黙の緊張感と葛藤が、この物語からは感じられる。

もう一つは、密かに侵入してきた敵軍を看破し、殲滅した物語である。霊廟寺という寺院の玉門池で、冬にもかかわらず多くの蛙が鳴き止まないという報告が女王の耳に入った。王は精兵を女根谷(〈写真126〉)に送り敵を討たせた。軍隊が西郊へ行くと女根谷があり、百済軍約500名が伏兵していたのである。牡丹の花

写真 126 慶州·女根谷

の話は善徳女王の審美的叡智を示す物語であり、女根谷物語は危機管理に優れた女王の洞察力と、それを実践に移す行動力を示している。また、韓国古来の信仰と陰陽五行説に長けた女王の能力をも物語っている。黄色い蛙は兵士の姿であり、玉門は女性の象徴の陰を指し、白は西側を意味するため百済軍が西方で待ち伏せしていることを知ったのである。

最後に、女王が自身の死す日を予言した物語である。女王は生前、自らが死亡する日を予言し、忉利天で葬儀を行うよう話していた。臣下らが忉利天がどこであるのか問うと、狼山の南側であるとだけ答えた。女王は予言の日にこの世を去り、臣下たちは狼山の南に女王を埋葬した。それから10年後、善徳女王の墓の南に四天王寺が建てられた。仏典によると、四天王天の上に忉利天があるとされているため、ここでようやく女王の予言が的中していたことがわかったという(〈写真127〉)。この物語は、善徳女王が仏典にも造詣が深かったことを物語っている。

写真 127 四天王寺址と善徳女王陵

これらのことから、善徳女王は有史以来初の女王で、様々な宗教·思想を網羅し、受け入れていたことがわかる。

義湘大師と浮石寺に関する物語は、『三国遺事』と宋代の『宋高僧伝』に伝わっている。唐の善妙姫は、義湘が唐に儒学した時の下宿先の息女であった。善妙姫は義湘への思いを告げたが、義湘は見向きもせずに修道に精進した。彼の心を射止めることができないと悟った善妙は、自らも仏弟子の道を選んで遠くから義湘を見守り、それを心の拠り所とした。義湘が別れの挨拶もなく帰国の途に発ったため善妙は断腸の思いであったが、一頭の龍となってその航路を見守ったという。

果たせなかった愛の悲しみを、仏弟子の道へ進むことによって昇華させた善妙は、義湘の守護龍となってともに新羅に渡った。帰国後、浮石寺を創建しようとした義湘は、土着信仰の抵抗に遭い、その努力は水泡に帰そうとしていた。『宋高僧伝』は、新羅の土着信仰を持つ異端の信徒約500人が抵抗したと伝えている。この時、善妙姫は再び揺れる石、すなわち浮石となって土着信仰を信奉する信徒に向かって山の上から転がり、それらを退けた。このような過程により完成した寺院であったため、浮石寺と名付けられたという。

漢文学

嶺南の辰韓地域では、衛満朝鮮の末期、一部の北方の知識人と中国系の流遺民が定着したことで漢字文化が受容され、漢四郡の時代にはさらにその現象に拍車がかかった。新羅の漢文は、真興王代の漢江流域支配を契機に、中国と独自の交流を深めることで、高句麗や百済に比肩するものになった。ただし、6世紀以前の新羅の記録には、漢文の文法に沿う資料はほとんど残されていない。6世紀初めから中頃にかけて作られた金石文資料の文章は、韓国語の地名·人名·官職名を記すために漢字の音を借りて一定の順序に並べる程度であった。統一新羅期以前には、僧侶の知識人が中心となって王の行幸、王に上表した公文書、王室主体の歴史、中国に向けた外交文書など、現実の政治において欠かせない一部の実用漢文の作成に留まっていた。そのため、詩歌などにはほとんど注目しない状況であった。

三国統一を前後する頃、仏教とは異なる新たな統治理念の一つとして儒教が定着すると同時に、当時としては最高水準の唐の九経(儒教における9種類の経典)を導入することにより、儒学に対する理解が拡大した。また、『文選』を国学の正式教科として選定し、『文官詞林』を受容して学ばせることで、ようやく統一国家の人材に相応しい文章力を磨くことができた。

三国統一以降、文章の作成は僧侶階層に限定されるものではなくなった。唐の国子監に修学し、あるいは新羅の国学に入学して五経·九経など儒家の経典を学んだ知識人や、『文選』、『文官詞林』などの詩文選集を学んだ文筆家らが出た。彼らはやがて僧侶階層に代わり、外交文書はじめ国にとって重要な文書家として表舞台に登場した。外交文書の作成に多大な功績を残した強首、宿衛学生出身で唐を7度も訪れた金仁問、九経を解釈して後学を教育し、「諷王書」(又の名は「花王戒」)を著した薛聰らが挙げられる。新羅の国学·少卿の官職に就いた金△△は「文武王陵碑」(681)を、翰林郎·金弼奥は「聖徳大王神鐘銘」(771)を作成した。特に「甘山寺弥勒菩薩造像記」、「甘山寺阿弥陀如来造像記」(〈写真128〉)、「聖徳大王神鐘銘」(〈図7〉)などは、当時の散文のレベルを示す傑作である。

甘山寺造像記は、重阿湌·金志誠が亡き親の冥福を祈るために甘山寺を創建し、母のために弥勒像(719)を、父のために阿弥陀像(720)を作り、その光背に記録を残したものである。作成者は奈麻聰となっているが、当時の最高の学者であり文章家であった薛聰を指すとみるのが通説になっている。両者とも、序論として道の究極の本質についての前提、彫像を作らせた金志誠の生涯、具体的な発願の対象や内容の3つの段落で構成されている。文章中には、仏教だけでなく、老荘思想、儒学なども網羅しており、「至道(最高の道)」、「三身(法身·報身·応身)」、「真宗(真実の教え)」、「栄班(高い地位)」などの抽象的概念語を自由自在に駆使し、前後の語句を2句ずつ対になるように整え、文章の美学を追求している。

聖徳大王神鐘は、別名を奉徳寺鐘またはエミレーの鐘という。聖徳大王の功徳を称え、王室と国の繁栄を祈願する目的で鋳造された。景徳王(742~764)の時に企画され、恵恭王7年(771)に完成した。「聖徳大王神鐘銘」は同鐘の外面に刻まれた文章で、序文が約630字、銘文が200字で、計830字である。序文は最初から最後まで4字と6字の語句を中心に前後の語句が正確に合致する典型的な四六駢儷体である。銘文は4言50句の形式で構成された詩であり、途中で何度か韻字を変える「換韻法」が駆使されている。

全文にわたって不自然な語彙がなく、経典や銘文に見られる洗練された言葉

写真 128　慶州甘山寺阿弥陀如来造像記

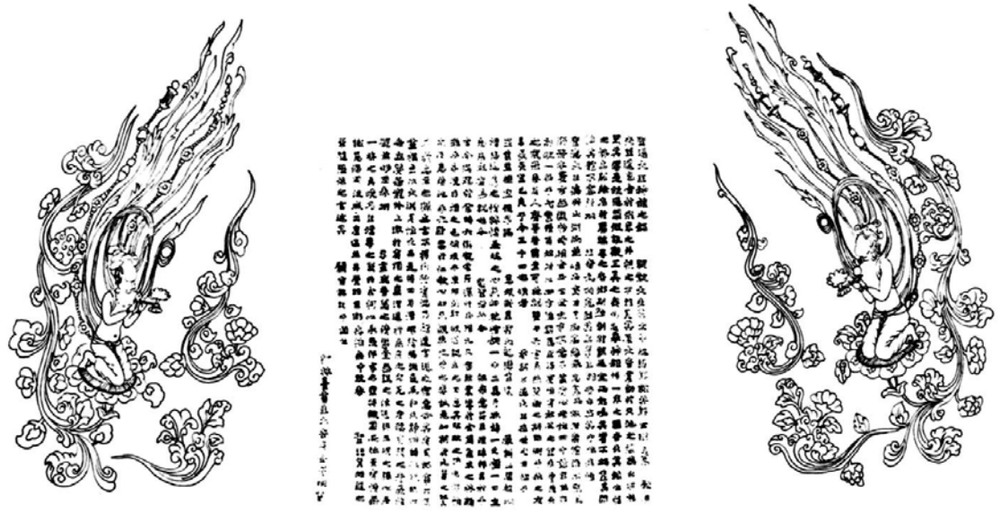

図 7　聖徳大王神鐘の飛天像と銘文の實測圖

を自然のままに使用しており、幅広く故事を用いる淀みない比喩から、当時を代表する最高の名文であることに疑いの余地はない。

一方、統一新羅期の漢詩は僧侶の偈頌と一部の叙情詩が中心であり、学者や官僚による創作はごく一部である。また僧侶の詩も彗超や義湘ら名高い作者が、国内ではなく海外で書いているという点で、根本的に完成度に限界が見られる。

新羅下代には、中国の文壇事情にも通じ、創作力も兼ね備えた賓貢(唐の科挙における一種の外国人向け試験)の及第者が多く帰国して活動したため、それ以前とは異なる近体詩が文壇の主流様式として確立し、文章でも旧習の一新に大きな役割を果たした。なかでも崔致遠は膨大な量の文章を残しており、文体の多様さ、文章の格式と表現レベルなど、あらゆる面で未踏の境地を切り拓いた。新羅末期に蓄積されたこのような創作の経験と作品の水準は、次王朝である高麗へそのまま受け継がれ、高麗時代前期に官僚貴族の文学を開花させる礎となった。

6 音楽

古代の社会では礼楽が重視されており、音楽が人々の生活の中で占める割合は今日よりはるかに大きかった。新羅の社会は王·貴族·僧侶·平民などで構成された階層社会であったため、それぞれの階層が享受した音楽や舞には、共通点と相違点があったはずである。平民は彼らの日常生活と直接関連する歌や舞を楽しみ、王や貴族は洗練された文化に相応しい音楽と舞を愛好したはずである。

平民の音楽

平民の音楽は彼らの生業と密接な関係がある。農業であれ漁業であれ、一人でできる仕事もあれば、多くの人が力を合わせてしなければならない種類のものもある。特に後者の場合、集団の労働力を同時に集約しなければならならず、その際に必要となるのが「労働謡」である。巨大な古墳を築造した4~5世紀の新羅人は、土を運ぶ際、力の結集のために労働謡を歌った可能性が高い。石塔を建てた7~10世紀の新羅人も、重い石材を運ぶ際に大きな号令とともに労働謡を歌ったはずである。

『三国遺事』によると、善徳女王(632~647)の時、彫刻家の良志和尚が霊廟寺において丈六像を作る際、城内の男女が土を運びながら「風謡」を歌ったことが記されている。これは労働謡の代表的な例である。当時の歌の旋律は今日まで伝わっていないが、「来てよ、来てよ、来てよ/来てよ、悲痛だ/悲痛だ、我らよ/功徳を積みに来てよ」のような短い歌詞からみて、旋律やリズムは民謡のように簡潔でシンプルな構造であったはずである。

一方、人々は様々な事情により、直接話すことのできない内容の物語を、童謡で広めたりもした。代表的な童謡が「薯童謡」である。百済の武王は幼い頃長芋を採って生計を立てる「薯童」であったが、新羅の真平王(579~632)の三女が大変な美人であるという噂を聞き、金城(慶州)に来て作った童歌を子どもたちに歌わせたのが「薯童謡」である。歌詞は、「善花公主は人目を盗んで嫁に行き、薯童を夜な夜な抱いている」という内容である。

内容は非常にシンプルで明確である。善花公主が薯童と密かに同衾したという意味である。結局、この歌がきっかけとなって善花公主は薯童と結婚するという結末になる。この「薯童謡」の作家については様々な異見があるが、5~7世紀に新羅社会で歌われた童謡であることは明らかである。

僧侶の音楽活動と仏教音楽

新羅に仏教が伝来したのは5世紀で、公認されたのは6世紀初めである。仏教の伝来は新羅社会全般にわたって大きな変化と発展をもたらした。音楽の分野も例外ではなかった。その際には僧侶がその主役となった。

景文王の時、4人の花郎が江原道(カンウォンド)通川(トンチョン)地域を遊説した際、王に従って国をよく治めるという抱負を抱き、3曲の歌詞を作った。そしてそれに曲をつける依頼をするため大炬和尚に送り、大炬和尚はその3つの歌詞に曲をつけた。第1曲は玄琴抱曲、第2曲は大道曲、第3曲は問群曲である。

玄琴抱曲とは、玄琴すなわちコムンゴを抱くという意味で、コムンゴに関連する曲と推定される。大道曲の「大道」の字に関してみると、新羅時代の様々な祭祀の中に「四大道祭」があったことから、この祭礼の際に使われたものかもしれな

い。問群曲の内容はわかっていない。この3曲は歌の旋律と歌詞は伝わっていないが、景文王が演奏を聴いて大変気に入ったとされるため、大炬和尚の実力が王室から認められていたことがわかる。この記録は、9世紀の新羅社会において、音楽分野で才能を発揮したのが寺院の僧侶であったことを物語っている。

王と貴族の音楽生活

新羅下代になり、9世紀の憲徳王と憲康王は、臣下のために開いた宴会で自ら「琴」を演奏した。弦楽器は楽器の中で最も上達が難しいとされる楽器の一つである。そのような弦楽器を新羅王自ら演奏したというのは、高麗や朝鮮時代の王とは異なる点である。この時の弦楽器である「琴」は、もともと「コ」と呼ばれた。コムンゴやカヤッコ系統の弦楽器の総称が「コ」であり、これを漢字で表記したのが「琴」であると思われる。新羅の王が演奏した楽器は、6世紀に加耶から入った加耶琴である可能性もあるが、9世紀初めに新羅から日本の正倉院にわたり現存する「新羅琴」の可能性も否定できない。

この琴は、5世紀代の新羅の土偶(小像)12点に見える楽器に求めることができる。鶏林路(ケリムロ)30号墳出土の土偶装飾付長頸壺(〈写真129〉)には、新羅の人物土偶が「琴」を演奏する姿(〈写真130〉)が表現されており、演奏者が膝に楽器を載せている。楽器の中央部が演奏者の前面にあり、楽器が斜めに立てられている点が特徴である。つまり、土偶に表現されたこの楽器は、新羅への加耶琴の流入前に固有の「琴」があったことを物語っているといえる。固有の弦楽器「琴」が存在していた状況下で加耶琴が新羅に導入され、三国統一以降は高句麗のコムンゴも流入したのである。

新羅の王は、臣下たちとの宴会の最中、興に乗じて自ら楽器を演奏することもあり、さらには専門の楽士の演奏を鑑賞したりもした。神文王は689年の新村(シンチョン)への行幸の際、宴を開いて音楽と舞を披露させた。この時に演奏された曲は計7曲であった。曲名に下辛熱舞、思内舞など「舞」の字が付いているところをみると、すべて舞曲と考えられる。各曲目の構成を見ると、音楽監督を除く歌·舞·楽の構成員は、少ない時は3人、多い時は6人であった。今日的観点からする

写真 129　慶州·鶏林路30号墳出土の土偶装飾付長頸壺

写真 130　土偶装飾付長頸壺の琴

と、非常に小規模の編成である。このように演奏の規模が小さい理由は、宴が行われた場所である新村が、宮殿が所在する徐羅伐ではなく、地方であったためかもしれない。

807年(哀荘王8)2月、哀荘王は月城の崇礼殿に座って音楽の演奏を鑑賞した。まず思内琴が演奏され、その後、碓琴舞が披露された。この時の思内琴の成員は新村の時の約2倍であった。王室で臣下のための開いた宴は、主に月城の崇礼殿と臨海殿において行われており、公演場は別途設けられていなかったようである。朝鮮時代の宮廷音楽も事情は同じであった。

碓琴舞は、5世紀の慈悲麻立干期の最高音楽であると同時に、新羅を代表する音楽家と評される百結の碓楽(碓とは、杵で餅をついたり穀物を精白したりする道具のことを指す)が受け継がれたものと考えられる。百結は、あまりの貧しさゆえにつぎはぎの服をまとっていたが、その布が百枚を縫い合わせたものであるということから、「百結先生」と呼ばれたという。すなわち、これは本名ではない。彼は歳の暮れに搗く穀物がないと嘆く妻のために、弦楽器の「琴」を演奏して穀物を搗く音を出したといわれている。これが後世に碓楽の名で伝わっている。

新羅の音楽書『楽本』

『楽本』は金大問が著した音楽関連書籍である。金大問は704年(聖徳王3)に漢山州都督に就いた人物で、『楽本』の他にも『花郎世記』など多くの本を著した。新羅は唐の文化を受け入れる過程で『礼記』にも触れたはずである。『礼記』楽記には楽に関する定義と音の性格に関する内容が記載されている。このような事情から推して、『楽本』は「楽の根本を記した本」という意味になると思われ、楽の定義から音の種類、性格、ひいては新羅楽器の種類や由来、または楽器別楽調や楽曲の数について記していると考えられる。

楽調は楽曲の音楽的構造のことを指すが、新羅人は楽器によって異なる楽調を奏でた。『三国史記』雑志の楽調を見ると、加耶琴とコムンゴ、郷琵琶、三竹の楽調がそれぞれ異なっていたことがわかる。特に弦楽器が異なる。管楽器は製作の過程で管の音程が決まってくるので楽調も類似するが、弦楽器は奏でる度に音程の調節が可能である。弦楽器は希望する旋法の使用が容易であるため、楽器によって楽調を変えることができる。しかし今日ではそのようにはいかない。なぜなら、そのような状況では合奏が不可能になるからである。新羅時代の弦楽器の楽調が楽器によって異なったのは、合奏より独奏が好まれたからであると考えられる。

新羅の楽器

新羅の楽器は考古資料や古文書などからその種類を把握することができる。考古資料では、遺物として伝わる「遺物楽器」と、遺物の図像に表現された「図像上の楽器」に分けることができる。

文献に記された弦楽器には三絃、すなわちコムンゴ·カヤッコ·郷琵琶がある。日本の正倉院に実物の楽器である「新羅琴」と、そのケースである「新羅琴櫃」が保存されている。図像上の楽器としては箜篌(くご)がある。

コムンゴと加耶琴は現在も韓国を代表する弦楽器である。コムンゴは高句麗由来であり、三国統一の後に新羅へ伝わった。「万波息笛(新羅の笛)」とともに月城の天尊庫に保管し、国宝とされた。景徳王(742~765)代の人である玉宝高は、一時期慶州南山にある金鰲山(クムオサン)の琴松亭においてコムンゴを演奏し、智異山(チリサン)の雲上院に入って50年間修練し、新しい曲30曲を作曲した、新羅におけるコムンゴの名人であった。

加耶琴は大加耶から伝来した楽器であるが、于勒とその弟子の尼文が新羅に投降したことにより新羅に伝わった。もともとは大加耶の嘉悉王が楽士の于勒に、中国の楽器を参考に12弦の弦楽器を作らせたものである。しかし関連遺物が出土していないため、製作当初の形態は知られていない。

「新羅琴」の実物は日本の正倉院に保管されている(〈写真131〉)。この「新羅琴」は長さ158.0㎝、幅30.0㎝で、今日の加耶琴やコムンゴに類似した大きさである。

琵琶は今日のギターのように抱えて弾く弦楽器である。新羅時代にはその種類が多様であった。感恩寺舎利函に表現された琵琶(〈写真132-①〉)には、楽器の頭部に鳥の頭のような装飾が施されており、上院寺銅鐘の乳郭に彫刻され

写真 131　日本正倉院の新羅琴

写真 132　各種遺物に表現された琵琶（①感恩寺石塔舎利内函、②上院寺鐘乳郭、③新羅土偶、④尚州·石刻天人像、⑤鳳岩寺智証大師浮屠）

た琵琶(〈写真132-②〉)は4弦の糸巻きがあり、首の部分が直線状になっている。一方、鳳岩寺の智証大師浮屠(〈写真132-⑤〉)と尚州の石刻天人像の琵琶(〈写真132-④〉)は、弦の糸巻き部分が鉤形に曲がっている。琵琶は演奏者が弦を弾く際、指を使ったり、しゃもじのような撥を用いたりして演奏した。

琵琶は西域から中国を経て伝来した楽器といわれている。新羅琵琶の場合、4~5世紀の新羅の土偶にすでに存在(〈写真132-③〉)しているため、中国の琵琶とは異なる。本来、琵琶は2弦の単純な楽器であったが、三国統一の後、高句麗や百済の琵琶の影響を受けて4弦に拡大し、首が曲がったものや直線的なものなど様々な琵琶が出現したとされる。

箜篌は西洋のハープのような形の楽器である。725年の上院寺梵鐘の中帯に刻まれている(〈図8〉)。この楽器の起源も西域とされている。この楽器の奏楽像は石塔や浮屠に見られる。三国統一後の初期に新羅に現れ、高麗時代初期まで演奏されながら、その後、伝統が断絶した弦楽器である。

新羅の管楽器を代表するのが「三竹」である。大きさによって大笒·中笒·小笒に分けられ、今日まで伝承·演奏されている。三竹の他に考古資料に表された管楽器

図 8　上院寺銅鐘の箜篌

図 9　上院寺銅鐘の笙

として、笙·簫、縦笛や短簫類、螺鉢、そして塤が挙げられる。

笙は今日では笙簧と呼ばれている。いくつかの管を音筒に挿し、それに長い管を繋いで吹き口とし、吹奏する管楽器である。上院寺梵鐘の中帯と下帯に表現されており(〈図9〉)、軒平瓦や軒丸瓦にも表現されている。この楽器は高麗·朝鮮時代を経て今なお演奏されている管楽器である。

縦笛は縦方向に吹いて演奏する管楽器である。文献には新羅の楽器として「笛」というものだけが伝わっている。5世紀における新羅の土偶や7~8世紀の軒平瓦などの考古資料に見える縦笛類の楽器には、管が細く長さの短い「笛」もあり、管がやや太く長さのある「短簫」類の楽器もある。鳳岩寺の智証大師浮屠(〈写真133〉)にも笛が表現されている。

塤は西洋楽器のオカリナのような管楽器で、土を丸く整形し、吹き口と様々な音程を出すいくつかの指孔があいた構造になっている。慶州月城の濠から直径約3.7㎝の唐三彩の塤(〈写真134〉)が見つかっているが、形はあたかも猿の顔のようである。これは新羅時代にすでに唐の楽器が輸入されていたことの証左である。

『三国史記』に記された打楽器は拍板と大鼓のみである。しかし考古資料には梵鐘や金鼓などの実物の楽器が伝わっており、昌寧の火旺(ファワン)山城からは8世紀の鼓1点が、京畿道の二聖(イソン)山城からはやはり8世紀の腰鼓1点が出土している。その他に、図像上の楽器として哱囉または鐃鈸もある。

拍板は今日では拍と称され、宗廟祭礼楽などで管弦楽の演奏を始める時に「パチッ」と1度、終わる時に「パチッパチッパチッ」と3度鳴らす打楽器にあたる。拍を鳴らす奏楽像は鳳岩寺智証大師浮屠の彫刻(〈写真135〉)のものが最も写実的である。

鼓は一般的に木の枠に獣の皮を張って作るが、梵鐘や金鼓のように金属製でないためほとんど残らない。鼓は用途や大きさによって様々な分類が可能であるが、現在では「腰鼓」のような小型の鼓だけが遺跡から発掘されている。大鼓は、『三国史記』の「太宗武烈王2年(655)、月城の中に鼓楼を建てた」という記録からその存在がわかるが、新羅時代の大鼓は伝わっていない。

腰鼓は腰に下げて叩く鼓を指す。腰鼓が図像に表現された遺物として、682年の慶州感恩寺西塔舎利函(〈写真136〉)などがある。京畿道河南(ハナム)市の二聖山城から腰鼓の実物1点が出土しているが、やや欠損している部分がある(〈写真137〉)。木製で長い方の鼓は43.0㎝、直径は17.0㎝である。今日の長鼓と形態上は

写真 133　慶州·月城出土の唐三彩の塤

写真 134　聞慶·鳳岩寺智証大師浮屠の笛

写真 135　鳳岩寺智証大師浮屠の拍板

写真 136　慶州·感恩寺西塔舎利函の腰鼓

類似しているが、規模を比較するとやや小さい。

小鼓の例では、昌寧火旺山城貯水池出土の楡の木製の鼓(〈写真138〉)がある。高さ51.2㎝である。表と裏に何かに掛けるために取り付けられた輪がある。

哱囉または鐃鈸という楽器は、西洋のシンバルのような形態の打楽器であ

写真 137　河南·二聖山城出土の腰鼓

写真 138　昌寧·火旺山城蓮池出土の鼓

写真 139　感恩寺址西塔舎利函の哱囉

る。感恩寺西塔舎利函(〈写真139〉)のものが最古の例である。統一新羅期の哱囉は図像でのみ確認されている。高麗時代では、大小多くの実物の哱囉が伝わっている。当時この楽器は「大吹打(管弦打楽器の大編成からなる軍楽)」に用いられ、寺院では哱囉舞の舞具として使用された。

7 科学と技術

天文と暦法

新羅の天文学を論じる際、2つの点において驚くべき事実がある。一つは、新羅の宮城である月城の西北の平地に立つ瞻星台の存在であり、もう一つは『三国史記』新羅本記に記された30件の日食の記録である。

天文

瞻星台という名は「星を見る台」を意味し、古くから天文観測施設という認識が広まっていた。一方、頂部の井の字形の四角い枠と、下部へ行くほど次第に広がり円い曲線となる、上方下円の造形美(上径2.85m、下径4.93m、高さ9.10m)は、新羅人の天地の理想を表現した括目すべき造形物として注目を集めてきた。

新羅人は仏国土に対する信仰が篤かった。瞻星台の31層の模塼石に上下の天地まで加えると33層になるため、これを仏教の須弥山の忉利天を形象化した儀礼的なシンボルとする解釈も成立する。遠くから見ると、井の字形の頂部が天に向かって生命の樹のように聳え立つ形になっているため、それを世界の中心と考えた新羅人の、天への信仰心が生んだものと解することもできる。

このように様々な解釈が可能であるが、瞻星台という言葉の字義に引っ張られ、「天文台説」が最も有力とされている。井の字形の頂部は確かに狭いが、天文儀器を載せ天文観測を行ったとする推論は、今なお健在である。しかし、『三国史記』や『三国遺事』、ないし金石文のどこにも、新羅人が瞻星台を天文観測に利用したという記録や、天文関連の遺物は残っていない。従って、近年には専門的な天文観測台というより、儀礼のシンボルとみる見解がより説得力のある説とされている。また、瞻星台の築造時期については、『三国遺事』が善徳女王(632~647)の時と記して以来、633年説(『世宗実録地理志』)や647年説(『増補文献備考』)などが提示されているが、これは朝鮮時代になって天文観測台であるとする認識が強くなったことにより、善徳女王の即位の年と没年を、その築造時期に比定したに過ぎない。

写真 140　慶州·瞻星台近景

日食記録を見ると、『三国史記』に記された67件の日食記事のうち、新羅のものは統一新羅期まで合わせて計30件である。30件のうち、19件(63%)までが新羅建国の4年目(赫居世王4年、BC54)の4月1日から第12代沾解王10年(256)の10月1日までの初期新羅、すなわち斯盧国期に集中している。なかでも初代·2代王の70年間に全体の30%(9件)が起きたとされている。その後、統一期の第38代元聖王3年(787)8月1日に日食記録が再び見られるまでの530年間は、何も記録がない。統一新羅期に記録された日食11件は、すべて三国統一から100年以上が過ぎ、政争により社会の不安が増大する下代155年間の記録にある。

このように、新羅建国の初期である初代、2代王の70年の間に全体の30%が記録され、新羅初期の310年間に全体の63%が集中すること、瞻星台を建造し、唐の天文暦法を受け入れ、天文学が大きく発展したはずの中古期および中代の530年間(257~787)に日食が全く記録されていないことを考えると、『三国史記』新羅本記の初期記録における日食記事をそのまま鵜呑みにすることはできない。新羅初期がおおよそ中国の後漢の頃にあたるため、『漢書』、『後漢書』、『魏書』、『晋書』などに記された中国の日食記録を借用しただけである可能性が大きいとする解釈も成立し得る。

重要なのは、三国の日食がどのように観測·記録·伝承され、『三国史記』の編纂時にそれが収録されたのかという暦法の問題である。これに関連して陥りがちな誤謬の一つが、日食の観測がきわめて難しいことであると認識することである。観測自体は、事実上、経験的かつ容易なものであるが、その予測は精密な科学であり、観測暦法の発達が必要な全く異なる領域である。また、観測した日食の日時を管理するためには、暦日に関する暦法や体制が整備されていなければならない。星の観測も同様である。ある星座を観測することが難しいのではなく、その観測内容を記録し、後の時代にそれを引き継ぐことが一層重要なのである。そのためには、一定の天文図の体系が整わなければならない。

暦法

天文学の中核となるテーマは暦日制度と暦法の問題であるが、新羅では専門的な暦法学が発達していなかったため、時間学の観点からアプローチする必要がある。

体系的な暦法の存在および使用を確認するため、太陰暦や太陽暦の指標となりうる閏月の使用について検討してみると、三国統一の直後、神文王9年(689)に閏月の記録がある。これには、その年から15年前の文武王14年(674)正月に暦術を学んで唐から帰国した大奈麻徳福が伝えたという記録が付け加えられている。この暦術は、具体的には唐初期の頒布暦である麟徳暦を指す。この麟徳暦により、神文王の時にようやく閏月の使用が可能となったのである。一方、閏月記録の初出の3年後である孝昭王元年(692)8月に、高僧の道証が唐から帰国して天文図を献上したことにより、この頃から天文と暦法の使用が盛んになる。

しかし、天文暦法を扱う専門機関は依然として設立されていない状態であった。8世紀初めの聖徳王17年(718)になってようやく天文暦法を担当する機関である漏刻典が設置された。しかし、その構成は天文博士1人、漏刻博士6人となっており、観測や暦法の天文学というよりは、日常的な時間学の方に焦点をあてた制度であったといえる。

文献記録とは別に当時の金石文資料を分析すると、閏月の入った干支と暦日の入った金石文は、9世紀中頃第46代文聖王による「昌林寺無垢浄塔誌」(855)が唯一のものである。ここに適用された暦法は宣明暦で、新羅下代に宣明暦が使われた明らかな証拠となっている。『三国史記』において聖徳王の時に漏刻典が設置された後、閏月の記録が増える流れと合致しているといえる。

このように、新羅は独自の暦法をつくらず、統一新羅の文武王の時にようやく唐の麟徳暦を受け入れ、聖徳王の時に漏刻典を設置して、漏刻博士と天文博士に天文暦法を担当させた。また、新羅下代には唐末の宣明暦を受け入れ、使用した。

統一新羅以前の暦法が使われた時の問題を調べるために、まず新羅の暦日制度と時間学の問題を広く考える必要がある。それと関連して、新羅の国家祭祀である始祖廟および神宮の祭祀の時期を検討すると、即位の翌年の踰年2月が祭祀の時期となったことがわかる。正月より2月を紀元とする例が頻繁に見られる。新羅人にとって1年の歳首としての紀元は2月だったのではないかと推定することができる。

次に『三国史記』新羅本記の、年月ではなく年月日のすべてが記された資料を見ると、日食や天変の記録を除いては建国後から600年近く後の法興王(在位514~540)の時まで、わずか2件のみが記されている。この２件は沾解王と智証王の死亡日を記したものである。これを除くと、真興王33年(572)10月20日、八関筵会を外寺において開催したという記録が事実上最初のものである。従って、『三国史記』の初期記録から日食や天変記事の時のみ干支の日まで細かく表記していることは、『三国史記』の編纂者が中国の記録を参考にしたためという説明以外には考えられない。

金石文の年･月･日の記録は、『三国史記』よりも早い時期のものに見られる。「浦項冷水里碑」(503)では「癸未年(智証王4、503年)9月25日」が、「蔚珍鳳坪里碑」(524)では「甲辰年(法興王11、524)正月15日」の記録が見られるのは、6世紀の智証王と法興王、真興王の時にはすでに年月日で表記する方法が一般的になっていたことを物語っている。

一方、新羅の金石文における暦日資料で最も注目すべき点は真興王の「黄草嶺巡狩碑」と「摩雲嶺巡狩碑」の暦日である。これらを検討すると、真興王の時に冊封と朝貢という公式の外交関係を結んだ北斉の天保暦を使用した可能性が考えられる。また、南朝の陳が使用していた梁の大明暦の可能性もあるが、「摩雲嶺巡狩碑」の暦日が北周暦とは明確に異なり、北斉の天保暦と一致していることだけは明らかである。これは、すでに知られている文武王の時の麟徳暦より早い時代に暦法が存在したことを示している。

真興王巡狩碑以降の干支暦日資料としては、まず『三国史記』新羅本記に見られる真徳女王5年(651、唐高宗･永徽2年)1月1日に朝元殿において行った賀正礼を挙げることができる。これは「正月朔日」が記された初めての資料である。次に、文武王の時や神文王や孝昭王の時の記録にも見られる。一方で金石文の中では、慶州「皇福寺石塔金銅舎利函記」に「中宗･神龍2年丙午年(706、聖徳王5)5月30日(壬申)．．．」という干支の暦日の資料が伝わっている。ここでの暦日は5月が大月となっているため、当時使われた麟徳暦と一致する。

一方、京畿道(キョンギド)安城(アンソン)から出土した「永泰2年銘蝋石製舎利荘厳具」の「代宗･永泰2年(766、恵恭王2) 丙午年3月30日(乙酉)」という暦日からは3月も大月と確認されるので、当時使われた五紀暦(763~783)と一致する。永泰2年銘の金石文は8世紀の中頃以降、新羅において五紀暦が使用されたことを示している。

『三国史記』「新羅本記」によると、哀荘王2年(801、唐徳宗･貞元17)夏5月壬戌

朔は「当然日食でなければならないが、日食ではなかった」という記録がある。この時は唐の正元暦(784~806)が使われた時期であり、この正元暦と暦日が一致する。この記録をもって新羅が独自に日食を予測した重要な証拠だとする説もあるが、当時は中国暦の頒給を受け使用していた。その暦書に日食の予報が付されており、それを根拠に待っていたものの日食が起きなかったという程度の解釈が可能である。

一方、山清(サンチョン)「断俗寺神行禅師碑」(813)の暦日資料は唐の観象暦(807~821)と一致しており、干支での年月日まで整っている。これにより新羅の観象暦の使用が十分に推測できる。さらに、安養(アニャン)「中初寺幢竿石柱記」(827)の暦日資料は、当時使われていた唐末の宣明暦(822~892、71年間)と一致する。

最後に、「聖住寺郎彗和尚塔碑」(890)など崔致遠の編纂した様々な碑文において、インドの暦である梵暦方法が用いられた痕跡が確認できる。これとともに、元暁や憬興、勝荘の『金光明経』注疏書の逸文資料を見ると、既に7~8世紀から黒月と白月によって構成された梵歴の暦日法が仏教の斎日や択日などに関連して使われたであろうという推測は蓋然性があるといえる。

度量衡

度量衡は長さ(尺度)、容積(量)、重さ(衡)、またはこれらをはかる器具の総称である。度量衡の整備や統一は、あらゆる時代、あらゆる国において、租税の収入、商品の流通、土木·建築などと関わっているため、最も重要な要素の一つであった。

尺度

我が国では、中国の度量衡制度を受容した。中国ではすでに漢の時代に度量衡の体系的な整理が行われていた。『漢書』律暦志によると、12律の基本音である黄鍾管の長さを基準に度量衡の単位を体系化している。黒いキビの粒を用いて黄鍾管を90等分し、その1等分を1分、10分を1寸、10寸を1尺、10尺を1丈、10丈を1引とした。分·寸·尺·丈·引の五つの基本単位を五度とし、これらの関係はすべて十進法によって成り立っている。

中国の制度を受容した新羅においても、尺と寸を中心に、これらの単位が広く使用された。「丈」は丈六像の(1丈6尺)のように、鐘·絶壁·石塔·仏像などの高さや、厚く積もった雪、地表面下の深さなどを表すのに使われた。ただし、引と分が用いられた記録はほとんどない。

「歩」は城や土手の長さ、都市や村の規模や周囲、建物の規模、布の長さなどを示すために広く使われた。新羅では当初より1歩は6尺で、624年に唐において1歩が5尺に変わった後もそれは変わらなかった。そして、使用頻度は少なかったものの、「尋」も長さの単位として使われた。 尋は本来、両腕を左右に広げ、一方の指先から他方の指先までの距離を指すものだったが、後に長さを測る単位となった。1尋はおおよそ8尺で、錦の長さと土手の長さを測る時に使われた。

一方、麻や錦の長さを表す単位として端·匹·疋がある。匹·疋などは一定の面積の布帛の量を指す単位であったが、長さの単位となった。中国では漢代からすでに匹と疋は40尺として通用していた。新羅でも匹と疋は区別せず、同じ長さの単位として通用し、その半分である段も、綾や絹の長さを測る単位として用いられた。その他に、2尺または1尺5寸の長さを指す「肘」、周囲の単位で8寸程度の長さとして使われた「囲」、軍隊における1日の行軍の距離として30里を指す「舎」などの長さの単位が使われた。

新羅で最初にどのような尺度が使用されたかは定かではないが、中国漢代に整備された尺度の制度を受け入れたことを考えると、漢尺が用いられたのではないかと推定される。それを立証できる具体的な遺物が、京畿道河南の二聖山城C地区から出土した定規である(〈図10〉)。

この定規の全長は36.1㎝であるが、最初の目盛りが端から0.5㎝あけて始まるため、実際の長さは35.6㎝である。この35.6㎝はさらに三つの区間にわかれている。第一区間は5つの目盛りに、その目盛りはさらに5つの目盛りに細分される。第二区間は5つにのみ区別されており、第三区間は目盛りのようなもので区別されていない。この定規の小さい目盛りは一つ0.47㎝で、大きい目盛りは一つ2.37㎝、第二区間まで10の大きな目盛りに区分された長さは23.7㎝である。6世紀中頃、二聖山城において使われたこの定規から、三国時代の新羅において長さ23.7㎝の漢

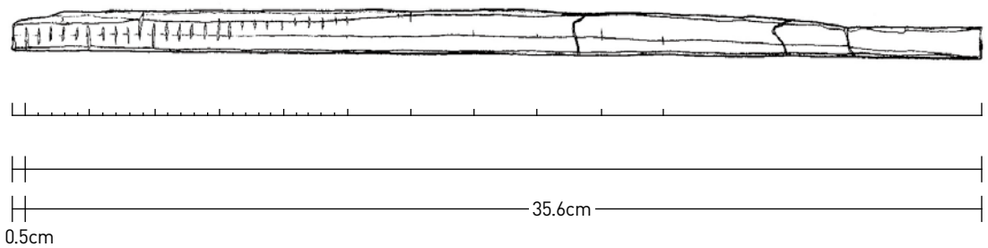

図 10　河南·二聖山城C地区出土の35.6㎝ものさし

尺が使われていたことが類推できる。

三国時代の新羅ではこのような漢尺とともに、高麗尺も使われたようである。高麗尺は高句麗の独自の尺度で、29.7㎝の唐大尺の1.2倍である35.6㎝で、この長さは上述の二聖山城出土の定規と全長が同じである。つまり、高麗尺は漢尺の1.5倍の長さで作られた尺度ではないかと考えられる。新羅ではこの高麗尺を受け入れ、都市の区画や量田などに利用した。新羅の王京は6世紀以来、段階的に拡大したが、王京の方里の区画と大きさ、道路の幅などについては様々な意見がある。しかし、1方の規模を東西約162m(高麗尺450尺)、南北約144m(高麗尺400尺)とする説のように、新羅王京の区画が高麗尺で計算した際に、正確な数字となっていることは、当時の新羅において高麗尺が使用された可能性を示唆している。

三国時代の新羅では、当初漢尺を受け入れて使用し、後に高麗尺を取り入れ、都市計画や量田などに用いた。高麗尺を受け入れた後も漢尺は体を測定するなどの用途で使われた。そこに7世紀に大きな変化が訪れた。唐から唐大尺を受け入れたのである。唐では高祖の武徳8年(624)に24.7㎝の南朝尺を唐小尺と、その1.2倍の29.7㎝の尺度を唐大尺と定めた。この唐大尺を新羅が取り入れたのである。

新羅において唐大尺が長さの尺度として使用されたことを示す遺物は、河南二聖山城から出土した29.8㎝の定規である。二聖山城C地区貯水池の第4文化層から出土しており、寸の目盛りだけが刻まれた長さ29.8㎝のものである。この定規は7世紀後半のものと推定されるが、その下層からは上述の高麗尺のものが出土している。

新羅において唐大尺を受容した時期は文武王5年(665)のようである。記録によると、従来では絹布10尋を一疋としたが、この年それを改めて長さ7歩、幅2尺

写真 141　二聖山城C地区貯水池出土のものさし(29.8cm)の側面(上)、正面(下)

を一疋としたという。1尋は8尺なので10尋=80尺、1歩は6尺なので7歩=42尺である。このような布帛尺の変化は、新しい尺度の制度の運用と絡んでいるもので、この時期に唐の尺度が導入されたと推測できる。

唐大尺を受け入れた新羅は、滅亡するまで営造尺として広く使用した。これは、聖徳王21年(722)、日本の侵入を防ぐために築造された新垈里(シンデリ)城に刻まれた銘文における築造の担当距離、そして真聖王9年(895)に建てられた海印寺·吉祥塔の高さやそれに関する「海印寺·妙吉祥塔記」からも推測できる。

このように、新羅では7世紀以降、身体を測定する用途として漢尺が使われ続け、7世紀中頃受け入れられた29.4~29.8㎝の唐大尺が営造尺として用いられたといえる。ただし、三国時代の都市計画や量田などに使用された高麗尺が7世紀以降も使われ続けたかどうかは、断定できない。高麗前期の基準尺が約31~31.5㎝で、高麗前期や新羅の時に1結の面積と算定方法が同様だったことを考慮に入れると、新羅の量田尺は高麗尺よりは唐大尺の長さだった可能性が高い。従って、今のところ7世紀中頃以降、新羅において営造尺と量田尺として使用されたものは唐大尺の長さの尺度だったといえる。

容積「量」

『漢書』律暦志によると、度量衡の容積の単位は、基本的に龠(やく)·合·升·斗·斛であった。これらの単位の関係は2龠を1合とし、10合=1升、10升=1斗、10斗=1斛の十進法により規定されている。漢代以降、龠は使われなくなり、ある時期を境に

合以下の単位として、合の10分の1として「勺」が使われはじめた。「石」は本来、重さの単位で120斤を指したが、斛の代わりに同様の容積の単位として使われるようになった。宋代には10斗=1石、5斗=1斛とし、石と斛の区別が設けられた。

新羅において使われた容積の単位として記録に記されたのは、合·升·刀·斗·斛·石·碩·苫などがある。合は記録に登場する容積の最小単位であるが、合の下位単位である「勺」も使われたであろうと考えられる。升は「両手でつかむことのできる容積」とされるが、「正倉院佐波理加盤付属の新羅文書」によると、「升」を意味する漢字として「刀」があてられている。中国の量を測る度量衡を受け入れる前、新羅独自の容積の単位であるトェマルなどが使用され、合·升·斗·石といった中国の単位の名称を受容した後も、この用語は使われ続けた。

写真 142　慶州·月池(雁鴨池)出土「十石入瓮」銘土器

斗より大きい容積の単位としては、石·斛·碩·苫などが使用された。なかでも最も一般的に使われたのは石であった。景徳王14年(755)、孝行息子の向徳に租を300斛下賜したが、善徳王の時に孝行息子の聖覚に「向徳の故事に従って」「租300石」を賞として与えたとされていることから、斛と石が同じ容積の単位であることが分かる。「碩」は「石」と発音も容積も同じである。

苫(せん)とは、韓国では本来の音は「チョム」であり、意味は菅(すげ)や茅(かや)などを粗く編んだむしろのことをいう。新羅では穀物の量をはかる単位である「ソム」を意味する漢字として使われた。一苫は2俵、1俵は5斗なので、一苫は10斗、つまり1石になる。従って、9世紀末に使われた苫は石、斛、碩と同じ容積の単位である。この苫を除くと、金石文と古文書では石、斛、碩の中で石のみ使われている。従って、新羅において公式に使用された容積の単位は石であったことがわかる。

新羅において1石が何斗であったのかをはっきりと記している文献は「正倉院佐波理加盤付属の新羅文書」である。8世紀頃作成されたこの文書には、官僚に対する俸禄支給について記されている。

しかし、新羅が最初に量を量るものを制度化した際には、尺度の制度同様に中国のものを受け入れている。従って新羅の1石は、当初は漢と同様、1石=10斗であった可能性が高い。

新羅の1石=10斗は8世紀以前のある時期に1石=20斗に変わった。1石の容量が2倍に増えた時期は、7世紀の可能性が非常に高い。百済·高句麗の滅亡により、新羅の領土が飛躍的に増え、生産力も向上しただけではなく、唐の制度の影響を受け、1石の容量が大きくなったのである。

9世紀末になると新羅の1石は15斗となった。真聖王10年(896)、崔致遠による「崇福寺碑」に、「対価として支払った稲が計二千苫(酬稲穀合二千苫)」と記されており、高麗後期の文人·崔瀣(1287~1340)の解説によると、苫は石と同じ容積の単位で、つまりは15斗であると解釈したことが記録からわかる。このように、1石=20斗から1石=15斗に変わったのは、新羅·下代になって1升の容量が以前の約200mℓから約350mℓへと増えたことで、1石を20斗から15斗に下方修正したのである。

漢代における1升の容積は約200mℓで、8世紀初めの新羅における1升の容積もそれと同様に約200mℓだったといえる。ところで、新羅·下代になって1升の容積

は約350mℓへと増えた。それは慶州雁鴨池出土の土器2点の容積と、土器にそれぞれ刻まれた「四斗五刀」と「十石入瓮」という銘文を比較して推算した結果である。4斗5升、つまり45升と刻まれた土器の容積を口縁部の先まで計算してみると約16ℓ=16,000mℓで、この容積で換算すると1升は約355mℓなのである。口縁部の先まで計算に入れたものなので、実際の1升の容積は355mℓより若干少ないと思われる。また、10石と刻まれた土器の容積は520.8ℓ=520,800mℓで、1石=15斗として計算すると、1斗は3,472mℓ、1升は347.2mℓである。従って1升の容積は347mℓ~355mℓで、およそ350mℓといえる。

重さ「衡」

漢代の重さの単位は銖·両·斤·鈞·石の五つである。銖はキビ100粒の重さであり、両は24銖、斤は16両、鈞は30斤、石は4鈞である。中でも石は次第に容積の単位として使われるようになった。唐の初期の貨幣である開元通宝の重さは2銖4累で、その10枚を1両とし、その後、両の下に1両=10銭の単位が設けられた。さらにその下に十進法の単位として「両-銭-分-厘」へと体系化した。つまり、10分=1銭、10厘=1分である。

新羅では斤、両、分などが主な重さの単位として使われた。斤は(黄)銅、両は金·銀の重さを量る時にそれぞれ使われた。両の1/100の重さである分は金·鉄·水銀などの重さを量るために使われた。中国と同様、斤と両は新羅では一般的に使われた重さの単位であった。

銘文や分銅などの重さに基づいて考えると、漢代における1斤の重さは約248gと推定される。尺度や容積と同様、重さも時代が下るにつれ増加しており、魏晋南北朝時代は1斤の重さは約500gへと増加した。隋·唐の時はさらに増加し、1斤は600gを超えた。

新羅時代の1斤の重量を明確に示す分銅などの遺物は残っていないため、概略を推測するにとどまる。恵恭王7年(771)に完成した聖徳大王神鐘には銅12万斤が使われたという。1997年に測定した鐘の重さは約18,900kgであった。この重さに基づいて換算した1斤の重さは約1575gである。この重さは漢代の1斤の重さと比べても少なすぎる。12万斤という記録は、実際完成した聖徳大王神鐘の重さではなく、鐘を鋳造する際に使われた銅の重さの合計を指すもので、鐘の鋳造過程で銅はある程度減少したと考えられる。従って、漢代の1斤の重さを考慮に入れると、8世紀の新羅における1斤の重さは約200gと推定できる。

新羅の医薬

医薬は「医」と「薬」の総称である。「医」とは、病気を治療する行為または技術、そしてその行為の主体を意味し、「薬」とは、疾病を治すのに使われる物を指す。現在では、病気を治すのに使われる医術と薬の両者を指す言葉として使われている。

中古期までの医薬

新羅初期の医薬では、以前からの呪術的方法と民間の経験などが伝えられた。最高の医療サービスを受けた王族も、病気になるとまず巫医が治療を行った。古代の巫医は祝文を唱えると同時に、簡単な薬物を使用した。檀君神話に登場するヨモギやニンニクは、巫医が使用した薬物の一種だと思われる。この薬物は、時代が下るにつれて民間の経験が蓄積された、新羅の薬物学の基礎となったのであろう。568年に建てられた「摩雲嶺碑」に登場する薬士は、生薬の管理や本草学を担当した医療の官僚が遅くても真興王の時にはすでに存在していたことを示している。

しかし、仏教が伝来し、巫医の役割は次第に縮小した。これは訥祇王(または味鄒王)の王女治病説話から推測できる。同説話は王女への巫医の治療が効かず、仏教の法師の力で治癒したという内容である。

仏教が普及し、僧侶が医薬の分野でも頭角を現すようになると、どの寺院の僧医の実力が上か競合するようになった。善徳女王が病気になると、慣例のように興輪寺の僧侶が治療にあたったが、それよりも新しい宗派である密教の密本法師の治癒力がより優れていたという説話が伝わっている。これはつまり、巫医に代わり、上流階級の病気の治療を担当していた僧侶の間で競争が激しかったことを物語っている。しかし、民間においては巫医の権威と役割は依然として強力であった。「巫覡」は時代が下るにつれ、庶民医療の中心的役割を果たしたものと見える。何より、医師といえる専門家の数が圧倒的に足りなかったからである。

新羅の処方

新羅固有の処方としては『威霊仙方』と『新羅法師方』を挙げることができる。これらの処方は、三国統一後、中国から本格的に影響を受ける前の新羅独自の医薬の状況を窺わせる。

唐の貞元(785~805)時代、周君巣による『威霊仙伝』には、当時新羅からの留学僧が教えた威霊仙草により重い病気を治したという物語が掲載されている。ところで、この僧侶は薬草の新羅での名称、つまり郷名しか知らなかったのである。これはつまり、唐では医学の知識があまりなかったことを意味する。これにより、威霊仙は8世紀の新羅の留学僧を通じて唐の医学界に報告されており、新羅から伝来した新羅固有の伝統医学であったことがわかる。

984年に日本の丹波康頼が編纂した『医心方』には、『新羅法師方』から採録した処方が4つ残っている。『新羅法師方』が書かれた時期は景徳王(742~764)の頃である8世紀中頃が上限と推定されている。ここでは腹の中に病的な塊が生じる病気、つまり「積聚」を治療する処方が載っている。8世紀以降に著された医学書であったとしても、新羅伝来の古くからの処方が採録されたと考えられる。

このように、現在伝わっている新羅の処方はすべて、中国の医学とは系統を異にしている。特に、威霊仙の事例は薬物の名称と用法が中国とは完全に異なっていたので、独自性の強い新羅の医薬の世界が存在したことを示している。

新羅の三国統一戦争期と三国統一後における医薬の諸様相

7世紀中頃、新羅が行った三国統一戦争には、高句麗·百済·新羅·唐だけでなく、高句麗の軍隊にいた靺鞨軍、唐軍にいた突厥(現在のトルコ)軍と回紇(ウイグル)軍、そして百済を支援するための日本軍までも関わっていた。このように、東アジア各国から集まった軍隊が韓半島に結集し、長年にわたって戦争を行っていた。ここでは、様々な風土病が伝わっていたであろうと想像される。また、新羅は百済や高句麗を滅亡させるために唐軍と連合作戦を行い、その過程で唐軍の軍医を通じ、直接中国医学に触れることができた。

軍事医学の一端は、662年に平壌城を包囲した唐軍の武将蘇定方宛に金庾信が伝えた医薬品から窺える。彼は食糧の他に頭髪30両、午黄19両を渡した。さらに文武王12年8月、新羅が唐に上表文を献上する際に送った物の中には、銀と銅の他に鍼·午黄·金などがあった。中でも頭髪·午黄·鍼·金は薬用が目的であったと思われる。金庾信軍が厳冬の時に頭髪をようやく蘇定方の軍隊に伝えることができたことから、逆に頭髪が治療剤として使われた食中毒·皮膚病·性病·凍傷などの様々な病気が7世紀中頃における唐軍の中で頻発していたことが推測できる。

鎮痛解熱剤である新羅の午黄は品質に優れ、三国統一後には、唐への主な輸出品目となった。止血剤としては磁石が有効であったようである。文武王9年(669)4月に新羅は唐の要求に応え、磁石2箱を送っている。これは新羅唐連合作戦の時期に、新羅産磁石の持つ薬効を経験した唐が、吐蕃(チベット)との戦争の時、新羅に要求したものと考えられる。磁石は鉄器による攻撃で内臓が露出したり出血がひどかったりした場合、そしてそれにより発熱などの症状が出た場合に生薬として使用された。現在の観点からは理解に苦しむ処方ではあるが、劣悪な状況下で発生した軍隊の中での病気を治療するために開発された治療法であった。

三国統一後の新羅では、692年に唐の「医疾令」に基づいて医学教育機関である「医学」が設立され、各種医療関連の行政も整備された。医療に関する当時の国家的関心事は、第一に国王を中心とした貴族の健康問題であった。国王と貴族は様々な医療サービスが優先的に受けられた。第二に、軍隊や力役集団のような大規模集団生活者の健康である。彼らにも官僚の医師が派遣された。このような集団では伝染病が発生しやすいため、それを未然に防ぐための社会的配慮もあったのである。これはそれ以前にはなかった変化といえる。

新羅中代になると、医学教育を担当していた医博士と鍼博士、そして国王を含む貴族の健康を担当した官医など、様々な職種の医療官僚が存在した。彼らは国家の医療行政を担当し、主導していた階層であった。医療官僚の選抜は国家が設立した医学教育機関において所定の課程を履修し、一定の試験に合格した者だけが対象となった。しかし、医術に長けた者は特別採用の形で、公的医療システムに組み込まれた。新羅の医学における教科の内容は、鍼と関連する医書が半分以上を占めている。 これは医学教育において鍼術を非常に重視していたことを示している。

「医学」から輩出された官僚の医師は、教育を受けた通りに、唐の医学に基づいて治療に臨んだと考えられる。そのような様子は、憲徳王14年(822)、王弟であ

る忠恭が病気を患った時に派遣された医師の処方からも窺える。彼は「龍歯湯」というものを処方したが、これを利用した治療法は唐の医学書に多く掲載されているのである。つまり、当時の新羅において唐の治療法が用いられたことを物語っている。

統一新羅期の官僚が処方していた医薬のもう一つの様子は、処方箋の木簡に現れている。月城の濠から出土している木簡は計20点余りで、中心年代は6~7世紀である。167番木簡には生薬の名称が記されている。この処方において注目に値するのは、主に性的機能を向上させるために使われた生薬が、毒性の強いものだったにもかかわらず大量に処方されているという点である。これは煎じ薬ではなく丸薬として処方したもので、新羅の薬典において官僚の医師が国王の性機能の向上のために調合した丸薬であった可能性が高い。

雁鴨池から発掘された木簡は、中心となる時代が8世紀で、その中でも198番木簡には一面に生薬名が記されている。この木簡の性格は、医書を学習した時に関連する処方を抜粋した「学習用の木簡」か、あるいは医師の処方箋を薬剤師が受け取った後、それに従って薬を調合した木簡と推定される。この木簡の処方は唐の『外台秘要』の処方に類似している。この木簡にも生薬の量が非常に多いことから、丸薬として大量に調合するための処方箋であったことが考えられる。

憲徳王の時の忠恭が服用した竜歯湯は、哺乳類の歯化石である竜歯を主な材料とするものである。これは、新羅において薬材の輸入が活発であったことを示す逸話である。新羅の生薬として中国や日本の文献に紹介されたものは、威霊仙の他に人参·午黄をはじめ、様々なものがあった。特に、対日貿易において薬材は重要な品目であった。景徳王11年(752)、日本に派遣された使節団には、東大寺本尊である毘盧遮那仏の開眼会に参加するという任務が課せられたが、その参加人数は700人にも達したという。彼らと日本の貴族との間で交わされた購入文書「買新羅物解」からは、具体的な交易品目が見られる。中でも薬材は麝香·人参·大黄·午黄·甘草などがあった。麝香と甘草などは西域や中国のものである。つまり、新羅は薬材の仲介貿易を行っていたのである。

一方、756年6月21日、日本の聖武天皇の四十九日法要の時に、皇后は亡くなった天皇が使用した愛用品や皇室の物品を東大寺に献納した。献納品の中でも、生薬に関する記録が「種種薬帳」の形で残っている。ここには計60種の生薬

が記載されており、麝香など16種は新羅からの輸入品である。特に紫雪と金石陵は、黄金を2両または100両ずつ加える調合薬であった。これから見ると、新羅は唐から薬材を輸入し、新羅に多かった金を加えて高価な薬を調合し、日本に輸出したと考えられる。

統一新羅期に培われた医学的成果は高麗時代にも受け継がれた。新羅の薛聡の後裔である薛景成家が高麗時代を代表する医家となったように、新羅系出身の医師たちは高麗社会において韓国中世医薬の礎を築く役割を果たした。このように、統一新羅期から始まった中世医療は、19世紀になって西洋医学が入ってくるまで、韓国の中世社会における基本構造として機能していた。

物の製作技術

物の製作に適用される技術としては、金属の着色技術、鍍金技術、ガラス工芸や宝石の加工技術、螺鈿と藍胎または乾漆技術、製織と染色技術、革の加工技術などがある。そのほとんどは新羅の人々が開発し発展させたものである。

金の精錬と加工技術

新羅といえばまず「黄金の国」という言葉が想起される。確かに新羅の古墳からは多様な金製品が多く出土している。その素材である金を鉱石から採集するためには、様々な段階の工程を経なければならない。その結果得られた自然金の粉には、通常、主成分の金の他に、完全に取り除かれていない不純物が残っている。従って再び精錬する必要があるが、その技術はおおよそ2種類に大別できる。一つは金の粉を鉛とともに加熱し、金(Au)-鉛(Pb)の溶融合金を作り、再び骨灰によって分離し、純粋な金を取る「灰吹法」である。もう一つは、純度の低い金の粉を水銀と混合した後に水銀を飛ばす「混汞法」である。新羅人はこのうちのどちらか、あるいは両者ともに知っており、それを適宜利用した可能性が高い。

金が得られた後には、ほぼ金板と金線を基本材料として、切り曲げ、穿孔して貼り付ける作業を行った。このような技術よりさらに高度な製作技術に属するものは、非常に小さな金粒を貼り付ける鏤金技術である(〈写真144〉)。鏤金技術

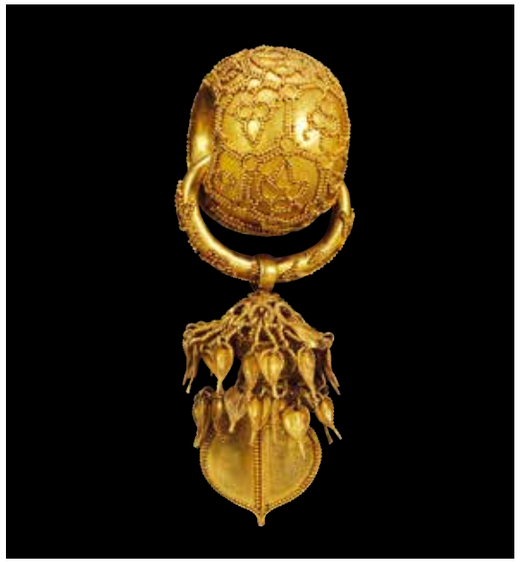

写真 143　慶州·普門洞合葬墳出土の太環耳飾

写真 144　慶州·普門洞合葬墳出土の太環耳飾鏤金技法

は、近年、自然科学的調査や分析により、大部分が鋳掛けと溶接の2種類の方法が使われていたことがわかった。鋳掛けは、金の鋳掛けやアマルガム法を用い、溶接は地の金板と金粒または金細線の両方を融点以下の温度で適度に加熱し貼り付ける方法を利用したものである。鋳掛けに使われた材料の金蝋は、溶融温度を低くするために銀(Ag)の含量を2~5%、銅を2%加え、融点を100℃~50℃に低くしたものを使ったと考えられる。しかし、上記の方法のうち、新羅の職人が主にどのような方法を利用したのかは定かではない。

鉄の鍛造および鋳造技術

新羅時代には既に製鉄技術がかなりのレベルに達していた。慶州隍城洞遺跡からは紀元前1世紀の鍛造用工房址とともに、鋳造と鍛造が可能な様々な用途の3

図 11　木心の設置と塑像の製作

図 12　外枠の製作

図 13　塑像を削って内枠を製作

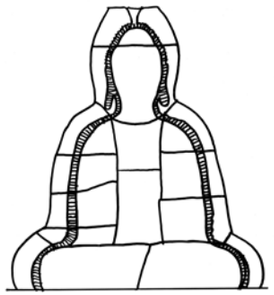

図 14　鋳型の組立完成図

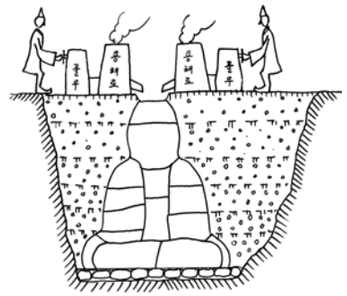

図 15　鋳造作業

世紀の炉が計20基発見されている。新羅時代における鉄器製作のための複合施設であった。また、墓からは紀元前1世紀から鍬の用途で使われたと推定される鋳造鉄斧が本格的に副葬されるようになる。このように早くから鉄を取り扱う技術を蓄積した新羅は、統一新羅期の下代になると、鋳鉄技法で大型の仏像を製作した。下代の創造的な工人は、全盛期の中代に巨大な聖徳大王神鐘の鋳造に成功した祖先の経験を受け継ぎ、当時最大の大型の鉄仏の鋳造に成功した。それが統一新羅末期(858)に製作された見ると(〈図11~15〉)、宝林寺毘盧遮那仏坐像である。

高さ273.5cmに達するこの鉄仏の製作技法を見ると、(1)まず木心を設置し、(2)その上に粘土を付けて鉄仏と同様の形の模型をつくる。(3)この塑像模型の表面に韓紙を貼るか、滑石の粉などを薄く塗って外枠が剥がれやすくなるように分離層をつくる。さらに、高温に耐えられる鋳型用土を塗り、その上に砂を混ぜた粘土を付けた後、藁や糠を混ぜた粘土を積み上げて外枠をつくる。枠が完成してからそれを幾つかに分割し取り外す。(4)塑像模型の表面を一定の厚さになるよう削り取る。この時、削った厚さがおおよそ5cm程度の鉄仏の厚さになる。(5)内枠の外側に外枠部分を組み立てる。この時、2つの枠の間に金属製の下敷きを入れるか大きい鉄釘で固定し、枠の間の間隔を一定になるようにする。鋳型周囲には溶湯を注ぐ湯口がつくられるが、鋳物の大きさによって一つまたはいくつかを設置する。(6)鋳造作業を行って鋳型を取り除いた後、鋳造の欠陥を補い、粗い表面は削る。別鋳した螺髪や手を組み立て、全体に金鍍金などを行って完成する。

漆塗り技術

漆塗りの技術は、様々な地の材料の表面に塗って光沢を出したり、色を出して荘厳にしたりして、腐敗や黴を防止する目的で使用された。新羅時代の塗料は自然界から得たものがほとんどである。代表的なものが漆であり、椿油や蝋、松脂のような樹液、含量などが材料に合わせて使われた。

韓国における漆塗りの技術は先史時代から受け継がれた土着の技術が基となり、三韓時代にはすでに相当な水準に達していた。三国時代になると、それ以前と比べて格段に発達した漆の技法が現れる。生塗りは精製したものを使用し、木心の上に織物を張って漆塗りをしたり、塗り物に様々な添加物を混ぜて下塗したりした。その上の漆塗りも様々な方法で塗布された。このように、漆器の製作技術が飛

写真 145　慶州·月池(雁鴨池)出土の木製銀平脱花形漆器

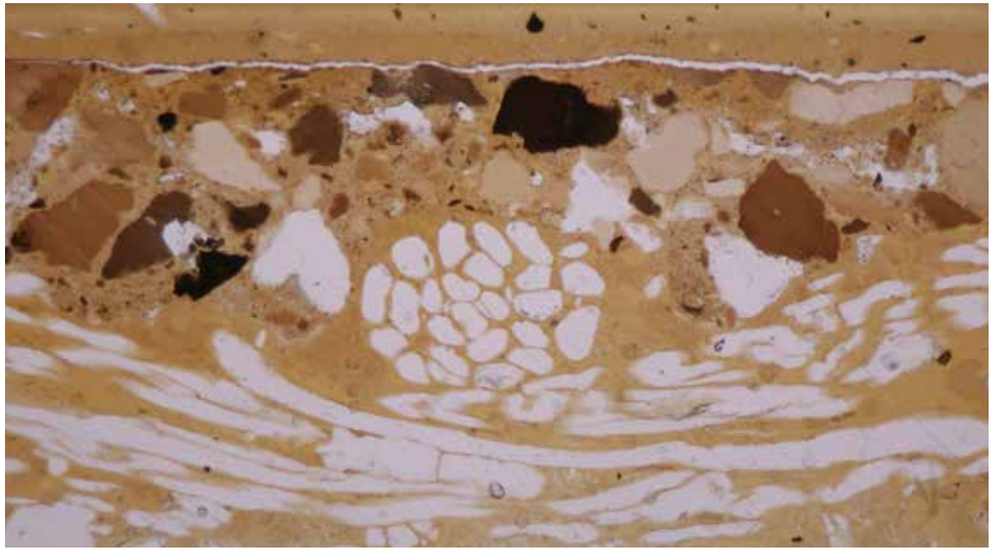

写真 146　漆塗り層の顕微鏡写真(X100)

躍的に発展し根付くことで生産量も急増し、朝廷では「漆典」という官署を設置して、漆塗りの技術に関する総合的かつ体系的な管理と規格化を目指した。

統一新羅期になると、竹を細く切り、巻いて形を作った後、漆塗りをした捲胎、竹の地に漆塗りをした藍胎、軽くて丈夫な漆器が製作された。漆塗りの技法も規格化され、木心に織物を張って2回地塗りを施し、精製した漆で透明な色または朱漆を数回行う。地塗りは生塗りに土粉と骨粉を混ぜた。骨粉は牛骨を高温の還元炎で焼き粉末にしたもので、漆塗膜に弾力を与え、漆器の耐久性を高める機能がある。雁鴨池出土の花形漆器がこの技法により製作された代表例である(〈写真145、146〉)。

この時代にはじめて登場した漆器製作法の一つに、金属工芸品の上塗りとして漆塗りをする平脱技法がある。例えば、銅鏡の場合、装飾が施される裏面にまず金銀製の装飾を施し、残りの部分には漆塗りをする技法が用いられることもある。これにより、金属工芸品がさらに華やかさを増し、材質の質感を冷感から温感へと変える驚くべき効果を生み出した。一方、慶州皇南洞の統一新羅期の遺跡から「黄漆」を入れた土器が発見された。黄漆とは、漆の木とは異なるチョウセンカクレミノから採取した樹液を精製したもので、塗ると黄金色になることから高級塗料として使用された。この遺物の発見により、黄漆を新しい天然塗料として活用した職人が新羅人であったことがわかる。黄漆の技術は朝鮮時代までは受け継がれていたが、その後途絶えてしまった。

製紙と染色技術

韓国に紙が伝来した時期は三国時代の初期と考えられるが、どのような紙が生産され、どのように発展していったかについては明らかになっていない。現存する紙類の文化財の中で代表的なものは、統一新羅期の『無垢浄光大陀羅尼経』と『新羅白紙墨書大方広仏華厳経』といえよう。

陀羅尼経(〈写真147〉)は幅6.7cm、全長約6.2mの長い巻物で、約54cmの楮紙12枚を繋いで作られている。楮紙の製作方法は、まず上質の楮の皮を加工し、細かい繊維にした後、水に溶かして竹簀で漉いた。次に、黄蘗(きはだ)などで染色を行い、再び紙を砧の上に置いて綾巻で叩く作業を通じて、薄くて丈夫な状態にした。このように完成した紙を木板の上に載せ、仏典を写し出した。陀羅尼経に使われた

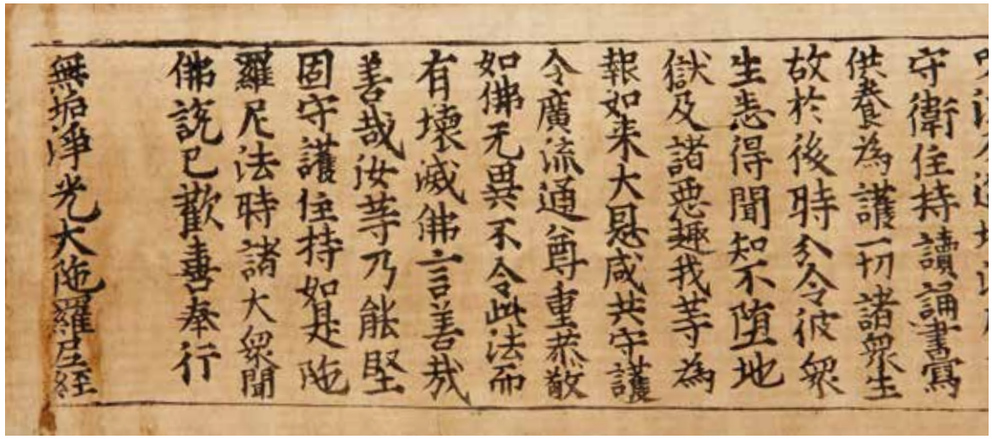

写真 147　無垢浄光大陀羅尼経

紙は紙質も優れている上に、砧の上で叩く技術を駆使することにより密度が高められ、他の紙よりも薄いが2倍以上の強度を持つようになった。また、黄蘗で染色を行うことにより、防虫効果を高めた。これらの技術により1300年もの間、釈迦塔の舎利孔の中で朽ちずに保存され、現在では現存最古の印刷本となった。

華厳経は新羅時代の筆書きの筆写本で、韓国における現存最古の写経である。長さ14m、幅29.2cmで、白紙30枚を繋いで巻物の形式に仕上げている。紙は普通の楮紙より薄いが(厚さ約0.04mm)、砧の上で叩いているので、3·4倍丈夫であると同時に、弾力にも優れる。特に、経典末尾の跋文により、当時の製紙技術と写経の製作過程についてある程度推察することができる(〈写真148〉)。つまり、原料の楮の根に香水を掛けて育て、筆写を行う筆師や巻物の軸をつくる職人、画師など、製作に携わった職人すべてに菩薩戒を受けさせたのである。また、職人はお手洗いの後や寝食の後は香水で体を清らかにした後、作業に取り掛かるなど、仏事に最高の礼を尽くした。さらに、最高の材料を集め、さらに選別して紙を作り、紙質を強化させる技術を適用することにより、結果的に最高レベルの韓紙を作ることができた。

一方、表紙の紫色は皇帝の色であり、最高の色とされ、神秘さと高貴さを象徴した(〈写真149〉)。表紙の紫色の染色がどのように行われたかについては明らかになっていないが、紫色の伝統的な染色法はいくつか知られている。まず、紫

写真 148　華厳経の軸と跋文

写真 149　華厳経の表紙(部分)

草の根を乾燥させ、粉にし、湯に入れて媒染剤として灰分を加えて染める方法がある。濃い色を出すためにはこの工程を数十回繰り返さなければならない。もう一つの蘇芳を鉄分の媒染剤をもって着色する方法では、華厳経の表紙と似たような色が得られる。

しかし、紙への染色はそれほど簡単なものではない。紙を水に入れると、楮の繊維の間の水素結合が切れてしまい、紙の形を保つことができない。染色も1·2回で色がしっかり染まるわけではない。特に紫の染色は難しい。

新羅の紙はすべて楮紙で、中国において主に生産された麻紙とはかなり異なる。新羅の楮紙は皮を叩いて作った、白くて光沢のある紙という意味の「ビ白紙」と呼ばれ、唐や日本にも輸出

されていた。このように、当時の新羅における製紙技術は世界最高レベルに達していた。

新羅の木版印刷術

新羅において木版印刷は、当初は仏塔への供物を納める目的で始められた。しかし、まもなく木版印刷は、教育の基本資料の生産にも大いに寄与した。高麗時代に入ると、膨大な大蔵経の印刷など、様々な分野において広範囲に利用された。

木版印刷術の前提条件となる紙と墨は実物と記録から見ると、すでに6~7世紀に幅広く使用されたことがわかる。慶州月城の濠から発見された7世紀中頃~後半のものと推定される長さ19.0cmの4面の木簡には、経典を筆写するために紙12斤を買い入れた過程が吏読によって記されている。これも紙を使用したことの間接的な証拠である。

新羅時代の紙の遺物として確認された代表的なものは、『無垢浄光大陀羅尼経』、『白紙墨書大方広仏華厳経』、「白紙墨書陀羅尼(華厳寺石塔)」、「陀羅尼経(羅原里石塔)」などがある。これらの遺物の共通点は、製紙の原料が楮の木であり、砧の上で叩く技術が適用されている点である。また、宗教的な目的ではない紙の例として、日本の正倉院収蔵の新羅村落文書がある。この文書には村別の人口数、性別、耕作地の面積、栽培作物等に関する数値の増減を記録している。

文房具の一つで印刷に欠かせない墨は、煤や膠(にかわ)、香料を混ぜて固めたものである。新羅の実物の墨としては、日本の正倉院収蔵の長さ約26cmの「新羅楊家上墨」、「新羅武家上墨」があり、日本奈良の東大寺収蔵の「新羅柳家上墨」、そして釈迦塔から発見された大きさ5.4×4.1cmの統一新羅期のものがある(以上、〈写真150〉を参照)。

木版印刷術の誕生と発達という側面から見て、初期の印刷は印章のように小さな面に刻まれた情報を紙に直接捺印する方法から始まり、次第に広い面積に多くの情報を盛り込む方法へと発展した。広い印刷版の上から紙を下に押す方法は力を均一に与えることができないので、板を逆さにして墨を塗り、それを紙に押す方法、つまり木版印刷術が誕生したのである。その変化過程の途中のものと

三国時代の筆　新羅楊家上墨　新羅武家上墨　釈迦塔から発見された墨

写真 150　新羅の文方具

して、仏陀や塔の形を刻んだ印象を紙に繰り返し押す方法があり、華厳寺西五重石塔出土の白紙墨書陀羅尼経(〈写真151〉)がその例である。

これは『無垢浄光大陀羅尼経』の内容を筆写したもので、塔の形を木版に刻み、繰り返し押している。『無垢浄光大陀羅尼経』の内容にも出てくるが、77または99の塔を作る代わりに塔の数の分の紙に押して奉納した。

この塔印は5段ずつ22行が押されているが、塔印1つの大きさは高さ5.3cm、基壇部の幅2cmで、基壇と相輪部のある三重塔の形で、各層の笠石の左右には風鈴まで刻んでいる。

新羅の木版印刷術を代表する『無垢浄光大陀羅尼経』は、1966年、仏国寺·釈迦塔を補修するために解体した際、第2層塔身部に奉納された金銅舎利外函の中から見つかった。その他に舎利孔金銅舎利函基壇部の底から『宝篋印陀羅尼経』と石塔の修復に関する文書3件が発見された(〈図16〉)。これらの文書は塔の製作と関係するもので、顕宗15年(1024)の唐の修復に関する記録や靖宗4年(1038)に再び筆写した記録である。具体的な内容は無垢浄光塔を建てた沿革や舎利を取り出して再び安置したこと、準備過程や寄進、支出の内容、地震の被害に遭った後1038年に修復した過程、寄進者のリストなどである。これらの文書を解読したところ、現

写真 151　華厳寺西五重石塔から発見された塔印(下)と拡大(上)

存最古の木版印刷の背景に関連する内容であることがわかった。

この無垢浄光塔、つまり多宝塔の修復に関する文書には釈迦塔への奉納過程について記されており、1036年の地震により被害を受けた両塔を1038年に修復し、さらにその前の1024年における無垢浄光塔の修復記録が釈迦塔にともに奉納されるようになったと推測されている。一方、修復の記録には塔を742年(景徳王の測位の年)に建て始め、恵恭王の時に完成したとされている。従って、木版印

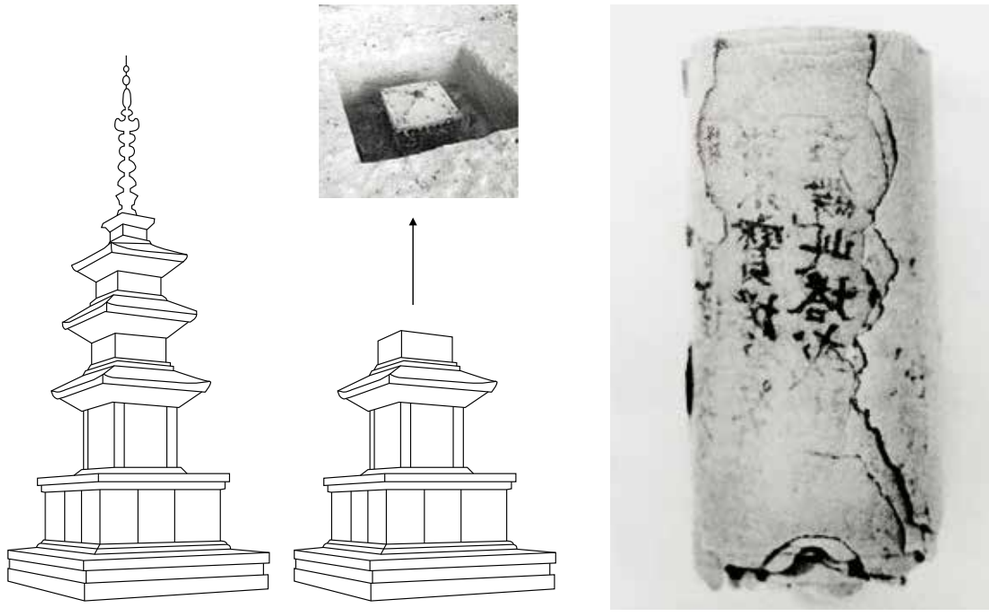

図 16　『無垢浄光大陀羅尼経』の釈迦塔第2層塔身部内からの発見場所(左)と発見状態(右)

刷本の『無垢浄光大陀羅尼経』も、742年頃に多宝塔に奉納されたものが修復の時に釈迦塔へと移されたと考えられる。

『無垢浄光大陀羅尼経』は、楮紙の木版印刷で、巻物の形の書物である。大きさは縦6.5~6.7cmに、各章52.9~55.7cm(第12章は44.0cm)の長さの紙12章を繋いで貼り付けている。総長641.9cmで、直径0.29cmの細い木の軸に紙が巻かれ、軸の両端は赤く塗られている。印刷された面の版式は上下の短辺の長さ5.3~5.5cmの辺欄内に楷書体で各行6~9字、全体681行が配されている。

『無垢浄光大陀羅尼経』の紙の色は茶色である。これは白いもの退色したのではなく、前もって紙を黄蘗で染色し、時間の経過とともに表れた色と考えられる。黄蘗で染色した紙は、黄蘗に含まれるアルカロイド成分に虫を殺す香りがあり、紙の寿命を延ばすとともに、墨のにじみを防ぐ効果もある。

紙の密度は普通楮紙より2倍以上高い。これは、製作の時に紙を砧の上に載せて木の棒で叩き、艶を出し、滑らかにするための加工が行われたことを示す。また、光沢があることから、磨きの過程を経ているもので、生紙ではなく熟紙であることが分かる。このような黄蘗染色と砧で叩く加工は、当時の高い製紙技術を物語っている。これらの技術により、墨を塗った木版で印出する時、墨がにじまず、さらに紙に当てて刷る時も損傷なく均一に印刷する技術を確保することができた。

本文の書体は、筆法の側面から見ると、結構は不定形で章法は均一ではない。このような筆法は6世紀初め~末の「蔚珍鳳平里新羅碑」(524)や「南山新城碑」(591)などで見られる新羅の伝統的な書法資料との類似性を示している。特に、筆法の様式は706年の慶州·皇福寺塔の舎利函の銘文に近い。これは刊行の時期を推定する端緒ともなる。

『無垢浄光大陀羅尼経』の刊行時期を推定する方法としては、紙や形などの物理的基準によるものがあり、その他本文の字や内容から推測する方法もある。印刷された字を見ると、中国唐の武則天の時期である690年~704年につくられた新しい字、つまり武周制字の「證·地·授·初」の4字が10ヶ所で確認できる。従ってこの経典は704年以降刊行されたものと推定できる。この経典が発見されて以降、木版印刷術の起源について韓·中·日の研究者の関心が集まった。『無垢浄光大陀羅尼経』が発見される以前、最古の木版印刷本は770年頃刊行された日本の『百万塔陁羅尼経』とされていた。これは『無垢浄光大陀羅尼経』から根本·自心印·相輪·六度の4種の陀羅尼をそれぞれ刻んだ後、捺印の方法により印刷·奉納したものである。

中国の一部の学者は『無垢浄光大陀羅尼経』の本文に書かれた武周制字に基づき、唐において板刻され、新羅の僧侶や留学生が帰国の際に持ち帰り、仏国寺を創建する時に釈迦塔に奉納した可能性が高いと主張した。しかし、実物の紙の分析により、新羅の伝統的な紙の加工方法により製作されたものが明らかとなり、書体も皇福寺塔金銅舎利函の銘文と同系統のものであることが確かめられた。従って『無垢浄光大陀羅尼経』は、新羅において作られた材料と新羅人による書体と板刻技術が融合し、742年以前に刊行された、現存最古の木版印刷本であると結論付けることができる。

8 生活文化

服飾

服飾関連の遺物

新羅の服飾を示す遺物に、龍江洞石室墳出土の28点の彩色俑がある(〈写真152-1、2〉)。この墓は7世紀末から8世紀初めに築造されたもので、俑は全体的に中古期に流入した唐の服飾制がどのようなものであったかを明確に示している。女性像は、文献の記録通りに中代初めに唐の衣冠制度を受け入れたことが明らかになっている。俑の大きさと服飾は位階の差を明示している。最大の俑は幞頭(ぼくとう)が大きく、紫色の服を着用しており、袖が広く「袍」が長い上に、裾の端、すなわちトリョンに別途の装飾である「襴」というものが付けられており、最高の身分にあたる真骨に属するものであることを示している。

これらの俑は現在、ほぼ色褪せてしまっており、最大の俑のみ色の保存状態が良好であるが、本来はすべて中古期の服制の規定に決められた位階により、紫・緋・青・黄に色分けされていたと考えられる。女性像は唐代に流行した典型的な服飾を着用しており、髪の形も麻立干期の土偶や隍城洞石室墳出土のような従来の後ろで束ねた髪ではなく、半髪の形であるため、全体的に唐の様式といえる。

次に、唐様式の帯金具を挙げることができる。唐式の帯金具は小型の鉸具(かこ)と鉈尾、方形の巡方、蒲鉾形の丸鞆からなる。これは中国でも出土例が多いが、周辺国でもこれを模した例が多い。中国の出土品を見ると、このような帯金具は唐の建国時にすでに製作されていた。唐の帯金具は7世紀中頃から新羅に伝わったとみられる。慶州将軍路(チャングンノ)1号墳の出土品は、定型化した段階の唐式帯金具で、帯に固定する鈒が金製であることから、高級品であったと推定される(〈写真153〉)。

写真 152 慶州·龍江洞石室墳の土俑

写真 153 慶州·将軍路1号墳の銅製帯金具(金製鈒)

興徳王の服飾禁令

遺物以外で統一新羅期の服飾をうかがうことのできる記録は、興徳王の時の服飾禁令である。『三国史記』雑志色服条では、興徳王9年(834)に、社会の身分秩序が乱れ、珍しい舶来品を好む贅沢な風潮が蔓延していることを指摘し、一種の「奢侈禁止令」を出したことが記されている。その内容は真骨から六頭品・五頭品・4頭品・平民に至るまで骨品別に服飾や車・馬具・器などの日用品、家やその付属品など、生活全般にわたり、輸入品をはじめとする様々な品目の使用を制限している。なかでも特に服飾については骨品別・性別に様々な規制事項を並べているが、翻って考えると、当時の人々がそのような禁止品目を好んで使用したことの傍証にもなる。これにより、当時の服飾を構成した様々な要素を知ることができ、多様な材質までもうかがえる。

真骨で現職に就いている者が被る幞頭には素材の制限はなかったが、上着・半臂(はんぴ)・ズボンには最高級素材である「罽繡錦羅」の使用を禁じている。半臂は下着の上に着る半袖の肩掛けの服である。「罽繡錦羅」は新羅の布の中で最高級品とされた織物で、「罽」は羊毛や絹糸などを織り交ぜたラサ(raxa)系統の毛織物と考えられる。「錦」とは様々な色の絹糸を精巧に織り交ぜた華やかな絹を、「羅」とは模様を入れた薄く上質な絹を指す。

幞頭とともに官服の主な付属品になるのが、帯と足首まである靴である。真骨として現職に就いている者は、装飾の施された白玉を帯に付着することや紫色の靴を履くことが禁じられている。靴の足首の部分を結ぶ紐にも淡い色の白玉の使用を禁じている。ポソンは模様入りの絹以外であればすべて許され、通常の履は革・糸・麻のいずれもすべて許されていた。麻の升は幅の単位あたりの布目の数まで制限が設けられた。真骨の現職に就いている男性は26目で、これは非常に細い糸で編んだ高級麻だったと推定される。

真骨の女性の場合、真骨の現職に就いている男性と共通する部分もあるが、下着・襟巻・櫛・簪・冠は女性が使用した服飾の要素である。櫛には瑟瑟鈿と玳瑁の使用を禁じた。前者は、現在のタシュケント産のエメラルドを螺鈿のように装飾を施したものを指しているようである。後者は熱帯地方のウミガメの甲羅である。「冠」は女性の頭に載せて装飾を施したものを指しているようである。以上のように、真骨のみならず、六頭品・五頭品・4頭品・平民に至るまでの男女の服飾に関する詳しい規定から服飾の材質を推定すると、次の通りである。

第一に、幞頭の場合、真骨は様々な材料を自由に使うことができた。しかし、六頭品は繐羅・絁・絹・布、五頭品は羅・絁・絹布、4頭品は紗・絁・絹・布、平民は絹・布のみを使うことができた。繐羅とは非常に薄い柄の入った絹のことを、「絁」とは柄のない高級絹を、「絹」は非常に薄いが粗い絹を、「布」は絹ではなく一般的な麻のことを指す。

第二に、腰帯の装飾品についてである。真骨以外に六頭品は烏犀・鍮・鉄・銅を、五頭品は鉄を、4頭品は鉄・銅を装飾品として使用した。「烏犀」とはクロサイの角のことを指し、輸入品であった。「鍮」とは銅と亜鉛を合金した黄銅のことをいう。この2つの材料は鉄や銅に比べ、高級素材であった。

第三に、靴についてである。六頭品以下は黒のトナカイの革に紫色の染色を施した波文を使用した特定の靴は禁じられた。これは新羅の官人にあまりにも人気が高かったため、そのような措置が取られたものと考えられる。真骨の中で現職に就いている者は、紫色でなければ黒のトナカイの革でできた波文のものも履くことができた。他にも、靴の装飾帯に制限があった。六頭品は烏犀・鍮・鉄・銅を、五頭品は鍮・鉄・銅を、4頭品と平民は鉄・銅をそれぞれ使うことができた。

食文化

穀物

青銅器時代の後期になると、稲作を営むことで本格的な農耕社会となった。斯盧国が成立する原三国時代には粟・黍・稗などの雑穀が主に栽培された。その理由は、この時期の気候が寒冷になり、全体的に稲の生産が減ったからであると推定されている。『後漢書』によると、辰韓は昔から肥沃な土地に恵まれ、五穀が豊富に収穫できたとされている。今日の五穀とは米・麦・豆・粟・黍のことを指すが、『三国志』弁韓条の記録では「土地が肥沃で五穀と稲の栽培に適している」とされており、五穀と稲を別々に記述している。つまり、三国時代における五穀には稲が含まれていなかったと推定できる。中国の秦漢の時代にも稲を除く粟・黍・豆・麦・長芋を五穀と言った。なかでも粟と黍が最も盛んに栽培された。

粟と黍の他に、主な作物として豆と麦がある。『三国志』東夷伝によると、麦は種蒔きをした後に祭祀を行うほど重要な穀物であった。他の作物に比べて耕作の期間が短く、干潟にも強い上に、遅くても6月までは収穫が可能であるという利点があり、豆とともに畑から穫れる主な作物となったのである。豆は農業技術が発達していない状態でも容易に栽培でき、凶作に備えることができたため、古代社会では主食となった。豆は麦とともに国家的にも重要な穀物だったのである。

この時期の穀物が見られる遺跡としては、釜山機張(キジャン)佳洞(カドン)の4~5世紀の集落遺跡がある。この遺跡の土壌を分析した結果、稲の他にコムギ・キビ・アズキなどの穀物とともに、モモ・マクワウリ・ヒョウタンなどとマンシュウグルミ・クリ・クマイチゴなどが見つかっている。

稲作が本格化したのは4~6世紀である。4世紀初め以降、鉄器の製作技術が大いに発展し、農具の生産が急増した。稲作のための水利・灌漑施設の築造や整備記録は4世紀以降に見られる。他の作物に比べ、稲の栽培には特に水の安定的供給が必要なためである。実際、貯水池の築造は法興王23年(536)に造られた永川(ヨンチョン)菁堤の碑文から確認することができる。菁堤の築造には7千人が動員されており、25人280組が組織された。

6世紀以降は稲作に関する記録が増えている。これは、新羅・中古期以前の主な穀物であるアワ・ムギ・マメなどの雑穀に代わり、コメの割合が次第に増えたことを物語っている。それを端的に示すものとして、『三国遺事』に掲載されている7世紀の逸話が挙げられる。義湘に弟子入りするために太白山(テベクサン)へ向かう真定法師のために、法師の母親が家にあった米7升全部を炊き、旅に出る息子に持たせたという逸話から考えると、少なくとも統一新羅期以降は、一般民衆も米をある程度消費することができたと推定できる。ただし、今日のように主食として米を一般的に食べることができるようになったのは、朝鮮時代に入ってからである。

膳に並んだ惣菜

新羅時代の食事は飯と惣菜によって構成されていたはずであるが、今日のように汁物も飲んだであろうか。崔致遠の『桂苑筆耕』には、「無駄に飯ばかり食べて、汁で味を調和させることを望むのは難しいようだ」という内容がある。ここで崔致遠は「和羹」を天下を治める宰相に喩えている。この文章は、彼が唐に滞在していた時に作成したもので、新羅に汁物があったかどうかについて、これだけで判断するのは難しい。ただ、汁物に関連する食事道具として、匙について考察することができる。

匙は今日では韓国の食文化を特徴づける最も重要な要素の一つである。匙を主な食事道具とする国は、東洋に限らず世界でも韓国が唯一である。匙は飯を食べる時も使われるが、主にスープ類をすくって飲むための道具である。従って、匙の存在は、汁物、とくにチゲなどの料理が重要なメニューであったことを示している。韓国には、青銅器時代から骨で作られた匙が残されている。穀物や野菜などを入れた粥の形をした料理を食べていたため、古くから匙が使われたと考えられる。韓国の料理のほとんどは水分を多く含んでおり、温かい料理が多かったため、手や箸だけでは食べづらい。咸安(ハマン)城山(ソンサン)山城から出土した木製の匙のように、三国時代の匙は、食事が主食と副食とに分けられている中で汁物を飲むための道具になったと推測される。

汁物以外の惣菜は、『三国遺事』に武珍州から王京を訪ねてきた安吉のために、文武王の弟の車得公が「具饌至五十味」の宴を開いたという記録からうかがうことができる。「五十味」については、惣菜が50種類だとする見解と、5つの御膳に出した五味だという見解がある。いずれにせよ、これにより7世紀中頃、新羅王京に居住した貴族たちの華やかな食文化がうかがえる。

肉類は狩猟や畜産により供給された。狩猟により得られるものは、イノシシ・シカ・ノロ・ウサギ・キジ・カモなどである。特に韓半島の先史時代以降の多くの遺跡

写真 154　慶州・月池出土青銅匙

からイノシシ・シカ・ノロの骨が出土している。『三国史記』金后稷列伝には、真平王が鷹や犬を放し、イノシシ・ウサギなどを獲ったと記されている。野生の鳥類の中ではキジが最も多く食された。武烈王が王位に就いた後には、1日の食事として酒6斗、米6斗、雄雉10羽を消費したと記されている。このような記録は、支配階級の豊かな食生活だけでなく、一般民衆の食生活にも肉類の中でキジが大きな割合を示していることを示唆している。実際に5~6世紀の慶山林堂古墳では、副葬された壺形土器の中からキジの遺存体が多数出土している。現代韓国語で、「ちょうど必要なものがない時に代用するもの」という意味で「雉の代わりに鶏」という諺を使うが、これは古くから雉が好まれていたことを示す証左といえる。

畜産は肉類の安定した供給を可能にした。飼育された家畜はウシ・ブタ・ニワトリ・イヌである。墓から出土したイヌやウマの骨はその証拠である。他にも、新羅において飼育された家畜としてガチョウ・クロヤギ・ヤギ・ヒツジが『日本書紀』に記されている。『新唐書』新羅条には、宰相の家にはウシ・ウマ・ブタが多く飼われていたと記されている。

匙の使用以外に現代韓国の食文化を特徴付けるもう一つの要素として、野菜料理の豊富さを挙げることができる。特に、春のナムル料理に使われる山菜は、遅くとも新石器時代以来の伝統を持つ韓国特有の惣菜で、世界的にも非常に珍しいものである。山や丘陵の多い地形に適応した食文化といえる。野菜類としてはサンチュやキノコに関係する記録がある。『三国史記』によると、聖徳王3年(704)に公州から金芝が、尚州から瑞芝が献上されたことが記されている。

『三国史記』によると、神文王の時に、金歆運の息女を王妃として迎える際に贈った結納品の中に、発酵食品や加工食品と関係する品目があり、注目に値する。結納品は米・酒・油・醤油・蜂蜜・醤・脯・食醢の135車と租150車により構成されており、食べ物が結納品のほとんどを占めている。『隋書』によると、新羅の婚礼では貧富の差が料理と酒にも表れると記されている。このような記録には、醤・豉・脯・醢のような発酵食品や加工食品が見られる。8世紀頃の日本の文献には、豆による発酵食品の中で、豆と穀物の麹である醤と豆を発酵させた豉が出てくる。前者は今日の味噌、後者はチョングクジャンに類似したものと考えられる。醢も発酵食品で、今日の塩辛や食醢(シッケ)に近いものと推定される。脯は乾燥させた肉である。

食文化の一面を示すものとして、遺跡から発掘された祭祀料理の痕跡がある。慶州国立博物館の8~9世紀の統一新羅期の井戸から、人骨と多量の動物の骨が収集された。ネコ・イヌ・ウシ・ウマ・イノシシ・ウサギ・ネズミ・モグラ・シカなどの獣類や、スズメ・カモ・キジなどの鳥類、カエル・ヘビ・フナ・コイなどの両生類・爬虫類・川魚、サメ・タラ・ボラ・スズキ・ブリ・タイ・ニベ・サバ・エイ・ヒラメ・フグなどの海魚の痕跡が発見された。これらは新羅の領土で穫れたものを神に供えるために生け贄として使われたものである。これらとともに桃の種も多く発見された。また、4~6世紀の新羅古墳からはニワトリやキジなどの肉類の他にもサザエ・ハマグリ・アサリ・シジミ・アワビなどの貝類、サメ・フグなど多様な魚の骨、モモ・マクワウリ・クリなどの果実類など、様々な食物が土器に入れられ、副葬されたものが発見されている。

祭祀や各種儀礼に関係する料理として欠かせないものに酒がある。『三国史記』新羅本紀によると、儒理王の時にキルサムという遊戯で勝敗を決め、負けたチームが勝ったチームに料理と酒を振る舞ったことが記されている。さらに、唐の詩人が「新羅酒」を詠ったことから、新羅の酒は中国でも広く知られていたようである。また、重要な儀礼の食べ物として餅がある。今日でも祭祀には餅が必ず供えられるが、特に米粉の餅は儀礼用の料理としての役割が大きかった。円仁の『入唐求法巡礼行記』の8月15日付の記事によると、唐の法華院において新羅の人々がすいとんや餅を供えて8月の望月の歳事を行ったことが記されている。

さらに、特別な食文化として茶を挙げることができる。茶は日常的に飲用されるものでもあるが、祭祀用、または供献用としても用いられた。『三国史記』によると、興徳王3年(828)、使臣として唐に渡った大廉が茶の苗木を持ち帰ったため、王が智異山に植えさせたと記されている。茶は善徳女王の時からあったが、この頃から盛んに飲まれたようである。茶の普及は仏教と深い関連がある。中国では後漢末期から茶の効用が知られ、東晋時代に仏教とともに広まったといわれている。

また他の食物として果物を挙げることができる。新羅時代にはモモ・スモモ・アンズ・クリ・ナツメを「五果」と呼んだ。『三国史記』新羅本紀によると、モモとスモモが古くから果樹として栽培されたことが記されている。また、『三国遺事』にはモモやクリの木に関連する逸話が伝わっている。一方、中国では新羅の松の実を「海松子」と賞賛しており、進貢品になったという。日本の正倉院の文書にも、新羅

から松の実を購入したという記録がある。

新羅時代に薬用として用いられたと思われる飲み物に高麗人参茶がある。『三国史記』によると、聖徳王22年(723)に唐に使臣を派遣する際、小さなウマ1頭、午黄と高麗人参、アザラシの皮、金銀などを贈ったと記されている。また、孝成王3年(738)には王が唐の使臣・刑璹に黄金30両と脯50反、高麗人参100斤を持たせている。734年、唐に高麗人参を200斤以上輸出したことが記され、崔致遠が唐で官吏として生活していた時、上官に高麗人参を贈ったという記録も残っている。このような記録から、統一新羅期以降、高麗人参が唐との主な交易品として定着していたことがわかる。高麗人参は生で食べたのではなく、薬用として煎じるか、茶として飲用したのであろう。

身分制社会だった新羅において、人々が食文化を平等に享受したとは考えにくい。王族・貴族のような上層階級のメニューは、米と汁、食醢や塩辛、肉類や魚類などの焼き物や、脯や酒などにより構成され、これらの料理は侍女がいくつかの膳に出したと推測される。一方で、一般庶民は醤や塩漬けの野菜やナムルを主に食べ、魚や肉類はそれを補う少量のみであったと考えられる。「双谿寺真鑑禅師塔碑」には、統一新羅期の人である真鑑禅師が、家に一斗の穀物も一尺の土地も持っていなかったが、大変な親思いで、魚を売って親に豆の粥を食べさせたことが記されている。禅師自身はドングリやマメを混ぜたものに、2・3種類のナムルの惣菜だけを食べており、ときに客が訪れても他に出す惣菜がなかったと記されている。この文章は特殊な地位の僧侶で修道者であるということを反映した逸話であるが、これにより一般民衆の素朴な食生活をうかがうことができる。

住生活

新羅の人々の住生活については、歴史の始まりから終わりまで記録は皆無である。また、考古資料の調査の程度と内容は時代によって異なる。

『三国志』魏書の東夷伝韓条によると、「住居は草屋土室を建てるが、形は塚のようであり、扉は上方にある。家族が同じ家屋の中で一緒に暮らし、大人と子供、男女の区別はない」とある。さらに弁辰条によると、「家を建てる際、横に木材を積み、監獄に似る」と記している。このような記録から見る家の全体構造と各部の細部については、この時代の家屋の構造を大体において受け継いだ麻立干期の「家形注口土器」の構造を参考にする必要がある。

上記の記録にある「塚」を墓と解釈すれば、家は地面を掘った構造、つまり竪穴式住居であり、それはおおよそ3世紀中頃における家屋の基本構造といえる。ところが、「塚」は「高い墓」という意味を持つ言葉である。従って、草屋を藁葺と理解するならば、地上の土の家が外形上、中国人にとっては高い墓のように見えた可能性もある。実際、この時代の家は地面を非常に浅く掘って整地するか、地面の上に家を建てた地上式構造であった。一方、扉が上の方にあるという表現は、竪穴式住居の出入口を示す表現で、家の構造が地上式である以上、この表現はそのまま受け入れるべきであろう。つまり、片方の壁の上にある入口から梯子を上って出入りする構造だという意味である。このような基本構造は麻立干期にもそのまま受け継がれたようで、それは家形土器にも如実に表されている。

現在までに嶺南地方の墳墓遺跡から実際に出土した家形土器(〈写真155〉)に

写真 155　麻立干期の家形土器

図 17　家屋の構造と各部の名称

表現された家屋の各部の構造はほぼ同一である。屋根がすべて草葺である点、内部が壁と屋根裏の2層からなる点、片方の壁に梯子が掛かっている点などが共通する。これらの表現は非常に写実的であり、実際の各部を忠実に再現していると考えられるため、これを基礎にそれ以前の時代の住居跡の発掘成果を参考にして、家屋の構造を復元することができる(以下、図17を参照)。

家の構造は草葺である。内部は入口が付く2階の屋根裏と屋根を支える耐力壁により囲まれ、密閉された下層の部屋がある。文献の「土室」は、入口がなく耐力壁のみで囲まれたこのような生活空間の様子を表現した言葉であると考えられる。もちろん、壁はすべて土でできているわけではなく、骨組みとして壁柱を主とした壁体架構が存在し、横方向に木材が積まれている表現が用いられたのではないかと推測される。

壁体は主柱と壁柱を緻密に立てて架構した後、ススキなどの草本類を混ぜた泥で表裏を固めて仕上げ、屋根を支える耐力壁の役割を果たす。この耐力壁は地上式の家屋構造において竪穴式住居に劣らず熱を管理するために工夫されたものである。室内は隔壁のない単室の構造である。竈から壁体の一方に沿って設置された一条の煙道付きのオンドルは、初期鉄器時代から現れる炊事および暖房設備(〈写真156〉)で、住居の中核となる要素である。煙道の先には排煙のための煙突が設置されている。

屋根は片側が円錐形になった屋根あるいは寄棟造りで、もう片側は切妻屋根を壁の前に若干張り出させた構造である。これは先史時代における円錐形屋根の竪穴式住居に低い入口を付けた構造から発展した形と推定される。耐力壁も青銅器時代における竪穴式住居から見られる壁柱が発展したものである。切妻屋根の方に入口が設けられており、梯子を上って入口から出入りできるようになっている(〈写真157〉)。

このような独特な重層構造や、入口と直結する架構材料としては、室内へ伸びる母屋桁(もやげた)と高い棟束(むねつか)を挙げることができる。この母屋桁は室内の四本柱が支えており、屋根の架構を支える部材であると同時に、屋根裏の外郭にもなっている。また、独特な高い棟束は屋根裏の空間を確保する一方、屋根裏前にある入口から室内へ出入りする空間を確保できる建築の要素である。このような屋根裏は、世代別の作業場であると同時に、家財道具や家の食糧保管場所であったと思われる。

このように、住居を重層構造にして屋根裏に入口を設けた理由は、害獣から人間や家財道具を守るための工夫だったのであろう。一方、紀元前後の時期に集落が沖積平野へと進出した際には、相対的に海進期にあたる時期であったことから、高くなった川面に適応するための方策であったとも考えられる。ただし、このような家屋構造、特に屋根裏の入口を一般化できない理由として、機張佳洞集落遺跡で入口が竈の反対側の地上面にある事例が見つかっていることが挙げられる。

麻立干期の新羅人の集落での生活は、佳洞遺跡からうかがうことができる。村は周辺を山々に囲まれた盆地に位置しており、周辺の山には栗の木、楡の木など豊富な木材があり、村の前には川が流れ、その周辺の肥沃な農地では農業が盛んに行われた。東海へと続く川沿いに形成された周辺地域との交流も容易であったと思われる。

この遺跡は、全体的に平面方形の地上式住居が集まっている場所と、小屋形の高床式倉庫だけが集まっている場所が明確に分かれている。その他、土器生産のための窯跡や、井戸跡などが確認されている。住居は一時期におおよそ30~40軒であったと推算されている。倉庫は村人が収穫した穀物や様々な種類の物品を保管するための公共の施設であったが、その数が多過ぎる点から、この村が当時の新羅において地方に対する支配の拠点としての役割を果たし、その倉庫

写真 156　釜山･機張佳洞集落遺跡の家屋跡

写真 157　復元の模型

写真 158　瓦屋形の蔵骨器外函

には献上品が集められていた可能性が考えられる。

新羅において瓦葺建物はおおよそ中古期に入って出現したと推定されている。瓦葺建物は、一時期、寺院や宮殿に限って建造されたと考えられていた。しかし、『三国遺事』辰韓条によると、9世紀末の憲康王の時には、都城の中に草葺建物は1軒もなく、家屋の軒と塀が連なっていたと記されている。統一新羅期になると、王京の一般家屋も瓦葺のものが少なくなかったのであろう。

統一新羅期の王京の様子は『三国史記』雑志屋舎条の興徳王禁令から推定することができる。規定が守られていなかった当時の事情があ定められている。各身分に対する禁止の内容は、最上位の真骨への禁止条項を基準に、身分が下る

につれて、項目を増やしていく方法が適用された。従って、真骨に対する禁止条項にその下の階層の禁止条項を加えていくと、当時の貴族階級の住まいにおける様々な側面をうかがうことができる。

真骨では、室は長さと幅が24尺(約7.2m)を超えてはならず、軒丸瓦および2軒以上の建築は禁じられ、格天井(ごうてんじょう)･重栱･栱牙･獣頭は設置できたが、懸魚彫刻は禁じられた。また、白蝋･銅の装飾は許されたが、金･銀･乳石･五彩の装飾は禁じられた。中央の階段と二重階段は許されたが、階段の石を変えることや三重階段は禁じられ、塀は梁と棟木を設置することや石灰を塗ることもできなかった。簾の縁は絹と絁は許されたが、錦･罽繡･野草羅と屏風は刺繍入りが禁じられた。寝床は厚めの錦の使用やシタン･ジンコウ･チョウセンヒメツゲの装飾は許されたが、玳瑁･伽香の装飾は禁じられた。一方、家の扉は重ね扉と四方扉が許された。

ここでの「室」は、規定通りであれば、1つの部屋とみるには大き過ぎ、1棟と見るには小さ過ぎる。従って、正面3間の建物で、各間の幅が7尺ほどの家を指すものという解釈も存在する。重栱とは木造建築の屋根の架構において梁を二重に掛けるものをいい、栱牙とは原初的形態の斗栱を指すようである。獣頭は、屋根に載せる獣頭形の装飾瓦のことをいう。懸魚とは、屋根の破風板が棟で合わさる切妻の頂に掛ける魚形の鉄製装飾のことで、入母屋屋根に掛けたものと考えられる。白蝋は鉛と錫の合金であり、五彩とは五色の丹青を指す。木材としては楡の木が多く使われたようである。

このように文献によって統一新羅期の瓦葺建物についての詳細を知ることができるが、全体像を想像するのは難しい。このような状況の中、 粘土を焼いて蔵骨器の外函として作られた瓦葺建物形の遺物(〈写真158〉)は、統一新羅期の貴族の家屋を知る上で大いに参考になる。これにより、入母屋屋根の瓦屋を想定することができるのである。

発掘によって知られる統一新羅期の住生活の細部資料はさほど多くない。しかし、皇龍寺址東側一帯(新羅王京S1E1地区遺跡)(〈図18〉)は、東西と南北に伸びる道路に囲まれた、一定区画を持つ王京の一坊の中の各家の構成を知ることができる資料である。坊の規模は道路の中心間距離を基準に南北172.5m、東西167.5mである。内部空間はさらに塀で囲まれ、その中に普通5~8軒の建物や井戸

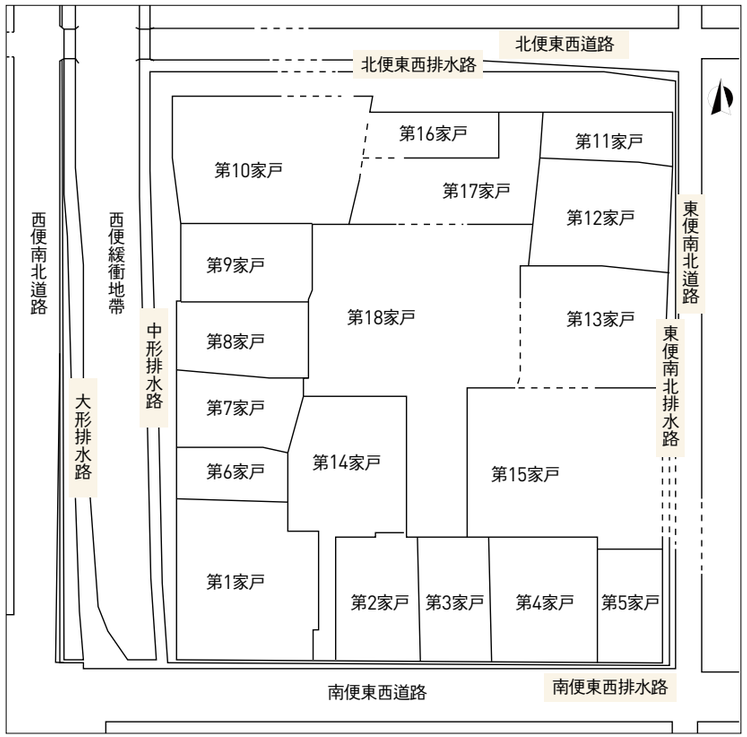

図 18　新羅王京S1E1遺跡遺構配置図

などを有する18の家戸に分けられている。18の家戸の中で、塀や建物の保存状態が良好なものは坊の南側と西側に多い。各家戸の規模を見ると、南と西の隅に位置する家戸を除くと、南に位置する家戸跡はおおよそ南北約30m、東西約20mで、南北に長い平面長方形であり、西側に位置する家戸は東西約30m、南北約20mの東西に長い平面長方形である。

そのうち第2家戸(〈写真159〉、〈図19〉)を例に挙げると、南北が東西より長い平面構造となっており、面積は704㎡である。すべて瓦葺と考えられる建物の配置を見ると、南塀の中央に設置された門に対応する北側塀の中央に、大きな南向きの第5建物が位置する。そして、残りの建物7軒がそれぞれ東側と西側の塀の近くに3軒ずつ東向きまたは西向きに配されており、第1建物だけが第5建物の南に近い。家戸北側の第5建物は面積37.45㎡で、他の建物より2倍から4倍広くなってい

写真 159　S1E1遺跡第2家戸発掘の全景

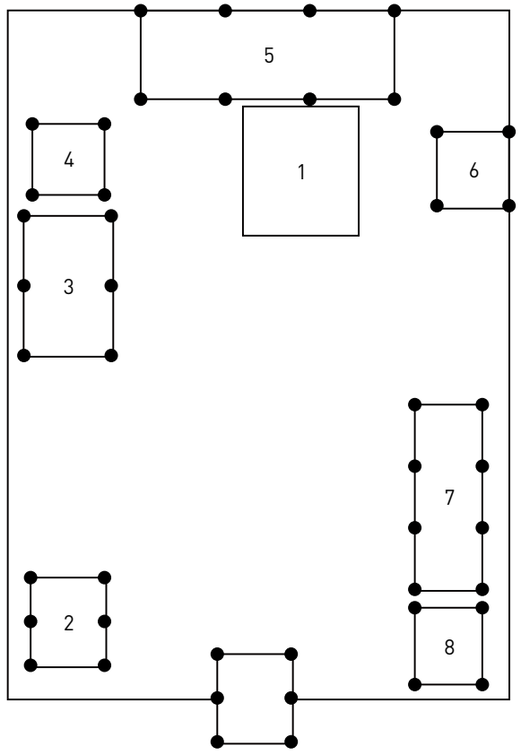

図 19　S1E1遺跡第2家戸建物の配置

る。規模や位置から見て第2家戸が中心建物と判断される。第7建物からは穀物の貯蔵が可能な大型壺が出土し、倉庫址と推定されている。当時の王京には集中式の上水道管理システムが備わっていなかったため、住生活において基本となる飲み水は家戸ごとの井戸から得られた。ときに一つの家戸から数個の井戸が発見されることもあるが、その一部は各家庭の儀礼用の井戸であった。

地方都市の居住タイプは、沙伐州の一部区域である尚州伏龍洞一帯の遺跡に対する発掘調査により、確認された野垂木の補強材のある建物址と一般住居跡、井戸などが見つかっている。野垂木の補強材のある建物址は、中軸方向がほぼ東西軸の西南向きまたは南北軸の東向きで、坊里区画線と一致する。個々の野垂木の補強材のあるものは通常直径1m、深さ30㎝で、建物の長辺の長さが10m以上の大型建物址と推定され、正面3間のもの(〈写真160〉)と1・2間のものに分け

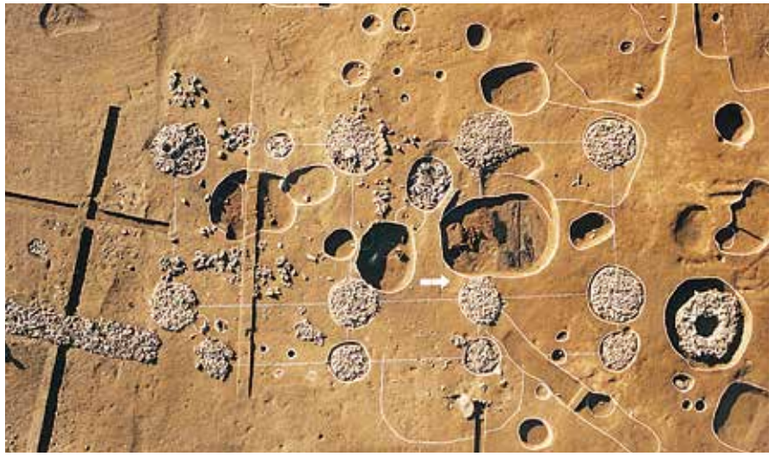

写真 160　尚州·伏竜洞256番地遺跡の野垂木の補強材のある建物址

写真 161　尚州·伏竜洞230-3番地遺跡の一般住居址

られる。正面1·2間の建物は広い柱間距離、対称の建物配置などを考慮に入れると、数軒の建物が1つの単位空間をなして配置された公共の特殊な建物址と推定される。一方、正面3間の建物址は公共の施設が位置する空間の左右に分散して配置されており、互いに直角または平行して密集して配され、1つの単位空間に

なると同時に、「コ」の字形の配置となっている。このような建物址は母屋の付属部屋を備えており、一般の住居跡と推定される。

一般の住居跡は浅く掘った竪穴で、平面形が方形または長方形、楕円形などの定型性を持ち、内部に竈や一条煙道などの炊事·暖房設備を備えている(〈写真161〉)。竈は粘土·石·瓦などを用いて構築され、釜を載せる部分とその周辺設備からなる。基本的に麻立干期の施設と同様であるが、煙道が保温性が高い石で造られている点が、以前から改良された部分であるといえよう。

井戸はすべて石造であり、地上部分は破損し、下部のみが残っている。石積みの平面形はほとんどが円形と方形である。断面形は筒形か上広下狭形がほとんどである。床面はほとんどが砂礫層を整地しており、加工した木材で「井」形に最下段の施設をつくり、壁石は全体の安定性と均整のために下部に上部より大きな石材を使用している(〈写真162〉)。

写真 162　尚州·伏竜洞256番地遺跡の井戸

9 農耕と物品の生産

農耕

統一新羅期は伝統的な農耕が完成する時代である。新羅では6世紀頃から貯水池を築造し、農地を拡大すると同時に、犁を含む鉄製農具が全国的に普及した。このような現象は、統一後、さらに拍車が掛かった。三国時代は主に墳墓から鉄製農具が出土する比率が高かったが、統一新羅期になると墳墓からの出土量は急激に減り、その代わり生活遺跡からの出土量が増える。この時期の鉄製農具出土遺跡はほとんどが王室や国家と関連性の深い場所である。この時期の農具に見られる大きな特徴として、ヘラ付き犁先の一般的な使用、鋳造鍬の大型化、有莖式手鍬の出現を挙げることができる。

出土する鉄製農具としては犁先と犁のヘラ、U字形鉄製刃、両刃手鍬、熊手、サルポ(鏟)、手鍬、鎌などがあったが、新しい変化の中心はヘラ付きの犁先に見られる。犁先は三国時代の遺跡からも出土しているが、耕作した土を1つの方向に集めるヘラ(鏵)付きの犁先はこの時期から出現している。犁のヘラを使い土を逆転させることで深耕が可能となった。これにより、土壌の肥沃度を高め、田の連作や畠の輪作も可能となった。この時代の犁先はソウル九宜洞遺跡から出土した典

写真 163　龍仁·彦南里遺跡出土の犁先

型的な高句麗式三角犁先を受容して製作したといえるほど、全体的に形態の類似性が見られる。

これらの農具を通じて当時の稲作は以前より格段に発展したが、自然災害による限界によりその発展が妨げられていたことは確かである。文献に見られるように、特に統一新羅期は主に種蒔きを行う3~5月頃に災害が頻発したため、その被害は大きかった。新羅の朝廷はそれを克服するために水利施設の増築と補修を行った。中古期以降、すでに新しい水利施設の築造と管理により川や渓谷の流れを調節して耕作地を増やし、8~9世紀頃は堤防の増築と補修が活発に行われた。永川(ヨンチョン)菁堤(チョンジェ)も、中古期に築造された堤防を8世紀末頃修築したものであることが、永川菁堤碑の貞元銘に記されている。この記録には、貞元14年(798)に水桶に該当する上排掘里という施設名が記されているが、これは貯水池から農耕地へと水を引く過程で必要であるものだったと考えられる。

統一新羅期において国に税として納める農作物は粟·米·大豆が中心であった。官吏への俸禄は米であったが、民を救済するために国が与えた穀物は粟であった。水田農業は発達していたが、依然として畠の方が主流だったので、米が足りなかったのである。従って、一般民衆は粟や大豆などを主食とした。

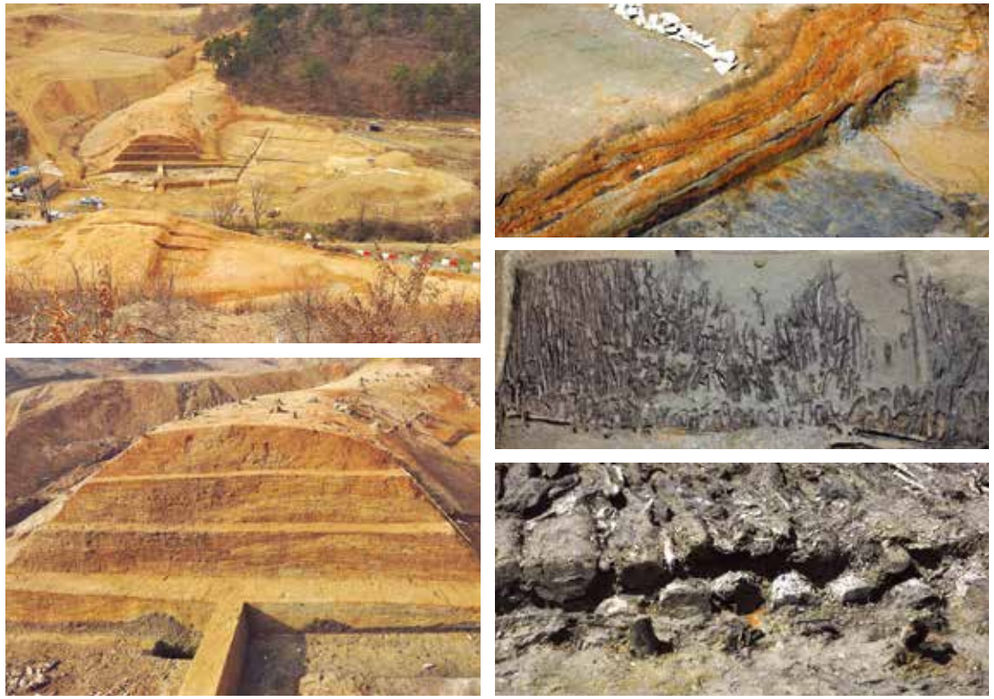

写真 164　水利関連遺跡発掘状況（左：蔚山·薬泗里堤防、右：尚州·恭俟池）

生産遺跡

三国時代から統一新羅期までの土器の生産技術において最も注目すべき現象は、窯の構造が生産の効率性を高める方向へ変わっていく点である。統一新羅期における窯の焼成部の底部で確認される有段式構造はその一つである。慶州勿川里、金泉(キムチョン)大聖里(デソンリ)、龍仁(ヨンイン)東栢(トンベク)地区などの遺跡で確認されたこのような段は、窯の床面を水平に保ち、器物を安定させて積むための構造と考えられる。さらに、5世紀以降使用された積石による焚口も、焼成作業を繰り返す際に土築の焚口を崩して閉鎖することで窯本体に損傷を与えるということがないという、構造上の利点を持つ。このような窯構造の変化とともに、各種窯道具が発達している点も、生産の多様化に繋がっている。慶州蓀谷洞(ソンゴクドン)遺跡からは多様なトチン、つまり土器台が出土してお

写真 165　慶州·花谷里の生産遺構(上)と出土遺物(下)

り、当時、洗練された土器生産が行われていたことがわかる。

新羅において瓦はおおよそ6世紀に使われ始めた。しかし、三国統一の後、本格的に建てられた官庁の建物や金箔を塗った家屋など、瓦葺建物が建てられるほどの財力を持つ階層が増えたことにより、生産も大いに拡大した。統一新羅期

写真 166　慶州·花谷里出土の紋様塼

写真 167　慶州·東川洞遺跡出土の鋳型

写真 168　慶州·皇南洞376番地遺跡出土の木

に瓦を生産した窯遺跡は、慶州地域の下邱里(ハグリ)、金丈里(クムジャンリ)、蓀谷洞、望星里(マンソンリ)などの遺跡をはじめとし、保寧(ポリョン)千房(チョンバン)、益山弥勒寺址、青陽(チョンヤン)本義里(ポンイリ)、尚州青里(チョンリ)、安東(アンドン)亭下洞(チョンハドン)、蔚山谷里など全国で見つかっている。そのほとんどは半地下式の窯構造であり、生産の効率性に関連する変化や特徴は現れていない。これは社会環境が変化していたにもかかわらず、それを享受できる需要層が限定されていたという点と関係するのであろう。

一方この時期は、慶州花谷里遺跡の例のように、瓦や土器を同一の窯で生産した、いわゆる瓦陶兼業窯が見つかっているのも特徴的である。8世紀以降の大規模遺跡である慶州金丈里遺跡からも、窯の内部に瓦と土器が一緒に積まれており、弥勒寺址遺跡でも窯の内外から統一新羅期の様々な土器片と瓦片がともに出土している。

統一新羅の王京で使われた生活用品、なかでも宮廷や官庁、一般人が必要とした土器や瓦などを生産した集落は、慶州市内の中心を囲む外郭に位置していた。そこでは、麻立干期以来、断続的または継続的に操業された陶器製産遺跡が確認されている。すなわち、慶州市の北東の外郭にあたる川北面(チョンブクミョン)蓀谷洞や勿川里などの場所では、特別な場合を除いて、時代を問わず都心の住民が生活する上での必需品が生産され続けている。南西の望星里なども同様である。このような生産と消費システムが完備されたことにより、慶州が王都として機能する物理的礎が築かれた。

統一新羅期の金属器の生産遺跡としては東川洞遺跡、皇南洞376番地遺跡などを挙げることができる。東川洞遺跡は北川の北に位置し、道路や大規模な建物址とともに、青銅工房址が調査されている。工房址は石列により区切られた3間の建物址のうち2間から確認された。内部に位置する直径3mの長方形窯は、赤褐色の鋳型が多量出土している点から、鋳型製作用の窯と推定される。ここでは青銅溶解炉4基と製錬炉1基が確認された。周辺でガラス製鋳型が出土していることから、ガラス製品も生産したと考えられる。

皇南洞376番地遺跡からは竪穴遺構、井戸、垂木の補強材の入った建物址、木柱列と木柵、集石遺構などが確認された。この遺跡は統一新羅の官庁が管理していた倉庫の付属施設か、祭祀用貢献物を保管していた付属遺構の可能性が

ある。この遺跡から出土した木簡に、倉を意味する「椋」の字が書かれていたが、これにより工房を管理していた官庁の物品保管倉庫を示す可能性が浮上する。生産施設から出土したガラスのスラグと坩堝を分析した結果、ガラスは鉛ガラスであることが明らかになった。共伴の石製錘は倉庫の穀物の重さを量る時に使用したものと考えられる。

物品

統一新羅期の土器文化は、2つの段階に区別することができる。まず、7世紀末から8世紀末までは印花文が大いに流行した。印花文はそれ以前の時代にすでに出現しており、当初は1種類の文様のみ特定部位にあしらわれていたが、この時期になると器全体を隙間なく文様で埋めて非常に華やかに仕上げている。大部分は長い原体にいくつかの文様を刻み、一度に広い範囲に文様を表現できるようにした。8世紀は印花文土器の全盛期といえる。

土器の器種に高杯類は見つかっておらず、盒や台付瓶が流行した。盒は口縁部が外反する形態へと変化する。この時期には火葬が広まり、印花文によって華やかに装飾が施された骨壺が流行した。代表的な遺跡は676年に完工した月池である。新羅の宮苑遺跡である当遺跡からは、上流階級の人々が使用した土器が多く出土している。

次に9世紀初めから統一新羅末までの土器文化がある。この時期には印花文装飾が激減し、無文のものが多くなる特徴がある。印花文は襞文瓶など一部の土器では表現されているが、前時代まで大流行していた様々な印花文はほとんど姿を消している。反面、襞文瓶や扁瓶などの瓶類が流行し、頸部に波文を刻んだ大型壺も各遺跡で確認されている。小型の襞文瓶は表面に縦方向の帯を付けるか、点線や実践を細かくあしらっているため、襞があるように見えるものである。四面が扁平な扁瓶は、馬車などに積み込む際に多くを載せることができるため、空間活用度が高い形態といえる。

この時期の土器は月池や皇龍寺址·弥勒寺址をはじめ、保寧真竹里(チンジュクリ)、始興(シフン)芳山洞(パンサンドン)、霊岩(ヨンアム)鳩林里(クリムリ)など

写真 169 慶州·月池出土の印花文土器

の地方の土器窯跡からも多く出土している。また、統一新羅末期には、後三国の抗争など混乱を極めたため、各地に城郭などが築造され、それらの場所からも多くの土器が出土している。将島(チャンド)清海鎮遺跡はその代表である。

一方、この時期は中国から輸入された越州窯系の青磁碗が月池をはじめとする生活遺跡から出土している。新羅では7世紀にすでに緑釉を塗った陶器がつくられ、高温焼成する技術も持っていた。さらに9世紀中頃には中国磁器に頻繁に接しており、統一新羅末期には磁器を製作する条件が整っていた。磁器の製作は高麗時代に始まったという見解が一般的であるが、統一新羅末期にすでに製作されていた可能性もないとはいえない。

新羅の瓦製作は、三国統一を前後する時期に大きな変化が訪れる。まず、それまで作られなかった軒平瓦が作られるようになる。さらに軒丸瓦では重弁の蓮華文が現れ、蓮華の中央に子葉が表現され、周縁部を珠文で装飾するようにな

写真 170　慶州出土各種瓦

写真 171　月池出土の宝相華文塼(調露2年銘)

写真 172　調露2年銘文塼の細部

る。それ以前の単弁蓮華文の軒丸瓦に比べ、非常に華やかな模様へと変化したのである。また、瓦当部には双鳥文·麒麟文·獅子文·迦陵頻伽文などの特殊な文様も現れ、宝相華文·蔓文·葡萄文など多様な文様が流行した。しかし9世紀以降になると、瓦当文様に細長い花弁が表現された菊花文が増え、それ以前の華やかな文様はシンプルになり、活気を失う。

一般的な軒丸瓦は、導入の初期は土器製作法と同様、粘土帯を輪積みして作られたと考えられるが、次第に円筒の枠を利用して製作する方向へと移り変わる。また、三国統一以前は無段式の軒丸瓦が多く、統一以降は有段式が流行する。軒平瓦はほとんどが長い竹板のような板(模骨)を編んで作った瓦桶を利用したが、後に円筒枠を作って製作する方法へと変化した。叩き板は短板から長板へと変化した。短板は長さ10cm以下で、少なくとも3回以上叩いて完成させる。一方、中板は長さ12~17cmで2回叩き、長板は1度で済む。おおよそ統一新羅期に入ってから短板から中板へと変化したといわれている。このような変化は技術の発展により作業の効率性を高めるためのものであった。

塼は現在の歩道ブロックのように床に敷いたり、壁に装飾を施す目的で使われた。無文のものもあるが、上面と側面に華やかな文様の装飾を施し、緑釉を塗ったものもある。緑釉塼は皇龍寺址·四天王寺址·感恩寺址·興輪寺址などから出土しており、法堂内部または建物の周辺に敷いていたようである。塼の文様は非常に繊細で洗練されている。代表的なものとして月池出土の宝相華文塼がある。上面の中央に8枚の葉が表現された大きな宝相華を配し、四隅には単葉の花びらが、側面には相対する2頭の鹿が施され、余白には巧みな技術による唐草文を埋めている。もう一方の側面には「調露2年(680)、漢只伐部出身の官職·小舎の君若が3月3日に作った(調露二年 漢只伐部君若小舎 三月三日作康)」という銘文があり、月池周辺における建物の工期、6部に分けられて建築資材が納品された状況、当時の官職などを知る上で重要な資料となっている。

他にも楼閣文塼·龍文塼·狩猟文塼·仏や塔が表現された塼があり、これらは主に側面に表現されている。側面文様があるものは床ではなく、塔や建物の壁に装飾を施す用途で用いられた。塔装飾の代表的なものは四天王寺址出土の緑釉塑像である。日本の植民地時代に鉄道工事の過程で一部収拾され、現在国立中央博物館に収蔵されている。近年まで四天王像の磚として知られていたが、

写真 173　月池出土の轡

写真 174　昌寧･火旺山城出土壺鐙

2006年より行われた四天王寺址の再発掘作業により、塼の全貌が明らかになった。この磚は四天王寺東西塔の基壇部の外面装飾に用いられたもので、3点が1組となって塔の一面に階段を挟んで2組ずつ、6つを配置していた。三つの像はすべて武装した人物が鬼を組み敷いた状態で座っており、表情から服装に至るまで細かく表現されている。各像は人物の視線、形態、鬼の姿などがそれぞれ少しずつ異なる。統一新羅の仏教彫刻の高い水準が感じられる作品で、当時活動していた僧侶の良志によるものとする見解もある。

三国統一後、遺跡からの武器の出土例は著しく減少するが、農具の発見例はある。農具も他の遺物と同様、墳墓からの出土例はほとんどない。龍仁彦南里遺跡の竪穴から犁先･犁先のヘラ･鉄製釜･錠･轡など様々な鉄器が出土しており、鉄器の製作所、または保管場所であった可能性がある。また、慶州東川洞770番地の井戸からは犁先や鐇斗などの鉄器が出土している。

馬具では轡と鐙が特徴的である。轡は主に鑣轡で、銜の側面に直交して輪が1つ付く独特な二重外環式である。銜はS字形で鉄製のものだけでなく、金銅製、青銅製のものも出土している。手綱の引手は三国時代の遺跡から見つかる2条の捩り技法が採用された例と、唐代の鑣轡に見られる円環が採用された例の2つの系列のものが出土している。統一新羅期の鑣轡を代表するものは、伝慶州塔里、昌寧火旺山城、光陽馬老山城、扶餘扶蘇山城、益山弥勒寺址、龍仁彦南里の出土品である。

鐙はつま先を包む壺鐙が多く確認されている。三国時代の壺鐙は、基本形を木で製作し、主要部分だけを鉄板で補強したものであるが、統一新羅期のものは全体が鉄製であるという相違点がある。統一新羅期の鉄製壺鐙は、鞍と鐙をつなぎやすくするために、革が通る孔の方向を変えたり、足を載せる部分を壺部の外側に突出させて広げるなど、機能的に工夫した様子が見られる。慶州天官寺址、慶山林堂低湿地Ⅰ地区、昌寧火旺山城、光陽馬老山城、益山弥勒寺址、伝黄海道平山(ピョンサン)出土品などがある。

10 海外との文物交流

貿易港

統一新羅期の外交は多元的であったため、外国との交易や交流も盛んであった。その結果、王都慶州には様々な文化や物が伝わり、新羅文化は国際性を帯びながら開花した。興徳王の禁令条に記された贅沢な風潮の背景には、活発な海外交流があったのである。新羅に関する外国人の見聞録や歴史書の記録が、すべて考古学的調査によって裏付けられているわけではないが、一部の状況はうかがうことができる。王京である慶州、地方の大規模な寺院、行政の中心地から、磁器など唐からの輸入品が出土しており、商人が往来していたと思われる貿易港の一部が見つかっている。

将島清海鎮遺跡は9世紀に張保皐が東アジアの国際交易の拠点として設置・活動した場所である。中国にわたって武官として勤めていた張保皐は、828年に新羅に帰国した。彼は興徳王に海賊の退治と国際貿易により朝廷の財政難を打開するための方法を提案した。興徳王は彼を清海鎮大使に任命し、1万人の軍人を授け、清海(莞島)に滞在させた。清海鎮は西海と南海を結ぶ沿岸海上に位置する。その海路は古くから東北アジアと三国を結ぶルートにあり、特に日本の対唐

写真 175 莞島·清海鎮遺跡調査の様子

写真 176 清海鎮遺跡の出土遺物

貿易船が通る航路に位置した。

現在、清海鎮本営が設置された将島と五峰山の麓の法華寺址が発掘されている。将島は長佐里沖180mにある約4万坪の小島で、張保皐を中心とする清海鎮勢力が滞在した本営である。遺構としては、島の浜辺に防御用木柵が、内部に内城や外城など城郭の一部の痕跡が残っている。木柵は将島の南と北西の海岸を防御するために立てたもので、海岸から10mほど離れた海底に丸太杭約1000本が40~80cm程の間隔で円形に設置されている。

出土遺物は一面扁瓶·四面扁瓶·小型襞文瓶·中国越州窯青磁片·軒平瓦と軒丸瓦·土器などである。これらの遺物は益山弥勒寺址や保寧·真竹里土器窯跡、慶州月池、鬱陵島(ウルルンド)天府洞(チョンブドン)古墳群などからも出土している統一新羅下代の代表的な遺物と同形である。竪穴内部からは祭祀遺物と

写真 177　蔚山·伴鷗洞遺跡の木柵列

推定される鉄盤·鉄釜·青銅瓶などが出土している。青銅製分銅·銅鏃·刀剣·鉄製腰帯·馬具などは清海鎮が貿易基地であっただけではなく、行政や軍事の拠点でもあったことを物語っている。

一方、蔚山伴鷗洞遺跡は、新羅の朝廷が直接経営した外港関連施設と推定される。発掘区域内では統一新羅期の木柵や井戸の他、三国時代の建物址、高麗時代以降の遺構などが見つかっている。調査された2列木柵の全長は約250mで、柵列の間隔は4mほどである。そして望楼施設が1区間に3つ、4区間に1つ見つかっている。望楼に使われた柱は直径45~70cmの原木で、残っている柱の長さは約130cmである。1mの深さの柱穴を掘って木柱を立てており、柱穴の底部には特段の施設はない。木柵は一般的に、土城や石城に比べて一時的な設置物の性格であると考えられていた。しかし、伴鷗洞遺跡で見つかった木柵は、その構造の堅牢さや丘陵を囲んで配された状況から、長期間にわたって使われたものであると判断できる。残存状態からみると、将島清海鎮の木柱列と同様、防御施設または接岸施設である可能性がある。

遺跡から発見される外国の文物

この時代のいくつかの遺跡からは、統一新羅の対外関係を反映する遺物が出土している。当時の文化が唐から新羅へ、それがさらに日本へと流れたため、遺物も同様な状況を示している。すなわち、新羅地域で唐の遺物が、日本で新羅の遺物が出土·保存されている。

三国統一以降、新羅の印花文土器が日本列島の至るところで出土している。7世紀末から8世紀初めと推定される遺物は、福岡県では大宰府·鴻臚館·福岡城址など主に日本の官庁跡から出土している。畿内からもこの時代の新羅土器が主に城郭や官衙関連の遺構から出土している。奈良県明日香村の石神遺跡からは長頸壺片が出土している。8世紀以降の城跡からの出土例として平城京出土品がある。大阪市四天王寺食堂遺跡出土の印花文長頸壺は寺院からの出土例である。大阪府大井遺跡や奈良県明日香村西橘遺跡などの生産遺跡からも出土している。これらは官営工房において新羅人が活動した可能性をうかがうことができ

る資料である。ところが、8世紀後半以降になると、それ以前に比べて城郭・官衙・寺院からの出土例は減少する。当時の日本と新羅の外交があまり行われなかったことと関係があるのであろう。

新羅は676年までに白村江の戦い(伎伐浦戦闘)で倭を破り、対唐戦争において勝利をおさめた。その後、両国は約35年の間、断交となった。緊張関係を修復

写真 178　慶州から出土した中国青磁と唐三彩(①拝里、②錫杖洞、③朝陽洞、④蘿井遺跡、⑤九黄洞王京遺跡)

するために最初に行動をおこしたのは唐である。高宗は新羅へ使臣を送り、神文王を新羅王に冊封し、文武王の官爵をそのまま受け継がせた。一方、新羅は神文王の時、長い戦争により乱れた民心を取り戻し、疲弊した国内の諸般情勢を整備する必要があったため、唐との関係改善に前向きであった。しかし両国の関係がすぐ改善したわけでなない。孝昭王代に関係改善の動きがあり、聖徳王代になってようやく国内情勢の安定を経て、唐との関係を修復させた。聖徳王は、在位36年間で使臣を唐へ46回も派遣するほど唐との外交に積極的であった。恵恭王以降、新羅では政治的・社会的に不安な兆しが見られ始めたが、両国は依然として友好関係を保ち、交流を深めた。

写真 179　軍威・麟角寺僧塔址出土工芸品(柄香炉、香炉、水瓶)

①

②

③

④

写真 180　西域との交流を物語る遺物（①九政洞方形墳、②国立慶州博物館孔雀文様石細部、③漆谷松林寺、④月池）

このような外交関係に基づき、唐の新しい制度や文物も新羅に伝わった。しかし、新羅は唐の文化をそのまま受容せず、自らの状況に合わせて変容させた。新羅の王京であった慶州市街地の随所からは唐からの輸入品が出土しており、それをモデルに新羅様式へと発展させたものも多く発見されている。

最も多いのは磁器である。月池・王京遺跡・皇龍寺址・天官寺址など王京から多数出土しているだけでなく、扶餘扶蘇山城・益山弥勒寺址・光陽馬老山城・将島清海鎮遺跡など地方の寺院跡や各地の行政の中心地からも出土している。中国の磁器は通常、高級な生活用品として用いられたが、蔵骨器として使用されるケースもあった。慶州拝里(ペリ)出土の蔵骨器は越州窯両耳付壺と碗が組み合わ

さった例であり、朝陽洞出土の蔵骨器は唐三彩三足壺に新羅の銅製皿が蓋になった例である。

金属器としては銅鏡と仏教工芸品がある。統一新羅遺跡からは鏡の出土例が少ない。数少ない出土例の中でも、慶州川北面東山里出土の海獣葡萄文鏡1点、瑞花双鳥文鏡2点は注目に値する。この2点の銅鏡は唐からの輸入品か、もしくは模倣製作されたものである。海獣葡萄文鏡は唐を代表する鏡の型式であり、統一新羅遺跡では慶州芬皇寺の建物址、王京遺跡、光陽馬老山城などから出土している。特に、馬老山城出土品は方形のもので、中国越州窯や荊州窯の磁器も出土している。瑞花双鳥文鏡の系譜は唐に求めることができるが、新羅において製作された可能性があり、高麗時代に大いに流行する型式である。

統一新羅の金属工芸の真髄は、舎利荘厳具を中心とした仏教工芸品と、月池から多く出土している王室の生活用品である。仏教工芸品の一部は唐から完成品が輸入された可能性のある昌寧末屹里(マルフルリ)埋納遺跡における瓶香炉、軍威麟角寺僧塔址一括遺物の瓶香炉・浄瓶・香盒などの銅製品などがある。末屹里の瓶香炉は最も広く普及した形式であるが、炉身内部に脱着できる内炉まで備えている点は特徴的である。麟角寺出土品は中国における神会禅師の墓塔(756)から発見された供養品に非常に類似しており、共伴の青磁蛇の目天目とともに完成品が輸入されたと考えられる。

このような唐の文物以外に西域との交流を示す遺物が一部で見つかっている。完成品が輸入されたものとされる事例は、漆谷松林寺塼塔舎利荘厳具のガラス碗と月池出土のガラス杯である。その他、西域人の様子を描いた各種石造彫像や様々な文様の要素は、わずかながら西域との交流を物語っている。掛陵や興徳王陵の文官・武官の彫像、九政洞方形墳の隅柱に刻まれた人物像からは、外国人の風貌が感じられる。これらは、新羅の朝廷に外国人が出仕していた証拠として解釈する見解もあるが、唐をはじめとする中国の諸王朝に見られる西域人の彫像のイメージが伝わったとする見解の方が、より説得力がある。文様には、宝相華文の他に、慶州博物館に収蔵されている石材に刻まれているもののような、樹下に配された左右対称の孔雀文などもある。この文様も西域との直接交流の結果というより、中国を介して伝わった可能性が高い。.

執筆者
(執筆部分)
李熙濬 慶北大
はじめに
第1篇 第1章、第3章 第1・2・4・6節第2篇 第1章 第1〜3節・5〜8節

李漢祥 大田大
第1篇 第2章、第3章 第5節
第2篇 第1章 第9・10節

林玲愛 慶州大
第1篇 第3章 第3節
第2篇 第1章 第4節

翻訳 PanTransNet

監修 高田貫太 日本国立歴史民俗博物館
山本孝文 日本大学文理学部

概要
新羅千年の歴史と文化
文化篇

編著者 《新羅、その千年の歴史と文化》編纂委員会

発行者 慶尚北道知事
36759 慶尚北道 安東市 豊川面 道庁大路455
T. 054–880–3176 F. 054–880–4229

発行元 慶尚北道文化財研究院
38874 慶尚北道 永川市 琴湖邑 元提2ギル38
T. 070–7113–9011 F. 054–336–8323

デザイン 任昭羅, 金多英

写真 吳世允

制作 デザイン工房
04554 ソウル特別市 中区 忠武路 13 エルクルメトロシティ616号
T. 02–2285–4132 F. 02–2266–9821
http://www.designgb.co.kr

印刷 ㈱テウンC&P

印刷日 2016. 12. 1.

発行日 2016. 12. 30.

ISBN 978–89–6176–247–2 98910
978–89–6176–245–8 98910(セット)

本書の著作権は慶尚北道に帰属します。
無断で転載、複製、改編などを行うことは禁じられております。
copyright@2016 by Gyeongsangbuk–do